
マジカル・マッスル・プリンセス

三角

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マジカル・マッスル・プリンセス

【Nコード】

N4089H

【作者名】

三角

【あらすじ】

「マジカル・右ストレエエエト!!」どう見ても右パンチにしか見えない『魔法』を使う美少女、レティシア。どこにでも居るごく平凡な大学生、太郎の前に現れた彼女は一体　!?王道ラブコメディです。

第一話 ロマン스에マッスルは要らない。(前書き)

この作品は、作者が舞氏のHP『SS搜索・投稿掲示板Arcadia』に掲載している物の再投稿です。

第一話 ロマン스에マッスルは要らない。

「マジカル・右ストレエエエエエエエト!!」

轟音。唸りを上げてふるわれた少女の右拳が、人ならざる化け物の頭部を木端微塵に吹き飛ばす。

真昼間の住宅地。突如現れた異形の怪物に襲われた俺を助けた美少女は、腰まで届く長い金髪を翻し

「主殿、安心なされよ! このマッスル魔女っ娘、レティシアがいる限り、貴方の筋繊維には傷一つ、付けさせませぬ!! 痛い!」

全力で噛んだ。

それが、俺と魔法少女 もとい、全身正に是筋肉なお化けとのファースト・コンタクトである。

ロマンスにマッスルは要らない

「飯、飯と。……ってあら、卵がもうない。これじゃあ卵チャーハン作れねえよ、塩、コショウ、味の素を素敵配分で振りかけた只の炒メシだよ……」

降り注ぐ日差しが徐々に夏のそれへと近づきつつある季節、時刻は正午少し前。

ボロっつい木造二階建て、その二階部分の角部屋。最寄りの駅から自転車で五分、通っている大学まで一五分。

日差しはばつちり南向き、6畳一間の1Kユニットバス付き。家賃4万円。

俺 みたけたろっつ 三丈太郎はそういう所に住んでいる。

「あーあ、卵がない卵チャーハンはもはやチャーハンにあらじ。具材卵しかなかったしな……買い物いくか」

俺は卵様を入手するべく、冷蔵庫の扉を閉めた。家の鍵と財布だけ手に取って家から出る。もちろん施錠も忘れない。

陽気に誘われて鼻唄なぞ歌いながら、近所のスーパーへと足を向けた。自転車を使う程の距離でもないので徒歩である。

ボロながら、閑静な住宅街の間に家があるせいか、辺りは静かで頬を撫でる風が気持ち良い。

すうっと大きく呼吸をすると、鼻を抜けるのは爽やかでどこか甘

い花の香り。

我が家の斜向かいである萩村さん垂涎の的、我が家の斜向かいの更に一つお隣に居を構える、通称『花咲か爺さん』自慢の庭園から漂ってくる香りだ。

蛇足だが、何故花咲か爺さんと呼ばれているのかは、ひたすらにガーデニングが好きで好きで堪らないというお爺さんの趣味から付いた名だ。

本名は田村五郎。5人兄弟の末っ子だとか。

本人は気さくで、更にこの周辺地区のお花なんかをわざわざ世話したり、綺麗に花卉の開いた花をプレゼントして回ったりする実に良い人である。

俺は彼から小さな押し花で作った栞を貰つて以来、仲良しだ。茶飲み友達とも言つ。爺さんと若輩の不毛なティーパーティーである。まあ、楽しいので構わないけれど。

「グルルルル」

h?

不意に、俺は獣の唸り声を聞いた気がして、順調に前へと前へと進みたがる足を止めた。まさか、ここ住宅街ですよ、日本ですよ。犬だろ犬。猛犬注意。振りかえつても何も見当たらなかったのです。小さな安堵の呟きを吐き、再び歩きだす。

「グルルルル」

「ピ、ピ、ピ」

下手な鼻歌がド下手な口笛に変わっても、猛犬（仮）の唸り声は着いて来ていた。流石に気にならざるを得ない。

「犯人はお前だあ！」

「グルツ！？」

ずびしと振り向きざま、意味もなく人差し指を背後に向かって付き付ける。まさに一人での奇行である。

客観的に見たらかなりアレな感じであろう俺の行動は、しかし結果的に間違っではないなかった。

何故なら 俺の後ろには、身の丈を優に越える巨大な犬モドキが居たからだ。

栗色の毛並みはぼさぼさで輝きがないが、縮尺を変えればゴールデンレトリバーに見えない事もない。

濁った瞳、半開きの口から鋭い牙が見え隠れ、垂れ落ちる大量の涎を舐める舌はまさかのドドメ色。

スイカくらいなら軽く丸齧りに出来そうな口が大きく開き、牙を見せつける様に俺の頭を目掛けて大突進。

「あ、あら？ ワンちゃん随分大きいねー……ってうおおああああ何じゃこりゃあああ！？」

「グオアッ」

思わず腰を抜き、尻から地面に転がった。

一瞬前まで俺の居た場所を、巨大な犬モドキが駆け抜けるのを横目に捉える。

風を切り裂く、中々のスピードと重量感だ。多分、ぶつかつたら呆気なく吹き飛ばされる。

お陰で尾てい骨に鈍く響く痛みを忘れることが出来たが、それは良いことなのかそうで無いのか。

とにかく事態が掴めない。全くもって訳がわからないが、あんな牙で噛まれたら確実に死んでしまうこと必至。走馬灯を見る暇すらないだろう。

「ウグルルルル……」

「おま。ちょ、おままま待て待て待て！！　まずは会話だ民主主義！　話し合おう、俺は日本語君は犬語！　バイリンガルを使えばきつと円滑な意思疎通が」

「オレサマ　オマエ　マルカジリ」

「って話せんのかよ！？」

再び、犬モドキが俺に飛びかかる。「おおおお」と無様にごろごろと路面を転がり、奇跡的に今度も皮一枚で避けることが出来た。鈍い衝突と破碎の音が響く。しかし、おそらく次は無い。

這いずる様にへたへた後ずさる。犬モドキは勢いよくコンクリの塀に向かって突っ込んでいて、上手いこと首から先だけが塀の向こうに消えている。

もしかしたらこれで気絶してくんねーかな、と思う俺の思考を裏切つて奴は元気に大暴れ、ガシガシコンクリの塀をぶち壊した犬モドキは、俺を振り返ってべろりと舌舐めずり。

生臭い吐息を吐き出して、犬面の癖ににやりと笑う。

「オレサマ　オマエ　マルカジリ」

ふお、コイツやつぱ話せる！

犬モドキが喋ることに無駄な感心を覚えた俺だったが、言葉の意味が脳に到達すると同時に泡を食って逃げ出したい気持ちで一杯になった。

だが、如何せん腰が抜けているせいで立ち上がれない。

圧倒的な痛みと死のリリティ。その余りの恐ろしさに自然、顔が引き攣り、歴戦の兵である俺の膀胱が期せずして緩みそうになった。

死にたくは無い。だが、だがしかし、この歳になって漏らしたくは無い。

前者は肉体的にまつすぐあの世へご案内、後者は社会的尊厳の抹殺、且つ自爆特攻並の精神的死だ。

視線の先ではゆっくりと体を撓め、今にも飛び掛かるうとする犬モドキの姿。

何も考えられず、咄嗟に目を瞑って頭を抱えた。

真っ白に染まった思考の中、脊髄で下された指令が俺の喉を震わせる。

込み上げる衝動のまま、思い切り、叫んだ。

「ああもう嫌ー！ 誰か助けてヘルプミーー！！」

「グオアアアアアー！！」

「待て！ 怪物よ、その方に手を出すのはこの我が許さぬッ！！」

果たして、俺の叫びにはきちんと答えが返ってくる。

住宅街に凜と響いたその声は、確かに一瞬犬モドキの動きを止めた。

目の前、巨大な質量が頭上を仰ぐ気配。

俺も思わず目を開き、声が来たと思われる方を振り仰ぐ。きっと今俺は、涙目に違いない。

「はーっはっはっはアー！！ 我は魔法 少女！ 古よりの因縁を果たす為、現世に舞い降りたり！！」

「……」

場が、微妙な沈黙に包まれる。

無言のまま、俺はそつと目の端に浮かべていた滴を払った。

ソイツは高い所に居た。

正確には、俺の近所の吉田さん宅、自慢の青い屋根の上で腕を組んで仁王立ちしていた。

露出の際どいピンクのキャミソールと、デニムのショートパンツを履きこなした少女の視線が俺を射る。

愛らしい顔立ちの少女だ。

さらさらと風にたなびく髪は、光にけぶる豪華な金色。

大きな瞳は碧の宝玉をそのまま嵌めこんだ様で、深く澄んでいる。

桜色に上気する頬も滑らかで、顔立ちだけなら確実に 中世の

お姫様で通用するだろう、そんな甘い美貌。

「とうー！！」

窄められた唇もまた愛らしく、銀の鈴の音の如く澄んだ掛声と共に飛び降りた少女の体は、地響きを立てて俺の目の前に降り立った。

……いいか、地響きだ。決して、羽のように音もなく着地したりはしない。現実はそのなに甘くない。

どうやら、神様は俺が酷く嫌いらしい。戦わなきゃ現実と。

「無事であつたか!？」

勇ましく肩越しに振り向き、俺に声をかける少女の動きに合わせて、屈強な僧帽筋と三角筋がうねり、上腕二頭筋がムチムチと盛り上がった。

着地の衝撃を受け止めた丸太のように太い大腿筋群が、ショートパンツを張り裂かんばかりに張りつめ充実する。

ついでに言うと、飛び降りる際にチラ見せしたおへその周囲には、男子の憧れ6つを越えて8つに割れた偉大な腹筋様。

胸部はもう既に胸ではなく、発達した大胸筋が服を押し上げているだけで、引き締まったお尻はつまり鍛えられた筋肉の証。

すつくと立ち上がったその姿は、オイルを体に塗りたくってポーズを決めるガチでムチなお兄さんがたに引けを取らない堂々の約180センチ超。

見事な凹凸を描く(筋肉的な意味で)筋肉はもう筋肉大爆発。

「うわぁ……もはやグロ画像だよ……」

怪奇、マッスル女!! 一言で彼女を言い表せば、正にそれだった。

想像してみたい! 首から上は、幼げな感じの甘美少女、首から下は、……女性物のピンクのキャミとショートパンツの

下に豊満な体（筋肉的な意味で）を押し込めた、文句の付けようもない心の姉貴、ガチムチマッスルボディ。

ふふふ、“美少女に助けられて運命の出会い”、なんて甘いシチュエーションで盛り上がった気分が、一気にレッドゾーン突破だろ
う……？

「……………」

図らずも、この時俺と犬モドキは心中でシンクロを果たしたと思う。非常事態なのに。

「それは、ねーよ……………」

「何だ？」

犬モドキを前にして、余裕綽々に俺の方へ向き直る筋肉塊　も
とい少女。

どこの怪物だコイツ。よっぽど犬モドキより恐怖の対象だよ。
街中を練り歩かせたら自然とお布施が集まるよ。

「い、いえ、何でも有りませぬ！」

しかし小心者の俺が、目の前で小首を傾げる圧倒筋肉搭載型無差別精神爆撃機に対して素直に思ったことを言えるはずもなく

っていかもしチョークとかかけられたら、首、折れちゃう
よね！？

「主殿！　これから我が、この犬モドキを魔法で倒してみせよう！」

「あ、ああ」

そんな訳で、せいぜいが目を逸らすことしか出来ない俺は、魂の命じるままに頷いた。もう、何も見たくない。

そして話は冒頭に戻るのである。

「ただの右パンチじゃねーか……」

満面に笑みを湛えた、自称魔法 少女レティシアと、未だ腰を抜かしたままの情けなさ全開スタイルでアスファルトに転がっている俺。

そんな俺の眩きは、住宅街を吹き抜ける風に流されて消えた。

ジーザス神よ、どうせなら。炎とか魔法っぽい攻撃を繰り出す奇想天外サーカスへ売却確実な魔法 少女を寄越せ馬鹿。

心なしか、俺の心の中にも寒い風が吹く。

第二話 穏やかな公園と、筋肉。

「ははは！ 我はベジタリアンだ！！」

人気のない公園のベンチの上に足を開いて仁王立ち。眼下を睥睨して、筋肉ウーマンは言い放つ。

そんな筋肉、野菜だけで出来るかボケめ。
帰れ筋肉の星へと。

「……………何で？」

あるのか無いのか分からないが、とにかく筋肉で盛り上がった胸を反らせた顔だけ美少女は、至極当然な所のある俺の疑問に

「肉を食うと、体臭がキツクなると言うではないか。我は見えての通り、可憐な乙女だ。それは許せん」

非常に突っ込みづらいコメントをしました、まる。

「くっ……………言い返したい、返したいがしかし……………！」

「近所さんの目から逃亡した先での、一幕である。」

穏やかな公園と、筋肉

「お初にお目に掛る、主殿！ 実は主殿は、先ほどのような輩で狙われておるのだ。だから、安全が保障されるまでは我が善意で護衛して差し上げよう！ 何てったって我はドキドキ 魔」

「それもついいですさつき聞きましたあ！」

「……そうか」

その後。

どう見ても物理攻撃にしか見えない右ストレートを、執拗に魔法だと言ひ募る少女に手を焼いて、俺はとりあえず近くの公園までやって来ていた。

住宅街に不自然すぎる沈黙が漂っていたから、もう少しあそこに居れば通報されること間違いなしだ。

俺だって、自分の家の外にこんな妖怪が居たら、外出する予定をキャンセルして携帯で激写する。そしてメールで一斉送信だ。

公園の中に人気はない。

賢明なお母堂達はこの歩く怪奇現象に恐れをなしたのか、鼻水垂らした子供を小脇に抱えて帰宅しているようだ。

……子供の情操教育的にトラウマ植えつけそうな生命体が隣に居るからな。

かくいう俺も、あまり首から下を見ないようにしている。
地面にぺったり座る訳にもいかないので、微妙な距離を保ちつつ、
2人でベンチに腰掛ける。

その途端、今まで黙っていた俺の怒りに猛然と火が着いた。
高熱の炎が俺の胸の所から指の先までを駆け巡り、あたかも全身が沸騰したかの様な震えを得る。

「もう何ですかさつきから！ 魔法とか犬とか筋肉とか筋肉とか筋肉とか！ 三丈太郎は今とても混乱しています！」

極限まで怒りつつビビっていた俺は、ついに小声で怒鳴るという特技を体得してしまった。

怒っても怖くない男、三丈太郎 それが俺の代名詞だ。
どこも誇れねー。

ちなみに、レティシアと名乗る少女は直視するには少々難易度が高すぎるので、ちらちら横目で眺めるのに留めている。

ああ、間違いない。俺にはサバイバルの素養が有る筈だ。

例え異世界へと旅立っても、持ち前のコミュニケーション能力とこの恐らく何があっても生き残れる素敵スキル。

この二つを生かしてあつさりと野宿2日目位で現世とさよならだ。

はん、異世界に行つて言葉が通じるかばけー。

言葉が通じないのにコミュニケーションとは片腹痛し水虫痒し。むしろリアルタイム言語通訳魔法の使い手を連れてこい。

肉体言語「魔法という斬新で奔放な魔法暴力論を振りかざす怪獣がグロ過ぎる。」

目の前の少女は、きっと筋肉魔法が奔放過ぎて世界が追いついてこれず、人知れぬ内に異世界へと飛び込んでしまったのだろう。

とにかく今あの首からしたのモザイクを直視すれば、俺の美的感覚が安らかに極楽浄土へ旅立たれること必至。

「うむ。……突然の事ゆえ混乱するのも致し方ないと思う。だが我を信じて欲しいのだ！ 決して悪いようにはせぬ、この……上腕二頭筋と三頭筋のバランスにかけて！ ふん！」

「ぐおお……！」

で、出た筋肉！ そこは普通誇りとかじゃねーんですかかちくし
よう！ 白い筋肉が暑苦し眩しい！

とあくまで心の中で怒鳴りつつも、俺はひとまず神妙にレティシアの話を聞くことにした。

だって筋肉の束が迫ってくるのが怖いんだもの。

大体30分が経過した、と思う。

全く、これが買い物帰りじゃなくて助かった。この陽気の中卵に放置プレイをかましていたら、間違いなく腐る。

それでは、何の為に買い物に出たのか分からないではないか。顎に手をあて、あるかないかの鬚をさわさわと撫でさする。

「つまり、要約するとこうだ」

「うむ」

美少女（仮）は目をつぶって頷いている。

変態と言う名の紳士であれば、この顔を見てキスをせがんでいるように見えるのだろうか。

しかし残念なことに、一常識人を自認する俺には、頷く度にびく

ぴくと動く首筋の筋肉束と、そこに浮いた血管も盛り上がりしか見えない。

「……えー、さっきの犬モドキは下っ端で、まだまだ俺を狙っている物騒な奴が居ると」

「うむ」

筋肉（本）は、再び頷いた。

「……」

「……」

「……」

何だこの喋りづらい空間。普段は元気に公園を走りまわる子供も、前述の通り今日に限って一人も姿を見せない。

飼い犬の散歩を日課とするマダム達も同様だ。

こんなの居たら、そりや人も寄りつかねーかい。

しかめつらしくぶつとい腕を組み、俺の言葉に頷く顔だけ美少女を見る。溜息が出た。マジ帰りたいこれ。何だ、悪夢か。

「……で、俺が狙われる理由ってのが、何かよく分らんけども常識じゃ考えられない位上質な筋繊維の持ち主だからだ、と」

「間違いない。通常、主殿のような筋繊維はありえないのだ。」

今まで重い荷物を妙に軽く感じたりした経験は無かったか？」

ねーよ。ありえないのは貴方の首から下です。鏡見る鏡。

「……い、いや、特には」

しかし、チキンでガラスなハートの俺は目線を明後日の方向へ逸らしながらそう言った。

また筋肉に迫られたりしたら恐ろしくて夜眠れなくなってしまう。

「恐ろしい……何という才能だ……！」

ガガガガガ！ 興奮したのか、猛烈な勢いで足を上下に揺らすレティシア。貧乏ゆすりのつもりだろうか。これでは局地型地震がよいとこだ。

その顔をぼんやりと眺め、非常に重要なことに気がついた。

ヤバイこいつ人の話聞いてない……！ ひやりと恐怖が俺の背筋を駆け抜ける。

このままでは、良く分からん内に、あの見るからに凶悪な筋肉に土俵際から押し出されてしまう。既に土俵際に居る状況なのが全く笑えない。ふふ。

とりあえず話を戻すことにした。

放っておくと、公園の地面に穴が開いてしまいかねん。

「オホン！ それはまあ今は置いとくとして、えー、レティシアさん？ あなたの目的は俺を護衛すること」

「うむ」

「それは俺の筋肉が特殊だから」

「うむ」

くっ……コイツ、うむうむ言ってるだけじゃねーか……。

だが、俺はめげない。諦めない。しかめつらしく難しい顔をして、腕を組んだ筋肉要塞に立ち向かうのだ。

「……何で俺のこと主殿って呼んでる訳？ 罰ゲーム？」

「うむ。それは主殿が我がマジカル・マッスラーズの次期頭首を担うに相応しいお方だからだ。主殿の筋肉にはそれだけの価値が……可能性があるのだ！」

うわ嬉しくねえ。何だそのド直球な団体名。

どう考えてもレティシアと同系統の人たちが集まる集団にしか思えません。嫌過ぎる。

……て、このままだと俺もあんな風なマツチヨに、なる、のか……？

ポーズを決め、逞しい筋肉を見せつける兄貴な体の上に、免許証に乗っている俺の地味な顔写真を脳内で張り付け……

「キヤーダメダメダメ。絶対ダーーーーーメ！！ お母さん、そんなこと絶対・対許しませんからね！！」

余りにおぞましい未来像に、俺は思わず性別反転。時も越えて母に転生、今の自分に注意を下す。

立ち上がり、腕を振り回し眦を吊りあげ、ミスった裏声でがなりたてた。

ありがとう俺。ありがとう母。今の一言がきつと俺を救う……。

「ど、どうしたのだ主殿……？」

「くっ……！！ あ、余りに邪悪な予想に取り乱しただけです。気にしちゃメッ！」

めっ、と人差し指を振って窘めた。キモイ。

横目で眺めるレティシアの顔に、引き気味の作り笑顔が貼り付いている。そうかそうか、これで引くのか。

誰が見ても引きまくるであろうダイナマイトバディ（筋肉的な意味で）の持ち主に、引かれる俺。ハハハ。

色々疲れて、自暴自棄を起こした俺はついに、ビビることさえ忘れて考えていることをだだ漏らす。

俺の行動に引いちやうような奴に、ビビル必要、なくね？ 気分は下剋上だ。奇天烈なスタイルでのテニスは出来ないがね。

「はい先生！ 頭首になるのは拒否権ありますか！ 筋肉リーダーは絶対嫌です！」

「わ、我は無理にとは言わぬ。当座の間は、とにかく主殿の安全を確保することが急務なのだ」

「そう。ちなみに、じゃあ俺ってもしかしてVIP？」

「うむ、我などより遥かに格上だ。ちなみに我はマジカル・マッス

ラーズの現頭首だが」

……何だよ、何でもかんでも突っ込むと思うなよ。

でもこれで、俺が偉そぶれる要因が一つ増えた。そう、俺は妥協を許さない男。俺VIP、コイツ平社員。

躊躇なくベンチの背もたれに踏ん返り返る。顔にニタリと悪役笑いが浮かんだ。

特に何も反応されない。ちょっと悲しい。

「ふっ……俺を狙う勢力については何か分っているのかね、ん、チミ？　んん、チミチミイ？」

「うむ。この隣町に住む、御堂久美子（29）が主犯で間違いなと思うのだ」

呆然。俺の頭の中が真白になりあそばした。

「え、ちょ、近くね？　っていうかあり得なくね？　知り合いだし！　かかりつけのお医者様だよ！」

「はらが減った!!」

「ふおお!？」

くわ！　レティシアは目を可愛らしく見開いて、突然意味不明なことを口走った。

続いて颯爽と立ち上がり、肉体言語で俺に空腹を訴えかける。

下手なハンマーより余程固そうな拳が、風を切る音が響く　　シヤドー・ボクシング。

平和主義者の俺は、俺の頭くらいなら簡単にトマト みたいに出来ちゃうその姿を見て、あっさり武装放棄。

必要以上に偉そうに振舞うことを速攻で諦めた。無理無理絶対無理。出来るだけ近づきたくありませんこれ。

凄まじいスピードを維持したままバビュンバビュン唸りを上げる
レティシアの体に、うっすら汗が浮かび始める。

躍動する筋肉。汗。収縮し、一息にその力を発揮する筋肉。汗。
それを目にしてしまう俺のコメカミに冷や汗。

放心状態で呟く。

「ハラガヘッタ？」

俺の当然な困惑はしかし、ブ厚い筋肉に阻まれた。上手く届いていないらしい。

きつと、彼女に近づくと同時にマジカル・右ストレートとやらで
撃ち落とされたのだろう。南無。

「主殿、我ははらが減った。これから寝食共にする身なのだ。我に
昼飯を食わせてくれ」

「は？ ……いやいやいや、もう一回言ってごらん？」

俺は今聞き捨てならぬことを聞いた気がする。いいか、気のせい
だと

「これから寝食を共にする身なのだ。我に飯を食わせてくれ。ハリ
ー、ハリー」

ですよー！……もう分かったからハリーハリー言いながらシヤドーボクシングするのは止めてください。

いいか、徐々にこっちに近づいてくるのも無しだ。

「……もう何でもいいや。詳しい事は後で聞くから、俺卵買ってくる……」

「むっ、いかん！」

「何ですか」

「我はベジタリアンだ！一身上の都合に肉はダメだと前もって言うておくッー！」

ムキィ！ムキムキィー！！ベンチの上でポーズリングを取りつつの告白に、俺は思わず呟いた。

「嘘っけ……」

「ん！？」

「あ、いやナンデモアリマセン」

チキンと、呼ぶなかれ。

第三話 ドキムキ・共同生活

「おお、ここが新しい我が家か！ 古き良き趣があるな、ぬあつはっはっは！」

ガツチリムツチリ筋肉ボンバーな顔だけ美少女が嬉しそうに手を叩く。字面じゃあ少しは可愛らしさもあるだろうが……ほら、聞こえないか？

ペちペちじゃあない、バチコンバチコンだ。あんまり力が強いもんだから、お相撲さんの張り手みてーな音がしてんだよ……。

「そもそも、お前ん家じゃねーよ……」

俺は力なく突っ込んだ。俺の両手にはゆさゆさ揺れる特大のビニール袋。ずっしり緑で黄色で赤色な野菜、それと卵が一パック納まっている。

我が家を前にした、異次元生命体との一幕である。

結局、この各部のパーツが狂っているとしか思えない歩くマジカルマッスルは、スーパーにまで着いて来た。

俺の隣、スーパー内で男性陣垂涎の露出過多さで闊歩する筋肉妖怪の姿を、遠巻きに眺める人の視線と囁き。

俺が動けば筋肉もつられてピクピクと痙攣し、マッソウ（マッスル）が張り詰め隆起すれば怖いもの見たさの群衆もつられてビクビクとすり足で忍び寄る。

「あう……はアーン、見よ主殿……！ 我の筋肉が、見せつける喜びに打・ち・震・え・てお・る・ぞ……！！」

ざざざざざ。玉のような汗を浮かべ、羞恥によるものか興奮によるものか、頬を桜色に染め上げた風神雷神象が身を擦ってポージングを決める。

それを見て、漣が引くように遠のくギャラリィ。

今ならモーセの気分が分かる。こいつなら海くらい割れる。間違いない。

俺の担当をしたレジのお姉さんが、真っ青な顔で必死にバーコードを読み込む姿が余りにも目に沁みた。

もうこのお店利用できない。噂される的な意味で。

おそらく携帯で激写されたであろう、ゴツクてデカイ頼りになる筋肉と俺の不本意なツーショット写真は、今頃電子の世界で飛び交っているに違いない。

わお、大型掲示板でも大人気。グロ指定画像の大本として、さぞやコラージュ技術の餌になっているに違いない。精神的ブラクラだ。

回覧板でも回ってきそうだ。切実に泣きたい。

「でも、俺泣かない！　だって男の子だもん！」

やむなく鍵を使ってボロアパートの玄関を開けゴマ。当然のように入ってこようとする単一機能特化型筋肉インターフェースを、懸命に背中で牽制する。

イタい話を聞かされるのも良い。化け犬に襲われたのも、まあ良い。何故か野菜を大量に買い込ませるのも良い。趣味：ボディービルにしか見えないのも、良くないが、今は良い。だがしかし。

「何故、あなたは部屋に入ろうとなさるのでしょうか……？」

遠回しに拒絶。

てつきり、上腕筋群と前腕筋群を撓ませ、荒ぶる鷹のポーズで俺を襲ってくると思ったのだが、レティシアは玄関前で立ち止まった。びくう！　と震えて半歩後ずさり、唇を戦慄かせる。

「わ、我が今部屋に入ると困るものが、散乱しているのか……？」

もじもじもじ。

芋虫の如く丸くて太い指の先を突つつきあわせ、上目使いで俺を

見る。

本来目線より下にある俺の顔を見上げようと、無理やり屈んだ太ももの筋肉が充実し、肩を竦める動きで懐かしの僧帽筋がぐぐつとせり上がる。

更に胸元から大胸筋の割れ目が目に入って、コンマ2秒で目を逸らした。

精神的ダメージを緩和する為に、何とか頑張って顔に焦点を当てる。

潤んだ瞳も、匂い立つかの如く上気した頬も愛らしく、僅かに噛みしめた下唇は美味しそうな苺色。瞳の中に星が煌いていそうな完璧な上目遣いはしかし、今や俺の恐怖の対象だ。
クーリングオフは、生ものには使えないのか。

「ひ、ひいいい……!!」

余りのキシヨさに我慢しきれず、身の気のよだつ経験をした俺はビニール袋をなるべくきちゃなくない所にそつと置き、全力で戸を閉めた。

バタム！ 力強い音と共に閉め切られたドアが、俺の心を慰めてくれる。鍵を締めチェーンを掛ける音が俺を癒してくれる。
しかし。

は、早く今の映像を上書きしなければ。脳が筋肉に汚染されてしまふ……！ ハリー！ ハリイイイイ！

「な、なな何て恐ろしい上目遣い！ 違う違う、俺の理想の上目遣いはあんなんじゃないありません！」

イヤイヤと首を振って、鳥肌の浮かんだ腕をガシガシ擦る。目を瞑り、何とか見つけ出せそうな奴の可愛い所を探してみることにし

た。

顔……声……髪……ええと、後は……ええと……うつん……もう無い。何だそれ。

取り敢えず、筋肉が全てを駄目にしているのだ。脳内で筋肉を緩和する為に、方程式に当てはめてみることにする。

ドジっ子 + 筋肉 〃 ねえよ。被害が甚大過ぎる。

お姫様顔 + 筋肉 〃 ダウト。国民は暴動だ。

高めのアニメ声 + 筋肉 〃 ダウトー！ 夢を壊すな。

金髪さらさらロング + 筋肉 〃 駄目。見てらんない。

魔法少女 + 筋肉 〃 ……チェンジ。魔法を使え。

謎の美少女とドキドキ 同棲生活 + 筋肉 〃 謎の筋肉とムキムキ 筋トレ生活。あるあ……ねえよ！

「うわあああああチクショーチクショー！ どんだけ頑張っても無理だヨー！ 筋肉はあらゆる萌えポイントを圧殺しちまうヨー！」

狭っこい廊下をばたばた駆け回り、目と鼻から塩水が溢れて止まらない顔を押さえて漢泣きに暮れる俺を、一体誰が責められるだろうか。いや、誰も責められない。

しかし筋肉少女にはそんな俺のマックスピュアハートが分からないようである。

ゴゴゴゴゴン！ 速過ぎてスタッカートを決める激しいノックを、扉にかますのだ。俺はビク！ 蠢き動きを止めた。

「十分経ったぞ主殿！ 我に見せるのが恥ずかしい、子供には見せられない特殊性癖の、イケナイ本やDVD、空気の人形は片付け終えたのか！？ むうん、もう我は空腹が我慢出来ぬ、入るぞ！」

成人男子に、分かっていると言っても言っではならないあるまじき暴言。

そもそも事実無根な社会的生命抹殺の一声を大音声で辺りに叫ぶと、扉がみしみし音を立てる。

慌てて覗き窓に目を寄せると、全身をふんばってドアノブと奮闘しているらしき肉ゴレムの姿が目に入った。

ぎよ、魚眼レンズ越しだとさらに……！

「や、やめ！ やめやめやめ！ や・め・てー！ そんなに乱暴にしたら壊れちゃうよーッ！」

金属の癖に、筋肉に屈しそうなボロアパートのチェーンを解除、鍵も解除。引き攣りに引き攣った作り笑顔で、俺は遂に筋肉の国からグロを配りにやって来た、恐怖の顔だけ美少女レティシアを部屋に入れた。

ニコニコ笑顔で玄関を開け放ち、勢い良すぎて外廊下の壁にバチコーン！ と衝突させたレティシアは、俺を見るなりこう言った。

「めしー!!」

「……退化してんじゃねーよお前……」

「飯ー!!」

「そういう意味じゃねーよう！」

ガスコンロから噴き上がる炎が渦を巻き、その上を長年の相棒である厚底フライパンが華麗に舞う。

重要なのは、押す力より引く力。動きに沿って、綺麗に空中に飛び上がった命の素が回転する。

コゲないよう、しかしムラのないよう

職人の技での優雅な片

手フライ返し。ジャツジャツと小気味の良い快音を立てて混ぜ込まれる食材達。

塩と胡椒は高々と掲げた手からサラサラと振り落とされ、米と卵の海へと均等に消えていく。続いて加える味の素はちよつと多め、味のアクセント。

何より手早さ、時間が大切だ。短すぎれば火が通らず、長すぎれば油でべちゃりとなってしまう。

極みの頂点、ぱらぱらの触感を追い求めて、出来るだけ高速で鍋を振る。

仕上げに醤油を回し入れ、香ばしい匂いが沸き立てば　それ即ち、完・成。

綺麗な半球を意識して、一粒足りともばらつくことなく皿に盛られた米どもは、ツヤツヤ輝きしつかりその存在をアピールする。

輝く卵は食欲をそそるゴールデンイエロー。ちゃん、と福神漬（百円。近所のスーパーの特売品）を好みで添えて、俺はテーブルに舞い戻った。

「あーらよ、出前一丁ー！！」

ガスン、コト、と音を立ててテーブルに不時着させたチャーハン共の前に素早くスプーンを並べる。

食べ物にはいつも感謝の心。お米には七つの神様だ。

腰を下ろし、小さくいただきます、と呟いてそのスプーンを手に取った。右手にスプーン、左手に水をなみなみ注いだガラスのコップ。

いつもは邪魔な紙束類も、食事時ばかりはその辺に適当に退場なさってもらっている。

完璧だ……ある種の満足感と共にこんもり盛ったチャーハンにス

ブーンを差し入れた所で、俺に声が掛った。

もやもやと霞む湯気の向こう、そこにちんまりでかでかと鎮座する地上戦専用肉体兵器。

このクソ狭い家でペットを飼うスペースはないので、言うまでもなくレティシアだ。動物ではなくて化生の類だが。

ふふふ、人間って何年生きたら筋肉に化けるのかな。

「あの、主殿。……何故、我の前には、チャーハンのみっしり詰まったフライパンが……」

見る。不器用なのか、ぐーでスプーンを握っているレティシアの顔には、困惑の色。首から下は水を弾く綺麗な青色。

このショートレンジで筋肉と向き合う自信がない俺の苦肉の策、秘蔵のレインコートを被せているのだ。

生々しい筋肉の割れ目が隠れただけで効果抜群、それでも無茶苦茶デカイ大女には違いないが、大分無差別テロ的な精神攻撃力が抑えられている。

あれはMP攻撃に等しいのだ。題して、『不思議な踊りも、見なければ効果はあるまいフハハ作戦』である。

なので、俺もわりかし普通に対応できるようになった。

「何故って……それくらい食べるんじゃないの？ 遠慮しちゃーよ？」

ふふん、如何にベジタリアンとは言えど、卵は兵器だと……おつと間違えた、平気だと言っていたんだ。この位は食べるだろうよ。如何な妖怪とて、卵で人は殺せまい。

「な、何合炊いたのだ……？」

「5合。あ、足りない？」

むう、ぬうう！ 唸り、恐ろしい物を見るようにチャーハンを見るレティシア。

暫く親の敵でも見るような目でチャーハンを睨んでいた彼女は、やがて首を一つ振り二つ振り、猛然と米をかつこみだした。

ぐーで握ったスプーンは不安定で、余りに勢いが付きすぎてぼろぼろと幾らかご飯粒が零れている。M O T T A I N A I。

「……！……！」

「おう、おう……そうか美味しいか。ほれチャーハンは逃げはせぬ。ゆつくりと食うがよかるう。ほほほ」

見てても不毛なので、俺も自分のチャーハンに取りかかる。
香ばしい香り、豊潤な卵の甘み、しっとり味のついた米の旨み、そして何より全体のハーモニー。

ただの米、ただの卵、そしてただの市販調味料を使っているのに
も関わらずこの味……！

「げふ。いや、実に普通のチャーハンだった。美味し美味し……ほれ水」

ふと気付くと、チャーハン一人前位の量をつこんだレティシアが、苦しげに逞しい大胸筋の辺りを叩いていた。

何だろう、ゴリラが良くやるウホウホなあれだろうか。ちなみに、正式名称はドラミングと言っらしい。

水を渡してやる。そしてふと思った。

コイツ食うの遅くね？

「ごきゆごきゆと喉を鳴らしグラスを干すと、室内レインコート女はテーブルに突つ伏す。その表情は金髪に隠れて俺には見えない。」

「おいどうした。それよりスプーンに米粒付いてるぞ、行儀ワルしないの」

「わ、我は……」

「あん？」

凜とした声音を最大限低く伸ばし話すその様に、地獄の底から響いてくる魔王の声を脳内でイメージ。

王様からひのきの棒と五十ゴールドだけを渡され、さあ世界を救うのじゃっ、などと言われて放り出され、色々あつてついに魔王城に辿り着いたその行き先。

おどろおどろしい声に引かれて奥へ進み、きらきら煌めく勇者装備（地面に埋まっている物もあった。何て扱いが悪いんだ）を確かめて、玉座の間へと飛び込んだ勇者は遂に、魔王と……と、そこまで考えた所で、妄想の翼を振り払った。

出てくるのはあれだ、威厳に満ちあふれ悲壮な過去を抱えた威圧感たっぷり雰囲気たっぷりの魔王陛下では無い。

筋肉の鎧に身を包み、筋肉の拳と美少女顔を装備した妖怪なのだ。黒のマントに、あぶない水着装備。うげえ。

「我は……小食なのだ……主殿が用意してくれた故、食べ尽そうと思っただが……おえぶ。えぶ」

……その図体でか。心中で呟く。

依然、もっさりとフライパンの上で自己主張をするチャーハンの野郎は健在だ。余り、というか殆ど減っていない。

予想外の展開だった。俺が一合コイツが一合としても、それが真実なら残り三合が余る計算になる。

「あらあ……一人分で精一杯？」

「うん」

こくり、弱々しい仕草で雨合羽が頷く。動きに引っ張られて、タバンの様な長い金色の髪もうねうねと動く。

「もう無理？」

「うん」

おう、同じ反応しか返しやがらねえ。

チャーハンはラップして冷蔵庫に入れておけばいいとして、ちょっと面白くなってきました。これはやらねばなるまい。

「あ？」

「うん」

「積乱？」

「うん」

「ネバギバ？」

「う……うん」

「つち」

「むうう」

苦しそうな割に余裕はあるらしい。俺は滅多に使わない救急箱を漁り、粉の胃薬を一包分取り出して金髪筋肉の頭の上に乗せた。

「いいですか、絶対吐くなよ？　ここ俺の家、吐く場所はトイレであって部屋ではありません。だからその胃薬飲んで休んどけ」

「むぐ……むぐ……」

コップを受け取り、横になるよう手で促す。寢床を貸してやれ？　ははは馬鹿な。

それにしても。

顔は、可愛いんだけどなー。体を横たえる為、肘をついた拍子にすり減った畳がミッシミッシ凹む音が聞こえる。

「……」

なにか釈然としない思いを抱きながら、手早く食器を重ねて席を立った。後片付けの時間です。

流れる水音。マスカットの微妙な香り、台所用洗剤の泡がふわふわと漂う。水をなみなみ満たしておいたフライパンは洗い頃だ。

汚れはお早めに落とすのが吉。ちよつと背後が気になって、手を止めて振り返る。

床に転がる一本の丸太……否レティシアは、すびすび寢息を立てていやがった。

食って寝る。原人かお前、という俺の嘆きを余所に、余ったチャ

ーハンが冷蔵庫に仕舞われた。

第四話 テカテカ・夜の共同作業。

「ふぬうん、ムツ、ハアツ……!!」

狭苦しい木造1Kの玄関入ってすぐ、狭苦しい台所に隣接した、これまた狭苦しい脱衣所兼浴室兼洗面所。

洗面台に取り付けられた、大きめの鏡の前で金髪の少女が唸る。

「……何してんですか俺ん家で」

腕を伸ばし、曲げ、息を詰め、動きを止める。素早く腰を捻って素早く反転し、止め、ポージング。力強い一つ一つの動作を丹念に確認していく。

「ふふ……この、私の身の内から沸き起こるムラムラを、肉体美に昇華しておるのだ!!」

ふぬあ! と肩越しに広背筋の隆起を確認していたレティシアが
いい笑顔で振りかえった。

「……さいで」

ばたむ。

俺は扉を閉めた。

何はともあれ、普通は胸がドキドキする就寝前、風呂上がりの姿である。

テカテカ・夜の共同作業

「えむ……」

「あ？」

俺は読んでいた本をぱたりと閉じた。音のした方に視線を投げると、すぴすぴと今にも鼻提灯を繰り出しそうなタオルケットの塊が見える。

はて、えむとか聞こえた気がするけども。

「えむ……えむ……」

モゾ、モゾモゾモゾ！ ホラーじみた動きがむしろ笑いを誘う。
いつもの俺なら、そう、もう既に心が世界恐慌だろう。

対策の為に、心が世界各国だ。

大荒れに荒れてブロック政策！（視界を遮断的な意味で）

さらに加えてニューディール政策！（見てしまった画像を、別の
画像に入れ替える的な意味で）

それらを発動させていたに違いない。

だが。駄菓子菓子。

今の俺は正に是天下無双の大英雄。これしきの気持ち悪さでは何も感じぬよ……ふおお、可笑しな奴じやのう。

俺は今、小説の中で無双三昧に敵兵を千切っては投げ、筆っては埋めしていた博愛主義者の老兵の心境なのである。決め台詞は『人類皆兄弟！ 憎み合うでないっ、死ねえええええ！』だ。

大抵のキモさは敵ではない。

言っておくが、俺は長いものに巻かれNoと言えず状況に流されるままの現代人。つまり、情報媒体 書物の内容にも影響を受けやすい。

一周回って寛容な悟りの境地に達した俺には、心のモザイクがあればそれで十分。しかし。

「えむ、MPが、足りぬあ—————い！！」

「ぼおおおおおう!？」

……耳栓は足らなかった。思わず、甲高い裏声で絶叫。

そしてもう一段深い所を悟った。神は、いや筋肉は俺に優しくないのだ。

善意で掛けてやったタオルケットから、太すぎる手足が不気味なオブジェの如く勢い良く飛び出し、重力に逆らって両手両足全力で真上を目指す。

一騎当千の老兵の寛容さを、一撃で破りさるその攻撃力。

「うるせえーよバカ！」

ガスガスと壁が叩かれ、隣の部屋から苦情が飛ぶ。木造故の欠点、まさかの無防備無防音。

とまではいかないが、隣人が大声で叫べば誰だっとうるさいと思うだろう。

しかし、今の俺に隣人の怒声进行处理する力はない。

老兵の許容量を越えたキモさが、ついでに人間としての何かを越えてしまった筋肉体操が、妖怪タオル手足の得意技として俺の目の前で披露されているからだ。

高く突き上げた足をボタンコンボタン上下させつつ、水色のタオルケットがうねうね揺れる。

五秒に一回のスピードで飛び出す金色の頭は、何とかギリギリ人間のものだ。

その余りの致命的気持ち悪さ。顔が隠れているからギャップ補正はないが、その分ダイレクトなキモさがバシバシ俺に飛んでくる。

夜中に見たらトラウマものの光景だ。

テレビの前の皆を守る為、顔と胴の部分が隠れきっているのがせめてもの救いである。

「……あ、寝ていたのか私。おはよう主殿。ふあゝあ、あーMPが足りぬわー」

「……おお」

なので、何か普通に寝起きっぽい反応をする妖怪タオル手足に、俺が怖れ慄いたのは致し方のないことである。

あんなの毎日見せられたら、どんな元気な人でも首吊って死ぬんじゃないかな。

図らずも物騒な感想が頭を過ったが、すぐに頭を切り替える。振り回されすぎて段々慣れてきた。いや、疲れて来たのか。

俺は幼子の如く目をぐしぐし擦るレティシアをあえて直視。そして膝を揃えて畳に正座。

色々な筋肉が躍動的過ぎて忘れていたが、聞き捨てならない単語を俺の耳は聞き逃していなかったのだ。

「あの……きん、……レティシアさん？」

「あ、うむ！ 何だ主殿。わ、我は寝ている間に粗相をしてしまったか！？」

つ、と正座のまま目を逸らす。MPを奪う不思議な踊りは、粗相で済ませていいものか。レティシアが慌てたがスルー。

「いやなんてーか、それは別にいいんだ。むしろ、頼むから思い出

させないで。……で、MPってなに？ マッスルポイント？」

俺は問うた。暫し頭を掻いていた筋肉タオルは、おもむろに立ち上がる。

彼女がいつの間にか雨合羽を脱ぎ棄てていたので、俺は黙って落ちていた雨合羽を差し出した。

露出が抑えられたことで、怒濤の勢いで減少しつつあった俺の心のMPが少し回復する。

減少しすぎて0になると多分死ぬから、これは精神的に死活問題だ。

「……うやむやの内にここに住み込み、主殿の護衛をしようと思っていたが、そうはいかぬようだな」

そんなつもりだったのかよ。

そんなつもりだったのかよ。大事なことから二回言った。

「まさか……名前まで解き明かすとは！ そう、MPとはMuscle Pointの略！ 魔法を使う為に必要なエネルギーのことだ！ 我だと……そうだな」

あああちくしょう！ 嬉しくない！ マッスルポイントって何だボディビルダー御用達のポイントカードのお買い物得点かよ！

イビキは聞こえなかったけど、寝ている時口半開きなのか。涎の跡がくつきり残る口許に鉄球のような拳を当て、レティシアが唸る。

「うむ……主殿も見たマジカル・右ストレートは我の必殺技……いや魔法であるのだが、あれだと五発が限界だ」

……嘘をつけ！

その後の説明を纏めるところだ。

- ・MPは寝ても回復しない（ゲーム的なあれはなし）
- ・でも時間経過か回復アイテムで回復する
- ・回復アイテムはプロテイン

俺的には右ストレートにしか見えない一撃だった訳だが、どうやら魔法らしい。へえ。

しかもプロテインらしい。へえー。

「で、MP足りなくなるとどーなの？」

これも気になる。何の問題も無いのか、それともDieしちゃう設定なのか。

「萎む」

音を立てて染まった頬を分厚い掌底で包み込み、白黒に明滅する俺の視界の真ん中で恥ずかしそうに面を伏せる。

俺は耳に小指を突っ込み、軽くぐりぐりとちゃんと聞こえているか確かめてから聞き返した。

「……はい？」

「は、恥ずかしいことを何度も言わせるな……！ 我の……我のこの筋肉が、見るも無残に萎んでしまうのだッ……！！」

地球の平和の為に、MPゼロの状態をキープした方がいいんじゃないかな。

ぼんやりとそんなことを思ったが、いつになく賢明な俺は口には出さなかった。

レティシアの動きに応じ、各部の筋肉がレインコートを盛り上げているのが分かったからだ。あれは突つつくと破裂する。多分。いやきつと。

「プロテイン飲むと回復すんの？ マジで？」

どちらかと言うと、正気で？ というニュアンスを込めてやった。今の俺には、疑問を解き明かす為に質問することしか出来ないのだ。パチパチと瞼を瞬かせ、レティシアは真顔で俺を見る。

「うむ。……申し訳ないが、主殿の家にプロテインはあるか？」

「残念なことに」

あるのだ。プロテイン。一回飲んだけどマズかったから放置してた奴が。牛乳で溶いても粉っぽく、況んや水をや、である。

「安心だ！ ではほんのお礼に、我が秘蔵の魔法を教えてやろう！
！」

俺は色々と諦めて壁掛け時計を振り仰いだ。正確な電波時計の針が午後六時二十八分を指している。

「ほあっ！ ふう！ うむん！」

そろそろ夕食の準備をしてもいいかしらん。貧乏金無しなので、五袋入り百八十円。茹でて作るラーメンだが。

「行くぞ！ マジカアアアル・左・ジャブ！ ジャブ！ ジャブ
ジャブ！ ジャアアアアアブ！！」

バババビュンバビュン！ 拳を繰り出すのに必要な無数の筋肉の束がみなぎり収縮、謎の叫びと共に大量の左ジャブが虚空に打ち込まれる。

猛烈な速度で打ち込まれた拳は、部屋の中の空気を打ち抜き、ちよつと離れた所に居る俺の前髪を揺らすことに成功した。

ついでに、精神的には二千キロメートルくらい離れた所にいる俺の精神を、狙撃手並の精度で射抜く。

「又ハーツハハハどうだ主殿！？ ふん！ これなら、ぬん！ 主殿もすぐに覚えられるぞ！ そおい！」

「……………」

もう叫ぶ気力も御座いけません。 ってゆーか近所迷惑考えろよ隣のお姉ちゃん超怖いんだよ！？

俺は良く知っている。

あれは友人を呼んで集めて夜通し騒いだ次の日のこと。

友人を送り出した俺はお隣の清楚系黒髪ロングのおねいさんに捕まり、カーテンも閉めきつた真つ暗な部屋の中で延々五時間、マジ説教を食らったことがあるのである。

暗闇から飛んで来る静かな罵声……チビらなかったのが不思議だぜ……。

ちなみに、五時間ノンストップ、ぶっ続けで正座だった。

賄いなし休憩なし何より給料なし。最悪の労働環境だった。

あ、ちょ、やめ、やめて下さいおねいさん。あばば痛い……直接的な表現が心が痛いの……！

「あ、主殿、震えておるぞ……！？」

「オオオオ腹減ッタネー、ゴ飯ニシヨウネー……」

トラウマスイッチがオンになった俺は、狼狽する次世代筋肉搭載パワードスーツの視線を振り解いて夕食の支度を始めるのだった。プロテインの粉はどこやったっけか。

「……主殿、ちょっと良いか？」

夕食後。俺はまどろみに身をまかせてウトウトしていた。レティシアはおもむろにテーブルを壁に立てかけ、そんな俺の手を引いて無理やり起き上がらせる。

通常なら恥ずかしげに視線を合わせあたりするシチュエーションだが、ヒロインは首から下がムキ！ ムキ！ ムキ！ な体型の妖怪だ。

とてもじゃないがマトモなフラグは望めない。俺はそんなフラグ欲しくない。TRUE BAD ENDだそれ。ベアハッグエンドに違いない。

掴まれた腕にミチミチ指が食い込むのがその証拠だ。

「なあゝにいゝ？ 俺ねーむいんだよぉーごふぁぁぁぁぁぁ」

台詞の途中に欠伸が混じる。そんな愉快な俺を、半ば可哀相なものを
見る目つきで眺める黄金の上腕二頭筋。

「主殿、風呂に入らねばいかぬ。それにゴ飯の後、風呂の前は子供に見せられない運動の時間だと昔から決まっておる。ふ、寝かせはせぬぞ……」

顔だけ見れば艶っぽい、微量の羞恥と期待を孕んだ流し目が俺を捉える。

目が合った瞬間に俺の眠気は吹き飛んだ。さっと血の気が引いて行く。

俺、貞操の危機！？

不肖この三丈太郎二十歳。未だ清い体のままである！

「……………！……………！」

俺は無言のジェスチャーで大・拒絶。両腕で胸の前に×印を作り、首を振る。初めてが筋肉魔神なんて、恐ろしさの余り声が出ない。

「ふふ、そう邪険にするものではない。最初は確かに慣れておらぬから戸惑うかも知れんが……やっている内に病みつきになるものだ……………」

顔だけ美少女の真赤な舌が、ちろりと軽く開いた真珠の歯の隙間から覗く。

恐怖に顔を引きつらせ、半べそかきそうな俺の方に、ぐっと屈強な筋肉の鎧が身を寄せる。

僅かに荒げた息が俺の頬をザワリと掠め、そして囁かれた。

「何だ、経験がないのか……………？ 珍しいな、安心しろ。我がちゃん……………教えてさしあげよう」

「そう、そうだ……上手いのだ、ああ、もっと……凄い……！」

今は夜。太陽に取って代わり、蛍光灯が唯一の光源として俺達の頭上に輝いている時間。

「んっ……。そんなに、強くしてはいかん。慌てなくても大丈夫だ……」

吐く息は荒く。

単純なリズム、激しい動きで汗が散る。

「あん、も、もう終わるのか……？ 駄目だ、男の子なんだから、もうちよつと頑張れるだろう……」

限界に向かって、ただ我武者羅に突き進む。感じるのは痛みと快楽。

俺の頭からは無駄な思考が削ぎ落とされ、どんどん体の熱が上昇していく。

「ふふ、頑張るのが辛いなら、一緒に数を数えよう……良いか？
ろく……なな……は、あっ！ は、早くしたらダメだ……ほら、はち……」

俺は 俺とレティシアはただひたすら

「きゅー……三十！　よーしゃ、筋肉の国直伝腕立て終わりー！」

筋トレをしている。

良く考えてみてくれ、こんな首筋から足の先まで筋肉に包まれた、合体ロボみたいな体した奴とどうこうなる訳ねーでしょう。

……ふふふ、色っぽい展開になるなんて、少しも考えていなかったさ……いなかったださ……。

何だよ、泣いてねえよ。

とにかく、高負荷・低回数の筋肉トレーニングをしているのだ。

今丁度、腕立て腹筋背筋スクワット、三十回一セットを二セット分、終了した所だ。

慣れない筋トレにムチムチと張りつめる俺の筋肉。嫌だ。

「ああ、良く頑張ったな主殿！　我もこんな真近で素晴らしい筋繊維達の律動を感じられて、今幸せだ……！　感動！」

人の筋肉をぺたぺた触って目を輝かせる姿は相当マッドな感じだが、そもそも筋肉要塞は首から下が異次元生命体。

多少の違和感やおかしさは、全て脛脛のヒラメ筋が乳酸として受け止めてくれる。

「……はぁん、ふう……本当に、いい筋繊維をしておる……」

「……」

褒めてねえよそれ。頼むから筋肉触って身悶えるのは止めてくれ。俺は滴る汗を無言で拭い、着替えを手にとって立ち上がる。あちこち既に痛むのは、若さの証拠だろうか。

「ん、おや主殿。風呂か？」

「ええまあ」

「それはいかん」

がつし！ と俺は腕を掴まれた。もう気力体力共に尽きた俺は、並大抵のことでは驚かない。

「ぬうあ！」

しかし、趣味筋トレ特技筋トレ座右の銘は二頭筋な怪物は、見た目からして並大抵ではない。

一瞬、こいつが並の世界になったら……世界の人々が例外なくムキムキマツチヨになったらという妄想に囚われかけたが、コンマ五秒くらいで振り棄てる。

ねーよ。何だかもう嫌過ぎるそんな世界。世界の修正力でも核でも何でも良い。滅べ。

「あばばばばばー！」

レティシアは素早く中腰になると、雨合羽に包まれた右腕の筋肉をム、ムムムムキィ！ と張りつめさせ、軽々と投げた。

何を？

俺を。

どこに？

ベッドに。

どぐわしゃーん！ と不自然な格好でベッドに叩き込まれてしまった俺は、逆さになった視界のまま俺を投げやがった半自動強制投人機を見た。

何の余韻に浸っているのか、そいつは俺を右腕一本で投げた体勢のまま、フォロースルーをキメている。

過去、世界中のどんな悪ガキだってここまで筋肉に頼った寝かしつけられ方をした奴はいまい。

「主殿！！」

「うあい」

疲れすぎて返事も適当になる俺。俺の頭の中にあるのは今、風呂に入る寝る、の二つだけだ。汗もベトベト気持ち悪い。

勿論、そんなこと微塵も知らないレティシアは、立ち上がりざまのマッスルポージングをズビシと決めて俺を見る。

「れでいふああすとを知らんのか、主殿！ 我は女の子であるぞ！
？ めは！」

「……もう好きにしちゃってー」

台詞の合間合間で違う筋肉をムチムチさせつつ、ポージングマッスルは言い放つ。

詳しく言つとこうなる。

『れでいふああすとを知らんのか、主殿！（三角筋ムキ！）我は女の子であるぞ！？（大胸筋ムキ！）ぬは！（上半身ムキムキ！）』

疲れ切った俺が二つ返事で了承するのも間違いないキモさ。

想像を絶する暑苦しさだ。六畳の部屋でマッスルミュージカルを開催されると、どこに居ても俺の居る所まで筋肉の熱気が伝わってくるのだ。

嫌なサービスだな。

その後、着替えがないと言う筋肉に対し（当然だ）、俺は今羽織らせている雨合羽にプラスしてダッボダボゆるゆるな寝巻きズボンを貸し与えた。

仕方無い。それしか入らないのだ。ムチムチし過ぎて。

レティシアが先に風呂に入り、俺がその後シャワーを浴びる。寝る前に歯を磨こうと洗面所に向かった所で

冒頭の遣り取りだ。

俺は大人しく台所で歯を磨くことにした。

今俺を構成する成分表示は、優しさゼロ%。むしろ厳しさ百%で出来ている。

なので。

無言のまま電気を消し、俺は布団に入って寝た。

「あれ、なんだろうこれ。目から塩水が……」

泣いてなんか無いよ。

第五話 猛る筋肉、街デビュー。

「我が名はレティシア・フォン・ムキムキ！ 決して、佐藤レティシアではない……！」

叫び。ある種の物理的な威力を伴って発せられたそれが、喧噪の中に広く響き渡る。

時間は奇しくも昼前、人で賑わう駅前。俺の前にそびえ立つレテ
イシアの深い翡翠色の視線が真っ直ぐ空間を突き抜け

「目逸らしてんじゃねーか、嘘つくなお前ええええええええええ！！」

微妙に逸らされたまま、明後日の方を見る。

一斉に群衆が「うんうん」と頷き、歩くマツスル罰ゲーム（ただし見る方に対して）の米噛みから垂れた汗がつつと顎まで滑り落ちる。

誰がどう見ても明らかな嘘。

これは、一夜明けた次の日の出来事である。

猛る筋肉、街デビュー

半開きのカーテンから朝日が差し込み、俺の顔を照らす。

どこからか小鳥がチュンチュン囀る音が響き、健康的な朝を演出する。

穏やかな朝の一時、眩しさに寝返りを打とうとした所でふと。

「何か、ちょっとこっ暑苦しいというか……」

まだ眠いが、仕方なく目を開ける。

そこに奴は居た。

「ふおお……！」

目に入るのは安らかな寝顔。伏せられた睫毛は朝露にしっかりとけぶるようで、意外に長い。

僅かに開かれて、甘やかな吐息を押しだす唇は可愛らしく突き出され。

すつすつと静かな寝息が俺の額をくすぐり、胸元にかかる長い金糸の髪の毛からは澄んだ香り。押しつけられた体からはミルクのような甘い香り。

そして

しどけなく寝乱れた胸元から、血管の浮いた分厚い筋肉が覗いているッツ！

「あ・る・じ・ど・の……！！！」

「ひ、ひいいいい！ グロっ！ 何という有害指定画像……！！！」

そう。

俺はレティシアに抱きしめられている。
というか、抱き締めつけられている！

何だこの今だ嘗てないアンチ萌えワード！ ちくしょうちくしょう！

「あ、ってちょ、痛、イタタタタ！ 痛い痛い痛い！ ギブ！
ギブ・アー―ッブ！！！」

ガツチリと背中中でホールドされた両手に力が籠もり、ギリギリギリ、と俺の背骨を責めあげる。

余りの痛みで、眠さもどこかに旅立ってしまったている。何の間接技だこれ。いや鯖折りだ。

おそらく純粋な痛みで真っ青になっているであろう顔を、思わず俺はちよつと上向けてしまう。

それを狙っているかのように、レティシアの顔がこちらに近づい

てくる。

何の因果か、真っ直ぐ俺の唇向けて迫ってくるそれは……！

「イヤーーーー！！ け、け、穢されゆーーーー！！！」

「おあ……お？」

俺の魂の叫びが、眠れる大魔神を揺り起こした。

しばしばと開かれた瞳は深い翡翠色。だが筋肉はムキムキ。

「た、頼むから離して下さいお願いします！」

「キヤアアアアア！ あ、ああああ主殿！？ 朝から我に、
一体何をするつもりなのだ！？」

ズゴン！ 理不尽に突き飛ばされ、床に転がる俺。

ババツと素早い動きで掛け布団を抱きよせ、存在しない異世界の敵が何かから己の身を守るレティシアの顔は真っ赤だ。

俺の顔は痛みとダメージで土気色だが。

「もう！ わ、我はそんな軽い女の子ではない！ 物事には順序と
いう物があるのだぞ！」

これが純粹に可愛い女の子だったらなあ……。萌え萌えなのになあ……。

俺が何をしたというのだろう。神様も俺に迷惑物件押しつけ過ぎである。どれだけ嫌いなんだ。

「主殿、聞いておるのか！ 主殿！？ ……あれ、主殿？」

どうしたどうしたレティシアさんや。

「顔が真白だぞ！ 大丈夫か、主殿ー！」

そりゃね。

「主殿ー……！ 我的、朝食が……！！！」

「そっちかよ……」

そして気絶。

時間が経ち、無事に回復した俺は膝枕で俺を看病するマツチヨさんの姿にもう一度悲鳴を上げ、現実世界に復帰した。現実には甘い。い。

鍛えられ過ぎたフトモモは固かったです。

色々あつて慣れた俺は、その後何事も無かったかの様に朝食を作り、プロテインを牛乳で溶き、言われるままに外に出た。

「どこに行くの？ 筋肉の国ですか？」

「うむ、ちょっと銀行にお金を下ろしにな。生活費位は入れるぞ」

「……」

普通過ぎる。心遣いは有り難いが。

この筋肉は、俺の目の錯覚とかではないらしい。

やはり歩く怪奇現象なだけあつて、行く先々で人々の悲鳴が巻き起こる。でも怒号はない。だって怖すぎるから。

俺は極力隣を気にしないように、歩く。街の様子は機能まで何も変わっちゃいない。

こんなに非日常な生命体と異世界体験をしているのに、日常は変わらない。せいぜい、筋肉に脅されて居候を許可させられたこと位いつも通り街を歩けば、曜日時間に関係なく沢山の群衆が好き好きに過ごしている。

若い男女。幼女。シヨタ。お爺さんお婆さん。スーツ姿のサラリーマン。エコバッグを提げたおばちゃん。

電気店の店頭では適当な番組が垂れ流され、本屋には滞りなく新本が入荷される。

二十四時間営業のコンビニも、災害でもなければずっと営業し続けるだろう。筋肉程度では日常は犯されない。

俺には、何が日常と非日常の違いなのか分からなくなってきていた。常識と非常識と言っても良い。

「……そう、だからこれも、別段おかしいことじゃあないんだ。そうさそうさ、常識常識……ふふ、ふふふふふ！」

「どうしたのだ、主殿？ 足りなかったか？」

手の中を感じるずっしりとした重み。指先に感じる一枚一枚のその繊細な感覚。胸に溜まる感慨と達成感が、血管に乗って俺の中を駆け巡る。

「イエイエいいいいえ。滅相も御座いませぬ姫様。100万円つて、凄いいんだネ……！」

要するに、俺は今初めてレティシアを正式に居候認定してやってもいいかな！？ という状態になっているのだ。

無論。初めて見た百人の諭吉のつつあんの力だ。グッバイ俺の

ちっばけな日常。

いやあ流石の俺も、百人の偉人に説得されちゃあネ！

いつもは俺に見向きもしないとつつあんが俺にその熱い眼差しを送ってくれるなら、俺は筋肉だつて受け入れるぜ……！

生活費と銘打ってレティシアから渡された札束は、現在しつかり俺の手に握られている。

あ、違うよ？ ネコババはしないよ？ そう、今日これからレティシアの服とか買いに行くからネ！

「てゅーかいいんですかコレ？ 普通こんなポンと渡すような額じやありませんよね！？」

感無量に浸って嬉し涙をこぼしていた俺はバツ！ と振り返る。

どんな過剰筋肉的トラップがあるか分からない。

今ならおどろおどろしいその筋肉だつて楽に直視……出来ずに、微妙に目を逸らす。難易度高すぎるよ。誰にも向かない難易度だよ。やはり、それ（金）とこれ（筋肉）は話が別だ。

「いや、我はその辺良く分らぬが、とりあえずその位あればいいかな、と」

「ちなみに、貴方のお家はなにやってらっしゃるーの？」

「ええと、何だったか……確か、パパは色んな企業の会社で、ママは有名なファッションデザイナーだ。我も株式持ってる」

ほらこれ、とピンクのキャミソールをぺろんと捲り割れた腹直筋と引き締まった外斜腹筋を晒し、タグに付いているロゴを俺に見せる。

俺でも知っている超有名ブランドだ。

しかし、娘とは言えこの服をチョイスするのはどうか。マジで。

「おお！ 超金持ちじゃねーですかお前さん！」

……ん？ 待て待て、それよりおかしい単語がなかったか？

「あの……レティシアさん？」

「？」

「今、パパとママって言いました？」

親御さんは、娘がこんな何て言うか、筆舌に尽くしがたい体格をお持ちになっていることをどう思っているのだろう。疑問だ。

それに昨日から、古の因縁とか現世に舞い降りただの何だの言う割に気になってたことがある。

一応ちよこちよこ話を聞いた限りでは、コイツは魔法が当たり前の世界からやって来たらしい。

百人のマッスル魔法使いが集まって初めて出来る大魔法、マジカル・大・右ストレートで世界と世界の壁をぶち破って。

そりゃまあこんな無差別テロ的な迷惑生命体が100体も集まれば、世界だってわりかしあつさり壁を通すだろう。

想像するだに嫌過ぎる魔法だ。俺が世界なら彼らにフリーパスを与えるね。

しかし。

「あ！ ち、父上と母上だ！ い、いかなあ、我もこの現世に降り立ってから、ちょっと毒されておるようだ。プンプン！」

とりあえずプンプンは止めて！ 意味的にも間違ってます。

この御方、もしかして……。

「……ちなみにレティシアさんや。苗字は？」

普通に考えたら、異世界から来たら言葉通じないよね。まして、日本語なんてマイナー語デフォルトにしないよね。

「佐藤だ」

「おいしいい！ 日本人じゃねーか！」

やっぱりな！ 異世界の魔法 少女（自称）の癖にやけに日本語ペラペラだと思ったらやっぱりな！

はっ！ と何かに気付いた様に頭を振ったレティシアが、銀行の前、駅前を中心に嘘を叫ぶ。

「しまった！ ぬぁ、私の胸鎖乳突筋がついうっかり間違えてしまったようだ！ 本当の我が名はレティシア・フォン・ムキムーキ！」

「無理あり過ぎるだろそれ！ 胸鎖乳突筋ってどこの筋肉だよ！ フォンって貴族かよ！ よりによってムキムーキかよおおお！？」

かよおお、かよおお、かよおお……俺の全力の突っ込みが、群衆の間に消えていく。

ふと頭を回して左右を見ると、大きく深く頷いている人が沢山いた。遠巻きだけど。

名探偵的洞察力でレティシアがハーフか何かだと看破した俺の前で、キン マンの着ぐるみがつくり膝を着く。

「くう、何たる不覚……！！ 我がここの駅から徒歩10分の所に住んでいる、佐藤レティシアだと何故分かったのだ！」

何自分からバラしてんのあんだ。てゆうか全部自爆ですよね！
だがそれは言わない。

精神の安全を守る為描写は伏せるが、上体を前屈みに膝に手を付くそのポーズ……！

バタバタバタバタ！ 騒々しい音に振り向けば、そこには苦しげに倒れる人・人・人！

首から下と上が織りなすギャップのパフォーマンス。ギャップといえども萌え要素は皆無、限界値を越えたキモさが老若男女問わず絨毯爆撃を敢行したのだ。

「いやあ、この威力に耐えられるってことはアレだ。俺はその分慣れちゃったんだなあ……」

苦しむ人々の阿鼻叫喚の図をバックに、俺はしみじみと呟く。嫌な慣れだった。

「ふふ、私の筋肉から迸る魔法的威光に耐えきれなかったようだな」

「佐藤の癖に」

「ぐっ……」

「どこにでもある平凡な苗字、佐藤の癖に」

「ぬうあっ……！」

「騙したね！？ 僕を裏切ったんだ！ 父さんにだって騙されたことないのに！ うえーん！」

言い、背を向けて疾走。ちゃんとうえーんの部分では可愛らしい泣きマネも入れた。

余りのキモさに周りの生き残りも精神崩壊。筋肉の精神攻撃ウェーブに便乗してバタバタ人を倒れ伏せさせて行く。畜生、そこまでキモいのかよ。

ノリの良い住民共め。

背後に流れて行く景色と人々の視線。それらを漠然と感じ取りながら俺は逃げる。ひたすら走る。

何故なら、俺はこの事態に混乱していたからだ。

レティシアの向こうから警察官が走って来たからでは無い。きっと無い。

第六話 迫る肉、そして筋肉。

「待てえい！ 主殿の筋繊維は我が守り抜くツ！ 我こそがマジ狩る魔法 少女、レティ」

「はん、うるさいのよアンタ。ムキムキムキムキ気持ち悪いわねっ！！」

「わ、私の口上を遮ったな！？ 不届き者！」

白衣に真赤なピンヒール。豊満な肢体を締め付ける、ちよつとドキドキする際どいボンテージ。肩口で揃えられた亜麻色の髪が風に踊り、翻る。

御堂久美子二十九歳独身。付き合っている男性なし。職業町医者。特徴毒舌。

「……何だろう、コスチューム的にはエロで嬉しい新キャラなのに、何だろう……」

俺の視線の先で、巨躯の筋肉姫とSM的衣装の女王様が向かい合っている。それも、俺のことで争っている。

男なら誰でも一度は妄想するシチュエーションだ。しかし。

俺が断固！ やり直しを要求するのは口角から泡を飛ばし暑苦しい舌戦を繰り広げる両者の姿。

片や、鉄筋コンクリート製のビルが如く頑丈な顔以外超絶筋肉姫。

片や、白衣の下に赤のエロコスチウムを颯爽と着こなし、腹と言わず二の腕と言わず顎と言わず、もっちり柔らかな贅肉を揺らす肥満クイーン。

マツチヨとデブ。

「……普通の女の人、居ないのかなあ……」

俺の切実な願いは青空に吸い込まれて消えてゆく。

これは、筋肉から逃亡を果たした先でのイベントである。

俺に迫る、肉と筋肉

「あーらら、ネタ的な勢いに任せてここまで逃げてきたは良いものの、どうすべか」

俺は手で汗を拭いながら呟く。レティシアに会ってから一日も経っていないのに、俺を包むこの圧倒的な自由感はどうだ。素晴らしい。

「ま、はぐれたけど家の場所は知ってるし……っていうかレティシア家近いらしいし大丈夫だよな……」

あの筋肉の鎧があればどんな暴漢も尻ごみするだろう。SPを付けるより確実だ。

駅前から走って二十分。俺は今自分の家とは違う方向へと歩いている。

知らない道。知らない場所。雑然としたビルが延々と連なり、道を歩く人影もない。

どんな町なのだろう。雑居ビルの窓を見上げて、どこにも電気が点いている様子はない。寂れた風が吹き、汗で濡れた俺の体から僅かに体温を奪う。

「あつー……流石に汗かくと暑い暑い！　アイス食べたいよね……」

「おーほほほほほ」

日差しは暖かく、風は比べて少し温度が低い。汗さえ引けば気分良く散歩出来るだろう。

足の向くまま気の向くまま、当て所もなくただ歩き続ける。

「迷子の迷子の」

「ほほほ。おっほほほほ」

道は分からないが、障りはない。どこかしら人が居るだろうし、案内板だって探せばある。そもそも携帯で地図検索できるし。

「あ、猫だ。……ほれ……ほれほれ……ほれほれほれ……！
ニャンコめ、何と愛い奴だのう……！」

「……おー……っほほほほほ！」

道の端で微睡む猫を見つけ、そろりそろりと近寄った。幸い人慣れしているようで、為すがままに撫でさせてくれる。至福。猫は世界の宝。

喉を鳴らした猫が俺の手に頭を擦りつけてくる。

「はー、癒されるわ。昨日からこっち、見た物と言えば……」

「ほーほほほ……うえっほん！ えほん！ ごふごふん！ ちょっと！」

アンチ癒し系リバーズ和み系の最先端に行く筋肉塊を脳裏に浮かべる。無理だ。いくら顔が可愛くても、少しも得した気分にならない。

某県の新マスコット並に詐欺だ。

「ちよつとアンタ蛆虫！ 聞いてないの！？」

肩を叩かれる感触に猫との触れ合いの時間を邪魔され、俺は夜叉の顔をイメージしつつ振り返る。

一瞬で引き攣った。

「何ですか人のことウジとか言っでぎゃあああああ！？ 脂肪！
」！」

「あんですってえ！？ アンタ食ってやろうかあ！！」

「ひいいいいい！ …… あ、久美子先生だ」

大声に驚いた猫が毛を逆立て、機敏な動きで路地へと逃げ去って行く。

その姿を視界の端に捉えながら、俺はベクトルの違うアンチ癒し系の生命体を前に言葉も無く硬直していた。

目に入るのは鮮烈な白。そして毒々しい赤。

「ひさしぶりねえ太郎。変わりはない？ ま、あんたの体調なんて宇宙の神秘よりどうでも良いけど」

「結構扱い大きいですね。先生俺のこと好きなの？」

「アホおっしやい。限りなく無限大にどうでも良いって意味よ。それより、どうこの衣装！ どうどう！？ 興奮する！？」

「……」

くつ。もうお気づきだとは思いますが、彼女が御堂久美子（29）独身「独身は余計よ！」である。

まさに絶世の美人。滴るような女の色気が噴き上がる美貌の持ち主だ。ただし後十……いや三十キロ程スリムな体付きだったならば、以前デジカメで撮った写真をパソコンで徹底的にダイエットさせた所、そうなったから間違いない。

その顔写真を使って彼女の経営する個人病院をPRした時は、来客数が四倍になった。男で。

診療室に入った途端全員完治するというミラクルが起きたが。

何はともあれ、完璧に体調管理出来ていない弾けるままに放置プレイなその豊満な肢体に目を瞑れば、腕の良い医者である。

「は、白衣をぴらぴら捲らないで……！！」

「あら何、恥ずかしいの？」

あえて何も言うまい。どいつ（筋肉）もこいつ（脂肪）もキャラが濃すぎるのだ。

俺如きモブキャラでは対応できない。

「そんなことは良いのよこのグズ。いいい？ 私はね、あんたの筋繊維に興味がある訳。だから 大人しく、解剖させなさい！！」

「ええい、またソレでござる！ 意味わからんし勘弁して！」

「お黙りチェリーボーイ。全ては私のダイエットの為！ 脱・デブ！！ その良質な筋繊維を説明して、永遠にスリムなボディを手に入れるわ！」

まさかの超展開。言い放ち、見る者に恐怖を与えるボンレスハムは白衣の袖口からメスとハンカチを取り出した。

磨き抜かれたメスの刃は、短いながらも鋭く陽光を反射している。切れ味は申し分ないだろう。

ハンカチには大方クロロフォルムでも付けているのだろうか。咄嗟に辺りに視線をやるが、依然として人通りは全くない。

シユタタタ！ 異様な輝きを目に滾らせた二重あごは体に似合わない軽いフットワーク。瞬く間に俺を壁際に追い詰める。

昨日の犬モドキなどより、余程分かりやすくてリアルな死の恐怖が俺の足を竦ませる。

音を立てて血の気が引いていくのが分かった。

「……！」

「そうそう、イイ子ね。大人しくしてなきゃお仕置きしちゃうぞ」

「おえー……」

つい言ってしまった。正直早くも後悔している。

顔中に鮮血を滴らせる様な怒りの血管をムチムチと浮き上がらせたキングスライムが、殊更ゆっくりと腕を振り上げる。

俺の視覚イメージの中で、たっぷり豊かなスライムボディがたゆんと弾む。

「正直な俺の馬鹿……！」

固く目を瞑る。訪れるであろう痛みと衝撃に備えて、反射的に体を強張らせた。

そして地響き。同時に着弾音。いつまで待ってもやってこない痛みに困惑して、恐る恐る目を開く。

「間に・合ったアー……！！　我が主殿に肥満ぶくぶく肉將軍が何をするッ……！」

「お、おお……？」

目を開いたその先、聞きなれた声が俺を包む。頑健な筋肉を身に纏い、アスファルトにひび割れを入れつつ着弾したレティシアの姿、長い髪が翻り、俺の鼻先をくすぐって行った。朝感じたのと同じ、シャンプーの匂い。

何となく最初の出会いを彷彿とさせるシーンである。

そんな風に呆けた俺を余所に、冒頭の遣り取りを挟みつつ事態が進行していく。

相性が悪いのか何なのか、2人の口論は激化の一途を辿っているのだ。

もう少し盛り上げれば、ムキムキと筋肉が唸り脂肪がプルプル揺れる大惨事になることは必至。

ずびし！　レティシアが芋虫、否否、人差し指を突きつけ叫ぶ。

「我はッ！　ご主人とッ！　デートをしておるのだッ！　何人足りとも、我が初　でえとの邪魔はさせぬい……！」

「そうだ久美子さん（29）、俺、俺達はでえ……はいダウト……！……行き成り何言ってますか……！」

「……」

「あ、あれ？」

「……太郎アンタ、それはないわー」

「……主殿、普通男女が二人きりで歩くのが……でえとでは無かったのかっ……我は間違っているのか……？」

おわ何だこの濃厚な負け感。さっきまでいがみ合っていた二人が見事にがっちり手を組んでる。

戦車位なら凹ませられそうな両の手拳鎚が、レティシアの胸元までせりあがり、その瞳には薄く涙の膜。

タイミング悪く通りに現れたおばちゃん連中が「ちよつとやあねえあの子」「遊んで捨てるのかしら!?!」「どれどれお相手は……うお!」

潜まないひそひそ話を始めた。丸聞こえた。

「太郎……」

「主殿……」

「……」

ぬう!

右を見る。

「お仕置きかしら……」

怒る肉。

左を見る。

「ぬう……むうう……ひぐ……」

泣く筋肉。

ズズイ！ と詰め寄って来た2人の迫力に、再び俺の足が震えだす。耐えがたい圧倒的迫力。
だが。

「……ご、ごめん、レティシア」

潔く頭を下げた。背筋は伸ばし、手は腰の横、顎は引いて深く深く斜め六十度。いや八十度。
今出来る精一杯の謝罪だ。

いくらレティシアが本名佐藤・レティシアだろうとガチでムチなマッスルボデイの持ち主であろうと、生物学的に顔は女の子。
泣き顔を見るのは辛い。首から下的にも。社会的にも。

そして俺の、ちっぽけな良心的にも。

「主殿……」

下げた目線の先、足元に女の子らしいサンダルが入りこむ。ていうかあったんだそのサイズ。

ガシ、と肩を掴まれ顔を起こされた。薄く涙を刷いた瞳に、情けない俺の顔が映っているのが見えた。

「許そう、主殿。私も早まったのだ。まずは……」

「いや、ほんと申し訳ない！」

「まずは……結婚を前提にしたお付き合いからだったなッ！……」

「凄いこと言っただねー！ それとこれとは話が別ですうううう
う！！」

寂れた風が吹き抜け、俺の叫びは空へと舞い上がっていく。

「……何、この私の空気感。スカスカだわ……」

崖っぷち独身（29）の眩きも舞い上がって行く。

第七話 ショッピングとポーシング。

「ふふん、筋肉く、弾ける筋肉、燃やせ脂肪、僕らの味方は乳酸だ
今だ、腕立て！ そこだ、懸垂！ 林檎をくだーけい」

小さくはあるが、上機嫌そうな筋肉姫の方から鼻唄が届く。

「ビール、ビルビルボディビール やぁマスタング！ 今日の大
会、ベルトは頂きだぜ！？ はははビル、まだまだ大胸筋の作りが
甘いな！」

……途中で、台詞が入りました。

楽しそうに吊るされた服を手に取りながら、わざわざ声色を変え
て喋りぬいている。

声自体は天使の歌声、天上の楽器。完璧なテンポとキー、澄んだ
声で口ずさみ、タンタンとサングルの先で床を叩いてリズムを取っ
ている。

だが、俺の興味はそんな所に執着しない。出来るだけ他人のふり
オーラを出しつつ、洋服屋 in the 筋肉に声をかける。

「……あの」

「唸れ大腿筋！ 世界記録を目指して」 挑め驚異のダンベル二
〇〇キロ……うむ？ 何だ、主殿」

「……それ、何の曲なの？」

「え、知らないのか？ 筋肉舞踏会。カラオケでも良く歌うのだぞ」

カラオケ！ まさかのカラオケ配信曲入りましたコレ！ どんな客層が歌うんですか、想像させないで！

余りの驚愕に後ずさり。その拍子に背中が女の子の子にぶつかってしまい、慌てて振り返ってその子に頭を下げる。

真に愛らしい笑顔を浮かべて会釈を返してくれた女の子の顔が、俺の背後を見てみる内に引き攣っていく。

「うわ、うわわ、うわわわあ！ ほ、ほほほ本当にごめんなさい殺さないで！ 失礼します！」

早口で言って走り去っていく。ちょっと本気目に瞳が潤んでいるのが見えた。何か辛い。いい知れなく辛い。

「……」

一つ溜息を吐いて振り返ると、楽しそうな広背筋がパツツンパツツンに盛り上がっているのが見えた。鬱だ。

「あ、この服可愛い……ぬう、Sサイズ……」

ちょーっとそれは入らないですよ。SってスモールのSだもの。ちなみにMは、マッスルのMでも無いよ。

心で呟いて目を逸らす。女装が趣味の男友達と買い物に行った時の気分である。

げんなりと首を振り、店の中を見回す。

所々で年ごろの少女達が目を輝かせ、真剣な様子で様々な生地・デザイン・値段の服を手に取っている。

ここはいわゆるレディースのセレクトショップ。セールだから、嫌に人が多い。

一人キョロキョロしている俺を、3、4人程の少女の集団が小さく指さしているのがチラと見えた。こう言う時、大抵の男はこう思う。

「女の子向けの店って、気まずいヨネー」

早く決めてくれないかなあ。

取りも直さず、大型デパート内での一幕である。

ショッピングとポーシング

「れれれれレティシアああああ揺らさなあいでえええええあ」

その後。俺はレティシアに抱えられてあの場から逃走を果たしていた。

正確に今の状況を描写するなら、そう、荷物のように肩に担がれているのである。

景色も、吐く息も、プルプルゼリーおばさん（29・独身）も全て置き去りにするスピードだ。いやこれはもうスピードじゃない。馬力だ。

レティシアはトップアスリートばりに大腿筋を唸らせて膝を突き上げ、空いた腕に筋肉の割れ目をびっちり浮かべながらの全力疾走。強靱な足が地を蹴り、その度に致死量の縦揺れが俺を襲う。

「我が、主殿を守るッ！！」

何に陶醉してるんだろうか、主人公に相応しい台詞が聞こえた。それはいいから酔いから守ってく……えぶ。

「ふはは、ふは、ふあはははははは！ 愉快！ 愉快なりー！」

「あばばばばば！ やめやめ揺らさなああああふう」

ガシコンガシコン揺さぶられる強制メリーゴーランドは、世界を狙える丸太足・佐藤が飽きるまで続けられた。

哄笑を響かせながらメロスの如く風になり、アスファルトの道を駆け抜け続けること二十分。

何せ、一回駅前通り過ぎて反対側に行つて、そこから反転して帰つて来たからネー。

「……あ、ぱ」

燃え尽きた視界の中、自分の口から何か白い靄が出かかっているのが見える。

すわエクトプラズムか！ 魂が旅立つてついでに現世からも立ち去ってしまう！ と言わんばかり、無理やり白い靄を噛み閉めて租借し飲み下す。

味はしなかったが、何か大事なものが戻つて来た感覚が嬉しい。膝に手をつき、さあ立ち上がろうとした所で眩暈を感じ、へたり込んだ。

視界の隅で、俺を下ろしてからどこかへ消えていた佐藤（筋肉）が戻ってくるのが見える。

「んむっ、んムッ、んンムウッ！」

ゴキユゴキユ！ とレティシアは、人間に有るまじき肺活力でアルミ缶をぺっこぺこに圧縮してしまっている。

健康的に反らされた喉、腰に当てた手、風呂上がりの一気のみポーズであらゆる打撃を無効化できそうな太い首に汗が光っている。

いや、肌が露出している所は全て汗でヌラヌラ、テカテカ！ 照り、光っている……！

「ぶ、はー！ 美味しいぞ、このホットお汁粉！！ 主殿も飲むか！？ 飲むか！？」

「はあ……お汁粉？　ってちょ、おま熱い熱い熱い！　ほっぺが陥没しちゃう！　そもそも何で夏前にお汁粉売ってんですか！？」

ググイと押しつけられたホットお汁粉の缶に、割と深刻にダメーシを受ける。

熱々のお汁粉缶を押しつける手を思わず払いのけた。ヌルリ！
汗でちよつと滑って気持ち悪い。

熱い。痛い。熱……でもちよつと気持ちいい……いい、いやいやダメダメ！　おマゾさんはハードルが高すぎます！

「こんなに美味しいのに何故飲まないのだお汁粉！？　ああお汁粉！　O・S H I・R U・K O……！！」

肉体的精神的に色んなダメージを負って動かない俺に業を煮やしたのか、レティシアは何となく懐かしの肉体言語。

間髪入れずに空気を打撃。走ったお陰でかいた汗を素敵に飛び散らせながらの　シャドー・ボクシング。

見えない相手を想定し、虚空に次々と拳を打ち込む。かと思えば、巧みなウィービングに急激なダッキング、絶妙なスウェーバックで攻撃を躲す。

レティシアはがしがしのインファイター体型の癖に、妙にステツプが上手かった。

切り刻む様に鋭くジャブを飛ばしながら、軽やかなアウトボクシングの技術を見せる。ああ、鋭いアッパー！

無論、駅前でそんなことをすれば人目を集めるものだ。瞬く間に人垣が出来た。

嬉しそうにそれを感じ取った筋肉露出癖の動きが加速し、合わせ

て額から、顎先から、お汁粉の缶を握ったままの手から汗の玉が飛ぶ。

キラキラと太陽のプリズム光線を反射するそれが、へたりこんだ
ままの俺の方に飛んできた。

「ひいひい……！」

汚れることも厭わない。ごろごろと地面を転がって避ける。

命の恩人ではあるが、普通に他人の汗とか触りたくないし、何かあの汗に触れてしまうとそこの筋肉が小山の如く盛り上がりそうな気がする。

速攻性プロテインか。

と、額に浮かんだ冷や汗を手で拭おうとして気付いた。

「OH! この手で触っちゃったYOO!？」

レティシアのマツスル汁でヌラヌラ光る手を慌てて服で拭う。嫌な汗がまた一つ米噛みを伝って滑り落ちた。

胸に手を当てると、動悸息切れが止まらないのに気が付いた。何て恐ろしい精神攻撃！

俺は疲れた体に鞭を打ち、じりじりと後ずさる。

良く見れば、レティシアを中心に半径3メートルのぽっかり空間が出来ている。老若男女を問わないそのキモさが人々を押し出したのだ。

気持ち悪さに子供が泣き叫び老人が倒れ、屈強な企業戦士も膝を着く。まさに地獄絵図。ここはどこだ、地獄の三丁目か。

「ははは！　やはり筋肉を躍動させるのは良い！　あ、私の筋肉は今日もキレてる？　キレてる……キレておる——ッ！！」

ズザザザ！ 更に半径5メートルに渡って人々が退いた。無理もない。どう見てもヤバイ目付きをしている。

キレてるのはあくまでレティシアの脳みその中身である。

「ああん、主殿……皆が我の筋肉に見・惚・れ・て・お・る……！
！ 身の内から湧き上がるこのムラムラ……！！ るまんちつく・
セクシーポーズ……！」

「……」

あはん！ うふん！ 声だけは甘く響き、しかし体はマッチョビルダー。

金剛力士像がセクシーポーズ（自称）を取るたびに精神を蹂躪する筋肉が跳梁跋扈。

膝に手をつき胸元を押し上げ、豊満な大胸筋の割れ目をキャミソールから覗かせ、パチリとウインクを一つ。

「ぐああ……！」

前方に居た、黒のスーツをビシ！ と決めた男性が胸を掻き毟って撃沈。力なく倒れ込み、ぴくりとも動かない。
良く見れば、口の端から白い泡が零れている。

そのポーズから片手だけ上げ、伸ばした人差し指で唇を撫ぜながら肩越しにちゃんと振り返る。お尻をより一層突き出したもうウインク。

「ぶほっ……！」

視線の先で、写真を撮ろうとしていた手から白の携帯が滑り落ち、次いで大学生らしい色黒の青年が崩れ落ちる。

カラカラと舗装された地面を滑って行く携帯を、幸運にも目を逸らしていた通行人がキャッチ。そつと青年の隣に置いてあげた。

更に祈るようにグローブの如き両手を組み合わせ、瞳に星を浮かべながらの強烈な上目遣い。小首傾げ付き。

「お母さーん！　びええええええええ」

「よしちゃん！　だ、大丈夫ぐつ……」

運悪く目が合ってしまった、小学生位の少年が泣き叫び、慌てて寄つて来たお母さんが昏倒。それを見た子供が更に甲高い鳴き声を上げる。

「き、強烈だな……」

とりあえず目を逸らした。太陽を見詰めて視線を浄化、ついでに脳内も浄化。

ふと目を下げると、頭の後ろで手を組み、大胸筋を強調するように胸を張り背筋を反らせるレティシアの姿。

また二、三人が崩れ落ちる。人間の弱点を撃ち突く的確な精神攻撃に、どんどん生存者が減っていくのだ。

俺の心配は目下の所、テレビ局か警察がすつ飛んで来るのでは無いかと言うことだ。どちらかと言うと、必要なのは救急車かもしれない。

人種信条性別門地その他諸々関係なく、平等の精神でもって等しく人々の精神にトラウマ画像を叩き付けるレティシアの自称セクシ

ーポーズ大会。

……その後10分間セクシーポーズ祭りは止まりませんでした、
まる。

「さあ主殿、人々の視線を堪能したことであるし買い物へ参ろうか
！ 服服洋服フリルレース！」

「フリルとかレースは止めてください」

「うむ？ 可愛いであろう？ 割りかし好きなのだが、どこがおか
しいか？」

「くう……言いたいけど、言いたいけどでも……！」

齒噛みして地団太を踏む。そんな俺を不思議そうに見るレティシ
ア。気づいてないのだろうか。激しく恐ろしい。

「も、もしかして、レティシアは、そういうフリフリで甘甘でゴス
ゴスな服を着たりするのかな……？」

「うむ？」

につこり、と。花が綻ぶように笑みを零した北斗神拳の伝承者を
彷彿とさせる筋肉ウーマンに、思わず一歩後ずさった。

まさか……いやそんなまさか！

「もちろん、着るに決まっているではないか。こう、もさもさで
フリフリなワンピースとかをな、こう、一回転したりとか、な？」

こう、の所でその場でターンを決めて見せる。剛腕が振り抜かれ、偶々近くを歩いていた男性の鼻先を豪速で通過。

腰を抜かせた男性は、服が汚れるのにも構わずに這いずって逃げて行く。半泣きだ。

しかし…… イツメエージンヌ。

身長百八十超、巷で話題の未来からやってきたサイボーグの如く成長させた筋肉の肢体を、フリフリのワンピースに包むその姿……！！

淡く膨らんだ袖から弾けんばかりの力瘤が覗き、裾から突き出るおみ足は奇跡の引き締め。

引き締め過ぎて究極進化、競輪選手の如くなっている。

そんな西洋の誉れ高き憂愁の美とはほど遠い、罰ゲーム（ただし見る方が）に等しいコスプレをしたしたレイシアの姿が、脳内に展開されている。

そして可憐に一回転するのだ。唸る筋肉で風を引き裂いて一回転。竜巻ラリアートの余韻を残しつつ、にっこり笑顔で小首を傾げたりするのだ。

あ・あ・あ・あ・あ！ ヒドイっ！

「…… もういいです。ほらレイシアさんデパート行くよー」

ここで普通の美少女なら是非ともお手を拝借して歩き出す所だが、それは無理だ。俺はスタスタと歩きだす。

ちゃんと隣にレイシアが付いて着ているのを確認して、大型デパートの偉容を見上げた。

地上十四階、地下三階。この辺りでも有名な巨大デパートである。大抵のものは此処で揃う、らしい。なので多分、特大サイズの女

性服もある筈だ。

レティシアから札束を預かっている俺は、歩く財布として彼女の買物に付き合う義務があるのだ。流石に置いて帰る程鬼ではない。

人の波に乗って自動ドアを潜ると、冷房独特のひんやりとした空気が俺を包む。肌寒さを感じる位に過剰な冷房に、さっと汗が引いて行く。

さて、女性服売り場は何階か。巨大な案内板の前で足を止め、しげしげとそれを眺める俺の横を暴風が駆け抜ける。

人の流れと空気を裂いて遠退くレティシアの姿をげんなりと見詰めた。今度はあれだ、何の騒ぎだこんちくしょう。

「こんにちはあッ！　そこな店員の御方！　女性物の売り場は何階なのか教えてくれぬか！？」

「あ、はい。女性服の売り場、は……じよ、女性服！？」

バツ、ババツ！　カウンターに着いて来客の案内をしていた女性店員が、作り笑顔をかなぐり捨て物凄い形相で筋肉を二度見。分かりますその気持ち。

自分の首から下がか弱い女性の目にどんな風に写るか全く気付いていないレティシアは、不必要に筋肉を滾らせ、ずずいとカウンターに詰め寄った。

ビクビクとその筋肉に血管が浮かび脈動するのに合わせて、哀れな女性店員さんの顔がドンドン引き攣って行く。

「そうだ、ぬうん！　……ん？　どうかしたのか？　青褪めておるが体調が悪いのか？　む、ふぬあ！」

「ひい！　お、お氣遣いなく……！　じよじよじよ女性服売り場は

七階になっております！ エスカレーターはあちら！」

「有難い！ ぬは！」

真珠のような白い歯を煌かせ、ウインクを一つ飛ばして上腕二頭筋をみなぎらせる。サービスのつもりなのか。

「はう」

「あれ、もう行った……ちょちょ、と大丈夫ー！？ あああ救急車ー！」

未確認筋肉物体に暑苦しすぎるポーシングを見せつけられた女性店員は、静かに息を吐き出し気絶。

隣で薄情にも目を逸らして耳を塞いでいた同僚の女性店員が気付き、泡を食って彼女の体を抱きとめた。

別に俺は悪くはないのだが、何故かこう言いたくなる。

「あわわ……う、ごめんなさい」

小さく謝り、無辜の民を次々と精神爆撃、かつ撃破しながらエスカレーターの前でこちらに手を振るレティシアの方を向く。

今日一日で、一体何人が犠牲者になるのか。余り深く考えないように頭を一つ振り、俺は前へと足を踏み出した。

「主殿ーッ！ 早く早くー！！」

溜息を吐く。今日は長い一日になりそうだ。

そして、やりとりは冒頭に戻る。

「主殿主殿！ これは！ これは我に似合うと思うか！？」

「うわーいまずはサイズを確認しようね！ 入るかぼけー！」

「は、入るっ！ これしきのサイズは我にだって……あ」

明らかにSサイズ。どう頑張っても入らない衣類を摘んだレディシアの手から異音。

「おまつ」

や、破いてんじゃねーよ！ とあくまで小声で怒鳴る俺。

「ぬ、ぬな……！」

「……お客様？ どうかさない、あああ！ ウチの商品！」

結局、可愛らしさの欠片もない男物の服をいくつか買った。レディースが入らないんだもの。仕方ないよね。

無論のこと、レディシアが女子にあるまじき臂力で引きちぎった服については謹んで弁償させて頂きました。

第八話 新キャラと筋肉姫。

「…………主殿、主殿。朝だぞ…………」

体がどこまでも浮かんで行くような、はたまた沈んで行くような心地よい微睡み。

「早く起きてくれぬと、朝餉が冷めてしまつ…………」

ゆさゆさ。ゆさゆさ。ごく優しい手つきで揺す振られているを感じる。覚醒しきらないまま、意識は茫洋と揺蕩っている。

「ぬう。むむう…………こほん、は、早く起きてくれぬと、キ、キス、してしまつぞ…………」

しばしの静寂の後、緩やかに深い眠りの世界に落下しようとする俺の耳許に甘やかな囁きが滑りこむ。

ほんのり冷たい手に頬を挟まれた。緩く、柔らかく意識が引つ張られて行く感覚。

意識の浮上に合わせて薄く、目を開く。

「ん…………」

目前、長い睫毛に彩られた臉を伏せ、ゆつくりと顔を近づける少女の姿。

白皙の頬に朱を刷き、細く小さい輪郭を覆い隠す金髪が朝日に透

け、キラキラと輝いている。

綺麗だな、とぶつ切りの称賛を心中で漏らしていると、少女の顔が少しずつ降りてきた。

「んんー……む……」

柔らかく、しっとりとしていて弾力があり、そしてとても甘い感触が唇に触れる。

数秒だろうか、数十秒だろうか。陶然と時が続き、やがて彼女は顔を離れた。

数グラムの羞恥と、慈愛に溢れた微笑みを浮かべ頬に当てていた手を滑らせる。

頬を撫ぜられる内に、臆気だった急速に意識が覚醒していく。少女の香りなのか、ミルクのような甘い匂いが身を包んだ。

「起きた、か？ 主殿……」

化粧をしている様子もないのに、艶やかに光る唇。そこに視線を吸い寄せられるまま、気だるく指を伸ばした。

その形を確かめるかのように触れ、なぞる。

「レティシア……」

そのまま首の後ろに手を回し、小さく柔らかな肢体を引き寄せる。彼女は潤んだ瞳を瞬かせ、ゆっくりとその臉を

「ひ、ひよええええええええ！！……ってあれ？ あれ？ ……」

夢？ 妄想？」

絶叫と共に飛び起きた。カツ！と目をかつ開き、左右を見回す。どこにも甘美少女レティシアの姿はない。

数秒混乱して、布団を跳ね上げながら激しく身悶える。穴があったら入りたい。ああ！ 布団に潜ろうか。

「ぬあああああ……いやぁん！ お、お、お、俺は何て妄想を！ ハッ、もしかこれも夢！？ そ、そうか普通の美少女がレディ」

「主殿！！ 朝だ、朝のラジオ体操の時間だぞ！ むうあ！ 今日
も私の筋肉は大・絶好調！ 早く起きろ、主殿！」

ニカツ！ ムキイ！ 顔でも洗っていたのか、つやつや卵肌のムキムキレティシアが洗面所から顔を出す。ついでにムチムチ筋肉をみなぎらせる。

やばい、こっちが現実だ。

「……あ、えー、はいはい、ちよつと待ってなー……はあああああ。俺って馬鹿なの？死ぬの？」

海よりも深い溜息を吐く。何て夢を見てしまったんだろう。現実との落差が激しすぎる。詐欺？ 詐欺かなコレ？ 眩き、布団から這い出る。

現実の風神雷神象様に朝餉^{あさくわ}は朝食を作るスキルはないし、そもそも首から下がアレなのでぶちゅーでラヴな関係になる可能性は皆無である。

くっ！
悔しくなんかないんだからネツ！

「ラジオ体操しようかなあー……」

首を鳴らす。ついでに、筋肉寝相でぐっちょんぐっちょんに乱されたベッドを整える。

何やかんやでレティシアとの生活も早1ヶ月。そんなある日の出来事である。

新キャラと筋肉姫

朝の暑苦しい筋肉ラジオ体操も、食事も終え、ぽっかりと空いた手隙の時間。

俺は貧乏な一人暮らしに相応しい小さなテレビを眺めている。
つ、と視線をずらすとそこには。

「ぬあー、このバッグ可愛いなー……あ、ママの所の新作かー」

バタバタ！ バタバタ！ 巻き込まれたら挽き肉になりそうな勢いで宙を蹴る足。

ジャージ姿でうつ伏せにベッドに肘をつき、ティーン向けのファッション雑誌を捲るレティシア改め佐藤の姿。

……台詞と首から下の差がシニールである。

例え慣れていても打撃力の高い光景から視線を戻す。

賑やかなテレビの画面にはしつとりと落ち着いた容姿の少女とベテランのコメンテーターが映っている。

「え！ そ、そんな……恥ずかしくって言えせんわ……」

司会者に思い人の有無を聞かれた少女が赤らんだ頬を押さえて身をよじる。

その度に背まで伸びる黒髪がさらさらと揺れ、会場内の客のものと思しき感嘆の溜息が漏れ聞こえた。

「あれれ、そんなこと言うとファンの皆が悲しんじゃうかもよ」

「いいえ、ファンの方々には……」

内容を聞き流しながらその顔へと興味を寄せる。

清楚さを引き立てる白い肌。細い頤に、すっと通った鼻梁整った眉、黒曜石の瞳。透き通った声音で紡ぐ言葉は鈴の音のようで耳に心地よい。

「主殿。何やら熱心に見ているが、ああいうタイプの娘が好みなのか？」

「いや、そういう訳じゃないんだけどね」

問いかけに返答し、振り返る。レティシアがバツと手元の雑誌を突き出した。

見開きで写っているのはテレビの中の少女。黒のビキニのみを纏ったその肌が眩く輝いている。

くびれた腰や、小さなおへそ、きゅっと引き締まった長い足のラインも未成熟ながら、背徳的な色気を纏っている。

十人中八人が間違い無く美少女と言い切ることが出来るくらいの、美少女だ。

言い切らない二人は美的感覚が天地崩壊しているか、ひがみ根性で現実と向き合えない者である。

「そんな訳じゃないとは、どういうことなのだ！ 何と云うか、こう、こういう、エロ大和撫子系の女が良いのか主殿は！？」

「違いますー」

もう筋肉じゃなけりゃ誰でも良いです。喉元まで出かった言葉を飲み込む。大体エロって何だエロって。

どう見ても水着に包まれたその胸元は 貧しい。美少女で微少女で貧少女だ。

「では、だいなまとはでいの我がビキニを着ようか！？」

「それだけは止めてええええー！！」

うばあ。浜辺で陽ざしを跳ね返す、黒のビキニに身を包んだマッスル魔法少女……！

日焼けの為にオイルを塗り、いつもより4割増しでヌラヌラ光るその肌！ 歓喜にわななく筋肉！

ば、罰ゲーム過ぎる……。

「……そういうんじゃないです。撫子は」

「お・に・い・さ・まあーーーー」

ガンバタム！！ 俺の言葉をぶった切って玄関がフルオープン。鍵は掛かっていないのだ。我が家は在宅時、鍵全開派。

それに、例え強盗とか入って来た所で、レティシアが筋肉を見せつけばそれで十分だ。

むしろ精神破壊力の加減が難しいのが難点だ。防御無視攻撃だから。

「ぬあ　！？」

「お兄さまがのたれ死んでないか、撫子が様子を見に来てあげましたわ……ってアンタ誰よ！？」

「撫子……」

三者三様の言葉が飛び交う中。テレビの中で笑顔を振りまいている美少女が、今まさに貧乏臭い我が家のたたきに立っている。

嬉しくない。もう全然、全く嬉しくない。

陽光を飲み込む、夜の闇を閉じ込めたかのような濃い黒の髪は頭の中の高い位置できゅっと結ばれ。

身に着けるのはシンプルな白のパーカーに黒のキャミソール。
上品ながらも可愛らしいデザインの黒色フレアスカートから伸び
る足はこれまた黒のブーツへと消えていく。

上品と清楚を売りにする、今爆発的大人気の美少女アイドル・撫
子の険しい視線が俺を貫いた。

なまじ美人の方が、怒ると怖い。

「お兄さま、説明！」

「……はい」

収拾着くといいな。とりあえず撫子を部屋に上げながら、何度目
か分からない溜息を吐いた。

「……で、この女性がお兄さまの部屋に棲み着いていると」

「おい、字が……や、何でもアリマセン。そういうこと……はい、
どーぞ」

「ありがとうございますわ、お兄さま」

三十分。撫子への状況説明にかかった時間だ。

「怪物に襲われた所を魔法で助けて貰ってそれを盾に居候認定さ
せられかくかくしかじかで現在に至る」

と、簡潔に十秒くらいで説明したらもの凄く怒られたので、仕方
無く最初から順を追って説明した。

話している内に思ったが、しかし滅茶苦茶な内容だ。

滅多に作らない甘いホットチョコレートを撫子に手渡し、テーブルに着く。

さて、今度はこっちだ。俺の横側、撫子の真正面に座るレティシアに目を向ける。

血走った翡翠の瞳がランランと輝き、俺をざくざく貫いている。心なしかギリギリと歯ぎしりの音も聞こえる。

ミチミチとジャージを張りつめさせる筋肉の隆起が見て取れた。なにそれ怖い。

「主殿！ 何故芸能人が主殿の家に来るのだ！ こやつは主殿の一体何なのだ！？ スパイ！？」

「スパイって何だよおかしいだろ！ ……さつきも言いかけてたんだけどもネー。撫子って あ、これ本名なんだけど、俺の義理の妹」

「……い、いもうと……？」

「イグザクトリイ」

レティシアは右を見、左を見、首を傾げて頬を掻く。くりくりと戸惑う様に翡翠の瞳を動かした。

「芋、鵜と？」

「おかしいおかしい何だそれ。鵜は芋なんて食べません」

「胃、猛と」

「猛々しいっておい！ あれか、腹が減って減ってたまらんのか」

「忌もつと……」

「呪っちゃダメ！」

「……いもうと」

「イエス義妹」

そんなに衝撃的だったのだろうか。効果は覲面だ。暑苦しい筋肉の束を唸らせて俺に詰め寄ろうとしていた筋肉姫がよよ、と後ずさる。

それを見て何故か勝ち誇る撫子。意味が分からない。

一応説明が終わったとして安堵する。ずずりと緑茶を啜った。

「うふふ、お分かりですか？ 貴女がお兄さまとどんな関係かは存じませんが、撫子とお兄さまの間にはそれはもう強固な絆があるんですよ」

「うぬう、しかし、絆の強さなら我も負けぬ！ 何せ、我は主殿に身も心も捧げた身！ 第一、妹では大したことはできまい！」

ブバツ！ 鼻から緑茶を吹いた。さ、ささ、さささ捧げるって何を！ ひい！ 想像させないで！！

瞬間的に今朝の夢が脳裏にフラッシュバック。羞恥やら気色悪さが背筋を走り抜け、「うわああああ」と咳き込みながら床を転がる。

「はん、お兄さまが貴女みたいな筋肉お化けに欲情なさるとでも？ それに撫子はあくまで義理。新しい関係も構築可ですわ！」

会話が異次元過ぎて理解出来ない。何を争ってるんだろ。あと、アイドルが欲情とか言うのどうなのそれ。

「は、破廉恥な！ 何が清楚だ何が上品だ！ 発情お嬢様ではないか！ ぶ、ぶぶブラコン！」

「な、え、言いましたわね！？　取り消しなさい！　人のこと言う前に鏡で首から下見なさいよ常識外生命体！　マツチヨ！」

「ぬ、ぬぬぬ！　我はマツチヨではない、ちよつと筋肉質なただだあ！」

[illegible]

俺の心を読み取ったのか、撫子が上品な仮面を投げ捨て神速で突っ込んだ。流石妹。て言うかちよっとって何だお前ら頼むから勘弁して下さい！

俺は転がりまわるのを止め、興奮しすぎて肩で息をしている二人に向かって声をかける。

「まあ、とにかく落ちていて。……ほら、隣の部屋から打撃音が聞こえませんか？」

⌋
⌋
⋮
⌋
⌋

迷惑になっている自覚はあるのか、しゅんと大人しくなる両者。同時に、お隣のお姉さんからの抗議も大人しくなる。今度菓子折り持ってお詫びにいかないとな……。

「くっ……お兄さまに会いに来たのですのに、何たる不覚。撫子、取

り乱してしまいましたわ」

「いや、私も興奮しすぎたようだ。ブラコンは言いすぎた」

「い、いえ……まあ、そこは訂正せずともよろしいですわ」

ぽつ、と頬を染める撫子。

「……変態か」

消えたと思っていた争いの種が激しく再燃。撫子の表情が瞬く間に般若にトランスフォームし、立ち上がる。

ペチ！ 壁に張り手を一発かまし、叫んだ。

「あんですつてえ！？ この筋肉達磨！」

「……」

奇しくも、俺とレティシアの沈黙が重なる。

無言のままに撫子を見ていると、慌てたように口元を手で隠し、うふふと上品笑い。

「……う、うふふ！ まあ撫子ったら、今のは冗談ですわよ。冗談

」

これだ。この二重人格。撫子は上品で清楚なお外用の面と、口汚くて腹黒い内用の面を持っているのだ。テレビの前の皆さんは知らない。

大和撫子の異名を取るアイドルが、実家では俺を踏みつけて椅子代わりに腰掛け！ 「撫子様に乗られるなんて光荣じゃない？」

よりによつて下着を買いに行かせ！「ちゃ、ちゃんと穿いて上げるから可愛いの買つて来なさいよ！？」いいから行け！」

あまつさえバレンタインにもらつた義理チョコを笑顔で粉々に粉砕してのけたことを！「無駄よ無駄。義理だもの。ほらこれ余つたからあげる」

そして二言目にはこう言うのだ。「はあ？何言つてんのダメ男。この撫子様に逆らうの？馬鹿なの死ぬの？ああん？」

くっ……泣けて、来たぜ……。

芸能界入りしてから言葉遣いこそましになったが、言っていることは変わらない。

「……ぬう、撫子、と呼んで良いのか？」

「ええ。撫子も貴女のことをレティシアと呼びますわね？」

ぎこちない笑顔、ぎこちない動きでぎこちなく握手を交わす2人。

「あ！？いた、いたたたた！何でそんな力強いんですの！？」

「あ、す、すまぬ！我と張りあえるからてつきり並ではないと思つて……」

「はあ？」

何キ口で握られたのだろう。リンゴどころか西瓜すら握りつぶせそうな握力で掴まれ、赤くなつた手を擦る撫子。

彼女ははあ、と溜息を吐くと部屋の中を見て回る。

台所、浴室、部屋の隅。窓の棧やテレビの裏まできっちりチェックして、こう言った。

「駄目ですわね。ええ、駄目駄目ですわ。どうしてお兄さまは、撫子が居ないとお掃除もちゃんと出来ないんですの？」

言葉の割に満面の笑み。ちら、とその視線が筋肉姫に向かう。

「一応、女性の方もいらつしやるのに？ 女だから、と言うつもりはありませんが、何にも家事が出来ないなんてことは、ありませんわよね？」

「……わ、我だって……くっ!!」

家事能力ゼロの筋肉塊が、家事万能の腹黒撫子に勝てる訳もない。実際、この一ヶ月の間は炊事も掃除も洗濯も、全て俺がやっている。少しは手伝え居候め。

「我だって、鉄パイプを曲げられるぞ!!」

「それが、家事に役立ちまして？ …… ああもう、お兄さまは本当、仕方のない子なんですから。これからもちやんと、嫌々ですけど！ 撫子が家事しに来てあげます」

言って、ない胸を張る。その辺をばやっと思っていると睨まれた。

「いや、嫌々なら別にいいぞ。仕事忙しいんだろ？」

「むっ!!」

鉄パイプを曲げられるらしいびっくり生命が撃沈し、床に転がって丸くなる。今ならあらゆる打撃を無効に出来たりするのだろうか。筋肉の膨張で。

そんな感じだ。

「い・い・か・ら、お兄さまは撫子の言うことが聞けないんですの！？ 放っておいて死なれても困りますし、仕方無く、ですの！」

ぴっ、と人差し指を立てた妹が唇を尖らせる。その言動に、何となく最近巷で人気のキャラクターを思い出した。

キャラをあしらう主人公になったつもりでニヤリと笑う。

「はいはいツンデレツンデレ」

「なっ！？ べ、別にお兄さまのことが好きとかそんなんじゃないのですわ！ ……勘違いすんなダメ男！」

「ふぐおー！」

蹴られた。一瞬翻ったスカートから素敵空間が見えた気がするが、そもそも妹のを見ても嬉しくない。

嬉しかったら変態だ。続けて何度も蹴られ、俺のHPがどんどん削れて行く。

視界の隅に見えるゲージは幻なのかしらん。緑色のバーは見る間に黄色になり、そこからはじりじりとレッドゾーンへ。

「あ、主殿に何をする！？」

がし、とレティシアに抱えられた。庇うつもりなのか、完成された筋肉の山に埋もれ、締め付けられている。

庇われる、それは嬉しくなくもないが。

いいか、締・め・付・け・られている……！

「っあ！ ちょちょ、ギープ！ ぎぎぎギブ！ レティシアさん痛い痛い首が締まってまゝずううううあゝ！！」

「お、お兄さま！？」

「ぱ……」

「お兄さま……！！？」

義妹や筋肉、二大怪獣大決戦。全ての状況を置き去りにして、俺は安らかに旅立ちました、まる。

第九話 ライバル。

「気を失ってるだけみたいですわね……本当、まったくもう」

私の膝の上で安らかに寝息を立てる兄の額を撫でる。むずがる様にむにやむにやと呟くのを見て、つい笑みが零れた。

特筆すべき程の特徴もない顔。印象に残らないような普通の顔。昔、私を助けてくれた、大好きなお兄ちゃんの顔。

「す、すまぬ撫子殿。つい力が入ってしまったようで……」

年ごろの少女らしい、可愛い声。隆々と盛り上がる筋肉と童顔気味の顔で、目の前の少女の年齢はようと知れない。

兄の顔を撫でるまま、彼女 レティシアを見詰める。

「構いませんわ。今はお兄さまが眠っている方が好都合ですもの。折角です。女同士の話を、始めましょう？」

静かに、戦いの火蓋が切って落とされた。

ライバル

「では、まず。貴方、佐藤レティシアさん？」

先程の自己紹介では、レティシア・フォン・ムキムーキ、などとふざけた名前を名乗っていた。先制のジャブ。

「……ど、どうしてそれを」

「簡単です。私仕事柄、貴女のお母さんと何度もお会いしております。折に触れて、何度も娘の　貴女の写真を拝見しましたの」

「……」

続いてボディブロー。

目の間、押し黙るレティシア。ふん、と鼻を鳴らし、転がっていた兄の手帳を引き寄せる。

中身に特に不審な所はない。強いて言えば、兄は大学には行っているのだろうか？　大学二回生とは言え、まだまだ必修の科目はあるはず。

「それに……写真を見る限り、貴女は普通の女の子だったはずですけど？」

「……」

一週間の講義の項目と教室が書かれたページを見つける。赤のペ
ンで事細かに注釈が入っていた。……出席なし。レポートのみ。出
席のみ。

……どうやら、ほとんど講義に出ずとも単位を取る自信があるら
しい。後で説教。

手帳を閉じ、視線を上げる。

「黙っていないで、何か言うことはありませんの？ ……魔法だっ
たかしら、そういうお話？ 荒唐無稽、ですけど」

「魔法は……あるのだ。確かにそういう力は、ある。我には師匠も
ある」

「証明することは？」

「今は出来ぬ……我はたった一つしか魔法を知らぬ。今、もしも魔
法を解いたりしたら、我は主殿を守れない。蓄えた力が散ってしま
う」

「……お話に、なりませんわね」

溜息を一つ。首を振る。

「お兄さまの出まかせかとも思いましたけど、あの話が真実だと？」

貴女は、そんな不確かな理由で兄に迷惑をかけているんですの？」

知らず声が尖り、きつい調子になる。声に込められた叱責の念を感じたのか、レティシアは身を小さくした。項垂れ、肩をすぼめる。

「……本当、だ。信じてくれぬか。放っておけば主殿が……危険なのだ」

小さな子どもを相手しているような感覚だ。確証はなく、兄が危ないと言い、そして知らぬ内に見知らぬ女が兄の近くに居座っている。

……何て不愉快。

続けてレティシアは、師匠とやらから教わった、魔法について訥々と。

曰く、魔法は実在の力である。

ただし、炎を出したり宙を飛んだりする様な、御伽話の超常力ではない。

何故なら魔法とは、限られた人間が持つ、魔力を使用することで脳や細胞の働きや耐久性を活性化する力のことだからだ。

魔法は、時に傑出した才能として発現するのだ。普通の人間以上の知能。普通の人間以上の肉体として。

古くはキリストから、歴史に名を残すような天才は魔法の恩恵を得ていた可能性が高い。

魔法によって増幅・強化された能力はしかし、基本的に人間という種のスペックを超えることは出来ない。

魔法は、神様が人間に与えた奇跡の力。その者の最も強い願いを叶える為の力である。

そんな風に語った。

一応、頭の隅にメモを取り、馬鹿げた少女を睨みつける。

「では、お兄さまが狙われる理由は？」

「主殿の体、それも筋繊維だ。……ふざけている訳ではないぞ！
ちゃんと、理由があるのだ」

「……続けて」

レティシアは私の顔をじっと見つめ、兄の顔を見つめ……ポツリ、ポツリと語りだした。小さな部屋に、体に見合わない小さな声が満ちる。

「主殿の筋繊維は……極めて特殊なのだ」

「……」

「我のように、いや、我でなくとも、普通筋肉は大きくなれば成る程大きな力を発揮することが出来る。それは、一本一本の筋繊維が発揮出来る力が、限られているからだ。そして、筋肉が発揮できる力の上限を生理的限界という。しかし、そこまで行ってしまうと筋肉が耐えきれずに壊れてしまうので、それを抑える為に心理的限界というものがある」

「それで？」

「しかし、主殿の肉体は生理的限界が非常に高い。筋繊維の質が非常に良いからだ。つまり、常人の限界を越えて、細身のままでも凄い力持ちなのだ」

細身の力持ち。その言葉に思い出を刺激される。いつもは閉ざしている、記憶の扉の向こうから迫り上がってくるそれを無言のまま一時押しやり、疑問の言の葉を口にする。

「でも、お兄さまはあくまで普通の身体能力しか持っていないですわよ？」

「……この一ヶ月、それとなく探ってみたが、主殿は深層心理で『自分が普通だ』と強く強く思っている。その無意識が、心理的限界のもっと下にもう一つ無意識的限界というべきものを作りだし、常人と同レベルの力しか出せないよう抑圧しておるようだ」

「ふう……で、本来ならどの位の力を発揮できる筈だと？ 車でもひっくり返せますの？」

前髪を弄り、揶揄するように放った言葉に思いがけず真剣な眼差しが返ってくる。

「正確には、分からない。我は魔法があるので、ウエイトリフティングなどの世界記録と並ぶか、超える位の力が出せるが、主殿なら……そうだな、おそらく、二メートル位はひっくり返せるのではないかな……最も、そこまで全力を出せば、流石に体が壊れてしまっただろう」

「は！？ 二メートル？」

「んん……」

細く悲鳴の様に上げた声を、慌てて抑える。兄の顔を見た。大丈夫、まだ起きていない。

兄を起こさぬ様にか、心なしか、続くレティシアの言葉もより潜められた物になる。

「言葉にするとチープな感じだが、もし、こんな……一人で、二tもの重量を持ち上げる力が出せる人間が居るなら、軍隊なぞはこぞつて欲しがるだろうな。もし、そんな力を手に入れる方法があるなら？ 『人類の進化の為』だから、何をしてもやむなしとする者解剖でもして、調べようとする輩がいるのではないかな」

はっ、と顔を上げる。

「我は、主殿の体質は魔法に寄るものだと考えている。無意識の魔法が体に人外の贅力を与え、それを主殿の無意識が発揮出来ぬよう縛っておるのだと。そうだとしたら、主殿の体を幾ら弄った所で同じ力は得られない。しかし、主殿のことを知る者には、そんなこと分らない。魔法などというものは、今の科学で解き明かせるものではないからな」

「……」

沈黙。幾猿かの空白を挟んで、口を開く。

「……でも。人間の限界は超えられないのでしょうか！？ なら、幾らなんでも2tの重量なんて支えきれぬ訳が……」

「いや！ 確かにそうなのだ。……主殿の魔法は、明らかにその定義を超えておる。何故なのかは我にも分からぬ。ただ……今まで、そのような件が無かった訳ではないので、名前はある。『選ばれし者』……唯一分っておることは、彼らが生まれつき魔法を行使出来ていること。人間を逸脱した能力を持つこと」

「馬鹿馬鹿し過ぎますわ……」

「私もそう思う」

はぁ、と諦観の溜息を吐く。米噛みを抑えつつ、目の前で同様に息を吐いている少女を見やった。

「……仮に、その話を真実だとして。何故、そんな訳の分からない、本人も知らない体質が知られているんですの？」

眉間に皺が寄る。レティシアを、目の前の彼女の姿を通して、顔も知らない誰かのことを睨みつける。

それはもしかすると、神様なのかもしれない。十年前に死に絶えた、私の神様。神なんて残酷で、ちつとも優しく何てない。

「……十年前」

「っ！」

「一人の少年が、災害現場から一人の少女を助け出す奇跡があったらしい。消防隊が少女を発見した時は、入り組んだ瓦礫が積み重なっていて、重機がないと少女を救出出来ない状況で。でもそこは足場が崩れていて、とても重機を持つてくるスペースなどない。それに他にも要救助者は居た。涙を呑んで消防隊が他の要救助者の所に駆けだすと、一人の少年が現れた。誰何の声も聞かず、幼い少年は重機でないと持ち上げられないような重さの瓦礫を、一人で持ち上げ、どかし、中から少女を救い出した代わりに限界を越えて倒れた。確か、その後入院したはず」

フラッシュバック。寂しくて、怖くて、痛くて、寒くて、とても優しい記憶が溢れ出る。

ごくんと息を飲んだ。

「……なぜ」

「人の口に、戸は立てられない。とはいえ、非現実的な光景だったことが幸いして災害の当時は少年のことが語られることは無かった。でも時間が経ってほとぼりが冷めた頃、当時の消防隊員から話が広まり、荒唐無稽なその話は後る暗い連中に嗅ぎつけられ、いつの間にか裏を取られ、今に至る……その少女は、撫子殿のことではないか？」

「……そうよ」

口の中で小さく呟き、目を閉じた。

「ええ、そうよ……」

今でも鮮明に思い出せる、あの暗闇。私が家族を亡くし、兄を手に入れたあの日のこと。

どかされた瓦礫の隙間からこちらを覗く、幼い彼の顔。

「……」

「科学は恐ろしいな。主殿を狙う奴らは纏まっていけないようだな、それぞれの作戦がぶつかり合って、相殺して、失敗する内に、どうせどこかに取られるなら殺してしまえば良いと考える者も最近現れたようだ。……以前、主殿を襲った犬モドキは、そんな勢力の実験体の一つだ」

馬鹿らしい、と切って捨てるのはひどく簡単。それでも、私の直感は彼女が嘘を吐いているのではない、と告げている。

兄が　ほんの少しでも危険にさらされている可能性があるのならば、それは看過できない事態だった。

兄が居なければ、私はどうやって生きて行けば良いか分からないのだ。

「魔法。魔法、ね。……撫子にも、似たような物がありますわよ？……だから今の話、兄の安全の為だと言っなら信じてあげても、良いわ」

心底驚いた、と言いたげな顔と視線を合わせる。苦笑。時計が時を穿つ音が、規則正しく部屋に響く。

「私はね、対面した他人の感情を読み取れるの。……どういう演技を私に求めているのか？　どう振る舞って欲しいのか？　嘘を吐いているのか？　……私はそうやって、直感とでも言うべき物で、女優として、モデルとして、歌手として、芸能の世界を駆け上がって来たんですの」

オーディションでも、テレビの番組でも、雑誌のカメラマンの前でも。

彼ら彼女らが望む私を読み取り、それを個性として表現して見せることで今まで人気を得て来たのだ。

これからは更に先、もっと自分だけの魅力を磨かなければ、生き残れないだろう。芸能界は甘くない。

しかし私は、女なら誰もが持つ鋭い感性。それが特別研ぎ澄まされているのだろうか。

「魔法は 本人の強く望む力で発現することがあるらしい。撫子殿のソレも、もしかすると魔法なのかも知れぬな。……我は、主殿を身を呈してでも助けたいと。師匠の手助けもあって、その思いがこの肉体となった」

「嘘は感じられないわ、残念ながら。それに貴女、嘘を吐くにしては下手過ぎますもの。……私が本当に気になるのはもう一つの方です。貴女は、何故お兄さまを守ろうと？」

「そつ、それは……」

瞬時に頬を染め、俯く。

例え少女の体に見えなくとも、心を読まずとも、その表情だけで十分だった。

テンプレートすぎる反応からはソレ以外の意味を読み取れない。大げさに溜息を吐き、肩を竦める。

「はあ、やっぱりそういうことですね。……でも、そういう方面なら、私、年季がこもってますの。負けませんわよ？」

余裕を、自信を見せつけるように頤を上げる。兄を思う心は何一つ劣っていないのだと示すように。

「我はッ……」

口ごもる女。兄に寄りつく女。同じ物を欲する女。おそらく……私と同じ、ソレを手に入れる為なら、最終的には何だって投げ捨てられる女。

「何を、躊躇っているんですの？ …… 私たちは女。殿方を手にしたいなら、正々堂々その身で、手管で、心で、魅せて堕とすのものですわ？」

「……」

あくまで不敵な笑み。 …… 確かに過去、何度も足蹴にしたせいで今の友好度は低いかもしれない。魅せるといってもタイヘンなのだ。目を瞑って真っ先に浮かぶのは、泣きそうな、否半泣きの兄の顔。 …… 大丈夫、私にも魅力あるはず！

「私は、撫子は…… お兄さまを好きですわよ」

「うむむ…… ごふぁあぁあ。 あれ…… 撫子、何か言っ、ぶばっ！」

「……」

緊張していた空気が弛緩する。

羞恥に頬が染まって行くのを感じ、迷わず兄の鼻の下 正中線上にある人体の急所に振り下ろした拳を撫で、小さく嘆息をついた。熱を冷ます様に頬に手を当て、仕切り直すようにふるふると首を振る。

「あらあら、寝つきがよろしいですわね」

「な、撫子殿……！？」

「うふふ」

顔を引き攣らせるレティシアに対して艶然と笑って見せる。

「寝つきが……よろしいですね？」

「……う、うむ」

青い顔で何度も頷くレティシア。……素直な子ね。

「まあ、もういいわ。何だか色んなことを一度に聞いて頭がパンクしそうです。掃除もする気分でなしに……撫子は、今日の所は帰りますわね？」

言い、席を立つ。未だ膝の上に乗せていた兄の頭が床に激しく着地したが、そんな些末事には気も留めない。ついでにぐりぐり踏みにじった。

人の気も知らないで、馬鹿兄め。「うぐぐぐ」とぐぐもった苦鳴を上げる兄の頬を、足先で最後につつと撫で、くるりと踵を返す。

「うふふ、ではごきげんよう」

静かに玄関を閉め、乏し　ややボリュームの足りない胸に手を当て大きく息を吐いた。古びた階段を降りながらそれとなく周囲に目を配る。

「あらら、まあまあ」

電柱の陰、曲がり角、何箇所かに露骨に怪しい風体の男達が立っている。揃いも揃って、没個性なサングラスにペラペラのダークスーツを着込んだ男達が、偶然こんな場所に集まる訳も無い。

彼らは兄達の監視なのだろうか。

……余計、レティシアの言葉を信じざるを得ないようですのね。

しかしそれにしても 甘い。甘すぎる。

これなら私のストーカーの方が、まだ対象に悟られない技術をお持ちなのではないだろうか。

ちらちらと視線を超越す者、じつと何もない場所に立ち携帯で話している者、どれも稚拙に過ぎる。目立たない様にしたいなら、もっと他に方法があるうに。

……技術畑の人間なのかしら？ それも、少々常識の無いタイプの。

偶然を装って、目があつた男性に微笑みかける。

サングラス越しの視線が戸惑うように揺れ、分かり易く紅潮して視線を外した。軟な男達だわ。

階段を降り切った所で踵を返し、一定のリズム、背筋を伸ばした姿勢を意識して木造建築から一歩一歩歩み去る。

振り向かない様に背後に気を付けていても、男達が付いてくる気配はない。

「さてと、どうしたのですか……」

行きと同じ、たった一人の帰り道。

不意に漏れた溜息が、髪を揺らす風に流れて舞い上がった。

第十話 女心とハゲと俺。

体感的に随分久方ぶりのキャンパス。一週間に一度しかない、出席の欠かせない講義の教室に座して俺はテキストを捲っている。

腕から外して、何気なく卓上時計代わりに折りたたんで置いている腕時計を見る。時刻は十三時十五分。

講義が始まってから十五分が経過した所だ。

静かである。マジメな学生がペンを走らせる音以外、静粛な空間が適度な集中と眠気を掻きたてる。

嫌に響く扉の開閉音にふと、視線を上げた。

扉の前に見覚えのあるつるりピカピカと天然地肌頭の男が一人。

昼過ぎの気だるい日差しが燦々と差し込み、ハゲ……もとい頭頂部が輝かしい男を照らす。反射が眩い。

堂々と入室してきた男に教室中の視線が集中する。

そんな中 朗々と響く初老の教授の声を遮って堂々遅刻して来たおバカさんはこう言い放った。

「あれ、太郎久しぶりじゃん!? 俺! 俺俺! 俺のことちゃんと覚えてるじゃん!？」

教えても居ないのに一瞬で俺の位置を見つけ、わざわざ指さして下さるツルツルマン。

「く・う・き・よ・め！」

俺は驚異の口パク会話法。声を出さずに語りかける。何を読み取ったのか満面に笑みを湛えた友人Aは親指をぐつと上げ、

「お前に借りてたマニア向けのエロ本、俺の迸るパッションで汚しちゃったじゃん!？」

「最低だお前ええええええええええ!!」

軽く二百人以上収容可能な教室でそんなことをのたまった。

思わず机に手を叩きつけて立ち上がった俺と、社会不適合発言を惜しげもなくかましたハゲに女生徒の絶対零度な視線が突き刺さる。

この肌にピリピリくる凍てつく波動……間違いなく抹殺だ。

俺が。社会的な意味で。

禿げは既に手遅れなのでどうでも良い。

「……ゴホン！ えー、君。騒ぐなら出て行きな」

「はっ、そんな突っ込みのキレで俺が止められるかよ!？」

シュババビツ！ 右腕を高く、左腕を低く。右膝だけを深く曲げ、重心を軽く落として訳の分からない謎ポーズを決めたツルツリーナが叫ぶ。

空気読めてない度百%を越えて百二十%である。

もう一刻も早く死んで欲しい。ご臨終なされた俺の秘蔵コレクションの為にも。秘蔵コレクションの為にも。凄い大事なことで二回言った。

俺の浪漫を返せ。

「……いいから君、珍妙な格好しとらんで」

「これは荒ぶる俺のポオオオズ!!」

「出て行けクソ餓鬼アアア!!」

「何するじゃー……ん!!」

きいーんとハウリングを起しつつ、増幅された教授のアグレッシブな怒鳴り声が教室中の鼓膜を貫き窓を貫き、隣接した中庭へと消えていく。

ついでに、年齢に見合わぬ軽快な動きでシャイニングウィザードを叩き込まれた丸ハゲ君も開け放しの窓から中庭へと消えていく。俺以外の場内総立ち。難易度の高い大技をキメた教授に盛大なスタンディングオベーション。

地鳴りのような歓声が教室を揺らす。

初老の教授も、恥ずかしげに小さく手を振って「ありがとう、ありがとう!」声を上げている。

それを見て指笛が響き、更に沸く大教室。

「……もう何なんですかこの大学」

密やかな俺の呟きが、渦巻く歓声と拍手に飲み込まれて消えた。

女心とハゲと俺

「うおおおおおおお！！ 横綱あああああ！！ けけけ蹴りに体重を乗せないでえええええ！！」

太陽が中天に昇る少し前。せせこましい6畳一間に絶叫が轟く。意味不明かつ不気味な夢に、俺は魘されている。目の前にはヤクザキックで俺を踏み詰る御堂久美子（三十路までカウント3ヶ月）の姿。

戦慄の白衣をチラチラと揺らし、決して人様に公開してはいけない白いお肉が見え隠れ。

真紫のボンテージで体を締め付けた様はまさにボンレスハム。ふかふかすべすべ、最高級の手触りを持つであろう肥満贅肉の持ち主である。

いや、彼女は太っているのではない。全世界に配る夢と希望を溜め込んでいるのだ。

大型ジャンボジェットの発着地にもなる太鼓腹型格納庫、要パスワードの隔壁付き二の腕貯蔵庫。

競輪似生足倉庫に、無駄尻保管庫、最後の手段頬肉ため池。

「……な、何の夢を見ておるのだ主殿!?」

「あかん……あかんねんそんなそこはああいやいやもう堪忍してらめえーーーーー!」

ギリリ。獐猛に目付きを光らせた久美子（独身）が独独しく舌舐めずり。

たゆんたゆんとお腹のお肉を揺らせつつ、男の子のイケナイ所をガシガシと電気按摩。流石独身、欠片も容赦がない。

俺の画面右下、HPバーがどんどん削れて行く。

「ぬおお!! 主殿!? 今、助けますぞッ、そおい!!」

あわや、男として大事な尊厳的なものが失われる二歩手前で、頬にダメージ限界突破の一撃が突き刺さる。

首の骨が過負荷に耐えきれずぐきりと異音を立てた。余りの痛みに目が覚める。

思わず、無意識に苦鳴が口をついて出た。

「ひでぶっ!」

「ぬは! 肘が入ったやもしれぬ!？」

「……あれ? ……ひ、HPバーはどうなったんですか!」

急速に夢と現実の境界線がはつきりと分かたれていく感覚。現実にはHPなど存在しない。

視界に入っているもの。それは見慣れた自分の部屋だ。

しかしやけに傾いている。

寝転んだままつい首を傾げようとして。

「……く、首が動かない……」

一体何の襲撃にあったのか。どう考えても脳みそをぶち殺す（悩殺）ポーズらしきものを取ってこちらを覗き込んでいるレティシアのせいだろう。

肘がなんちゃら言っていたことだし。

「あ、主殿……」

首が動かないので、ごろんと体ごと一回転。何とか視線をレティシアの方に合わせる。

どこか落ち着かなげな色を浮かべた翡翠の瞳を覗き込んだ。

「はいなーんざましよ」

「撫子殿はもう帰られたぞ……後、そろそろ昼の時間だ。我は、可及的速やかにご飯とプロテインを要求する！」

「……」

瞳に映していた感情は何だったのか。すぐさま普段の調子に戻る筋肉姫に溜息を吐く。

もっ少し俺を労われとかプロテイン残り少ないから買ってこねば

とか、つらつらと意味のないことを考えた。

それ程重い怪我でもないのか、既に首の痛みは治まりつつある。しかし敢えて体ごと転がり、時計を見上げた。

かつ、と限界まで目を見開く。

「おう！！　すぐ出なきゃ講義始まっちゃうYO！？　支度支度支度ー！」

ゴキリ！　腕の力で無理やり頭を正常な位置に戻す。飛び起きざま、愛用のトートバッグを引っ掴んだ。用意周到な俺は、昨晚バッグの中にテキストとペンケースを突っ込んでいる。

自転車と家の鍵を放り込み、携帯をジーンズのバックポケットに叩き込んだ。

着替えは朝してあるので無問題。飯を作る時間など有り得ない。寝癖などに掛けている時間は無し。慌ただしく玄関へ向かい靴を突っかける。

「主殿！？　我のお昼ご飯は！？」

「ええい、それどころではありませぬ！　行かせてくだされー！」

筋肉達磨の放つ声を振り払い、扉をはね開けて飛び出した。

途端、日差しが俺に降り注ぐ。頭上に広がっているのは雲が数える程しか見つからない青空だ。

爽やかな空気を胸一杯に吸い込み、大きく一歩目のストライドを取る。

見てるだけで軽く鬱になれる自律歩行型圧倒的筋肉要塞より、出席が必須な講義の方が重要度は上だ。

廊下を軋ませ三段飛ばしでボ口階段を駆け下り、愛しのママチャリ・ラヴさん二号機に飛び乗った。

「主殿ー！ 我的プロテインはどうするのだ！？」

ズバム！ 玄関の扉を豪快にぶち開け、モリモリ筋肉を張りつめさせながら叫ぶ姫さまは精神の安寧的観点から無視無視。

しっかりとペダルに乗せた足に力を入れ、勢い良く敷地から飛び出そうとして

「痛ーッ！？ あああ鍵外してねえー！」

こけた。

叫びながらバッグを漁り、ロックを外す。今度こそ軽やかにラヴさん二号機（税込八千円。在庫処分品）は走り出した。

二ヶ月前と違い、照り付ける陽光は肌を刺す様に強い。寝ぼけ気味の頭を一度振り、安全のため左右を確認しつつ大学を目指す。

人気のない住宅街を突っ切り、コンビ二のある交差点を左へ。

青々と緑の葉を揺らす並木を抜け、二度の信号待ちを経て直進すると、徐々に大学の学舎が見えてくる。

特別大きくも小さくもない、ごく一般的な規模の大学だ。

「ふぁーお！ 遅れる訳には、いきません……！」

ここから先は坂道だ。自転車爆漕ぎのおかげで額に落ちる汗を拭い、力を籠めて立ち上がり、更に体重を加えてペダルを踏み込む。

古いせいなのか、碌にメンテナンスしていないせいなのか、一漕ぎ毎にギイコギイコと錆びた音が立つ。

「む、むは……！」

ついに坂を登り切った。大学敷地内の駐輪場に急いでラヴさん二号機を押し込み、きちんと施錠。盗まれることの無いよう念の為、鍵は二つ付けてある。

足早に駐輪場を後にしながら時計を確認した。現在、午後十二時五十五分。

「ふぁーーーーーおう！」

講義の開始時間まで後五分といった所だ。駐輪場から目的の教室までゆっくり歩いて約五分。

普通に歩いても遅れることはないが、気合いを入れる雄叫びを上げ、敢えて競歩で学び舎を目指す。

良い席は取れないであろうが走りはしない。自転車の全力走行で疲れているのだ。

大きく、素早く腕を振りながらの競歩を続けていると、中庭を突っ切って歩く一人の女性に目が止まる。

黒のショートカットを揺らし真っ白な足をミニスカートから伸ばすその姿。

普通の、筋肉でも脂肪でも義妹でも無い女の人だ。ちょっと可愛い。

「……うわキモっ」

しかし女性は、擦れ違いざま吐き捨てる様に呟いてのけた。

余りの驚愕に振り向くと、けっ！と顔を歪ませ、ペッ！と唾を吐き捨てるジェスチャーを残して歩き去っていくのが見える。

「……」

「あ、けーくうーん！ ごめん待った？ もー、今日はサービスし

ちやうから、ネ？ 許して〜！」

お姉さんAは丁度駐輪場の所で彼氏と待ち合わせをしていたらしい。

地獄の底をチヨモランマの頂から見下すような先ほどの眩きから一転、猫撫で声で彼氏らしき男に飛び付いている。

何だけーくんって。ちくしょう、お前の彼女なんかムキムキになっってしまうが良い！

う、羨ましくなんかないんだからねっ！

「……」

やはり普通に歩くことにする。あれ、何で視界が霞んでいるんだろう。フッフあれかな、汗が目に沁みるのかな……。

そして話は冒頭に戻る。

あの後、華麗なシャイニングウィザードで二階の教室から地面にダイブした全開ハゲは何事もなかったかのように再び教室に現れた。教授の米噛みに青筋が立っていたが、今度は謎ポーズも決めなかったのでお咎めはなしだ。

学生簿と照らし合わせて、単位という名の超個人的制裁を受ける可能性はあるが、まあ俺には関係のないことである。

今日出なければならぬ講義はこれ一つなので、後は帰宅するだけである。ダメ学生などのワードはNGだ。

「なーなー太郎。聞いてくれよ！？ 俺の、俺の進むパッションが

さあ！　こつ、んあーらめえ！！　ってなつたんじゃん！？」

「日本語で喋れ」

　　というか早く帰りたい。しつこくハゲが俺の周りをうるちよるする度、眩い反射光が俺の目を射るのだ。
何という目くらまし。

「もういいですあの本あげますー」

「え、マジじゃん！？　ケチんぼでネクラで非モテでブツサイクな太郎が、二言目にはパリイパリイ言ってあらゆる世間の荒波を受け流すあの盾役にしかない太郎が俺にエロ本くれるって！？」

「何だこのハゲ頭！　ていうかじゃんって何だその語尾！　キラ付けか、俺以上に女に縁がないくせにキラ付けか！？　それと嘘設定連呼すんなこの陶器ヘッド！　ナンパして振られる度にルルル歌ってんじゃねえよ校舎裏で！」

「おう、鋭い突っ込み切れ味抜群じゃん！　じゃあ俺はねばねば！？　ねばつくじゃん！？」

「意味わからんわあー！」

怒髪天。奴とは違い立派に髪の毛が生えそろっている俺のテンションはそんな感じだ。

どこか筋肉のテカリを彷彿とさせるスキンヘッドを右手で掴み、締める。握力は四十キロ位しか無いが、痛みはあるだろう。

「あいダダダダダ！　ドメスティックヴァイオレンスじゃーー」

ん！」

興奮しているのか、掴んだハゲ頭は見る間にタコ頭へ。顔と言わず頭と言わず真赤に染まった茹で蛸が唾を飛ばして喚き散らす。うわきたね。

「お前は俺の妻ですか！ キシヨイこと言つな名前も呼ばれないモブの分際でえい！」

「ひ、ひどつ！ 聞いて驚け俺にはちゃんとま

「さーて帰るかぁー！」

「名前くらい言わせるじゃーん！？」

言い捨てるや否や駆ける。ハゲも走って追いかけてくるが、駐輪場は目の前だ。

モブは大学から徒歩3分の所に住んでいるので徒歩。自転車に乗ってしまえば追いつけないのだ。

「馬鹿め！ こうしてお前はモブとして歴史に埋もれて行くのだ！」

ふははははは！ ここ最近のストレスを発散するように哄笑を上げる。ピシ、と敬礼を送ってラヴさん二号機の鍵を外した。

空気だけはちゃんと入れてある相棒が、俺の体重をしっかり受け止める。ペダルを一度空転させ、丁度良い位置で足をかける。

「ふは、ふあははは！ 俺の秘蔵コレクションを汚した罪、しっかり後悔するがいいハゲモブめ！」

「太郎ーーーーー！ 前、前ーーーー！」

「何が前だ殺人頭頂光線反射しないで下さい！ あーばヨー！」

何故か足を止め、五メートル位離れた場所で震えている輝きに目を向けたまま、ぐ、と足に体重を乗せる。

正しく前へと向かう筈のラヴさん2号はしかし。

「あれ？ 進まない……」

何も障害物はないはずなのに。おかしいぞ。

原因が分からずに前を向く。

そこに奴は居た。

「あ・る・じ・ど・の……！」

「ひいいデジャヴー！」

悪鬼の形相で筋肉を漲らせ、普段着のジャージではなくいつか着ていたキャミソールとデニムのショートパンツを身に纏った筋肉姫。久しぶりの生筋肉が目の前で唸り張りつめ、浮かんだ汗で服が体に張り付き殺人的ラインを浮かび上がらせている。

僅かに透けるキャミソールの下には、割れた筋肉、が……！

「ふう、ふう、ふう」

そんな不思議生命体は荒々しく息を吐きながら、自転車のカゴがつつしと掴み受け止めている。

助けを求めて視線を振る。駄目だ。ついさっきまでそこそこに人が居たのに、既にハゲ以外に人が見当たらない。何て危機回避能力

の高い大学生共だ！

「あの……れ、レティシアさん……？」

恐る恐る。そんな形容詞が似合うであろう青褪めた顔で、俺は今にも人間の限界的キモさを張り裂けそうな生命体に話しかける。

眦を吊りあげ、ぴくぴく顔面筋を痙攣させているレティシアが怖すぎるのだ。

「えむ……」

「……えむ？」

「我はMPを補充、したいのどうあああああああ！！」

「いやああ殺さないで！……MP？」

レティシアの叫びが大地を揺るがす。前にもこんな遣り取りをした気がするのは気のせいだろうか。

それにしてもMP。お日様の下で叫んで良い単語なのか。下手をすれば、いやしくなくても可哀想な人認定まっしぐらの単語である。

「家に、プロテインとか食材とかあるんですが……じ、自分で作るという選択肢は」

「我はな、主殿……！」

「な、何ですか」

「我は、料理が、出来ぬのだッ！ 故に主殿手ずから作った昼飯所

望、プロテイン希望!!」

「何だその我儘！ 微妙に語呂が良いし！ あ、ちょ、籠が握りつぶされちゃう!? ラヴさん！ ラヴさん二号機――!?」

全然嬉しくねー！

「ほ……」

ぽつりと落ちた呟き。 気になって思わず背後を振り向くと、そこには驚きをそのツラに貼り付けて凄惨なことになっている禿げが目に入った。

わなわなと震えている。

「惚・れ・た・あー！ 初めましてマドモアゼル！ あなたは何て素晴らしい女性なのでしょう！」

奇怪な叫び。 愛するラヴさん二号機の危機に滑りこんだのは、頭髪が無い頭部も眩いハゲ男。

こちらからでは太陽を反射して輝く後頭部しか見えないが、何故か籠を親の敵の如く握りしめるレティシアの手を取り、がつつり戸惑わせている。

そのお陰でラヴさん二号機の籠は無事だ。 そうつと自転車から降り、余りにも常識から遠い所に居る二人から離す。

一応鍵を掛けてハゲの様子を遠巻きに眺めることにする。 ハゲと筋肉。

異空間過ぎてぶつちやけ近づきたくないにも程がある。

こやつらは頭の中身が急展開過ぎるのだ。

「な、何だお主。 主殿の友人か？」

「はい親友ですよマドモアゼール！ いやぁ本当に綺麗なレイディだ！ すみませんがお名前を……」

「ちょ、おま！」

思わず衝撃が口をついて出た。振り返ったモブは一言二言レティシアに声をかけ、素早く俺のもとへ駆けつける。

しっかと肩を組まれる。距離の近い笑顔が怖い。

「太郎お前……いつの間にあんな可愛い女の子と知り合ったじゃん！？ 驚きじゃん！？」

「お前の美的感覚が驚きですよ！」

俺がこう言うのも無理もないと思う。首から上は確かに美少女に相違ない。しかし首から下は異次元モンスターの一種だ。

親切にも俺はその所をしつこく説明してやる。

如何に筋肉体の上に美少女顔が乗っているとキモいのかを解説する。

しかし、瞳をキラキラ輝かせ頬を上気させた禿頭はそんな忠告に耳を貸さず、しっかりと俺の手を掴んだ。

ぬらりと汗で滑る。振り払った。男に迫られてもちつとも嬉しくないしむしろ気持ち悪い。

「いいんだいいんだ。お前の言いたいことは良く分かる……だがな、俺達はライバルだ！ レティシアさんは絶対に渡さねえ！」

「何言っちゃってんの！？」

「何よりあの筋肉……垂涎ものだぜ！　ずっと隠していたが……俺は筋肉フェチなんだっ！」

フェチなんだ……フェチなんだ……フェチなんだ……大学の駐輪場にエコーを伴って響き渡る告白。

爽やかな笑顔で唾をまき散らしながらの友人の言葉に、俺は冷静に一步下がった。

正直、ドン引きである。

「語尾語尾。後キヤラ崩れてんぞお前」

「レティシアさん！ 僕と一緒に過ごしませんか！？ 勿論僕が出しますよ！ 何食べます？ ささみ！？ 鶏のささみ！？」

もはや筋肉に取り憑かれたハゲに日本語は通じないのか。筆舌に
 尽くしがたい笑顔のままロシアの許へとＵターン。

再びレティシアの手を捧げ持つように取って誘いをかけている。

「むう、しかし我はプロテインが……それに主殿の手料理……」

流石の無敵筋肉要塞も新手の変態には耐性が低いのか。やや仰け
反りながら言葉を濁す。

しるるレティシアに業を煮やしてか、返す刀で紳士の敵・アブノ
ーマルハゲが飛んで来た。

「おい、太郎……！ お前レティシアさんに主とか呼ばせてどんなアブノーマルプレイなんだよ俺そんなこと許さねえぞ俺も混ぜばっつ！」

「落ち着けええええ！」

迫り来るハゲの生理的気持ち悪さに、全力で拳をブチ込む。
良い感じの手応えを残して、ハゲの体は舗装されたアスファルトの上をごろごろ転がって行く。

ハゲが提げていたブリーフケースが宙を舞い、本人とは対照的に、控え目な音を立てて地面に墜落した。

……これで正気に戻ったか？

「た、頼むじゃん……もうお前への恨み節は抑えめに後で丑の刻参りに留めるから、兎に角俺とお食事出来るよう説得してくれじゃん……！」

もう駄目だコレ！　ごろごろと地面を転がり、這いずったまま俺の足首を掴むハゲの額から一筋の血。まさにゾンビの如し。

「分かったから離して下さいわああ俺のズボンで血を拭おうとするなああああ！」

「ぶばあ！？」

取り敢えず足の裏で頭の輝きを封じ込めるように蹴りを入れ、レティシアの所へと駆け戻る。

ハゲもレティシアもどちらも精神的ブラクラに等しいが、今は慣れているだけこちらの方がマシだ。

得体の知れない趣味を全開にしたモブキャラは、余りにも直視しがたい存在へと進化していらっしやるのだ。

近づきたくないし見たくも無い。というかもうあらゆる縁を断ちきってしまいたい位の超絶キモさご降臨中なのである。

「……うおお……何というグロ野郎だ……！　と、という訳で今日

は一先ず、アレと昼食を取ってくれ！ 俺は帰る！」

「待つのだ、主殿！ ……アレというのはあの頭の悪そうなハゲのことか！？」

「レティシアさん！？ 俺の愛を分ってくれ！ 具体的には、こう……こう！ こんな感じでイエハー！」

背後で悲痛な悲鳴が上がっているが、後、ちょっと見てみたらありもしないラインを空中に描いているが、気のせいだ。

俺は、初めて見たレティシアの蒼白な顔に逆に落ち着いて来ていた。

そう、決してB A K A 力で掴まれた肩がみしみしと音を立てているからではない。断じてない。

「そうですあのハゲのことです。彼は脇役の星、役立たずの国変態の町から地球に移住してきたモブキャラです。彼に名前などないのです」

「な……ハゲであるだけでなく、役立たずなのか！」

「チクシヨオオ！ 俺はハゲじゃねええ！！ 剃ってるんだよおおおー！！」

「では俺はこれで！」

シユタ！ と片手をあげ、地面が大好きなのかまだ転がったままの筋肉趣味なキモハゲーラと、呆然とする筋肉搭載型精神爆撃機に別れを告げる。

だが、一向に肩を掴む手が離れない。そして一秒ごとにレティシ

アの顔が悪鬼へと変貌していく。

間近でそれを見せつけられる俺の恐慌は計り知れない。

禍々しい気配に当てられ、通りがかった黒猫が泡吹いて気絶。カラスの群れが電線から飛び立ち、やはり途中で気を失って地面に落ちる。

辺りは是正に大・殺・界。

俺の膝も笑っている……！

「離して離して！ 僕もう帰ゆーーーーー！！！」

視覚から脳へ、背筋を通って全身に行き届いたその限界を越えた恐怖に期せずして幼児退行。

じたばたともがくが、頑強な手は全く外れない。ピクリとも動かない。

「主殿は……主殿は！ 我に、このハゲとで、ででえとして来いと申すのかっ！？ 許せぬ、無体に過ぎるぞ主殿ッ！」

「いやなんでそんなああ肩が外れちゃうっつ」

「レティシアすあーん！ 俺とでー」

「黙らぬか痴れ者がッ！！」

「おっふっ……」

バタバタガシャン！ レティシアの剛腕を振り抜かれたハゲは、視界の端から端へ、綺麗に消えて無くなった。

同時に、自転車をなぎ倒す様な派手な音が続く。

震える俺の視線の先でにつこり、とレティシアが満面に笑みを浮

かべた。

「主殿には、女心というものについて、教育が必要なようだ……
帰るぞ主殿！ さあ、我を後ろに乗せて2人乗りだ！」

ムチムチムチ！ 女性に有るまじき筋肉を漲らせ、ヌラヌラと光る上腕二頭筋を見せつける。

その筋肉のどこに女心があるのかと小1時間問い詰めてみたくな
ったが、きつと無駄だろう。

蝶々毎飛ぶお花畑で、花咲く様な満面の笑みを浮かべるレティシ
アの米噛みにはぶっとい青筋が立っている。

「は、はい」

結局、素直に返事することしかヘタレな俺には出来なかった。
解放されてすぐに自転車を数台巻き込んで転倒しているハゲを一
瞥して、すぐに目を逸らす。あれは他人他人。
願わくば死んで欲しい。

そして俺はラヴさん二号機の後ろにレティシアを乗せ、絶対自身
より重い彼女に苦戦しつつ家を目指すのであった。

「今ならアトラスの気持ち分かる……」

「ぐふふ、女性一人、かわい女性だった一人が重いとは言わぬよ
なあ」

「いつ……！ 肩を抓らないで下さい！」

下り坂を猛スピードで下りる最中、俺の涙がキラリと風に流されて行った。

第十一話 神ングアウト。

「いいかお前に足りないものッ！ それは胸囲自重慈悲包容力微笑
体力艶麗さ優しさッ！！ そして何よりも 年上分が足りない！
ノット妹ノーモア妹！ 昨今の妹ブームに反旗を翻す！ 俺は！
巨乳お姉さん萌え だああああああ！！」

咆哮。魂の限りを籠めた叫びがボロい六畳一間を揺らす。
何かをやりきった晴れやかな気持ちで眼下に目を向けると、まあ
るく目を見開いたレティシアと、膝を着き項垂れている撫子の姿が
目に入る。

「な、何てこと……！ く……やはり乳ですね！？」

ふふふ、この高尚な思考に着いて来れんか。

姉萌え！ 超甘やかされたい！ 姉ならロリでも良いし！ 年上

ロリ！ ロリお姉さんロリロリ！ 巨乳！

それってロリなのか？ ただの童顔？

ふと究極の命題に対して考え込んだ所を、レティシアの声が遮る
ロリ。

……人として色々駄目な脳内成分がだだ漏れになっている。マズ
イ、年上ロリ巨乳好きという性癖が広く知れ渡ってしまう。
生きていけない。主に世間的な意味で。世の中は変態に厳しい
のだ。

「うむ、ならば我など最適ではないか！ 我は主殿より年上！ しかも……認めるのは癪ではあるが常々、少しばかり幼く見られるのだ！」

ん？ と首を傾げる。はて、今何か日本語に近しい言語での幻聴が聞こえたのだがが。

「そのムキムキ ダイナマイト・バディのどこにロリがあるんですかあ！ 今すぐ浴室行つて鏡見てらっしゃ……あれ！？ 年上！？ 生活力皆無の癖に！」

再度の咆哮は俺の驚き。ずびしい！ 人差し指を突きつけた状態でレティシアを凝視する。

掃除としては有り余るパワーで棚から何から万能に壊し。炊事すればお鍋が爆発化学反応。

ならばと洗濯させてみると衣服を引きちぎるという三次元にあるまじき離れ業ぶりを発揮するレティシアが？

年上？ いやいや御冗談を。ははは。笑えない笑えない。

ここぞとばかりに更に言い募ろうと、口を突いて出そうになった台詞は物理的に押しとどめられた。

「どこがおかしいと言つのだニヤつくな我は不器用などではなあああああああい！！ デンジャラス！」

「おふう」

見事な角度で飛んで来た足刀が鳩尾に沈み込む。衝撃の余りくの字に折り曲がる体をどこか遠い視点で見ながら、俺は床に転がされた。

ビクビクとのたうつ横隔膜。

痛みで……呼吸が……出来まてえん！

この前撫子が現れてから約一週間。ある日の昼下がりの出来事である。

神ングアウト

「レーティーシア？ 早く起きろマッチョビルダー。蒲団が干せねえでしょ！」

朝と言うのは憚られる時間帯。既に窓から差し込む光は十分高く、駄人間よろしく惰眠を貪る駄オルケットの塊を照らしている。ちょこんと飛び出た頭には安らかな寝顔のオブション付き。その

額や頬に幾筋か、甘く柔らかな金糸の髪がかかっている。

ぷっくりと膨らんだ柔らかそうな頬は桜色、だらしなく緩んだ口許や緩く線を描く様に伏せられた瞼も可愛らしい。

むにやむにやと、意味を為さない寝言の合間に響く微かな寝息は細く色づいているかのよう。

「う、ん……」

肩を揺すられる段に至ってようやく起きたのか、薄く翡翠の瞳が覗く。

その瞳を覗き込むようにベッドに手を着いた。放っておけば再び瞼が閉じられてしまうのだ。

そつと手を伸ばし、ぷくぷく柔らかな頬つぺたを軽く叩く。ぺちぺちと良い音が鳴った。

「おーいレティシアさんや。寝るな寝るな起きなさい。もうお昼ですよ！ ご飯の時間ー！」

「ぬう、」はにゅ……」

「」はにゅって何ですかそれ……」

「ご飯の一言に反応したのか。如何せん呂律が回っていない様子ではあるが、今度は完全に瞼が持ち上げられる。

焦点は合っていない物の、茫洋と彷徨う瞳からは起きようとする幽かな意志を感じ取れた。手を付いていたベッドから身を起こす。

レティシアはごくごくゆったりと仕草で丸めていた体を伸ばし、半身を起こした。

タオルケットを巻き込みながらの女の子座り。猫がするように背

筋を伸ばすのと同時に大欠伸、俺は分厚い筋肉とご対面してしまう。

……いいか、重要なのはここからだ。レティシアは最近、暑くなってきたのでYシャツとスパッツを着用して寝ている。

どういうことが分かるだろうか。

Yシャツ。殆どの男子垂涎の衣装である。

男性ものを女の子が着用した場合、サイズが大きすぎて指先が袖からちよこなんと覗き胸元からは危うい曲線が大・解・放！ とても危うい。

その妖しい魅力にて男性陣の理性を一発で破壊しかねない、リールウエポンである……！

だがしかし、そんな最終兵器を装備するはレティシア。期待はムキムキと裏切られるのだ。

確かに、彼女が身に付けているYシャツは俺の物。テラテラと濡れ光る筋トレ後の筋肉言語で、先日半ば無理やりに強奪されていた代物である。

ちなみに半ば、と言ったのはラヴでスウィートな展開からではない。

目の前の筋肉姫が、一体どこまで常識を崩壊させることが出来るのかちよつとやってみたくなったのである。

つまり、どこまでキモくなれるのか。……一度、ヒラヒラフリフ

リのゴスロリ服を着せて見た時のことは、今では良いトラウマだ。

俺は無言でトイレに駆け込み、試着室を貸してくれた服屋の店主は迷わずその日の営業中止。監視カメラに映ってしまった精神破壊光線も破棄。

俺は真っ青な顔で店主に頭を下げ、不思議がるレティシアを連れて帰宅した後、一晩高熱に魘された。

軍隊とか皆ゴスロリ服採用すれば良いよ。戦場では銃弾の代わりにレースやリボンに彩られた屈強な男たちの精神攻撃が飛び交うのだ。

キモ過ぎて戦争中止、世界平和達成。……嫌過ぎる。

一瞬暗黒面に落ちた意識を、レティシアへと戻す。そして一般の萌えポイントとの相違を脳内で指摘していくことにする。

俺よりデカくて太いのでパツパツに盛り上がった袖からは節くれだったゴツイ指がしっかりと飛び出し。

男を惑わす魅惑の胸元からは、俺を悲しい気分させる分厚い胸板の割れ目が覗き。

鍛え上げられた肩の僧帽筋や三角筋のお陰で肩口はぎゅちぎゅち。背筋を反らしたことでリアルへそチラなその腹筋は、今日も見事に八つ割れ。

視線を更に下げればスパッツの伸長力の限界を今にも超えそうな豊かな大腿筋群……！

競輪選手かお前。

そして極めつけに。

よりによってその凶悪なおみ足が、女の子座りをしているのだ……！

「ぐあダメだめ却下却下大却下！！ タイムマシンでも使って、今すぐ過去の俺を殴り倒したい……！！ 何というグロ光景を召喚してしまったんですか……！」

「むあー……ごはにゅん……」

レティシアからシュババツと目を逸らす。しかし、ごはにゅんなる単語を聞いてやはり視線を戻した。まだ眠いのか、ごしごしと目

を擦っている。

そうだ、別にレティシアが悪いわけではない。

キモさの基本スペックが高すぎるくらいはあるが、俺がグロ世界の深淵に、不用意に手を、いや首を突っ込んでしまったのが悪いのだ……。

「……ほれ、目を擦るな。それと涎垂れてるぞ。だらしない」

節くれだったゴツイ指でグワツシガシ！ と目を擦るのを止めさせ、ティッシュでレティシアの口元を拭う。

抵抗もせず、ぼやぼやとされるがままのその姿に親ってこんな気持ちなのかなあ、と生暖かい気分になった。

何この所帯じみた空気。

「お昼ごはにゅ……ごはん」

「あーはいはい、ごはにゅの用意するからちやつちやと顔洗って来なさいねー」

ぺし。不安定に揺れるレティシアの頭を軽くはたき、洗面所兼浴室へと追いやる。

ちゃんと顔を洗っているのを確認して、台所に戻り冷蔵庫を開けた。冷やりとした空気が頬を撫でる。

冷蔵、冷凍、野菜室、と順に目をやり。

「つても何すべか……卵チャーハン？ いあいあ、一昨日作っただ……あ、カレー残ってたなあ……」

よし、お手軽カレードリアにしよう。

タッパーに詰めて冷蔵していたカレーの残りと牛乳、チーズを取

り出す。

うん、と一つ頷いて手早く米を研ぎ、炊飯器のスイッチを入れる。タオルで軽く手を拭って、カレーを鍋に開けた。

軽く火に掛けて暖めながら牛乳を加えて味をまろやかに。軽く味を見た。

……甘口だ。レティシアがあの外見で辛いのは苦手だ何だとうるさいので、三丈家のカレーは子供が喜ぶ超甘口なのである。

「えーと器、器……お、これこれ」

ドリアに使う食器を二つ取りだし、再び冷蔵庫を覗く。

我が家にバターなる高尚な代物はないので、植物性マーガリンを食器の内側に塗りたくる。

風味と、後片付けがしやすい様にといい憎い配慮だ。このこの、やるねえ。洗うのは俺だが。

弱火で焦げつかない様に温めていたカレーの火を止めた所で、米が炊けた。立ち上る湯気が食欲をそそる。最新式だけあって、炊きあがりまでが速いものだ。

「ふん、ふふん、ふ、ふふん」

順調な工程に鼻唄混じり。しゃもじで米を掻き混ぜる。一度カレールーと米を混ぜ混ぜしてから器に入れた。

その上からもう一度満遍なくルーをかけ、冷凍庫に入れてあったチーズを多めに散らし、オーブントースターに入れる。

チーズが焦げないように、適当な時間につまみを合わせた。低く長い連続した音。じりじりという音と共にチーズが焼ける香ばしい匂いが立つ。

「ふうむ、片付けしますかね」

残り物のカレーは使い切ったし、タッパ―や炊飯ジャーも先に洗っておきたい。

ノーモア汚れ！ 早い内に！

一分置けば汚れと菌が大繁殖だ。真実かどうかは分からない。呟き、振り返る。

「……ふお！」

「我はお腹すいたぞ……！！」

いつの間に洗面を終えたのか。だらしなさ全開で前髪から水滴を垂らすレティシアが膝を抱えて床に座り込み、こちらを見上げている。

寝ばけ状態から脱し、しっかりと焦点を結ぶ翡翠の瞳が鮮やかに煌き、がっちりクラッチされた両腕の筋肉が盛り上がり。

流麗なラインを描く眉、薄い桜色を刷いた滑らかな頬。揃えられた両の脚線はしかし妖怪丸太足。

何か深刻なダメージを受けている気分になって視線を逸らす。

最近視線逸らしが癖になって来た。言うまでもなく、マインドテロから儚い心の平穩を守るためだ。

誰だ、体を鍛えている女の子が良いなどと言った下郎は！ 引つ立てい、レティシアを見せてくれるわ！

「……レティシアさん、そこに座られてると作業がしにくいんですけど」

声をかける。身長差があるので、レティシアを見下ろす形になるのは珍しいと言えば珍しい。

というか、台所の地べたに座り込む様な行儀悪は俺が叱るのでそ

れも珍しいのだ。

家では、筋トレするか何か女の子っぽい雑誌とか読むか鏡の前とか部屋の中でボーシングを取っている所ぐらいしか見ない。

どんな駄目人間だこれは。

「お腹へった！ 後プロテイン」

「子供かお前さんは……慣れたのは良いが、少しは遠慮しろというに。妖怪家事デキナーイめ」

「……」

「……？ レティシアさんどうして俺の膝を掴んで……あちよ、やめやめやめ！ 割れちゃう！？ お膝の皿が割れちゃうよぉ」
「！」

凄まじいまでの激痛。左ひざを万力の如く片手で締め上げるレティシアの瞳が、妖しく光っている。

俺はぐ、ぐ、ぐと引き寄せられるままに膝を屈した。額に脂汗が、ついでに目に涙が浮かぶ。

「ぐめ、ぐ……ぐふ！」

言えない……痛すぎてもはや謝れない！

刻一刻と痛みは激しくなっていく。

余りにもヴァイオレンスな苦痛責めに何とか離してもらおうとレティシアの手を掴んだ。びくともしない。あ、指も巻き込まれでででで！？

「ぐふふ、主殿。乙女に言うてはならぬ台詞を申したな……！」

「……………！」

唯一無事な方の手で必死に床やレティシアの手を叩いてギブアップ表明。

可憐に窄められた唇から洩れる、乙女にあるまじきぐふふ笑いをBGMに、俺のタップが怒濤のエイトビートを刻む。

痛みが限界を越えてしばらく悶絶していると、レティシアはようやく手を離れた。

ふん、と鼻を鳴らし、

「良いか、主殿？ 我は可憐な乙女だッ！ 主殿は女心と言うものがちつとも分つておらぬ！ むん！！」

ムキムキ！ 額に青筋立てつつのポージング。

Yシャツの胸元からチラ見える大胸筋の割れ目がより深くなり、腕部の上腕三頭筋並びに上腕二頭筋、肩の僧帽筋がみっちり張り詰める。

腕をこちらに伸ばす動きに合わせてぎちぎちという音と共に、凶悪な筋肉と筋肉の境界線がくつきりと浮かび上がる。

力み過ぎのせいか、天然自然な赤鬼の仮面を被った姫の白い歯が暑苦しく光る。

あまつさえ、つい先ほどまで俺の膝の皿を粉碎しようとした猛威を振るっていた五指をわきわきと見せつけるのだ。

「……………」

まだ足が痛いので追撃は受けたくないし、傍から見るとレティシアは本当にイタイ人なのでそっと目を逸らす。

決して暴君筋肉を怖れているのではない。自称魔法少女他称無差

別精神爆撃機に対する俺の優しさ全開の宇宙的配慮だ。

地球の公転速度で脳裏に煌めく無駄能力だが、言わぬが華という言葉もある。

「ぬは！ 何だか、盛り上がってきたぞ……！！」

決して俺如き常人には理解できないししたくない何がしかの興奮に、レティシアは目覚めている。

先ほどまでの怒りもどこへやら、上機嫌にポーズを変えつつちょこちょこと摺り足で流し台から鏡の方へと向かうのだ。

かくして、俺の家に重心を崩さない摺り足横移動をする完全自律型迷惑筋肉見せつけ機の姿がご降臨なされた。単純にキモい。

「……神よ……」

ひっそりと厳肅かつ適当に十字を切り、何か間違っている気がしないでもないので首を傾げてから柏手を打つ。

ちなみに、我が家の神様は福の神様と貧乏神様である。特に理由はない。

憎い奴が現れたら貧乏神様奴を不幸に！ と祈り。

何か幸せなことがあったら福の神様サンキュー！ と感謝する。

その程度の信仰心に過ぎないのだ。日本人的モラトリウムが生み出す驚異の無宗教。

そんなことをしていると鼻孔に馥郁たるチーズの焼ける香ばしい匂いが届き、台所の床についていた膝に力を込め立ち上がる。

軽い疼痛が残っていたが、レティシアから理不尽マッスルアタックを受けるのが日常になっっているので気にも止めなかった。

一時的に痛い痛い、決して後遺症とか残らないように絶妙な加減で俺を痛めつけるのだ。最悪の技術である。

オーブントースターの焼き上がりを示す音に導かれるまま、ドリアの様子を覗き見る。

何やかやで放置してしまっていたが、焦げた様子はない。こんがりときつね色の焼き目が付いたチーズがとろとろとカレーにかかっている。

香ばしい匂いを嗅いで口内に涎が溜まる。絶妙の案配だ。

熱くて素手では触れないので、厚手のミトンで器を取り出し、平皿の上に乗せる。

落ちない様気をつけながらテーブルまで持って行った。往復してスプーンを用意し、冷たい麦茶を二人分グラスに注ぐ。

出来るなら先に洗い物を片しておきたかったがそうもいかない。未練たらたらに恨めしげな視線を流し台に送りつつ、異空間と化する浴室に顔を出す。

ぐきゅるるるるるる！

「あはん！　ぬはん！　うっはああああん！！」

目を逸らした。眉間を揉みほぐし、一息ついてから声だけを届ける。

一瞬で目に焼き付いてしまった悪魔的光景を一刻も早く完全削除してしまいたい。

何故、少しも色づばくなくない声でせくしい？　ポーズを極めんとするレティシアの姿を視界に納めねばならぬのですかゴッド！

色気出そうとする前に地鳴りの様な腹の音を止めて下さい。

「……ご飯出来たヨー」

何か邪悪な筋肉物質を含んでいそうな汗をまき散らしつつ、満面の笑みでポーシングするビルダーウーマン。

彼女が戦隊物のヒーローだったらきつと、日課のポージングタイム中は怪人をスルーで鏡の前に立っているに違いない熱心さだ。うわ、戦隊物だったら後四人くらい居るじゃないか。想像するだに恐ろしい。

ふと自分の境遇がとても不憫に思えてしまったせいか、もの凄く小声で昼餉の完成を告げた。

無論、ちょっとしたお茶目の様なものだ。気付かなかったらドリアが冷めるまでそっとしておこう何て思っていない。多分。

「何と！ やつとか主殿！？ いや素晴らしいす・ぐ・に・行・く・ぞ……！ ラストー！ ふぬあ……！」

ち、聞こえたのか。飯の事に関しては脅威の地獄耳を誇るレティシアに戦慄を感じつつ、怖いもの見たさでもう一度浴室を覗きこんだ。

ラストのポージングに何選択するんだろう。
そして激しく後悔する。

怖い物見たさ……人間はなんと業の深い生き物なのだろうか……。

「うきやああああ！」

何という筆舌に尽くしがたさ……！ 見てはいけないもの見てしまった。

その熟れ熟れの肉体が生み出す絶妙な精神攻撃具合は悶絶級だ。目を逸らす所か素早く踵を返し、力なく床に腰を落ち着ける。

注いだ麦茶を半分程一気に飲み干してつつぷした。

……何て食欲を減退させる画像なんだろう……。

「うむ……これで完全に目が覚めた……ぬ！？ 主殿、何をしておるのだ？ 体調が優れないのかご飯ハリーハリー！」

「心配より食欲の方が上じゃねーか！……全く、ほれスプーン。今日のご飯は即席カレードリアです！熱いから気を付けてね！」

「ふあ！熱熱っ！？しあやへろひあー！ー！」

「聞けよ俺の言葉を、言わんこっちゃない……何、舌火傷した？……はい麦茶」

差し出した麦茶が強引に掻つ攫われる。行儀悪く零れた滴を、台拭きで拭き取った。ちらと顔を上げると、涙目で麦茶をちびちび舐めている姿。

お馬鹿め。

舌が痛いのであればしばらく大人しくしているだろう。

一度席を立ち、レイシアの口に氷を一つ突っ込んでやってから菩薩の気持ちで手を合わせ、頂きます。

カレードリアにスプーンを入れた。

はふはふ。美味し。

「主殿ー！それでは、我は今日もちよつと出てくるぞ！ふむん！」

無駄筋肉を無駄張り切りさせて無駄ポージングを取りながら、レイシアから声が飛ぶ。

パソコンの画面に向かっていた視線を引きはがして玄関に目をやると、着替えをして靴を履いている彼女の姿が目に入った。

かけっぱなしにしている軽快な洋楽ロックの音量を絞り、こちら

も声を上げる。

「はい、夕飯までには戻ってこいよ。後無意味に町の人をあの世に送っちゃいかん。具体的にはポーズ取るな筋肉みなぎらせるな。OK？」

「我は子供ではない！ それに、この筋肉美は人を脅かしたりしないのだ。偶に……そう、偶に感動の余り気絶する者がおるだけだ！」

嘘臭えー。ジト目で眺めると、ついつとレティシアは視線を逸らす。一応自覚はあるのか。

丈夫なカーゴパンツに黒のブーツ、大きく十字架がデザインされたTシャツを身に纏ったレティシアの口が何か言いたげにもごもご動いた。

露出が控え目なので、パースが狂つてるとしか思えない頭身に全力を賭して目を瞑れば、何とか見られる姿になっている気がしないでもない。

いや無理だ。美少女顔に大柄ボディはどうしても違和感がある。

「ぬう！ 主殿、行つてきます！」

しばし視線を彷徨わせていたレティシアは劣勢に立った故か、焦った様に玄関を開け放ち半ば駆け足で外へと飛び出していった。室内に沈黙が下りる。

一つ溜息をついた。

「何か最近、外出が多いなあ」

そう、筋肉ムキムキの癖に、運動と言えば室内筋トレか室内シャ

ドーボクシングしかないレティシア。

特に用事もなければぶち引き籠っている駄目人間な彼女は最近、時間を問わず良く外に出る。これが更生の兆しなのか。

個人的には外に出るたびに何がしかの都市伝説を作ってくるので引き籠っている位が丁度良いのだが。

こう、何か服に鉄の匂いのする赤い怪塗料が付着しているとか。服がぼろぼろになっていたりとか。何と戦ってるんだらう。熊？ブーキラー？

ぐつと背筋を伸ばし、床に転がった。

つつい忘れがちになるが、レティシアが来る前はいつもこの静寂だった。

この狭い部屋に友人を呼ぶことはないし、そもそも交友関係はそんなに広くない。不本意ながら友人（仮）であるハゲも何かと忙しいらしい。

しんと静まり返る部屋は、好むものでもあるし寂しいものでもある。

まあ、それはそれとして。

「ドウフフ！ ロリなお姉さんの画像を集めるでござる！」

がば！ と起き上がりネットに接続。軽快な動作で立ち上がったブラウザを操作する。

こればかりは他人の目がある所で出来ないのだ。珠玉の画像庫、至宝たるムッフ画像を集めるのに人目は不要。むしろ無用。

むひむひ笑いながらお気に入りフォルダをクリックしようと

「主殿！？ 撫子殿が今」

「お兄さまー、この前は突然帰ってしまって申し訳ありませんわ。お詫びの意味で、今日はちゃんとお掃除してさしあげますからね！？」

「ぬおおお！」

「ひよわーーーーー！」

神速の動きでブラウザの閉じるボタンをクリック。脂汗を流しながら勢いに任せてノートパソコンも閉じた。

力を入れすぎたかも知れぬと焦りながらも、あくまで本命は機密情報の保持だ。設定の通り、パソコンは静かに休止状態になる。

「……………どうしたんですの？」

「主殿？」

「ふう、イヤ、ナンデモナイヨー……いらっしやい撫子。んで今日は何だつて？」

汗を手の甲で拭いつつ、何とかそれだけ口にする。

胸に手を当てると心臓がばくばく鳴っているのが分かった。やべえマジ危ないですわコレ。

「だから撫子が、駄生活を送っているお兄さまの為に嫌々ながらお掃除」

「だから家の前に立ってもじもじしていたのか！」

「うるさいわね！？」

ずかずかと上がりこんだ撫子の姿に目を瞠った。先程は動転して
いて気付かなかったが、白地に赤のラインが入った、瀟洒な着物を
着付けている。

夏祭り以外で着物を見ることが珍しいので、しげしげと眺めた。
良し悪しは分らずとも、妹とは言え綺麗な少女が和服を着こなす姿
は上々。

しかし、三人も居ると流石に部屋が狭い。

「う、うるさくなどない我は主殿の家に住んでいるのであるし気に
するのは当然だッ！！　ぬは！」

「やめてよキモいのムキムキすんな！　それに何開きなおってるん
ですの！？」

「だって撫子殿が魅せて堕とs」

「なぶ、だ、だまりゆえー！」

「やーい噛んだな！？　噛んだな！？」

「この……！」

顔を真赤に染めた撫子がレティシアにくっついてかかる。この二人、
いつの間に仲良くなったんだろうか。首を捻る。

まあ、仮にも女性同士であるし、そういうこともあるかと納得し
た。

しかしこう、字面では何でもない戯れだが、着物姿の清楚な美少
女が筋肉で出来た要塞に挑むのだ。

ひのきの棒で魔王に挑む位には無謀に見える。

ああ、案の定。

なでしこは ひのきの棒 でなぐりかかった！

しかし れていしあには きかなかった！

「あぶつ」

「あ、撫子殿！？ ごめ……」

俺は見ていた。遠ざけようとしてもしたのdarou、レティシアが何気なく突き出した掌が、豪速で持って撫子の小さなお鼻に突撃するのを。

あんなモンが飛んで来たらそりゃあ……あ、鼻血。

「うえ、うええ、うえええええん！」

爆泣き。余程痛かったのか、撫子はへたりとその場に座り込み、鼻を押さえながら眼尻からぽろぽろと涙の粒を零す。

おろおろと慌てて何も出来ないレティシアを横目に、俺はずりずりとティッシュの箱を引き寄せた。

「……もうキャラ崩れまくりですね妹よ。はいティッシュ」

「うぐ！」

ぱつと差し出したティッシュは一瞬で奪われた。

薄くではあるが化粧もしていたのdarou、涙の跡に沿ってファンデーションが滲んでいる。

「うわ……鼻血と涙で凄いことに……」

「うー！　みにやいれ！（見ないで）」

座り込み、涙する和装少女。しかし鼻血。

それはそれでカオスで可哀そう過ぎる光景なので、そつと撫子から目を逸らした。身ぶりでレティシアに指示を出す。

了解したのか、そうつと撫子の隣へ膝を着くのを確認し、台所へ向かった。

洗面所にしまつてあるタオルを取り出し、水に濡らしたタオルを2つ、片方だけビニール袋にくるんでレンジでチン。

暖かいタオルと冷たいタオルを交互に当てれば、涙の跡が残らないと聞いたことがあるからである。

「……こほん、私としたことが、取り乱しましたわ」

「おいまだ鼻の頭赤いですよ」

「……！」

コワ！　切れ長の瞳で睨みつけられ、思わず首を竦めた。黒曜石の瞳がキラキラ輝いている。

逆らったら多分食われる。肉食獣的な意味できつと。

「で、掃除するとか言っていましたけどおぜうさん。何しに来たーの？」

話を逸らす為に指摘すると、撫子は如何にもやる気なさに視線

を振る。

俺の隣で、小さくなるうとして泰山の如く鎮座していらっしゃるレティシアがびくうと震えた。

その動きで僅かに床が揺れる。我が家がボロいのかレティシアが重いのか。真実は体重計だけが知っている。

「ああ……今日はもうやる気なくなったのですわ」

「す、すまぬ」

「ふん」

短いやりとり。しかし、ロリーなおねえたまの画像を検索する楽しみを奪われた俺の追及は止まらない。

怒髪天を衝くと、逆にざっくり切り捨てられそうな予感がビンビン来ているので、なるべく柔らかかにだ。

決してヘタレてはいない。高度な外交的手段の行使と言って貰いたい。

「ほう、まあそれは置いといて何しに来たの？」

「ちょっと、ご報告に」

個人的にオラオラな勢いで、しかし外から見たらごく弱気な俺は首をかしげて疑問符を飛ばした。

宙を飛んだ目に見えない記号を、撫子が手で叩き落とす。

……ハートとかじゃ、ないのにな。

「撫子、この下の階に引っ越してきましたの。だからそのご挨拶に」

「「えええ」」

図らずも声が被る。小さくなっているはずのレティシアの方へ向くと、目が合った。ぐ、と互いにサムズアップ。

それを見た撫子がバムバムと両手でテーブルを叩いた。

「な、何でそんな残念そうなんですの!？」

「だって撫子蹴るんだもん」

「それに、私の強敵であるからして。あと主殿、男が「もん」はちよつと」

むむむ、と気色ばんだ様子の撫子は眉を顰めて言葉を放つ。

「全くあなた達は……それとお仕事の方もお休みすることにしましたから! 異論は認めません具体的には撫子に絶対服従!」

台詞の結びと同時にすつくと立ち上がる。細工の美しい扇子を取り出し、仰け反って無い胸張りながらぱたぱた自分を煽ぐ。

仰け反り過ぎて白いのど仏が露わになっている。

カオスだ。

何をどう言えいいのか分からな過ぎて、とりあえずテレビをつけた。

人気絶頂の国民的アイドルがいきなり仕事を休職したら、ニュースの一つにもなっているはずである。

果たして、確かにニュースになっていた。それどころかどの放送局も撫子が一時芸能界から撤退する旨の記者会見を流している。

あれ、こんな人気だったのか。凄いな。暴動とか起きないか心配だ。

撫子の顔をぽかんと見上げた顔が間抜け面だったのか、妹は物理的に上から目線で鼻を鳴らした。

「という訳で撫子に絶対服従ですわ。良いのです？ この豚奴隷」

「ひどい！ お兄ちゃんは撫子をそんな風に育てた覚えは……」

「お黙り？」

青筋立てた顔も怖い、完璧な笑顔の中で目だけが笑っていないのも怖い。正直ヘタレな俺は視線を合わせていられずついと下げた。

撫子に睨まれると、リアルお馬さんごっこ！ などと言って撫子に乗せた状態で砂利道を駆けずり回った時の傷が痛むのだ……。

勿論四つん這いで全力疾走。当時洩垂れ小僧だった俺は半ズボン着用。膝がどうなったのか言うまでもない。

血塗れスプラッタである！

「仰せのままに女王様！ ででですからもうこれ以上鞭では打たないで！ 私は豚です！ 無能な豚野郎でございますうう！ ぶ、ブヒブヒ！」

「撫子殿……」

「ちょい？ 鞭で打ったことなんてないでしょう！ というか、仮にも可愛い妹が一つ屋根の下に来るというのに、嬉しくはありませんの！？ 妹萌えはどこですの！？」

土下座。土下座である。どうぞ好きなだけお踏み下さいませ女王様！ という伝説の体勢である。

ぐりぐりと畳に額を押しつけていると、レティシアの声が耳に入った。焦った様な撫子の声も続く。

うひょひよ。撫子をからかうのは楽しい。

こんなことばかりしているから、もしかしくなくてもいびられているのやも知れぬ。

だがやめられない止まらない。

「もう！ 嘘ばかり仰つて。……それにしても、踏み易そうですね……踏み……ほらほら……どうですの……！」

「イタタ！ 痛い痛い！ ……あ、でもちよつと気持ち良……良くないよ！ ダメだよ！」

まさか本当に踏まれるとは。頭をぐりぐり擦りつけつつ、尻を左右に振るキモ土下座を決めていた俺の後頭部に衝撃が走る。

そのままぐりぐりと踏みにじられて危うく、危ない趣味に目覚めそうになった。

トリップしかけていた思考と撫子の足を振り払い、逃れる。

実の義妹の前、というか足の下で身悶えかけていたのだ。レティシアの変態を見る視線が痛い。

気まずさを誤魔化す為、俺は立ち上がり高らかに叫んだ。

「妹！ 可愛い妹が来るのは吝かではござらん！ お兄ちゃんなどと呼ばれた日にはその道の人ならば悶え嬉死ぬだろう！ しかしっ！」

びし！ と撫子を指さす。いきなりテンションマックスの兄の奇

行に付いていけないのか、半歩後ずさられる。

動きに合わせて結い上げた黒髪がさらりと流れた。

撫子のファンなら鼻息荒く飛び掛かる場面かもしれないが、今の俺はそんな不埒な行為など遙か彼方、高貴で末期な脳内ワールドに夢中なのだ。

「妹！？ 否、それでは駄目なのだ！ 例え時代が妹を求めていようと、我ら、我らのような高潔の士は妹イベントで喜ぶ訳にはいかないッ！！」

「……」

あ、ヤバイ何かテンション上がって来た。止まらないぞコレ。レティシアと撫子の蔑むを越えて蔑ろにするような視線も気にならない。

今俺は新世界の神だ。間違いない。

うひょー。

「実妹！？ 義妹！？ 年下の幼馴染妹キャラ！？ ヤンデレツンデレ素直クールロリ！ そんな！ ものではッ！ 俺の心は揺らないッッ！ 何故なら」

そして冒頭の神ングアウトに戻るわけだが。

水月に叩き込まれた痛みで強制的に神から徒人へ戻った俺は、恥ずかしさの余り死にたくなかった。

そう、所詮俺は徒人。神などではないのだ。

仮にも女性の前で、自分が年上巨乳姉キャラ萌えだということを暴露してしまう人間。

……頑丈なロープねーかな。

軽く鬱っている俺を余所に、撫子が復活を果たす。ステップを刻みつつ油断なくこちらを窺う筋肉姫の姿が怖い。

もう一度鳩尾に喰らえば確実にリバーズする。絶対する。

そうなれば、既にレッドゾーンに差し掛かりつつある俺の社会的信用度が底打ち底抜け、負の世界へとフルダイブだ。それだけは避けたい切実に。

「も、もう蹴らないで下さい……」

しかし、レティシアに向けて放った懇願は先に撫子の元へと届いたようだ。幽鬼の如く立ち上がり、ゆらりゆらりとこちらへ歩み寄る。

垂れた前髪で目線が隠れ、その表情は読み取れない。

正直な話怖い。こういう妖怪を昔話の中で聞いたことがある気がする。口さけ？

ゆらりと面を上げた撫子の瞳と目を合わせて、俺はひいと息を呑む。ひくひくと引き攣っている頬が非情に恐怖だ。

私は恐怖が貴女のジョーン。

脳内言語も不確かだ。状況的には全くおいしくないし笑える要素皆無の絶望的逼迫感なのだが、膝が笑う……！

「……所詮、男は乳か！ デカイ乳が良いのか！ ホルスタインですか！ ……私は！ 私が満足するまで！ 踏むのをッ！ っ止めない！！」

「うべ！ うべ！ あ、脇腹はやめッ！ ば！ お腹から何かはみ出ちゃう！」

スタンピング！ アイムスタンピング受け身！

着物の裾をからげつつ、連続でそのおみ足を振り下ろす撫子。一撃一撃に体重が乗っていて地味に痛い。

い、痛い。いた、て、いてて骨！ そこ骨ボーン！ あああ踏みにじらないで！

「ふう、ふう、ふう……今日はこの辺で、勘弁しておいてあげますわ？ ……次胸のこと言ったら殺すわよ！？ ああ！？」

一体何分経ったのだろうか。肩で息をしつつようやくと、全身全霊で兄を踏みなじる斬新な啓蒙運動を終えた撫子は、とても良い笑顔で言い捨てた。

未だぐにぐにと頬を踏み踏みされたままなので、気の抜けた声しか出せない。

「……ヴあい」

漏れ出た声は震えていた。ふん！ 荒々しく鼻を鳴らした撫子大明神がおみ足を退けて下さる。

思いつきり息を吸い、肺に十分な空気が入りこむのと同時に体の到る所から鈍痛が響いた。吐く息は熱。痛みを堪える独特の物だ。まあ自業自得である。

「レティシアさん？ ……引っ越しの荷物が重くて。荷ほどき手伝って下さいませんか？」

「うむ……構わぬが……その」

「ああ、そこに転がっている変態虫は無視していてくださいまし。」

姉だ巨乳だとはああああ盛る豚野郎ですから。駄ですの。愛の鞭」

「……」

もぞ、と動いた。首だけ浮かせて2人を見やる。

主犯の一人のくせに心配そうなレイシアの視線とは別に撫子の鋭すぎる視線が突き刺さり、ノーアクションで目を逸らした。

強い者に従う。弱肉強食は生物の本能である。

虫で豚ですぶう。日本語は喋れない設定なのだ多分。不用意な発言は間違い無くゴートウヘル。

そう、これは本能である。大事なことなので二回言った。

……これ以上踏まれたら、色んな汁が噴き出ちゃうのだ。

「ではまた。お伺いに参りますわ」

バタムン！

扉が閉まる強烈な音が、空しく部屋に響く。

……からかい過ぎたか。

後悔先に立たず。

第十二話 マッスルインザシー。

「ふはは！ ふは！ ふはははははははははは！ 人々の視線は
我に釘付け！ 我も罪な女よのうッ！！」

人々。見渡す限り、埋め尽くすとまではいかないものの、それ
でも大量の人間がそこには居た。

遙か空の彼方にはギラギラと情け容赦なく君臨する太陽。

どこまでも続く蒼い空、ぽかりと浮かぶ白い雲。果てなく広がる
塩気をふんだんに含んだ深い藍の水。

海である。

「うぎゃああああ！！」

「メイデー！ メイデエエエエエエエ！！」

「誰か助けてくれー！！」

「ウホ！ 良い姉貴……！！」

自宅最寄の駅から電車で三十分強。そこから徒歩で十分弱。山と
並ぶ夏の大レジャー場には、今阿鼻叫喚の地獄絵図が広がっていた。
怒号。悲鳴。絶叫。涙。鼻水水着その他もろもろ。

新型ウイルスのパンデミック並の恐慌に陥った老若男女が恐怖に顔を歪める。

原因は言うまでもなく一人の少女。彼女が視線を振るたびに群衆は右へ左へ逃げ惑い、ポーズを一つ決める度に数えきれない数の人々が力尽きる。

もう警察じゃダメだ。これはテロだ。自衛隊を呼べ。
後、最後に叫んだ奴病院逝け。行けじゃなく逝け。

俺はオーバーアクションに肩を竦め頭を振り、「H A H A H A 困ったぜマイコー」と呟いた。様式美という奴である。

正直な所海辺のレティシアの姿など見たくもない所か想像したくもない。むしろ今すぐ帰りたい。

何故かって？ 愚問さ。

「あん……！ 見られ、見せつける悦び……！ 我の肉体美が官能の炎にぬめり舐められておるぞ、ぬ、ぬは……！！」

鼻息も荒くレティシアは身悶えている。海パン一丁でそれに立ち向かう俺は呆然と思った。

ただしレティシアの方は決して見ないまま。

「フリーダム過ぎる……」

もうコイツ置いてお家帰りたい。

ある夏の日、本来は楽しくて仕方のない海水浴でのワンシーンである。

マッスルインザシー

照り付ける陽射し。肌をじりじりと焼くそれが容赦なく砂浜に突き刺さり、反射した光が目射る。

波打ち際では水の飛沫が飛び、跳ねた海水の粒が人々の体を濡らす。

パラソルを立て、寛ぐ者。目を閉じて太陽の下寝ころび、肌を焼く者や砂を蹴散らしながら楽しげに遊びに興じる者。

遙か水平線の先まで延々と続く海原のそこここで自由に泳ぎはしやぐ者。

人々が思い思いに過ごす浜辺で、二人はとにかく抜群に視線を集めていた。

「ふははははははははは！！ 真夏の海辺に我、参上！」

「お兄さま、撫子の水着、どう思いますの？ な、何でしたら一番に感想を言わせてさしあげますわ！？」

……いい意味でも悪い意味でも。

素顔を隠す為の大きめサングラスに白のワンピースタイプの水着を可憐に纏った撫子の姿には男女問わずの讃辞や嫉妬。

大胆にも大きく背中を開いた際どいデザインで、足りない胸元からきゅっと締まったくびれ、そこから魅惑のヒップラインへと布地が続く。

その下、滑らかにシミ一つない淡雪のような細脚がすらりと伸び、爪の形すら可愛い未成熟ながらも蠱惑的な脚線美を晒し。

活動的に頭の後ろで一つに括られた黒髪が風に靡くことが、より一層撫子の美貌と白さを際立たせる。

僅かな陰影を付ける肩甲骨、丸みを帯びた肩口。

それらも匂やかな色気染みたものを振りまき、彼女は女性という種の魅力で持つて強引に浜辺の男という男共の視線を釘付けにしていた。

扁平な胸部をモノともしない美しさである。惜しい。

扁平な以下略。

「ああ……良く似合っているなあ撫子の水着姿。流石スタイルが良い……まるで女神様のようだよ!」

「うふ、うふふ……あ! お、お兄さまに褒められたからって嬉しくありませんわよ!? 勘違いなさらないで!」

ざらざらと砂を吐けそうな台詞を、撫子から外し明後日の方向に向けた視線のまま呟く。

普段ならこんなセリフは言わないが、今は別だ。少しでも現実逃避したい。

主に、そう、撫子の隣で仁王立ちしているであろう第一種怪筋肉生命体から逃避したいのだ。

「主殿ー！ 我の水着はどうであるかッ！？ この、くびれ！ キレてる、筋肉！ つふぬ！！」

聞こえない聞こえない聞こえない。

そうだな、レティシアがスキューバダイビングに使うようなウェットスーツを着用しているならば！

俺には何の被害もないし何より海に遊びに来た一般市民の方々にトラウマを植え付けることもないのに。

何故こんなことになったのか。

涙か絶望感か、兎に角霞みそうになる視界を宥めつつ、俺は昨日のことを思い出していた。

「お兄さまぁー、お風呂掃除終わりましたよ。他には……ちょっと！ 邪魔なんですけどー!?」

「うむう……」

何時も通りの六畳一間。せせこましい小市民的住居であるボロ木造建築に、三人もの人間がぎゅうぎゅう詰まっていた。

言うまでもなく、俺、筋肉、撫子の3人である。狭い。

先日撫子が越して来てから、既に何日か。

「家事をしてやる！」の言通り、夏真っ盛りの中撫子は甲斐甲斐しく我が家の面倒を見てくれている。

毎日何くれと顔を出しては、掃除洗濯し俺と嫌々ながらレティシアに餌付けし、と過ごしているのだ。

単純に考えても、自分の家よりここに居る時間の方が長い。家計簿もきっちり付けている。こんな出来た妹は中々いまいよ、有り難い。

しかしいくら暑いからと言っても薄手の服で動きまわるのは勘弁して欲しい。

まあ胸部装甲が絶望的に薄い為、ロリーな巨乳お姉たん萌えーな俺には軽微たるダメージだが。

敵兵、未ダ見エズ！（断崖絶壁的な意味で）

「お兄さま！ もう、この居るだけで不幸せになる座敷筋肉をどうかして欲しいのですわ！」

そんな撫子が声を上げる。ピンクのキャミソールに、ちょっと際どい白のミニスカートを纏った義妹の尤も過ぎる意見に頷いて俺も声を上げた。

「……レティシアさーん、何ーやってんの……？」

おう。ここ最近のだらけきった生活のせいで声までふ抜けている様だ。

いつもなら家事とか何とかやるがあるが、撫子が全てやってくれる、というか俺が家事するのを好まないのも何も出来ない。

手伝いならばOKされるが、この手狭な部屋では一々手伝いを買って出る方が邪魔になるのだ。

何か仕事したい。最近の俺の二トつぶりには目を瞠る物がある。どうにも暇なので、撫子を揶揄って踏まれたりレティシアに連れ

られて筋トレしてたら撫子に踏まれたり撫子をべた褒めして踏まれたり庇おうとするレティシアに良い感じに頸動脈を圧迫されたり撫子と買出しに行って往来で踏まれたり。

……あれ、俺踏まれてばかりじゃね？ ていうか、天下の往来で踏まれるのは最早それ調教じゃね？

「うむ……もちろん私の筋肉を鏡に見せつけているのだが……」

どんな趣味だそれ。表現が新し過ぎる。

「この筋肉をな、より多くの人、より広い場所に知らしめる方法はないかとな。後我は暇だ。遊びに行きたい……ふ・ぬ・あ・あ！」

「……迷惑過ぎですの」

同意。

そういえば以前、デジカメで撮った写真をボディビル協会に送った所、熱烈なラブコールが来たことがあったか。

レティシアには内緒で送ってみたただなので丁重に辞退したが。異次元的筋肉を鎧うレティシアだけで臨界点突破なのに、それにさらなるマッシヴが絡むのなんて只の地獄絵図だ。

肩を組むマッスル達。ポーズを決めるマッスル達。オイルでテカテカする白い肌、浅黒い肌。右を向いたら大胸筋。左を向いたら三角筋。

立ち込めた熱気がむんむんと充満し、滴る汗が筋肉から更に迸る。兄貴、兄貴、兄貴、兄貴！ そしてその中心に兄貴を超える超・姉貴！

BGMはケツドラムだ。

「うぷ……！ 駄目だ、想像しては駄・目・だ……俺のバカバカ！」

床に転がりバランスの取れない達磨の如く七転八倒を決める俺を
余所に、撫子とレティシアだけで話は続いて行く。

「遊び……そうすわね、確かに夏だし、どこかに行きたいもので
すわ。ほら、ポーズは良いから汗をお拭きなさい」

「うむ……かたじけない。どこが良いかな。我は余り遊びに詳しく
ないのだ」

「まあ、定番と言えば……海か山じゃありませんの？」

「ぬあ、海！ 海海！」

「はいはいもう、子供ですか貴女は……海ですの、確かに皆で行く
のも楽しいかもしれませんわね。……熱い砂の上に転がるお兄さま
を、踏み……うふ」

「……撫子殿？」

「じゅるり……あ！ 何でもありませんわ！？ お兄さま！」

「ヴぁー」

やる気のない声を上げる。流石に俺でも展開が読める。買い物に
行くから着いて来いと。

「そういうことで撫子達、水着買いに行つて参りますわ！ お留守

「番よろしくお願いします」

「あれ……つ、着いて行かなくていいんですか？」

思わずバツと起き上がり、正座。驚愕に目を見開く。

これはもしや……一人になれるフラグ！？
ロリお姉さん巨乳画像フォルダを充実させるチャンス！？

と期待に目を輝かせていると、撫子は髪をかき上げ侮蔑の視線を飛ばしてきた。特に意味もなく、背筋に冷や汗が流れる。

何を言われるのか。というか、何故軽蔑の視線を向けられねばならぬのか。

「……別に、着いてきても良いですけど、お兄さまは女性の水着姿を舐めまわす様に視姦するのでしょうか？ ……この変態め」

予想外！ 撫子の中の俺象は一体どうなっているのか。腕を振り上げ抗議する。

「ひどい！ そんな変態じゃありませんよ！」

「まさか、私の体も！？舐め回す様に！？」

「お前は黙れええええ！」

分厚い両の腕で大胸筋辺りを抱き抱え、身を守るように一歩遠退いたレティシアに痛烈な突っ込みを入れる。

深い深い溜息を吐き頭を抱えた。撫子のほっそりとした足で小突かれて顔を上げる。

「ふうん……変態ではない、と言い逃れをするんですの？」

腕を組み、顎を逸らして仁王立ち。女王様の貫録を身に付けた義妹の姿に気圧される。ちらと視線をレティシアに振り、助けを求めたが両腕で×印。

決して屈強な両腕でクロスチョップの体勢を取っている訳ではない。否定のジェスチャーだ。助けは望めない。

「は、はい……この高潔な私めが変態などと、その様な世迷い言……」

「嘘仰い！ お兄さまのパソコンの中にある、windows system backupフォルダのこと、隠せるともお思いでしたの！？」

「ぎょわーーーーー！ な。ななな何故それを！ 二重三重に隠していた俺の巨乳ロリお姉さまフォルダおぶ！」

飛び上がって叫ぼうとする。しかし、膝をあげようとした所で顔面に撫子の足の裏が突き刺さった。

絶妙なバランスで顔を踏まれ、身動きが取れない。

「ふ、ふ、ふ……何が巨乳ですの？ ん？ 貧乳には興味などないと生きている価値がないと？ あん？ ああん！？ ほらほら這いくばって足をお舐め……！」

「ちょぶ、やめふえくらはいだだだだ！ 鼻が！ 鼻がー！」

げしげしと踏まれ蹴られるまま、俺は成す術もなく涙目になっていく。修羅の表情を宿した美し恐ろしい妹は、半ば全力で俺を踏み

しめていた。

……あ。

「黒のレースとはまた、大人っぽい」

「……………！」

あ！ やめ！ ごめ！ の、乗ってる！？ なでじこの足が、ほつぺたに乗ってぶぶぶ！

「あら……何故かしら。と、つ、ぜ、んお兄さまの顔の上で片足垂直跳びやりたくなりましたわ……ふふ、うふふふふ！ 愉快！」

「撫子殿、そ、その辺にしておかないとリアル生命の危機が……」

レティシアのおずおずとした静止の言葉に、撫子のジャンピングスタンピングが止まる。

びつくんびつくん痙攣しながら意識を半分飛ばしている俺の体に、ようやく安息が訪れた。

あれは……川？ 何かこの川越えたら楽になれそうな気がするー……。

「な、撫子殿！ 主殿の顔が、顔が！ 幼児のトラウマ級に！？」

「……………はあっ！」

「げふあ！ ……あれ、川は？ おじいちゃんは？」

腹に突き刺さった衝撃に意識を取り戻す。

起き上がり、きよろきよろと辺りを見回した。蒼い顔をしたレイシアと、慄然とした撫子以外に人は見当たらない。

「あれ？ 俺今何してたっけ？ あれあれ？」

思い出せないぞ。手招きしていたおばあちゃんはどこだ。……おばあちゃんって誰だ？

「お兄さまが海に連れて行ってやると仰いましたので、撫子達は水着を買いに行こうとしてる所ですの」

「撫子殿!？」

「ああ、そうかあ。行っておいでー不審者に会ったらレイシアを見せるんだよ。はいお金」

何故か痛む頬を摩りながら、二人を手招きする。一応お金を渡して、玄関から元気良く外に出て行く後姿に手を振った。

レイシアの憐れむような視線が気にかかる。

……何か忘れているような気が……。

まあいい。兎にも角にも今はチャンス、お姉さんフォルダを充実させるのだ。

早速パソコンの電源を入れる。おなじみのロゴをまんじりと見つ、ログイン。

Dドライブの……クリック。クリッククリック。

「な!」

思わずパソコンの筐体を掴む。予想だになかった出来事がそこ

できていた。

「十GBを越えるロリ巨乳お姉さんフォルダが……ないだど!？
なな何で！ そうだ、検索だ!」

慌ててフォルダの名前を検索し、どこか違う場所に移っていないか探す。

しかし、暫しの時間を挟んで表示された結果は。

「……該当なし……。ゴミ箱にも間違って捨てられてなし……。ふふ、
うふふ。これは夢。そうきつと夢……」

ああ、努力の集大成が。一つ一つ丁寧に名前を変えて、見やすいように整理していた魔法の画像達が。

今、ご臨終。

「あ、駄目だこれ鬱だ死のう」

パソコンを閉じ、ついでに自分も後ろに倒れ込む。入りこんだ陽射しが目に沁みて涙が出た。くすん。

ということがあったのである。

結局記憶を取り戻してしまった俺が撫子に涙ながらの抗議をし、踏まれたエピソードは割愛する。

俺は変態ではないので、好き好んで踏まれた一部始終を説明する気にはなれないのだ。

「主殿!」

むん！ 夏の日差しに勝る暑苦しさが、俺の肩を掴んだ。万力の如くギチギチ締め上げられる肩の痛みを無視しつつ、必死に視線を遠くに飛ばす。

ガシ！ と今度は頬の両側を掴まれた。力強く挟み込まれているせいで正視に堪えない面白顔に変化しているはずの俺の顔。

首に力を入れ抵抗するも、当然力負けして徐々に正面へ視線が移動していく。

そして遂に

「あ・る・じ・ど・の……！」

「ひぐつ！」

喉の奥が引き攣り声が出ない。ざあざあと血の気が引いて行く音が耳の奥に響いた。

一体何を考えているのか。

長い金髪はよりによってツインテール。黒のリボンで可愛らしく纏められた髪の毛のせいか、普段より幼く見えるのが悪魔的破壊力。駄菓子菓子。百八十センチを超えるマツチヨでマツシブでビルダ―な体に黄色と黒の縞々極小ビキニを貼り付けたその姿。

……いいか、ビキニだ。ウェットスーツでも、ワンピースタイプでもない。レティシアはビキニを着ているのだ……！ しかもツインテール！

常より五割、いや八増し増しに露出を増やしたそのビキニは、僅かに大事な部分と大胸筋のてっぺんを覆っているのみ。

何というかこう、筋肉が付いていてもその上に乗っかっているはずの脂肪の塊などどこにも見えず、ただ縞々水着はぺったりと肌を

隠している。

自分の方を向いたことに満足したのか、俺の前で次々にせくしいポージングを取り始めるレティシア。

動きに合わせて、括った二つのテールが空気を裂き、硬直した俺の視界に容赦なく筋肉達の圧殺的キモさが押し寄せる。

「うふん……！」

ウインクと同時に首を支える頑丈な胸鎖乳突筋は頭板状筋や肩の僧帽筋、三角筋が張りつめ。

汗でテカテカ輝き。

「あつはあん！！」

胸元を強調するポーズでは割れに割れた大胸筋の谷間から腹直筋、前鋸筋、外斜腹筋がうねり。

汗でヌルヌルぬめり。

「ぬは……！！」

体を捻った際には背中の方の力強い広背筋や菱形筋、ビキニで覆われた大臀筋や中臀筋がはつきりした窪みを作り。

汗でヌラヌラ照り返し。

「主殿に見られておる……！！」

大地を雄々しく踏みしめる丸太のような大腿筋群、ヒラメ筋や腓腹筋がパツンパツンに隆起して大地を踏み閉め。

汗でヌトヌト日差しを跳ね飛ばす。

ヌラヌラ汗を滴らせるその姿は、正に有害の一言に尽きた。放射能かこれ。

「……おぶ！　グロい……この世のものとは思えない位グロい……！」

「ひいひい！」

聞こえた悲鳴にようやつと新鮮なグロ世界の精神呪縛が解け、振り返る。

「おおぅ……」

そして絶句。

つい先ほどまで親子連れやカップル、仲の良さそうな男や女のグループなどが轟めいていた浜辺からどんどん人氣がなくなっていくのである。

パラソルを畳み荷物を抱え、子供の手を引いてついでに写メでもと携帯を向けた老若男女が次々と倒れ伏す。

瞬く間に、半径三十メートル以内の人間が熱い砂浜に熱烈な抱擁を成し遂げた。

以前買い物に行った時の比では無い。ゴスロリ服を着せた時並、いやそれ以上の圧倒的防御無視精神攻撃力。

「あぁん、何という視線の数……！　我は、我は、我はもう……気をやってしまいそうだ……！　筋肉が喜び打ち震えておる……！」

お前以外の皆が気をやってます。あと吐き気で痙攣しています。余りに広範囲な攻撃の威力に、俺は少し落ち着きを取り戻した。死屍累々と転がる、墓まで持って行けそうなトラウマを抱えてし

まった無辜の人々に手を合わせ冥福を祈る。

どうでもいいけど熱中症とか心配しないでいいんだろうか。

「ちょっと！ 何で無差別に精神汚染波を撒き散らしているんですの！？ お兄さまも目を逸らしてないで、少しは注意して下さいまし！」

良い所で撫子が割って入る。その手には飲み物が三つ。近くの自販機で買ってきたのだろう。それを俺たちに手渡ししながら、眉根を寄せている。

出来た子だ。しかし、このレティシアを見ても何も思わないのだろうか。

「はいお兄さま。炭酸でよろしいのです？ 私は紅茶、レティシアは水。……あ、海に入る前にはちゃんと準備運動するんですよ」

「はい」

素直！ 何て素直なのレティシア！

俺は猛獣使いを見る目で撫子を見た。視線があった彼女は小首を傾げ、手に持った缶を振る。

「……飲みたいんですの？」

「いや、俺コーヒー党だし。ってか開いてないじゃん。……開けないとか？」

「別に、力が足りなくてプルタブを起こせないなんてことは……！ な、何で笑ってますの！？」

「我が開けようか？ 我なら握りしめただけで開けれるぞ、こつ、ぶしゅつと。さあ、我に開けさせてくれ！ さあさあ！」

「……結構ですわ」

レイシアの参入で、一気に異次元的になる会話に頭痛を覚えた。普通、缶を握りつぶして開けたりはしない。出来てもしない。

とりあえず撫子の手からアイスティーを奪い、開ける。小気味良い音を立てて普通に空いた紅茶の缶を、再び撫子の手に戻した。

「あ、ありがとうございますわ……」照れた様に頬を染め、ぼそぼそと呟く撫子。

まあ兄ちゃんだからな、と笑い、話題を戻した。

「で、あの撫子さん。どうしてあのビキニ筋の塊を見て怯まないんですか」

ビキニ筋＝ビキニを身につけた筋肉の塊、であるのであしからず。しかし個人的に非常に気になる所だ。二人で水着を買いに行ったのなら衝撃も少なからうが、それにしても平然とし過ぎている。

その秘訣を是非伝授して欲しい。

多分どこかの流派の奥義になる。

「怯むもなにも……レイシアの筋肉が無駄に気持ち悪いのはいつものことですし。それに」

「それに？」

ぐつと撫子に身を乗り出して耳をそばだてる。すると心底嫌そうな顔の撫子にぐい！ と纖手で押しやられた。

冷たい缶を持っていたせいか、ひんやりと僅かな冷たさを感じる

その手。

「あの水着選んだの、撫子ですもの」

「YOUはショック!!」

ブルータスお前もかー！ 叫び、母なる大地に五体倒置。訝しげに俺を見下ろす撫子に対し、地面からビシ！と指を突きつけた。

「あの水着！ ダウトー！！ 何がどうなってあれを選んだのですか十五字以内句読点含むで答えてください！」

「え、可愛くありませんの!?!」

十三文字！ でも残念不正解ブブー！

兎に角体を巡る「ぬああ！」な激情のまま、砂を蹴散らし地面を転がる。

「もう、恥ずかしい！ お兄さまはどうしてそういつもいつも脳が変なんですか!?!」

強制停止。六回転目で見事に踏まれた。

勿論、お前のセンスの方が変だよ！ などとは言えない。トップアイドルでモデルもやってるくせに何であんな水着を選ぶのだ。

破壊力という点ではこれ以上ない位大正解だが。

「全く……んん、それにしても、直に踏むというのもそれはそれで……」

「ノー！」

妹がダークサイドに落ちる前に、何とか足を振り払った。何でこんなSいんだろこの子は。

そのまま勢いで立ち上がり、波打ち際でポージングをキメているレイシアを指さす。余りにもキモいのですぐに指を下ろした。

「あんな、あんなの……！ くっ、体が拒否反応起こすから直視出来ないっ！」

そして冒頭の光景に戻る訳である。

「ふははははははははは！！ 我の美しさを目に焼きつけ、生まれてきたことを感謝するが良い！ もっと見て見て！」

大量の遠巻き視線に興奮したレイシアのテンションはフルスロットル。留まることなくひたすらそのビキニボディを見せている。きつとその内、捕虜の尋問にはムキムキマツチョな女性のポージングを見せつけるという方法が採用されるに違いない。

何という歴史的キモさ。きつと歴史の教科書に載る。写真付きで。

「あの子はまあったく疲れませんかー。さ、お兄さま。水遊びしに行きましょう」

呆けた様に陽射しの下、どんよりと立ち尽くしていると紅茶を飲み終えた撫子に手を取られた。

引つ張られるまま波打ち際まで近づき、素足に当たる水の感触に我に戻る。

「あら泳ぐのか？ ……もうあの怪奇現象から逃れられるなら何で

も良いです。どうせだし、海に向かってルパンッダーイブ！」

「あ、ちよっとお兄さま！？ あう！」

ばしゃばしゃと水を跳ね飛ばし、撫子の手を握ったまま沖へ向かって駆けだす。程良い深さの所で海水に飛びこんだ。

一度深く潜り、驚いた表情を浮かべている撫子の額を指で小突く。サングラスを奪い取り、そのまま抜き手を切って泳ぎだした。泳ぎは得意でも不得意でもないの、ごく普通のスピードだ。

「ぷは！ ちょ、お兄さま！ それ取られたら撫子困ります……！」

背後から、撫子の焦った声が届く。確かに困るだろう。

肌露出型無差別精神掘削機と化したレティシアのお陰で人がやや減ったとはいえ。

人ごみの中にアイドルが居るとなれば騒動が起こるに違いない。でもそんなの関係ねー。一度向き直ってあっかんべーとしてやると、青筋を浮かべた撫子は猛然と波を掻き分け泳ぎだした。

まだ距離があるので、少しだけその姿を眺める。

清楚系を気取ってる癖に運動神経がやたら良い妹だけあって、伸びやかに動かされる手足は軽やかに水を裂き、日差しを反射してスピードに乗る。

見る間に近づいてくる美しい姿に笑みを浮かべると、反転して逃げることにした。

「っ！ 捕まえましたわ！」

「ってはや！？」

いつの間に追いつかれたのか。速すぎである。ウサギとカメさん並の性能差だ。

俺はいくらかも距離を稼げずに撫子に捕まった。大人しくサングラスを返してやり、浜辺に目を向ける。

「おー、まだやってますぜ筋肉姫様……」

視線の先では、レティシアがどんどん最高撃墜数を更新している。ああ、自己新。店内最高スコア。歴代新スコア。海にも入らず暑くないのだろうか。

「ちょっと、何でサングラス取って行きましたの！？ 波打ち際で水遊びするだけのつもりでしたのに」

「いて！ 抓るな抓るな千切れちゃう！ ……いや勢いもあるんだが、アイドルなんてやってたらこんな風に遊ぶ機会ないだろ。顔隠したりとかメンドイし。沖に来ればあんま目立たんから、好きに泳げるかなってな」

一番の理由は、レティシアから離れたかったからだけだな。頭の中だけでそつと呟く。

一応色々考えているのだ。いつも踏まれてばかりの駄目兄でも、兄は兄。妹のことを気にかけるのは当然のこと。

つらつら立ち泳ぎで波間を揺蕩いながらそんなことを思っていると、不意に肩口にほっそりとした手がかかった。次いで小さな小さな声。

「もう、いつも何も考えていなさそうな癖に……」

更に額をコテリと預けられる。冷たい海水の中、そこだけが確か

な温かさを持っている。

しかしそれも一瞬のこと。振り返ってからかつてやろうとした時には、いつも通りの撫子の顔がそこにあった。

太陽の下、サングラスに隠されていない笑顔を咲かせたその美貌が眩しく、つい目を眇めてしまう。

「さあお兄さま？ それならレティシアも一緒に、今日は沢山遊びましょう！ ビーチボールも浮き輪も西瓜も持って来てますから！」

言つや否や、レティシアを目指して泳ぎだす撫子。清楚キャラになつてからは珍しいそのはしゃぎ様に思わず笑みが零れた。

海は、楽しい。早く三人で遊ぼう。

思い、俺も撫子に続いて水をかき分ける。

奇妙な縁で始まったマジカル 魔法少女（自称）との生活が、何だか今はとても楽しい物になってきていた。

「レティシアー！ ビーチバレーしますわよ！」

「ぬう……はああ！ この躍動感。デカイ！ キレてる！ ……ムラムラ！ ……はっ、な、撫子殿！？」

「ビーチバレー。ほら、お兄さまも戻って来ましたし、貴女が居れば鬱陶しいファンも寄ってきませんし」

「うぶぶ……は、早過ぎるだろ撫子……常識的に考えて……」

へたり込む俺の目の前に、しばしばのビーチボールが突き出された。

顔を上げ、レティシアのお陰で周囲に人が寄りつかない中、素顔

を晒す妹の顔を見る。

膨らませるの？ 視線で問うた。

膨らませるんですの。視線で返された。拒否は即ゲームオーバーに繋がる可能性大だ。

急な運動で波打つ心臓と肺に鞭を打って、それを受け取る。やけくそ気味に空気を吹きいれた。ボールは結構大きく、意外に肺活量が必要。

何とかまんまるい形になるまで息を吹き込むと、酸欠で頭がクラクラした。日ごろの運動不足がたたっているのか。

「あはは！ お兄さま、だらしないですよ？」

「主殿ー！ 我はビーチばえーは初めてだ！ 早く遊ぼうハリーハリー！」

「だから少しは俺に気を使えと……ていうかばえーじゃねえですバレーですう！ やー、ごは！」

剛速球。

馬鹿にしてやろうと放った言葉が終わる前に、撫子が上げたトスを、高々と飛び上がったレティシアが筋肉の国的グレイトマッスルで全力打撃。

かなり本気目の殺人スパイクを俺の顔面に叩き込んだ。

堪え切れず傾いでいく視界の中、「いえーい！」「いえーい」2人が仲良くハイタッチを決めているのが見える。

何だかやられてばかりだ。
だけど。

「へへへ」

「わ、笑っておるぞ!？」

「頭の病院に連れて行くべきかしら？」

もはや痛みすら日常の一部。楽しくて楽しくて仕方がない。
視界に写る筋肉と貧乳。青い空、白い雲。

耳に届く潮騒も、人々が放つ阿鼻叫喚の精神的断末魔も。
鼻をくすぐる磯の香りと肌を焼く陽光、じんわりと熱い砂の大地
でさえも。

その全てが俺の幸せの一欠片。

「ふへ、ふへへへへへ」

「主殿!？」

「こ、これは流石に……」

しかし頭を打ち過ぎて、もう駄目かもしれない。
たたり。鼻血が一筋、垂れるのが分かった。

「なんらかキモチイラッ」

俺の呟きに、慌てる二人の姿が印象的です。

結局この後疲れてくたくたになるまで、ビーチバレーやビーチフ
ラグ、砂に埋めた俺の横に西瓜を設置する残酷な西瓜割りをして
楽しんだ。

浮き輪でぶかぶか浮いている間が一番平穏だったと思う。

嗚呼、海って楽し恐ろしい！

第十三話 拐かされた姫君。

「うぬう……お主は！……お、お主はほらあの……誰であつたかデブの人！？」

「デブ言うな筋肉娘が！！　御堂久美子ピチピチの二十九歳独身！
よ！！」

贅肉と筋肉、二人の叫びが空気を揺らす。

何の変哲もない往来。燦々と降り注ぐ陽射しの下で、レティシアと独身「うるさいわね！」は出会ってしまった。

片や白衣に弾けんばかりに全開な真紫……いや魔紫のエロボンテ
ージにブランドバッグ。

片や活動的なショートパンツに男性物のタンクトップの下に筋肉を無理やり押し込め。極何の変哲もないトートバッグ。

「どうしてこの街にはこんなのが居るんだ……！」

「いつそ殺してくれええええ！」

「は、早く救急車を！」

二人揃えば倍率ドン。さらに倍。精神的にアタックチャンス。対都市壊滅用戦術兵器級のキモさ大爆発である。夏なのでいつもより余計に、本当に余計に暑苦しさ増分特大号。盛り盛りである。

「ふふふ……ここで会ったが百年目！ 我の主殿には指一本触れさせぬ！ 久々の魔法で筋肉的成敗してくれるわッ！」

「おーっほほほ！ 囀るわね小娘！」

「ぬう……高笑いだと!？」

「あ、私こうやって登場するって決めてるのよ自分ルール。お分かり？」

「……」

「……そついや、百年目って言うけど、何で百年なのかしらねえ。アンタ分かる？」

「え、いや勢いで使ったけど、我にはちょっと……」

街の中心部、圧倒的暑苦し気持ち悪さで対峙する二大怪獣の間を、季節外れの寒い風が吹きぬけた。

俺の預かり知らぬある日のこと、カンダタ親分とキングスライムの邂逅が織成す恐怖的一幕である。

拐かされた姫君

「あゝ、あつついわあ。何か良いダイエット方法ないかしらコレ」

バタバタ！ バタバタ！ 一部の性癖の奴には大人気の白衣の裾をからげ、カルテを挟むボードで風を仰ぎ入れる。

だらけた姿勢のまま足を組みかえると、失礼にもキャスター付きの椅子がぎしぎしと煩い音を立てた。軟弱な。

「アイス、ジュース、アイスアイスアイスジュース 炎天下のなか糖分 油分 見る間に増える腹の肉…… って嬉しくないわ！」

そうだアイス食べよう。冷凍庫にぎつちりと眠る氷菓子の存在を思い起こし、立ちあがる。

邪魔な肉の鎧をゆさゆさ揺らしつつ、備え付けた冷凍庫の扉を引っ張り開ける。

うだるような熱気を押し流し、冷たい空気が頬を包んだ。にんまりと顔を緩め、手を突っ込む。

「……ん!？」

おかしい！ 一度腕を引っかき、今度は頭を突っ込んだ。ふり
ふり尻を振りながら、隅から隅までくまなく視線を配る。

「んん！？ ……アイスが、ないわ」

間違いではない。昨日まで後十個はあったはずなのに。いつの間
にか食べてしまったのか蓄えられてしまったのかこの贅肉に！
体が重いので苦勞して頭を引っかき、冷凍庫の扉を閉める。途
端にじっとりとした熱気が体を包む。じわっと汗が浮かんだ。
新陳代謝は良いのよ。デブだけど。汗かいても痩せないけど。

「さて、どうしようかしらね……」

のっしのしと肉を揺らし、乱雑に散らかったデスクに取って返す。
携帯、家賃、保険、水道光熱費その他諸々…… 今月の払い物の金
額と貯金、売上を頭に浮かべてしばし唸る。

生活費は別にして、何個アイス買えるかしら。
むむむ、と更に唸る。どうにも面倒だったので、電卓を引き寄せ
た。

目にも止まらぬスピードでキーを叩く。即座に現れた数字を吟味。

「アイス一個百円として…… 他にも欲しい物あるし、あー、今月は
後三十個ね。十分だわ。ふん！」

鼻を鳴らし、外出の時によく利用するブランド物のハンドバッグ
を掴んだ。この中に財布も入っている。

もう四年使っているので少しくたびれている。一瞬窓の方へ目を
向け、どこか遠い所を見た。

「……ふ、ふ、所詮独身には豪華過ぎるブランド物…… でも良いわ、

独り身貫き二十五年。その記念に買ったごさもしい褒美なのだから……！」

呟き、バッグを肩に掛けて踵を返す。診察室から出ると、そこには誰も居ない待合所。昼前だし丁度良い。

当院ではたった今から院長の私が返ってくるまでお昼休みです。診療所を手伝ってくれている女の子に休憩にする旨を告げ、そのまま建物の外へ出た。

直射日光が容赦なく肌に突き刺さり、思わず顔を顰め舌打ちを漏らす。

「暑いわ……暑い暑い。何でこの脂肪は溶けて消えてなくならないのかしら……！ 我が体ながら不便なお肉！」

歩き出し、忌々しげに腹の肉を見下ろす。同時に顎にたぷつとお肉が挟まり二重顎。キィー！ 歯ぎしりをした。

生まれてこの方二十余年。今まで一度足りともスリムやスレンダーと言った言葉にお近づきになったことはない。

生まれつき細胞が大きいだのかなりの胃下垂だの何故か基礎代謝が低いからすぐエネルギーが脂肪に変わってしまうのだの……！

ええ生まれた時は四千グラム超のそれは元氣な赤ん坊だったそうよ！ ガルル！ 通りがかったスレンダーなOLを威嚇。

「ひっ！？」

炭水化物ダイエット、もずくダイエット、断食ダイエット、ボクササイズエクササイズ、適度な運動にヨガ水泳滝行山籠り。

どのダイエットも効果なし。開き直って暴飲暴食、ぶくぶくぶくぶく肥え続け。気付けば独身三十路一步前！

「その細い足をぱりぱり食べてやろうか……！」

「にゅぐ!？」

八つ当たり気味にミニスカートで歩く女学生を威嚇。どんな分厚いステーキでも軽々と噛みちぎる白い歯を噛み鳴らす。ガチガチ。

「痩せたい……痩せたいけど痩せないのよ……！」

同期の女友達は皆結婚してしまっている。

この年になって招かれた結婚式で、「やっぱ独り身っていいわよねー自由だし」「そうそう。旦那が」「などと囁られるあの屈辱。花嫁のブーケトスなど掠りも出来ず、ご祝儀を払い引き出物の袋を手になげ一人で家路に着くあの虚無感。

目を付けた男性も尽く顔を引きつらせ汗を滴らせ、足早に逃げ去っていくこの脂肪。

性格はとやかく言うまい。化粧には結構気を使っているし我ながらセンスは良い。しばしばファッションについて相談も受ける。

流行りのテレビ番組もカラオケも、脂の乗った色気ある仕草講座も受講した。

医者だけあって社会的地位はそこそ近年収も平均以上。実は隠れて料理も出来る。裁縫もする。

でもモテナイ。誰か貰ってやって下さい。

……。

私は独! とアスファルトを砕かんばかりに大地を踏みこみ、大きく鼻を鳴らした。

独! 独! と忌々しい、ボンテージの隙間からまろび出ている腹の無駄脂肪を掌で叩く。

嗚呼瘦せさえすれば！　こんなすぐに汗を掻くこともないし男にも避けられないしイライラもしないし膝も痛くならないし体も軽いのに！

「この世はなんて不公平なのかしら！　皆ぼつちやりフェチれば良いのに！　この三六〇度包み込むような脂肪の壁で受け止めてあげるわ……！」

ハンカチで汗を拭う。気付けば診療所を遠く離れて、街の中心部まで来ていたようだ。

ここなら大型スーパーも近い。ついでにお夕飯の買い物もして行く。

そうだ何味のアイスを買おうか。オーソドックスにバニラ。いやいやチョコレート。チョコチップバニラ？　ストロベリーも抹茶も捨てがたい。

新製品は出ているかしら。

ごくり。自然と口内に溢れた唾液を飲み下す。

「あーーーーー！！　お主ッ！」

背後から響いた大音声に眉を顰める。澄んだ高い声で、声を聞くだに細そうなこと！　何だ全く最近の若い娘は！

どこか聞き覚えのあるその声に訝しみつつも、眉根を寄せた不機嫌顔のまま振り返る。

「あ、暑苦しい……！」

そして冒頭の出会いへと繋がるのだ。

「何でお主がここにおるのだッ!？」

「何でつてアンタ、アイス買いに来たのよアイス。三十個」

「さんじゅ……!？」

気を荒げ、息を荒げるととても暑くなる為、とりあえずのクー
ルダウン。脂の乗った丸っこい手で顔を扇ぎながら半目を向ける。
視線の先、レティシアだとか名乗っていた少女はこの炎天下の下、
元気良く金髪を揺らしながらステップを刻んでいる。

見るからに暑苦しい。溜息を吐きすすつと日陰に入った。ひとま
ず、体感気温が下がる。

「ええそうよ三十個よ文句ある？　ねえ文句あるの私が太って！
アンタなんか筋肉の癖に、キィ！」

精一杯歯を剥き出しにして威嚇すると、相手の構えが解かれる。
怯んだのか。

「ああ……三十個、いるのであろうな……」

微塵も怯んでいなかった。

それどころかよりもよって、納得した素振りでぽんと手を叩き
腐る小娘。その目線は私の腹に向いている。

「そこで私の腹を見るな！　もう、アンタん所の太郎になんて手え
出さないからどっか行きなさいよ。しっしっ」

「……何故なのだ？」

全く可愛くない動作で首を傾げる筋肉女。動きに合わせて、はみ出した筋肉がムキムキと張りつめた。うぶ。

「……鏡見なさいよ鏡！ アンタみたいな恐ろしいボディガードが居たんじゃ何も出来ないわさ」

ほらここもそこも！ 指差し指摘する。

「……何か怪し過ぎるぞ！？」

疑わしげな視線。それをべしつと手で振り払い、少女を睨む。

「そりゃ怪しいだろうけど。私だって脱デブりたい一心で色々やったけど、よく考えたら太郎の筋組織なんて調べても意味がないのよね。学術的価値はありそうだけど、そっくりそのまま私の全身とつかえっこ出来る訳でもないしさ」

「じゃあ何故主殿を襲ったのだ！？ 犬モドキから端を発し、最近では妙ちくりんな黒服達を家の周りにうるつかせている癖に！」

ズビシ！ 大きなアクションでこちらを指差し返す引き締め過ぎた肥大筋肉娘。

その言葉に、はてと首を傾げた。何か話が噛み合っていない。

独、独と音を立てて地面を踏み閉め、柔らかい顎に手を当てる。

やわこい顎の肉をぶにぶに指で摘みながら思考する。

生まれてこの方ふくよかなことに恨み以外の感情を持ったことはないが、ここのお肉だけは別だ。考え事の時に触っていると何だか落ち着く。

「アンタ、それ何の話よ？ 犬モドキ？ 黒服？ アンタ病院行く

？」

「な！」

「？」

驚愕の表情を顔に張り付けた小娘の姿に、私は更に疑念を抱いた。何言ってるのこいつ？

時間をおかず、違和感の正体に気付く。ああ、もしかして誤解されているのかしら。

「えーと……まずは事実をはっきりさせましょう。脳なし太郎は以前、犬モドキ？　とか言うのに襲われた？」

「……う、うむ」

あまり頭はよろしくないのか。自分が言うことではないが、靈感商法とかに容易く騙されそうな感じだ。

ていうか犬モドキって一体何なのかしら。

冷静に相手の動きを観察しながら話を進めて行く。

「で、私がたまたま太郎に襲いかかった後、今度は黒服の怪しい奴らが家の周りをうろつきだした？」

「うむ……だから」

「で、私が犯人だと。それは誰から聞いた訳？　自分で調べたの？　人づてに聞いただけ？　憶測？」

「い、いや……」

矢継ぎ早に質問を重ねる。暑いし早く答えてほしい。

こちらの言葉を飲み込む時間が必要だったのか、筋肉娘は汗を滴らせるまま難しい顔をして俯き、顔を上げ、右を見る。

そうしてやっと私に顔を向けた。流されるままの金の髪が風に揺れ、たなびく。

「えと……我はその、探偵に依頼して、主殿の周囲で怪しいのがぶくぶく肥満体のお主だったから……」

……どこまで失礼な娘なのかしらね。

憤りを力強く奥歯で噛み殺し、胸を張る。言いがかりも甚だしい。

「信じるかどうかは別として。私はそんなの関与してないわよ。偶然太郎の体質について詳しいこと聞いて、まあ主治医だし心当たりがないこともなかったから、ついダイエットに利用できないか解剖したくなったけどね。私マッドだから」

「……むう」

当然、今一つ信用仕切れていないらしいレティシアの姿に溜息を落とす。手招きして、すぐ近くの喫茶店に足を向けた。

「いらつしゃいまーせ」

奇妙な節を踏んだ店員の声。

程良く効いた冷房が体を撫でていき、それに僅かな爽快感を得る。カウベルの鳴る音にちらと振り返ると、警戒心丸出しの少女が続いて入って来たのを確認。

嫁の貰い手が存分にありそうな若い！ 細い！ ウェイトレスに

「二名で」と短く告げる。

引き攣りも引き攣った営業スマイルで、何度も私のボンテージと小娘の筋肉を見比べる店員を訝しみながら空いている席に案内される。

サーブされたお冷を一息に流し込み、ついでに氷をガリゴリ砕いた。

黒革の上品な作りのメニューをぱらりと捲り、すぐに閉じる。

全ては家に帰ってからのアイスの為。三種のアイス乗せも本日の日替わりケーキもパフェも今は我慢。

「私はアイスコーヒーを。……アンタは？」

「わ、我はアイスココアをくれ」

「えと……アイスコーヒーミルクたっぷりお砂糖どつさりと、特大アイスココアですね？ 少々お待ち下さいー」

はて、言っていないのにミルクと砂糖を多めに付けるなんて出来た店。一人頷き、背もたれに体重を預ける。

ギシギシギシ！ 穏やかな喫茶店の雰囲気合わない異音が響く。

「……」

無言のまま背を起こした。渋い雰囲気を漂わせる店内をぐるりと見まわし、物珍しげにこちらを盗み見ている他の客を片っ端から睨めつける。

見よ！ このお腹周りを！ ここに詰まっているのは脂肪ではない、貴様ら愚かな庶民の絶望だあ！ とばかりに目をかつ開いた。ついでに犬歯も剥き出し。喉を低く唸らせる。幸せなカップルには理解できないどろどろした独り身的呪詛を込めたそれは正に鬼婆

の顔。

「ひい！ うわこっち見た！」

「写メ！ 写メ！」

ふん。鼻を鳴らし白衣に寄っていた皺を指で伸ばす。

気を落ち着けるために深く息を吸い込むと、今まで気にも留めていなかった低いクラシックに気付いた。

クラシックは良い。重厚な音楽に自然と表情が緩み、お冷のグラスを指でつつく。僅かに残った氷がからからと音を立てた。

ヨイショと足を組み、眼前小洒落たアンティークのテーブルを挟んだ向こう側に居る明らかにパースがおかしい少女を見やる。

「何だか話が長くなりそうだから、取り敢えず入ったんだけどねえ。誤解されたまんまだと診療所の固定客が一人減るからね」

「お待ちたせ致しました」

奇妙なアクセントを付けた店員の声が滑りこむ。手にした銀色のお盆の上には汗を掻いたグラスが二つ。

涼やかな透明のグラスに注がれたコーヒーに、ありったけの砂糖とミルクをブチ込み付いていたストローでぐりぐり掻き混ぜる。

カフェオレに限りなく近づいた元アイスコーヒーを口に含んだ。
うん、丁度良い甘さだ。

水滴の付いた手を紙ナプキンで拭い、視線を頭上へ。

その先では、精緻なデザインのランプが仄かな灯りを店内に落としている。

「じゃ、まずはアンタからよ。私は早くアイス買って戻んなきゃなんないんだから、太郎の周辺で何が起ってんのかちゃきちゃき話しないさい」

「……とにかく、誤解は解けたのかしら？」

ズチュルルル。レティシアがココアを嚙りながらコクコクと頷いた。

腕に巻いている細い時計を見ると、既に針が四半刻分動いている。診療所の常の昼休みの時間が終わるまで、後二十分と言った所だろう。

テーブルの上に置いたままのアイスコーヒーは空、中の氷もすっかり溶けてしまっている。

「……その、久美子殿が一連の事件の首謀者でないのは、分かったのだ……すまぬ、疑ったりして……」

しょんぼりと頂垂れるレティシア。

それを尻目に伝票を掴み、立ち上がった。

「ほら、話自体は終わったんだし行くわよ。それに私も全くの無関係でもないみたいだし……くおらお前ら、食ってや・ろ・う・か……！」

独！ 独！ と地響きめいた音を立ててはす向かいのテーブルを威嚇しつつ、依然こちらを眺めていたカップルが半泣きになったので許してやることにする。

今に見てなさい太めの女性が美女のスタンダードになったら鍋で煮てぺろりとたいらげてやるわ……！

口の中で一息に呪いじみた不満を転がし、踵を返してレジへ向かう。財布を取り出そうとするレティシアを制して会計を済ませると外へ出た。

快適な非エコ冷房ガンガン空間から出た途端、纏った肉の鎧に突き刺さる大自然の脅威。折角引いた汗が再び噴き出てくる。

無遠慮な日差しを降らせる太陽を見上げ、一つ舌打ちをした。

ええと、大型スーパーはこっちだったかしら。

たったの二車線。対して広くもない道路に沿って歩き出す。ドスドスと重たい足音が後ろから聞こえている。

「あの……忝い！ 私の分まで払って頂いて……！」

「おほほ、いいのよ別に。アンタまだ私より若いんだから。……そう……まだ若いなんて言われるのは今の内……！」

「はあ……」

「……お、おほん。兎に角私も心当たりがないこともないから、探りを入れて」

「あぐっ……！」

滞りなく最後まで綴られるはずの台詞が、突然の悲鳴に遮られる。ただならぬ物を感じ、反射的に振り返った視線の先には信じがたい光景が広がっていた。

音も無く歩道に横づけられ、後部座席の扉が開け放されている黒

の高級車。

ぐつたりと力の抜けた大柄な少女。

それを両側から支えるダークスーツ、サングラスの男ともう一人。サングラスの手に握られた物々しい機械の塊から、バチバチと空気を灼く異質な音が響く。

決して、蹴躓いた所に手を貸したようには見えなかった。

ふと、もう一人の男が懷から黒い塊を取り出した。淀みなくまっすぐこちらへ向けられたその銃口が、一直線に空気を貫いてポイントされている。

真贋は分らない。だが映画でも見たことのあるそれはまさしく拳銃である。記憶にある物より細く延びているのはサイレンサーという奴だろうか？

小さな玩具の様なその機械に対して、未知の恐怖が背筋を駆け抜けた。

ひゅ、と声もなくただ息を吸い込む。

隔てる物なく晒された男の茶色の瞳に、明らかな愉悅の色が浮かぶのが見てとれた。こんな恐怖は今まで味わったこともない。

足が竦む。悲鳴を上げるどころか、身動き一つ取れないパニック状態に陥った私の命を繋いだのは、あるうことか黒服の片割れ。

バチバチと電流の余波を迸らせるスタンガンを依然手に持つ男が、銃を持った男に小さく声をかけたのだ。

怪訝そうに眉を顰めた男は、渋々と言った感じで懷に凶器を戻す。

「おい……出せ」

黒服の片方、スキンヘッドに頭を剃りあげた男が一瞬こちらを振り向く。

サングラスをずらし、不敵に口角を吊り上げるその姿には確かに見覚えがあった。

「んな……！」

親しい訳ではないが、確かに見知った顔。

その名前を呼ぶ前に男は車の中へと消えていく。きゆるきゆると耳障りな音を立てて急発進した黒の高級車は、見る間に遠ざかって行った。

ゴムが擦れた嫌な臭いと微かな道路上の焦げ付き、レティシアの持っていたバッグだけがそこに横たわっている。

「何よそれ……」

遅れてやってきた恐怖に全身がおこりのように諤々と震え、その場にへたり込む。運の悪いことに近くに人が居る様子はない。

そうだ警察。パニックに揺らぐ思考の中、それだけを考え付いた。咄嗟に震える手でバッグを探る。

取りだしたシルバーの携帯電話のフリップを開いた所で、見慣れないアドレスからメールが入った。

件名は空。

「……警察に通報したいならどうぞご自由に……？」

フザケタ、余りにもフザケタメールの内容に、車が走り去った方向をきつと睨んだ。

ああそうならやってやろうじゃない！

電源ボタンを連打して待ち受け画面に戻り、一、〇とプッシュ、通話ボタンを押す。

数回のコール音の後、答える男の声は限りなくこちらを馬鹿にした物だった。

たっぷりの侮蔑を含んだ耳障りな音が聴覚を刺激する。

「はいはいどうしましたかー？　こちら誘拐犯です……くくく、先生は度胸が良いなあ。通報はご自由には言ったが、次は……。この女を殺されたくないや、ガタガタ震えてお家の隅っこで蹲っててくれよ先生？　さつきは見逃してやったけど、とばっちりが行くかもよ？」

「……ッ。アンタ……！」

腹の底からせり上がった怒りの衝動に任せて、通話を断ち切った。気づかぬ間に荒くなっていた息をつき、手に持ったままの携帯電話を乱雑にバッグに押し込む。

とぐろを巻いて体の中を渦巻く強い感情のまま、なけなしの気合いを振り絞り立ち上がる。

あの少女には義理も借りもないが、だからと言って見捨てるのは趣味じゃあない。

それに少女を浚った男とは面識がある。太郎の事もあるし他人事とは思えない。

多分あの連中がレティシアの言って居た黒幕のはず。助ける為には何をすれば良い？

携帯は駄目だった。この街には公衆電話はない。

じゃあ警察に直接？　最寄りの派出所までどれくらい掛かる？

そこまで考えた所で顔を上げる。視線の先、所々に数人、明らかにこちらが気付けるように黒服の男たちが立っていた。

見張られてるのか。舌打ちを漏らす。

誘拐は何の目的で？

どうして彼女を狙って？

目的……そこでふと、一人の知り合いの顔が浮かんた。

迷っている暇はない。思っている通りならアイツの所に連絡が、否脅迫が届くはず。

見張られているようだし、警察に連絡を取れない以上これしか出来ることは思いつかない。

何より。

よろよろと踏み出し、地面に打ち捨てられたバッグを拾い上げる。冷や汗を白衣の袖で拭い、一度大きく深呼吸。

「あんなクソガキに舐められたままで、いられるもんですか……！」

駆けだした。

低く吐き捨て、ともすればまたへたり込みそうになる弱気な足を叱咤する。

この場所からならば、走って行った方が早い。入り組んだ住宅街の道筋を思い浮かべながら、重い体を引きずるように急ぐ。

運動不足と脂肪、二つの壁に阻まれながらも少しずつ進む。背後を振り返ると、黒服が一人付いて来ているのが見えた。

止められない所を見ると、こちらの目指す方角は既に知れているのか。

……好都合だわ。

ほんの少しの安堵を原動力にくべ、碎けよとばかりにアスファルトを蹴った。

今はただ、それしか出来ることを思いつかないのだ。

第十四話 彼女の不在と新たなる変態。

「 太郎っ！！ 」

遠慮の欠片もなしに開け放たれた玄関。

驚いて振り返ると肩で息をし、汗だくながらも瞳だけを爛々と光らせた久美子女史（もうすぐ三十路）がそこに立っていた。

最近流行りの対戦型格闘ゲームに義妹と興じていた俺は、言葉にならないその威圧感に圧され知らず唾を飲み込む。

ぎりぎりど精一杯握りこまれた玄関のドアノブ。陽炎のように汗を呼気を揺らめかせるその姿。

「うわあ……」

正直 余りにキモくて叫びそうになりました。

のどかな午後の暇時間をブチ壊す、予想外の展開である。

彼女の不在と新たなる変態

「ど、どうしたんですか久美子先生」

「……っぜ、はぁ、はひ、はひ、ふぐむ！」

突然の来客。息も絶え絶えに何か必死で話そうとする久美子の姿に掌を突き出し落ち着いてと伝える。

訝しげに首を傾げている撫子の姿を目の端に置いたまま台所へ行き、冷蔵庫から取り出したミネラルウォーターを一杯コップに注いだ。

血走った眼でドアに縋りついたままの久美子にとりあえず水を手渡す。

「あ、ありがとう」

続けて二杯、三杯。喉を鳴らして流し込むように水を飲み終えた久美子は、零れた水を袖で拭いよると家の中に上がりこむ。

むん、と濃厚な汗の臭いが鼻をついた。

久美子に手を貸しながらテーブルの所まで案内し、座ってもらう。一向に落ち着かない呼吸に苛立っているかのように奥歯を噛み締めているのが見て取れた。

……一体何の御用なんざましょ？

こちらを見上げている撫子と目を合わせ、同時に首を傾げる。

続けて同じタイミングで久美子の方を向いた。未だ炯々と激情が揺れる瞳もそのままに、強く手首を掴まれた。
ぐ、と引き寄せられる。

う！ 汗と香水が混ざって……！

「……いい、良く、聞きなさい太郎、撫子ちゃん！ ついさっき、アンタン所の筋肉娘が、浚われたわっ……！」

「え？ はい？ やだなあ何言ってるんですかそんな汗掻いちゃつて。ドッキリ？ ドッキリ？」

困惑は感じたまま言葉になった。

あんな全身に無敵（戦いたいと思う者が居ないの意味で）筋肉を身に装着した吃驚生命体を誘拐？ あり得ないあり得ない。

だってこの前五kgの米袋で豪快なお手玉してましたからねスーパーで。

重たいし強いし見た目キモいし色気ゼロだし。誘拐するメリットが一つもない。いや、お金持ちだから身代金は取れるのか？

そんなニュアンスを込めて久美子の目を覗きこむ。

その通りだと笑うなり、アンタ少しは引っかけりなさいよバクテリア！ とか逆切れするなりせず、彼女はただもぞりと手を動かした。

付き出されたその掌には、少し平べったい布の紐。重力と重量に従って落ちて行くそのカーブを辿れば、見覚えのあるトートバッグが目に入る。

久美子、撫子、バッグと順に見比べた。

とりあえず本物なのか確かめよう。俺は手を伸ばす。

「……これ、レティシアのバッグですわね。どこで拾ったんですの？」

手が届くよりも数瞬早く、撫子が久美子の手からバッグを引手繰る。

「ごそごそと織手をつっ込んで取り出したのは、見覚えのある化粧ポーチ。ゴスゴスにデコレーションされた手帳。飴玉。プロテインの袋。」

「うわぁ……プロテイン入ってるとか、間違いなくレティシアのですよ……」

しかも裏にマジックで『れていしあ』と名前まで書いてある。この小学生なのか。

色んな意味で気が遠くなった。

「このバッグがあの子の持ち物だつて言うのは確かみたいですけど、久美子先生？……貴女以前、私のお兄さまに襲いかかったとか。何考えてるんですの？」

尖った声。風船位なら簡単に破裂出来そうな鋭さを孕んだ声音に顔を上げる。

そう言えば襲われたんだっけ。

余りにも日常が濃すぎてすっかり忘れてた。

それに。

「……はぁ……面倒ねそこからの？　っていうか私、結構前に菓子折り持って詫び入れたわよブ太郎に」

ゴロリ！ 寝転んでだらしく白衣をはだけ、見るに堪えない紫のボンテージと白いお肌を晒してくれやがる久美子。
動きに合わせてふるん、とお腹の贅沢肉が揺れる。
露出過多な際どいボンテージで、ボンレスハムの如く拘束された生っ白いお肉が自己主張激しめに飛び出しているのだ。
居たたまれない気持ちになって目を逸らした。ブタはお前だちくしょう。

「……本当ですよ！？ ちょっとコラ、目を逸らしないで現実を見なさいお兄さま！」

「ひぶ！」

鮮やかな軌道を描いて叩き込まれた足先が俺の側頭部に突き刺さる。

俺はベッドの剥き出し木材の部分に全力で突っ込んだ。

絶妙な角度だったせいで無茶苦茶痛い。

言葉も出せずに悶え転がる。涙で滲んだ視界の端で、疲れた顔の久美子に呆れた視線で眺められているのが心に堪える……。

「ほ、本当です台所の棚にもらったお菓子がまだ入っております……！」

「それなら先に言えばよろしいのに！ ……心配してたんですのに全く！？」

理不尽！ 俺は米噛みを手で押さえながら亀の如く丸まった。
おみ足を振り上げた撫子の姿が目に入ったからでは決してない。

「……漫才は良いの漫才は。太郎！」

「お」

すっかり息も落ち着いたらしい久美子にグワシ！と襟首を掴まれた。

そのままガツクンガツクン揺さぶられる。

ぶよぶよにふに新感触な久美子の体が二十三重にブレて見える。

「緊張感とかないわけアンタは知り合いが誘拐されたのよ！？」

「おおお お お ぢづいでええええええ」

「落ち付いてるわよっ！」

「どっちが漫才ですの……」

「……ふん！」

パタリ。気の抜けた音を立て力なく墜落した俺を、無言の床だけが優しく受け止めてくれる。

ああ床、あいらぶゆー。

「で、本題に戻りますけれど、よろしいですの？」

「ええ」

「ヴぁー？」

ぽふ、と頭を押さえられた。

ぐつたりと視線だけ上げると、真剣な表情で座り込む撫子の姿。

「レティシアが誘拐されたっていうのは本当ですか？」

「本当よ。マジよ。三十路かけるわよ」

「……賭けないで下さいそんなモノ」

「ぐ……三十路前の年齢を生かした笑えるジョークなのに……笑える……笑……笑えないわよ……！」

何しに来たんだろう。二人の姿が見やすいようにごろりと回転する。

手から遠のいたことで「あ……」と撫子から声が上がった気がするけど気のせいだ。

妹に撫で撫でされるのは、お兄ちゃん恥ずかしくて堪らない。

「……もう。はいはい、笑えせんわ。で、あの子が誘拐されたとして、警察には連絡したんですか？」

「それなのよね……詳しいことはかくしかじかなんだけど、という訳で警察には連絡出来ない状況だったのよ。アンタ達の所に来る分には問題なさそうだったし、直接ここに連絡来るかと思ったから走って来たのよ。お肉揺らして」

撫子が俯いて眉間を押さえた。ほっそりとした白魚の様な指でそこを揉みほぐす。

やや投げやりに溜息を落とし、顔を上げた。

「……真面目に話して下さい！ 何がかくしかじかですか。何で警察に連絡出来なかったのか、そもそも何で先生が誘拐について

知っているのか、全で一から十まで完全に説明して頂きますわ……！」

常ではキラキラと光を反射して輝く黒曜石の瞳が据わっている。つ、と久美子の米噛みに煌く汗が一筋滑り下りて行った。

「は、はい……」

割りかし傍若無人な独身（29+）を恐れさせるとは。我が妹ながら何でこんなに逞しくなってしまったんだろう。寝転んだまま首を捻る。それにしても。

「誘拐か……」

想像付かないな。

「……そういう経緯でしたの」

「なる水口」

いつもより一人減って、一人増えて三人。いつも通り狭苦しい六畳一間の只中で俺と撫子は大きく頷いた。

レティシアは主に縦に、久美子は横と奥行きの場所に場所を取るので、体感的にはいつもよりも狭いかもしれない。

ちなみに、俺は依然床に寝転がっている。というか、独身の話に相の手を入れていただけなのに撫子の尻の下に敷かれている。物理的に。

何故だ。

「いちいち話の合間に、なるホロドウフフそうでゴザルか、煩いからですわ」

「さいで……」

ちら、とこちらに視線を落とした撫子が冷たく呟く。心を読まれているようなタイミングである。

「はあ……それでお兄さま、どうなさるんですの？」

「何が？」

「いだ！ いたああああイタイ抓らないでえ！ ……い、今の所が何も出来ないと思います……！」

「まあ、結局何も、誰がどこに誘拐したのかすら分かっていませんものね」

うんうん、と一人頷いて一際強く俺の脇腹を抓りあげた撫子嬢が手を離す。

うつ伏せのまま、動かしにくい腕を動かして抓られた所を摩ろうとして「ひあ!？」撫子の足を撫でてしまう。ぺし、と頭を叩かれた。

「犯人に心当たりはあるんだけどねえ……」

「いや申し訳ない。真に遺憾であるからして」

「どこ触ってるんですの！ スケベ！ って、今何て仰いました？」

「いや申し訳な」

「お兄さまには聞いておりませんの！」

「ごめんなさい……」

話の流れがシリアスなのは理解しているが、どうにも頭の中で整理する時間が欲しかったのだ。

決して、撫子を揶揄う為にふざけてるのではないのである。

一人目を閉じ組んだ手の上に顎を乗せ、うむと頷く俺を放置して二人の会話は続いて行く。

「今、犯人がどうか仰いまして？」

「ええそうなのよ。あの子を車に連れ込む時、男が振りかえって顔が見えたんだけど……見覚えがあつて」

「見覚え……有名な男なんですの？」

戸惑ったような撫子の声音。微かに身じろぎするのが触れた尻から伝わってくる。

……台詞だけ見ると変態そのものだなあ。

いや、お休み中であるとは言え絶大な人気を誇るアイドルである撫子に乗っかられているというのはこう、何だこう、イケナイことなのやも知れぬ。

何がとは言わないが、柔らかい。子供だ子供だと思っていたが、義妹は思ったよりしつかりと成長なさっているようだ。

まあ、胸部装甲が絶望的に薄いため萌えーはないが。微乳であつ

て美乳でない。

……つまり撫子の首から下お腹から上の部分には男の夢が詰まっ
ていないのだ。ちなみに大きくなることに夢、愛、ロマンと詰まる
物が増えて行く。

いやいや、きっと彼女は大きい人に詰まっている分の夢を周囲に
分け与えているから小さ、

「……何か不愉快な気配が」

「ぶむっ」

……痛い。

「さ……続けて下さいな」

「有名では無いんだけど……個人的に顔見知りでね。以前、人体解
剖学とか細胞生理学とか神経生理学とか、熱心に聞きに来てたのよ。
私の学会発表で興味を持ったとかで。かなり頭の回転が早い子で、
面白い着眼点とかもあって……まあ今は関係ないわね。そういう程
度の顔見知りな訳よ」

「そうですの……」

沈黙が三人を包む。はあ、と溜息を吐いた久美子が体を揺すった。
テーブルに遮られてはつきりとは分からないが、床と彼女が背を
凭せ掛けたベッドが軋んだので間違いない。

一回盗み見たことがあるのだが、彼女の体重はピーkg……おや、
ピーキロ……三桁ではない、と言っておこつ。

「あ、そうだわ」

パチン。指を鳴らす音。

「名前とか外見の特徴をまだ言っていなかったわよね。……名前は」

ブーーーーー。

シリアスな空気を投げ捨てジャーマンする音が響く。来客の少ない我が家では余り活用されることのない呼び鈴の音である。

本当に久々に聞いた。

「はいはい、今出ますよ」

ブ、ブブ、ブ、ブ……ブ、ブー

……リズム取ってんじゃねーよ。口の中で呟き、玄関に向かう為にゴロリと「ひゃ……ったー！」転がる。

巻き込まれてバランスを崩し、強かに後頭部を安普請の壁に打ち付けたようだ。

軽くなった体を起こして振り返ると、うるうる涙目で打った所を押さえる撫子と目が合った。

「うー……!」

睨まれている。めっさ睨まれている。

「嬢ちゃん……人生はいつも戦場だぶっ!？」

殴られた。とりあえずまあ落ち着けと手振りで示し、

ブ、ブ、ブー ブブブブブー

ぶんぶん煩い有名な童謡の節回しで呼び鈴を連打する不屈き者の方に目を向ける。

といつても玄関だが。

「…… K U K I Y O M E N A I 奴め……こつそり飛び出て驚かしてくれるわ」

そつと、そつと忍び足。そんな俺の匠の動きに背後から「ああ……」という溜息が二つ聞こえてくる。

ふふ、磨きあげたこの忍び足に感嘆の吐息を我慢出来ないようだな……！

「誰だ家の呼び鈴連打する奴、あー……」

全力全開。不用意に玄関前に突っ立っていたら扉ぶつけて開け殺してやるつかという勢いで開け放った玄関を、俺は迅速且つ慎重に閉めた。

駄目だ。無かったことにしたい。

「ちよつとお兄さま？ ……どうしたんですの？」

「太郎？ アンタ何やってんの」

怪訝そうな声に振り返り、ぎこちなく笑みを浮かべる。

「い、いやあ間違いだったみたいでネ！ ネ！」

「……」

ネ！ の所でほつぺに人差し指を当てて首を傾げると、物理的な威力を持つ精神波が飛んで来た。

具体的にはどうしようもない馬鹿を見る時の世間の冷たい目だ。

冷や汗が垂れる。

ブー ブブブブブブブブブ……

あえてスルーしていたが、呼び鈴を何がしかの曲調に合わせて連打していた怪人物の迷惑ライブはまだ終わっていない。

ネタがもう尽きたのか、ひたすらエイトビートで連打するという嫌がらせ行為に発展している。

「お……呼び鈴が止まった……？」

何か不気味なものを感じ、玄関から一歩二歩と後ずさる。
がちゃ、とドアノブを回す音が嫌に響き、ふと鍵を掛けていなかったことに思い至る。

「グウウウツドイーブニイイインッグー！」

ズバム！ と玄関をぶち開けた先には変態が立っていた。
間違はなく先ほど、玄関先に突っ立って呼び鈴を連打していた御方である。

呆然と口を開け、その変態の姿を確かめる。念の為腕で目を擦ったが目の前の悪夢的光景は変わらない。

仕立ての良い黒の二つボタンスーツ。上着の下には汗を浮かべて地肌全開。更に趣味の悪い巨大な蝶ネクタイを首にかけている。

頭の天辺から伸びる長大なモヒカン髪は鮮やかなショッキングピンクで、顔にはミラータイプのスポーティなサングラス。

身長おおよそ百四十センチ。子供の如き短軀の上に乗る顔は、サングラスで隠れているとはいえ三十以下には見えないものだ。

一言で言えば、変態のチビ親父である。

もつどこから突っ込めば良いのか分からないので、とりあえず叫んだ。

「今は、昼ですー!」

「そういう問題じゃないでしょうこ、コレは何ですの変態ですよ!」

「裸スーツに蝶ネクタイ、モヒカン……素敵だわ……」

「はっはっはっはっは」

カオスである。

普段比較的冷静な撫子もテンパっており、独身(29)に至っては異次元の感性でスーツから垣間見える地肌の割合とかを語りだしているのだ。

勿論俺もテンパっている。突然家にこんな変態がやってきたら間違いない通報物だ。そうだ通報しなきゃ。

ポケットを探り、携帯を取り出す。

何番に掛けて良いのか咄嗟に思い出せず、頭に思い浮かんだ単語をとりあえず叫んだ。

「そうだこういう時は消費生活センターに……!」

「ち、違います警察ですわ! 一一〇番ですよ!」

ロンパリ気味の撫子に頭をはたかれ我に返る。

何考えてんだ俺。消費生活センターに相談したって変態は帰ってくれないぞ!

腰に手を当て、見たくもない乳首ガン見せで高笑いを続ける変態が恐ろし過ぎて更に部屋の方へと後ずさる。

携帯のナンバーを、一、一、まで打ちこんだ所で男が素早く動いた。

片足を大きく踏み込んで上体を深く倒し、両の腕を真っ直ぐ伸ばして後ろに突き出す。

なんで変態の奇行を見ると気分が冷めるのか。考えて一秒で脳内に答えが浮かぶ。

威力は向こうの方が上だしな。

良い感じに体重の乗った足の裏が鼻にめり込むのが分かった。肺の中にある空気を吐き切るつもりで声を張り上げる。

「おご！？ 鼻、鼻、が……！！」

ず玄関に衝突し廊下に転び出て、鉄製の策で頭を強打してのた打ち回っている。

衝撃で弾き飛んだサングラスがカラカラと間抜けな音を立てて滑って行く。

荒く息を吐きながら、俺は玄関を開け放したままズビ！ と小男の靴跡で汚れた家の床を指差した。

「お前後でここ雑巾がけだぞ！ 聞いてんのか鼻血ブー！ ついでにお前の言う謎の組織だら何だらも喋ってもらうぜー！」

展開に付いていけないのか、背後で未だにテンパっている撫子と何かだらしく緩んだ顔で呟く久美子。

二人が冷静になったのはほぼ同時だった。

「はっ……余りに前衛的なセンスに脱帽してたわ！ ……趣味が合いそう！」

台詞は久美子が。

「……っこの変態！ 変態！ 変態変態！ ですわ！」

「お、おふう！ 痛い！ 痛いね！ でも良いよ僕は受け入れる！ もっと踏ん……」

「このこのこの！ このーっ！」

しかし行動は撫子の方が速い。

余程怖かったのだろう。目尻に涙を浮かべ、俺を押しつけて変態を連続で踏み付ける撫子。

鼻血を垂らしモヒカンを乱し、無防備に踏まれながら何故か恍惚

と頬を染める変態の様子に、撫子のスタンピングは天井知らずに威力を上げていく。

「ああ……も、もっと……！　もっと踏ぶふ！」

「……！　……！」

ゲシゲシ。

「も、も……そ、そろそろ終わりに……」

「……」

ゲシゲシゲシゲシ。

「やめ……」

「お黙りなさい」

踏み！

「も、もう堪忍して……」

メソメソ涙を零すモヒカン。これで美少年とかだったらシヨタの世界的には許されたかもしれないシチュエーションである。

だが露になったコイツの顔はどの角度から見てもおっさん顔で、鼻血と痣に彩られたじゃがいもの如き面では通貨換算して一ペソの価値もない。

美麗な顔を怒りとか色々で般若の如く歪め、執拗にぐりぐりと男を踏み詰る撫子相手ではいわんをや。

ここで俺に出来ることは一つ、素直にご冥福を祈ることだけなのである。

全員が落ち着いて来た所で小男に玄関の汚れを雑巾がけさせ、家に上げた。

先程とは一転、氷の鉄仮面を張り付けた冷厳な撫子の眼差しが、正座して更に小さくなっている裸スーツを貫いている。

「……で、何の御用ですの？ ふざけたりしたら逮捕ですわ。ふざけなくても逮捕ですけど」

「お、脅しても無駄だ……僕は如何なる拷問にも口を割らないように

「……は？」

「ええはい、勿論本日はご用件が御座いまして！ へへえ！」

弱っ！ 小物過ぎるだろコイツ……。

撫子が眉を歪めくいと顎を上げただけで顔を引き攣らせて土下座に移行する変態蝶ネクタイ。

義妹に任せておけば話は聞き出せそうなので、俺は黙ったまま状況を見守ることにする。

ヘタレたモヒカンのヘアスタイルを眺めているのが可笑しいものもある。ぷぷ。

「で、ご用件は？」

「はい！ あの、あの僕はですね、佐藤御嬢さんという方を誘拐した一味の一人なんですがつ！ ……あ、詳しいこととかは下端なんで分からないんだね！」

衝撃告白来ましたコレ！ 何でこんな駄目な奴寄越したんだよ。

「伝言、と言ってましたわね？」

「はいっす！ 僕ビデオレター預かってまして！ ……ええと、コレっす！」

小男を部屋に引きずり込む際に、玄関先で見つけて拾っていたブリーフケースからビデオを取りだす。

モヒカン将軍様にするかのようにずりずりと正座でにじり寄り、両手で捧げ持つようにしてビデオテープを差し出した。

ちらと撫子に目くばせされ、表面に貼ってある最近流行りの連続ドラマのタイトルは無視して受け取る。

今時ビデオかよ。

幸い我が家ではビデオデッキという素晴らしい機器が現役で活躍中なので、放り込んで再生ボタンを押した。

型の古いテレビの画面に、どこかの会議室らしい様子が映る。

「……」

中央に、部屋を分断するように設置された長机。座り心地の悪そうなパイプ椅子がその隣に並ぶ中、一つだけやたら重厚なソファが目に入る。

こちらに背を向ける形で鎮座しているソファ。頭髪のない輝かしい後頭部が僅かに背凭れから飛び出しシニールさを誘う。

「やあ諸君。この相手を馬鹿にする意図満々のビデオレターを見ているということは、そちらに脳なしの役立たずでぶっちゃけさつさと首にしてくれと各所から嘆願書が来ているエージェント変態がちゃんと言ったようだね？」

「僕が言うのも何だけど。酷いものだよね、あの人……」

「ていうかお前、味方からも変態って呼ばれてんのかよ。まずはそこだろ」

「しっ！……静かになさって下さいです。まだ何か話していますわ」

正座のまま力なく頂垂れたエージェントが指先でそつと涙を拭う。ちよつとキモかったので素で突っ込んでしまった。

「そう……ご想像の通り俺はこの組織のリーダーさ。しかしその正体とは！」

勢い良くソファが回転する。

「ああ、行きすぎ、行きすぎですリーダー！」

このビデオを撮影している奴だろうか。どこか焦った男性の声と言う通り、回転し過ぎてまた背中を向けていた。

輝く後頭部は咳払いをし、今度はゆっくりと反転して姿を見せる。

「さて、これが俺の顔な訳だが……」

「戦隊物のお面被ってんじゃねーか……」

どこまでもふざけた奴である。

頭痛を覚えて米噛みを押さえると、隣で同じ様に眉間を揉んでいる撫子の姿が見える。

どれ、と思つて背後を見やると、顎に手を当て妙に厳しい表情をした独身。

「……この蝶ネクタイ、どこで買ったのよ!? 脱帽だわ……」

「いやいや、僕なんてまだまだですよミス。それにしてもその白衣ボンテージ……ご自分で考案なされたんですか? いや素晴らしい」

「うふふ! そうなのよ! 若い子のファッションの相談に乗る時はあえて進めないのよね……これが似合うのは私だけだもの!」

「感動だ! 僕たちは気が合いそうですね!」

いえーい、いえーい、とハイタッチをかます変態二匹から目を逸らした。変態は変態同士仲良くやっていて頂きたい。出来れば遠い所で。

変態の国なんか丁度良いのではないだろうか。

まあいい。このビデオ見たらこいつ警察に突き出そう。

決意してテレビ画面に注目する。無駄に長話をする戦隊物仮面は、中々本題に入らないらしくジリジリと時間だけが過ぎて行く。

「という訳で、俺はこのお面を手に入れたのだよ。壮絶な値切り交渉の末、観客の拍手に包まれつつ五十円玉を店主に差し出したのだ」

もう凄まじくどうでも良い。げんなりとりモコンを手にとって、

早送りしようと腕を上げた瞬間。

「おやあ、もしかして今早送りしようとしているのかね？　かねかね！？　いかなあ、これから本題に入るというのに！」

イラッと来る言いまわしだが、本題を聞けるならまあ我慢出来んこともない。一端上げた腕を下ろす。

「では只今より俺主催による大　野球拳大会！　ウホッ！　男だらけの地獄絵図」を開催します！！」

「うつきゃああ！　畜生！　畜生！」

何だコイツム力つく！　ばしばしと床を連打しながら身悶えた。投げやりに寝転んだ撫子が小さく呟く。

「……ここまで来ると、呆れてしまいますわー……」

「　　というのは冗談でな。フアフアフア、レティシアはわれがゆうかいした。返してほしくばあすのあさ9時、われがつかわした者におまえがしたがってついてくるがよい」

「某ラスボス先生インスパイアしすぎだろ。後お前スーファミ版やつたろ？　ひらがな多いぞ」

「うふ、うふふ……！　どう、どうどうこのボンテージ、際どいでしよう！？」

「ああ何て眩しい……今度僕も着てみるよ！　ところで裸スーツならぬ、スーツボンテージというのは如何だろうね！？」

誰か何とかしてくれ。そう思っていると、画面の中のふざけた男は「アヂュー」と言って姿を消した。

映像はここで終わりのようだ。黒く染まったテレビ画面から目を外し海よりも深くドブ川よりも澱んだ溜息を吐き、撫子と目を合わせる。

今の忘れたいから必要な所だけ纏めてくれい。

嫌よ撫子も忘れたいんですの。

駄目か。とりあえず未だに変態談義に花を咲かせている馬鹿二名にリモコンを投げつけ沈黙させる。

そこでふと気付いた。

ビデオデッキはまだ再生を続けている。

「またアレだろ……パツと画面が変わって言い忘れたよ！　とか言
って出てくるんでしょー」

「その通りだよ！」

「うわ……」

本当に現れた。というか台詞を予想していたのかコイツは。

しかも先ほどとお面が変わっている。紙で出来たペラペラの赤鬼の顔。節分豆を買った時、おまけで付いてくるような粗悪な奴だ。

……突っ込まないぞ？

「言い忘れていたことがあったんだが……いいか？　お前の家は現在、俺の手の者で見張られている。意味が分かるか？　お前ら全員、外に出ることも、どこかに連絡することも許さないってことだ。もしも妙な真似をしたら、迷わず小娘を　殺す」

「……っ」

雰囲気を一変させ、僅かに覗く瞳だけを暗く輝かせた男の言葉に息を飲んだ。画面越しでも伝わる凄絶な殺意が体に絡み付く。

殺す、喧嘩の時など不用意に口にされがちなチープな単語が、現実味を帯びて胸に突き刺さる。

どこか楽観視していて現実味の無かったレイシアの誘拐という事件に対して、俺は初めてはつきりとした危機感を抱いた。

「三丈太郎、お前に出来ることは二つだけだ。大人しく俺に従うか、女を見捨ててお家でガタガタ震えているか 分ったらお返事は？ ああ、見捨てた場合はお前たちに危害は加えないと約束しよう」

この男はやばい。脳の奥で警鐘の様に鳴り響く何かに従って表情を引き締めた。

何となしに感じる既視感、どこかで覚えているはずのそれに目を細め思い至る。

そうだ、昔、親に連れられて裁判の傍聴に行った時見た連続殺人犯と同じ雰囲気だ。常軌を逸した憎悪や悔恨を抱えた人間の色。

子供の俺はソイツが纏うそれが怖くて、泣きべそをかいた記憶がある。

コイツも、そういう類の人間らしい。

「じゃーなー。また明日、会おうぜ？ あ、あとエージェント変態は今日付けで首だから。皆の歎願書来てるし」

「ええ！？ ちょ、リーダー……ああ……」

今度こそビデオの再生が終わる。最後の最後、にっこりと馬鹿丸

出し満面笑顔を浮かべた男が妙に怖かった。

あそこまで態度や言葉が豹変する奴など滅多に居ない。

首を宣言され項垂れる変態を尻目に、片手で心臓の辺りを押さえつけた。高速で大きく脈打つ鼓動の音が耳に響き、五月蠅ささえ感じる程だ。

「…………お兄さま？ お兄さまってば！」

「お、おう…………」

撫子の声で我に返った。いつの間にか息を止め、緊張で体が凝り固まっていたのである。

大きく息を吐きだすと同時に、嫌な汗が噴き出てびっしょりと体を濡らす。

「…………大丈夫ですか？」

「撫子こそ」

心配そうにこちらを覗き込む、青ざめた顔の撫子の額を指で小突き無理に笑顔を浮かべた。ぎこちなくはあるだろうが仕方無い。

幾度か深呼吸すると、少しは気分がマシになる。空気を読んだのか、珍しく押し黙っている久美子と変態の姿を確認し、頭をかいた。

どうすれば良いのか分からない。

もしかしたら監視など付いてないのかもしれない。迅速にこのビデオを持って警察に行く方が良いのかもしれない。

レティシアの両親共に社会的地位とかあるし、そちらに一任するのがやはり筋だと思う。

でももし、そうやって『何か』してレティシアが殺されてしまっ

たら？

そう思うと何もする気が起きなかった。

殺したのはお前だ、とあの男に吐き捨てるのは簡単だろうが、間接的にでも俺がそのトリガーを引いてしまうのは気分が悪い。

何よりあの男の真意がつかめなかった。そもそも何で俺を呼ぶ？

時計を見る。

時計と分針はそれぞれ、三と五を示している。午後三時二十五分。指定された時間まで後十七時間と三十五分。

「どうすりゃいいのかね……」

俺の呟きが静かな部屋に広がり、反響して自分に返ってくる。

撫子、久美子、変態。そして俺。皆今しがたのビデオを飲み込めていないまま、秒針が時を刻む音だけがやがて部屋に満ちた。

選択肢は、決して多くは無い。

第十五話 ロマンティック・アパカー。

「……俺、これが終わったら巨大掲示板でスレ立てするんだ。タイトルは『俺んちにデブと女王様と変態が居るんですが……』」

「叩かれるのが落ちですわね……女王？　女王って誰のことですか？　ねえ何でお兄さまは視線を逸らして口笛吹いてるんですの!？」

「撫子ちゃん、そういうのは大人の事情なのよ」

「若者よう、悩め悩め！　それが明日への露出に繋がるのだよ！　ふはー!」

「黙れチビ。モヒカン。露出変態。脳無し。中年」

「ち、直接的な表現が胸に突き刺さるよ御嬢さん……!　僕の扱いが酷いね!？」

さて何でだろうネー。変態は撫子に踏まれてると良いよ。

狭苦しい六畳一間に俺と撫子とデブと変態の四人。どうスペースを有効活用しても狭いものは狭い。

というか暑い。狭暑苦しい。

匠にリフォームして貰わなければ無理だ。まあ、何ということでしょう、こんな所にも匠の技が光ります……程度の広さもないからダメか。

デッドスペースを活用する前に、俺が大家さんにデッドされてしまっ。

少々お年を召している大家さんに初挨拶に行った時、「貴様……ヒロヒホっ！ シャアア！」とか言って模造刀を振り回されたのは良い笑い話だ。

当時の俺には少しも笑えなかったがな。ちなみにヒロヒホという日本人にあるまじき単語は、上手く発音できなかったヒロヒコ（孫）の名前らしい。

じいちゃんに一体何したんだ、まだ見ぬヒロヒホよ。

「とりあえず窓、全開にしとこう」

半端に開けていた、ボロいベランダへと続くボロ窓を全開。立て付けが悪いためガタガタと煩いがそれはこの際仕方がない。

この部屋に越してきた時からそうだし、掃除とか小まめにしても効果無しかったのだ。

中天から少し外れた所に掛かっていたお日さまは、今はもう西の地平線に沈みこもうとしている。

ここから見える世界は等しくオレンジ色。
肌を感じる風の温度は、昼間より僅かに低い。

時間は、刻々と流れている。

ロマンティック・アパカー

「どうしたもんかね……」

何分狭い。ので誰かが何か喋れば、等分にここに居る全員に言葉が伝わってしまう。

あれから数時間、ゆっくりとビデオの内容を噛み締めていた各自は今、つらつらと話し合いをしている真っ最中。

「……お兄さまが狙われるのに心当たりのある方は？」

主に撫子が問題提起と進行。

「いやあ、何せ僕は末端だからね。アジトに居る時はいつも、半裸で一人社交ダンスを踊っていたからよく分らないよ」

「死んで下さいまし。久美子先生は？」

「え、今さらつと凄いいこと」

「やっぱり……さっきも説明した体質じゃない？」

「……」

変態は役に立たず。久美子先生は特に今のところ手がかりなし。俺は一人で黙考。

時間ばかりが経過して、未だ何一つ良い意見など出ていない。分かったのは、俺が実はスーパー筋肉の持ち主だということだけ。久美子はそれを、スキンヘッドの男から伝え聞いたらしい。何だその驚き設定。

だからレティシアを誘拐した奴について見覚えがあつたとか。奇しくもレティシアの言っていた“ありえない筋繊維”というアホな言葉が実証されてしまったようだ。

当の本人的には全くそんな感じはしないんだけどね。

「……分からないことばかりですわね。目的も見えませんし……とにかく今の所、お兄さまが明日、彼らに従うのかそうでないのかが問題ですの」

「詰まる所、それなんだよなあ」

溜息を吐く。ちらと窓の外に目をやった。

夕刻に開け放った窓の外は既に暗く、僅かな街灯と星と月の明か

りだけがそこに漂っている。

くう。

「もう夜……ん？　今何か聞こえたよね？　よね？」

「……」

何かえらく可愛らしい音が聞こえた。
もしかしてこれ。

「お腹の音、か？」

「……っ！」

おう、撫子が耳と言わず首と言わず、熟れ熟れトマトの情熱色に
大变身。

「ぶぶ、お腹空いたからご飯にしよけー」

「……お、お手伝い致しますわ」

「ぶぶ」

「お腹空いたわねえ」

「フオーーーーーウ！　僕も腹ペコリンリン　だよ！」

うわぁ凄いフォロー空間。お間抜けな展開に、誰ともなしに笑みが漏れる。

俺はニヤニヤ、撫子は真赤なまま、独身は柔らかく、変態は激しくどうでも良い。

「うぷぷ。くうーだって、可愛いどうっ!!」

鳩尾にめり込む肘。しっかりと踏み込んで放たれたそれが無情に俺の体力を削る。

立ち上がりかけた膝が落ちた。さっと顔が青ざめるのが分かる。

あ、足技に加えて肘とは……!

「……何か言いました!?!」

「な、何でも、御座いません」

く……い、胃酸が込み上がって来るぜ。鳩尾に肘はリアルな危険が……。

「……何だか僕、君に親近感得ちゃったよ。ほら苦しくない苦しくない!」

のそのそと近づいて来た小さいおっさんが俺の背を摩る。いいからモヒカンをバタバタさせるんじゃない。

後お前コロンなんか付けてるんじゃないよ。

「だ、大丈夫」

丸見えの肌に浮いた汗が嫌すぎる。おっさんの手を払って今度こそ立ち上がる。痣になってなきゃ良いが。

そつだ飯を作らなければ。口にゴムを食み、髪を纏めて台所に立

つ妹の所まで歩み寄る。

「今日のご飯は何な訳なのよ？ …… あ！ アイス買ってないわ！」
知るか。

「僕はビイイイフシツテユウウ！ が！ 良いね！ 凄く美味しいね！」

ダメレ。否死ね。

というか、四人分の食料あったっけか？ 今日は買出しに行く日だったんだが。と、撫子と一緒に冷蔵庫を覗きこむ。

「んー……と」

眉根を寄せ、むむむと口をへの字にひん曲げた撫子が唸る。
無いのである。

見事に肉も野菜も魚も無い。

もう米？ 銀シャリだけでいっちゃうのか？

「どうすべか。…… あ！ あれがあるじゃないですか。えー、安かったから買い込んでたブツが確かここに……」

棚をこそごとと漁り、目的のブツを掴みだす。
手に持ったそれを頭上に掲げた。
ぺっけぺー。

「じゃじゃーん！ 金無い時の俺らの味方！ S U M E N N 様」

「じゃあお鍋、用意しますわね」

撫子は特にリアクションを返すことなく鍋に水を張る。

俺は猛烈に投身自殺したくなって麺をそつと台所に置いた。

冷たいコメントより、スルーの方が心に痛いと思い知る二十歳の夏。

「……えふん。じゃあ俺はネギ切ったりするから、麺を頼みます…」

「わかりましたわ」

屈みこんで火加減を見ている妹。

その隣で、俺はまな板の上に生姜とねぎを並べる。

包丁でつつかえながらもネギを細切れに。生姜をすり下ろして、その良い匂いにお腹を鳴らしつつ麺つゆと刻み海苔を取り出した。

いつも使っているお茶わん三つ。と、器が足りないのご飯茶碗一つ。

麺つゆを適当に注ぎ、だらしく転がっている久美子を足でどけつつテーブルに並べる。

薬味は纏めて小皿に盛り、箸は足りないので割り箸を使うことにした。

一度テーブルに戻り、それらを並べて戻ると丁度、麺を茹で上げた撫子がお湯を捨てる所だ。

一度ざるを使って水に晒してうどんを冷やし、水分をきってから豪快にそのままボウルに乗せる。

冷たさが足りないなあと思ったので、氷を数個ざるの中に落としたり。ざるの下にボウルがあるので水が漏れる心配はない。

コップに麦茶を注ぎ、撫子と協力して食卓に並べた。

「おいドグサレ共、飯の時間です」

「うふああああ」

「ひゅおおおお」

「……起きて下さいまし！」

べしん！ べしん！ 撫子の平手がこの短時間で寝に入っていた二人の額に炸裂。

コメントし辛い欠伸を漏らしながら起き上がる。

何か凄い見ちゃいけない物を見ている気分になるのは何故だろう。勢いを付け、高速で手を伸ばす。

「痛い！ な、何で殴るんだね！？ 僕は男に殴られても性的に興奮しないのだよ！？」

知るか変態め。堂々とベッドで寝るな。

枕を抱えて頬を緩ませるモヒカンのオヤジの姿は間違いなく有害指定画像である。検閲が入るに相応しいキモさだ。

思わずぐーでパンチを入れた俺を咎めることが出来る者はいまいぐー。

「肉肉肉肉刺身肉……って麺！？ 素麺だわこれ！？」

「もう！ 静かにして下さいまし！」

「イグザクトリィ！ 嫌ならご飯抜きですからねー！」

ぎゃいのぎゃいの騒ぐ変態二匹とそれを叱る撫子を制し、皆でひとまず手を合わせた。

長方形のテーブルに対し、席順は俺、隣に撫子、正面に脂肪遊戯、斜向かいにモヒカンだ。

何と潤いと常識の無い光景か。

「いいか？ はいお手てを合わせましょー」

「「「頂きます」「」」

「ただフォーーウ！」

俺は無言で席を立つ。拳を握り締めた所で撫子が華麗に宙を飛んだ。

うどんやらを乗せたテーブルに片手をついて床を蹴る。一瞬でテーブルを飛び越え、勢い良く振り抜かれるのは可愛らしい膝小僧。唸りを上げて空を切るその脚線が

「くぼー!!」

首筋に対して横から、頸椎を刈り取るように打ち込まれた。角度的に見事なシャイニングウィザードがモヒカンの体を吹き飛ばす。唾をまき散らしながらベランダの方へと消えて行ったソイツとは対照的に、撫子は奇麗に着地をした。

「……」

沈黙のままベランダに通じる窓を閉め、ついでに鍵もしっかり締める。更にシャツとカーテンも閉め切った。

振り返ったその米噛みに青筋が立っている。

「……悪は滅びましたわ。さあ、頂きましょう」

「うん」

「……そ、そうね」

超怖いけど良くやった！ アイ・コンタクトで褒め言葉を送ると、つんと顎を逸らして得意げに返される。

何やら窓を叩く音が聞こえないでもないが、きっと幻聴だ。変態の相手は気力体力共に使うからな。
眉間を揉みほぐす。

折角のご飯時にネタに走る奴は我が家に不要です。

「あらこの薬味、美味しいわ」

「お隣さんのおすそわけです。何でも実家の方でも美味しいと評判な生姜なんだとか」

「うどんの茹で具合も丁度良い見たいですわね」

「撫子の腕が良いから」

「もう！ お兄さまったら」

「はははは」

そんな和やかな遣り取りを挟みつつもうどんを完食。

覗きこんだざるの中には小さな麺の一欠片も残ってない。掃除機の如きバキュームで三十路一步前が掻き込んだからだ。

……結構な量を湯がいたはずなのだが……まあボンテージを内側から張り裂かんばかりに満ち満ちる白い肌を見れば納得できる。

一食でこれだけ食えばそりゃあぶくぶくぶくぶく、デブること必至。

「あゝ――喰ったわ。喰らったわコレ！ 後片付けは私がやるから、アンタ達は休んでなさい」

「あい」

白衣を脱いでボンテージだけの邪悪な姿に変身した久美子がお肉を揺らして立ち上がり、脂肪を震わせて流しへ消えていく。

破壊力抜群の光景から目を逸らした俺は有り難い申し出を受け取り膨れたお腹を抱えて寝転がった。

天上からつり下がる蛍光灯の白い光をぼやっと見つめる。

お腹が空いていては良い案が出ないな、と思っていたが、お腹が満ちても良い案は出ない。

流しの方から聞こえてくる水の音をBGMに、ふとそんなことを思った。

明日の朝九時まで、レティシアを見捨てるかどうか決めないといけない。馬鹿げた話だ。何だそれは。俺にどうしろと言っんだ。

俺は半ば現実逃避気味にゆっくりと瞼を下ろす。

「……お兄さま」

「なあにー」

「……レティシアが居ないこと、で、何か問題はあるんですの？」

目を開く。隣で同じ様に寝転がって伏し目がちに、躊躇を挟み込みつつ声を上げた撫子に顔を向けた。

戸惑いをたつぷりと振りかけた声音は、流れる水の音にかき消されそうな程小さく力無い。

これまで誰も発言しなかった内容だ。俺も、多分久美子も考えついていたながら言葉にはしなかった言葉。

それを敢えて口にした妹に、何を言えば良いのだろうか。

しかし俺の口は意思を無視して勝手に動き、意味を為さない音の羅列を吐き出した。

「それは……」

「撫子は！ そんな危ないことに首を突っ込んでお兄さまに傷つけて欲しくありませんの！ だから……」

「……うん」

言いたいことは分かる。

独身の話に寄ると、拳銃っぽい物を持っていた奴が居たらしいし、そもそも白昼堂々誘拐なぞして脅迫のビデオを送ってくる様な奴らだ。

義理とか人情とか馴れ合いとかを纏めてひっくりくるめて切り捨ててしまえば。

俺の中にはレティシアのことを忘れて、このまま平和に暮らしていたいという希望がある。

危険な目になぞ会いたくない。

俺は愛と勇気に溢れた物語の主人公ではないのだ。

殴られれば傷つくし、もしも拳銃なんかで撃たれたら呆気なく死んでしまうだろう。

おおゆうしゃよ、死んでしまうとはなさけない、と復活させてくれる王様も居やしない。

いつそセーブ出来ればいいのだが俺の人生にセーブポイントなんて便利なモンはない。

格闘技どころか喧嘩も殆どしたことが無い様な男に何ができる？ 誰だって我が身が一番可愛い。

水の音が途切れたのに気がついた。

首を横に倒すと、そこにはこちらに背を向けタオルで手を拭く独身の姿。動きに合わせて、はみ出たお尻の肉がふるふると揺れる。

「……是非モザイクが欲しい所ですな……」

「……二段腹で挟み殺すわよ。ちょっとシャワー借りるわ。そうね、一時間位かかるかもね」

だから何話してても聞こえないわ。呟き、返事を聞くこともないまま久美子は浴室へと消えて行った。

揺れる腰回りの脂肪に含まれた不器用な優しさを感じ取って、心の中で礼の言葉を呟く。

俺は再び蛍光灯に視線を戻し、目を瞑った。

頬には撫子の強い視線が注がれている。それを熱として感じながら、胸の内で渦巻くどろどろをそのまま唇に乗せた。

「レティシアは……まあ突然現れて押しかけて来たからな。生活費は入れてたけど、家事は一切手伝わないしムキムキで心臓に悪いしベッド取られるし家は狭くなるしロリ巨乳お姉さんの画像とか集められないし筋トレさせられるし物は増えるしたびたび攻撃されるし……」

「……そ、そう羅列されると」

困ったような撫子の声。

「……いやはや歩くデメリットみたいな奴だな。魔法とか訳わかんねえし」

「否定はしませんわ……」

そう言って苦笑する気配。

しかし気付かないふりにも限度があつた。先ほどからずっと、撫子の声は震えている。

何だかんだでレティシアと一番仲の良かった彼女が、友人を切り捨てる様な言葉を口にするのにどれだけの勇気を要したのか俺には分からない。

分かるはずが無いのだ。

震災で家族を亡くし。

その容姿のせいで碌に友達も作れずいじめられ。

芸能界で成功した後もやっぱり周囲の期待や下心、やつかみのせいで友人を作れず。

今になってやっと手に入れたであろう友人なのに。

「何か訳わっかんないすわー……今朝まで元気にプロテイン飲んで

た奴が誘拐？ で助けたいなら俺が来い？ これ何てエロゲ？」

「お兄さま……」

「撫子は、レティシアが居なくなっただ方が良いか？」

意地の悪い問いかけだ。空気に溶け込んだ俺の言葉は、自分が思っていたよりずっと冷たく響いた。

「お兄さま……っ！」

音を立てて頬を張られる。次いで衝撃。熱くて柔らかくて小さな物が圧し掛かる感触にようやく目を開いた。

乱暴に掴まれた肩も引つ叩かれた頬も妹が乗っかっている腹も全部熱い。

何より、顔中に止め処なく降り注ぐ雫が一番熱い。

「ふ……っ！ ……っく！」

抑えきれない激情を堪えるように顔を歪ませ、黒曜石の瞳一杯に涙を溜めた撫子の顔。

悩んだのだろう、きっと。兄か友人か。

縛ったままの墨色の髪の毛が滑り落ちて頬を掠めた。

「な、撫子は……あの子を見捨てたいなんて、そんな、そんな訳……！」

いやはや馬鹿だなあ俺。

ゆっくりと手を伸ばして撫子の涙を拭う。Sっけはあれど優しい

撫子が、友達が居なくなことを望む訳ないのだ。

そんなことは、ずっと共に居た俺が一番分かっている筈なのに。

「うん。ごめん。分ってる」

「分ってない!!」

叫び。魂削るかのように押しだされたソレが部屋を揺らす。

「撫子は、レティシアが大切な友達で！ でも でも！」

流れ落ちる涙もそのままに、レティシアは強い視線で俺の瞳を覗き込んできた。

濁流の様につながる激情を直接叩きつけられる様な感覚に知らず、ごくりと唾を飲み干した。

「でも撫子は、私は お兄ちゃんが好きなの！ 私をずっと、何度も助けてくれたお兄ちゃんが好きだから！ でもあの子も大切でっ！ お兄ちゃんには怪我なんてして欲しくなくて！ だから、でも……」

「……あー」

気の抜けた声が喉から漏れる。

パニックだ。

じつくりと時間を掛けて浸透してくる文章がガツンガツンと脳を揺さぶる。

途端に視界がばやばやと揺らぎ、撫子の姿だけ鮮明になる。

ん!?

え？ なに十二何の話！？ 急展開！？

「は？　うえ？　何の、え、ええ！？」

「すく……」

あ、ヤバイヤバイ何がヤバイって俺を好きって何それプリン好きの好きなのかイヤこのタイミングでそれは鬼畜過ぎるだろ jkじゃなくて。

あああ妹よお兄ちゃん
の胸元に顔を埋めちゃ
らめえええええええ
えええええええ！

な、何か喋らなくては！

「くあせdrftggyふじj1p!」

駄目だ！ 日本語にならぬ！

「ぐす……うぐ……むむむ」

「と、とととと兎に角！？」 離れて頂けないで、しよ、しょうか！？」

うわやべえ
声が上ずる。

この、このミッシェンは彼女いない歴〃年齢をひたすらに守り抜いてきた俺にはハードルが高すぎる。

「……や！」

「ぬぐ！」

一度涙目の上目遣いで俺を睨み付けた撫子は余計がつしりと抱きつ……ああそうです認めよう俺は今義妹に抱き付かれています！
ややややめやめ頭をグリグリ擦りつけないで匂いを嗅がないで満足そうに息吐かないで……！

「い、妹よ……兄のたつてのお願いだよ離してお・く・れ！ あ、兄は行かねばならぬのだ！」

「やー！ どうせ部屋から出れないもの！」

べつとりと糊の如く張り付いた妹が離れてくれない。

仮に誰かに知られたら、ぺっと唾を吐かれて親指を地面に向けられること必至の事態である。

「行かせて下され！ 行かせて下されー！」

「行かせませぬ！ 行かせませぬー！」

後から思い返すと顔を押さえて床を転げまわり恥ずかしさが恥死レベルに達するであろう遣り取りを交わす。

ドタバタ暴れていると、不意に涙目のままの撫子が片腕だけ離して振りかぶった。

助かった！

とにかくまずは離れないところ、色々何ていうかこう、ああんメーデー！ 俺の体がサンバースト！

「ようーしそのまま落ち着いてまずはお兄ちゃんから手をぶふおー
ー！ー！」

「わふ！」

俺は兎にも角にも痛みとか未曾有の大混乱とかから抜け出すために腕に力を込めた。

少々乱暴ながらも両手を使えるように抱きしめられた状態から脱出し、逆に抱えるように拘束。

胸元に顔を突っ込んで小動物じみた悲鳴を上げる撫子をぎゅうと押さえつける。

よしこれでパンチから逃げだせた！

「むう、むぐ……な、何するんですの！？」

⋮

「……あれ！？！」

打ったのか、小さな鼻の頭を赤く染めた撫子が顔を上げる。何故か小さく萎んでいく語尾に首を傾げ、俺は気付いてしまった。

……逃げてない。逃げてないぞコレ！　むしろアレだ、何だか俺の上に乗っかって足を絡ませた撫子を俺が全力で抱きしめゲフンゲフン！

「ふ、ファンの方々ごんばはいー！」

あ、あ、鼻血出そう。

ふにゆふにゆと力が抜けて茹でダコそっくりの物まね芸を披露する撫子を慎重に隣にキヤツチアンドリリース、自分は反対側にゴロ
ンと半回転。

うつ伏せになつて般若心經を必死に唱える。妹は貧乳。妹は貧乳。妹は貧乳。妹は貧乳。じゃなくて。

「觀自在菩薩行深般若波羅蜜多時、照見五蘊皆空、度一切苦厄。舍利子。色不異空、空不異色、色即是空、空即是色。受・想・行・識亦……」

高校の時、校則違反で反省文十枚書けと言われた時に死ぬほど細かい字で般若心経を写経しまくったので未だ頭に残っている。

約二百六十字が延々とリピートされる反省文。啞然とした生活指導の表情が痛快だった。そしてそれは武勇伝になっているらしい。

「Be cool、もちつけ、いや餅をついてどうすんだ俺。Be cool……ふう」

よしよし良いぞ、良いぞ良いぞその調子！ このまま冷静な思考を取り戻すんだ。

「……うむ」

何かそんな感じ。

冷静になると、今俺がどれだけキモかったかとかちゃんと答えるよとか、色々なことに気付いてしまう。

恥死だ。

「いやああああああん」

とりあえず両掌で顔を抑え、ごろごろと床を転がり回ることにする。

ばたこんばたこん足を振り体を捻りのたうち回っていると。

「……な、何やってるんですの！」

「ぐふっ」

互いに寝転んだまま、げしりと蹴りつけられて俺の身悶えターンが強制終了。それでも体が離れたおかげで大分冷静になれているはずだ。

「……で？ どうするんですの」

ぷい！ と音が出そうな位の勢いで顔を背けた撫子がぼそりと呟く。

やっぱりアレは本人も恥ずかしかったのか。

頬に朱を刷いたまま、それでもその黒曜石の瞳に抑えきれない揺らぎを見てしまった俺は。

「行く」

「……そう、ですの」

脳裏にチラつく暑苦しい馬鹿笑顔を思い起こしてしまった。

それ故か、すんと気持ちが悪く落ちて着いてしまう。

「多分もしかしたら万が一いやいや億が一の確率ではあるものの、俺はレティシアのことが好きなのかも知れん。あの筋肉娘が死ぬとか訳わかんねえし。でも正直、いきなし告白されて気が動転した。撫子はやわっこくて良い匂いがしてドキドキもした。でもまだお前は妹で、だけど大切なヒトでもある」

我ながら酷い奴だ。

「……酷い人。いつそ、奇麗に振ってくださる方がよろしいのに」

苦笑する。その通りだと思う。

「はつきりしないのは、アレだ。まだ俺自身良く分ってないからだ。行く決心はついたけど、じゃあレティシアが好き好き大好き愛してるーで助けに行きたいのかって言うと、何だか違うような気もする。撫子の姿にグラついたしな」

「グラついたんですの？」

「……まあ。威力が高かったからな」

手について身を起こす。

落ち着いてはいるが、頭の中にはぐるぐると色んな理由が巡っている。

「色々、色々理由はあるけど悩んでたって仕方無いし。やらなくて後悔するのは分ってるんだから、とりあえずやってから考えることにした」

大丈夫だ。何せアレだ、スーパーマッスルらしいし。

何かをやる時は第一動機、原初の衝動が重要なのだ。原動力は大切だ。

妹を泣かせたくないから？

レティシアが大切だから？

違う、いや違わなくもないがそれだけじゃ何か青臭くてこっ恥ずかしい。そういう感じの青春夢ノートな理由は、若い世代に任せたい。

ただ何となく、泣き寝入りは気に入らない。
そう、これでいいのだ。これがいい。

俺は俺の周りを含めて適当に馬鹿やって生きて行きたいのだ。こんな訳の分からんイベントで俺の日常をぶち壊されるなんて了承出来よう筈もない。

レティシアが居ないと妹が泣く。俺も何かしつくり来ない。何より何かあの仮面野郎は気に食わん。

OKこれだ。

決めてしまうと、悩んでいたのが馬鹿らしくなった。思わず笑みがこみ上げてくる。

簡単だ。シンプルなのは良いことだ。

「……無理は」

「ノンノン、無理は男の特権なのだ、妹よ。賢いやり方？ 何それ美味しいの？ 大体誘拐だの脅迫だの、人を馬鹿にしたやり口が気に入らん。勝手に誘拐されたレティシアもけしからん。是非とも連れ帰って説教かまして奴の嫌いなピーマン祭りを開催しようと思う」

「それは何か違う気が……」

確かに。一理ある。肩をすくめてみせた。

「ま、大丈夫じゃね？ 何か良くわからんけど、俺ってスーパーマッスルらしいし。レティシア引きずって案外平気な顔で帰ってくるって」

安い気休めだが、こう言えばきつと撫子はこちらの意を汲んで笑

つてくれるはず。

俺の知っている妹ならば、きっと。

果たして、撫子にはっこりと微笑み返して来た。その瞳に強く光が灯っている。いつもの澄ました強気顔だ。

一先ず胸を撫で下ろす。胸の内には、等分の謝罪の念も渦巻いている。

「ふう、言いたいことはありますけど、今は勘弁しておいて差し上げますわ……でもお兄さま？」

「んん？ ナンだいマイシスター」

すす、と撫子がこちらに寄って来る。そつと肩に手を掛けられた。

「それと告白の返事を濁すのでは、乙女的にはまた違うお話ですわ……！」

「ふお……！」

がっちりと握られた両肩が音を立てているように痛い。握力何キ口何だろっ、とか現実逃避を試みる。

だが目の前で、イイ感じに怒り笑いしている撫子の表情は変わらない。満面の笑みで目だけ笑ってないって何だそれ。

ホラー！

「お・に・い・さ・ま……？」

「ひいい食べないでー！」

目を瞑りばつと腕を上げて顔を庇う。
だが、予想に反してばす、と軽い感触。

「……？」

「……せめてこれ位は受け止めやがれですわ」

「うむ？」

痛くない。そつと目を開けて見下ろすと、撫子の頭の天辺が目に入る。胸元にしな垂れかかって顔を擦り付けるのだ。

「うにゅーん。ごろごろ」

「ね、猫の鳴きマネとはまた器用な」

まああれだ。良く考えたら役得って言うかそうじゃなくて抱き付かれてるよさつきよりは冷静クールに行くんだ。ダンボールはどこだ。

駄目だこりゃー。

なので、半錯乱状態である俺の耳がそれを聞き付けたのは全く持つて偶然である。

それは僅かに床が軋む音。

何か気を逸らす物が欲しくて顔をそちらへ向けたのは、半ば反射だった。

顔が引き攣る。恐怖と驚きでびく！と大きく体が震える。

「うふふ……！　うふふふ青い果実……！」

「うひ……！？」

怖！ 久美子が台所に身を潜めるように隠れ、目だけこちらを向けているのだ。ぎょろりぎょろりと素早く動くお目目がグロテスク。じんわりと台所の暗がりには紛れるその姿は正に是化生そのもの。独身過ぎて世を憐んでついでに自棄食いして独身死した独身幽霊だ。濡れたままの亜麻色の髪から水滴が滴り落ちている。拭け。

「ホホホホ気にしなくて良いのよ続けて！ さあ続けてご兩人！ 私のことは気にしないで好きなだけ！ オホホ……オホ……そう、独身年増なんて放って置いて2人でいちゃつくが良いわ……！」

「な、撫子！ あれ！ あれ！ あんなの兄ちゃん見たことないぞ！？」

「んにゃー……つてきやああああああああ！？」

バシバシと撫子の肩を叩いて久美子を指差す。甘えまくりモード（俺命名）全開だった撫子が久美子に気付き一瞬で飛び離れる。同時に何故か、撫子は腕を曲げて肘を引き、腰の捻りを加えながら固めた握りこぶしを撃ち出した。

真赤に染まった黒髪美少女の腕は華麗な円弧を描いて空気を切り裂き

「見ないでええええええ！！」

「あ、つぱかあああああああああ！？」

俺の顎を撃ち抜く奇跡的威力の神速アップercutとして撃ち込まれた。

何という理不尽。

首が引っこ抜けそんな衝撃に引きずられて背後に吹っ飛ぶ。ベッドの端に強か後頭部を強打して、俺は声にならない悲鳴を上げた。今の俺の状態を数式で表すところなるだろうきつと。

脳が揺れる＋痛い＝瀕死。

「お、おう……！ あおう……！」

「オーッホホホホホホ！ カップルなんて許さないわ私個人的に！ オホホ！ 愉快！ 愉快だわオーホホホホ！」

アシカかオットセイそっくりの奇声を上げて痙攣する俺。

台所に潜みつつギラギラした瞳で高笑いを上げる久美子。

頬を掌で押さえてクネクネと身を捻っている撫子。

そう言えば延々ベランダで放置プレイ中のモヒカンオヤジ。

狭苦しい空間、たったの六畳一間なのに、余りにもカオス極まらない状況である。

脳が揺さぶられているので見える世界も揺れている。気持ち悪い。もう何かどうにでもなれと俺は目を閉じた。

どっとはらい。

第十六話 それぞれの朝。

「ああ……何て事だ、もう手遅れなのか……」

俺は窓の前で呆然と膝をつき頂垂れた。

爽やかな朝。

小鳥達が軽やかに囀り、降り注ぐ陽光は優しく街路樹の葉を包みこむ。

吹き抜ける風も快く、僅かに汗で湿る肌を撫でて去って行く。

清々しい朝だ。

「あ、あはあん！ 何だこの感じ……新しい、新しいぞ……これは……これは快感！？ 気・持・ち・イ・イ……ッ！」

しかし視線の先には、爽やかな朝ぶち壊しの禍々しい物体が転がっていた。

猫の額の如き小さなベランダの端で、頬をモヒカンと同じ色に染め汗と涙と涎と鼻水を垂らしながら身悶える中年の姿。

晒した肌に汗の珠が煌めき、恍惚とした表情は満面の笑みに彩られている。

素肌の上に羽織っていた仕立ての良いスーツはぐるぐると丸めて置かれ。

その上で三点倒立する一人の変態の姿。

「この首にかかる負荷……軋む肉体……一晩の、放置プレイ……ッッ！！ おじ、オジサンはもう、もうもうエクスタシー！？」

逝け。

逝ってくれあの世に。

かなり関わりたくない境地に達しているモヒカンだが、自分家のベランダで変態が恍惚と三転倒立しているのはご近所さんに見られたくない。

破滅だ。社会的に。

それにほんの微量ではあるが好奇心もある。

どれだけエキセントリックな思考プロセスを経たら爽やかな朝のベランダで悶え三転倒立する気になるんだろうか。

発想の斜め上さが世界新だ。

「……何してんの？」

嫌々な感じがただ漏れになってしまうのも仕方ないと思う。

「ああ！ 少年！ おはようっ！ 良い朝だね！？」

お前さえ居なかったらな。

「聞いておくれよ！ 僕はねえ、昨晚放置されていて、最初はお腹も減ってそれはそれは寂しかったんだ。だけど気付いたんだよ！ これ、気持ちいいよね！？」

さやか。

……ああ分かる。どんどん半眼になって行くのが自分でも分かる。

「そう悟った僕はもうエレクトだよ。一晩中放置される快感に酔い

していたんだけど、朝になって何か物足りなくて。だから三転倒立などやってみただね！」

だからの使い方おかしいだろお前。

どんだけ変態としてのレベル高いんですか。

「お兄さまー、朝ごは……」

ひょこ、と頭を突き出してきた撫子が硬直する。

その表情を横目で見て俺はすぐに目を逸らした。そつと後ずさる。テーブルの上には、香ばしく焼き目のついたトーストとマーガリン、苺のジャムと冷たい牛乳が乗っている。
平和だ。

「……」

「おやおはようマドモアゼル！ ああ、そんな蔑む目で見ないやもつと見て！ ヘイカモンイエー！」

「……」

「あはは、ほんのお茶目なジョークさ、いっつあ変態ジョーク。そんな怖い顔したら綺麗なお顔が台つ……」

「うふふ、うふふ」

血とか肉とか詰まったモノを殴打する音が聞こえる。俺は素直に耳を塞いだ。撫子の目、あれは殺す目だった本気と書いてマジで。レティシアの時はそれでもなかったが、男の変態にはかなり厳しいな。

まあ意味不明の体勢で身悶えて、しかも撫子を挑発する奴だから
自業自得だ。

一晚忘れてたの謝ろうと思ったけど、もういいや。

九時まで残す所あと二時間、もっと緊張してても可笑しくない状況
での一幕である。

出立の朝

「……朝」

窓からうつすらと差し込む光で目が覚めた。

ぼんやりと、半ば眠ったままの頭で視線を漂わせる。

薄暗い見慣れた部屋。お気に入り壁掛け時計。

天井の蛍光灯からつーつと漆喰の壁に視線を落としていく。ぎつしり本が詰まった本棚に、どこかの外国の風景だとか言うポスター。そして

「……あれ、起きる世界間違えたかな」

目を瞬かせる。念入りに手の甲で目を擦り、一度深呼吸。再度目を開け頭をぶんぶこ振り、じつくりと目を眇める。

「ふご……ふごごごごごご……！！」

豚！

いや違う人？ 人、だよな……？

こんもりと小山の如く盛り上がったタオルケット。そこから豚の如き怪音が轟いてくる。多分久美子だと思うが確信が持てない。人が寝ているにしてはタオルケットの盛り上がり丸過ぎるのだ。

「えー……と」

首を捻り、むむむと眉根を寄せる。

「……」

僅かに覗くのは足の裏。ということはあるは尻？ということはある……一々輪郭を辿って行ってようやくそれが何なのか理解する。それはまるで。

「土下座？」

いや、女性にあるまじき音を使用した躰を搔いているので、別に

何かに謝っている訳ではない、と思う。ただ寝てるだけだ。

ただ体勢が不自然である。言語化しにくいが、とにかく土下座に近い体勢だ。

深々と土下座するように足を折りたたみ尻を突き出し、ぺったりと上体を倒して額を床に付けてバランスを取っているのだ。多分。そうとしか見えない。何であんな体勢で寝てるんだろう。不思議な生命体過ぎる。

もしかしてあれは、デブと独身のコラボレートを脱出する為の独自で特殊なカロリー消費の儀式だったりするのだろうか。ないわ。

「……すげー確かめてみたい」

朝からアレだが、気になる。人間ってあんな体勢で寝れるのか。写真、写真。

体を投げ出していたベッドから身を起こそうと、俺は片腕をつい……ん？

視線を反対側へ。

「ひよ………！」

そこで悲鳴を飲み込んだ俺を誰か褒めて欲しい。

悲鳴が『ひよ』とか、ぬらりひょんか俺は。ぬらりひょんがどんな悲鳴を上げるのかは聞いたことがないけど。

「む、むおお……ど、どどどど」

小声で焦りを表現する。がっしと捕獲されている腕を動かさない様、冷や汗を流しながらぶるぶると震えた。

そう今俺がすべきは！

「柔らかいぞなもし……！」

違う俺の馬鹿！

くそうテンプレ攻撃かでも無理です誰か助け、

「う、うん……」

……なくても、いいかなあ。

ふは、ヘタレと罵るが良い。常識的に考えて、もうちょっとこのままで居たい。

詰まる所、今俺の左腕は撫子によってはっしと抱きかかえられているのだ。

離さぬ！ 離しませぬ！ とばかりに巻き付いた両腕。加えて微妙にレッドゾーンに触れそうな左手の先にはしっかりと太ももが絡み付いている。

うにやうにやと寝言を呟きながら押し出されるのは芳しい吐息。擦りつけられる頬と言わず体と言わず、とにかくやわっこい。

すぐ近くにある頭からはシャンプーの良い匂いがして、僅かに覗く寝乱れた胸元からはまた、女の子特有の甘い香りが

「ポーーーーーウ……！」

小声で、叫ぶぜ……！

うわああどうしようどうしよう何でこうなってんだろ！ 起きたらやっぱり殴られるんだろうなコレ！

昨夜の記憶を手繰り寄せる。公正にして公平な譲り合い精神を發揮しあった末、ベッドは撫子が、俺と独身は床で寝ることになったはず。

寝る前は普通に床に転がったし、というかそもそもベッドに入った記憶など無い。

「んー……お兄さまぁ」

「ひよわ……!？」

偶然だろうが、ふっと耳に息を吹きかけられる。何かイケナイ感じの電流が脊椎を奔り抜け、図らずも逆エビに反り返ってしまう。そんなことをすれば当然。

「んん。……?」

「……」

ぱち、と目を開いた撫子と目が合う。思わず息を呑んだ。薄ぼんやりと霞みがかった漆黒の瞳は常よりも色が深く、吸い込まれてしまいそうな不思議な気分を思い起こさせる。

陽光にけぶる睫毛は長く、整った眉は色気と無邪気なあどけなさを感じさせる絶妙な角度で歪められ。

良い香りのする濡れ羽色の髪の毛が一筋、頬を伝って口許に滑り落ちている。

唇が渴いているのか、僅かに開かれた唇からそっとピンクの舌先がちろちろと覗き、妖艶な仕草で唇をなぞって行く。

「……いやこれは」

我が妹ながら、エロい。

「?」

まだ覚醒しないのか。とろんと夢の世界を揺蕩っているような風情の撫子は、何を考えたのかもそりと動く。

腕を抱いていた両手を更に伸ばし、きつく足を絡め俺を抱きしめ、お気に入りの抱き枕かぬいぐるみを抱きしめているように数度頬ずりすると、むふー、と幸せそうな笑顔で息を吐いた。

何だこの可愛い生き物。

猛烈に頭を撫でくり撫でくりしてやりたくなる。

「おーい」

起こすのは可哀想な気もするが、時計はもう朝食の時間を指している。ぐーぐー腹の音を垂れ流すことも出来ず、俺は小声で撫子を揺さぶった。

「うー」

呻く妹。

「姉御、朝ですぜー」

揺する俺。

「ホホホホホホホホホ」

笑う久美子。
って。

「……いつ起きたんですかアンタ」

ジト目を向けた。起きた癖に妖怪球形タオルケット状態の独身のそり、とこちらを向く。

「うつ……！」

足りない。

化粧とか化生とか。世間様に顔向け出来ない凶悪な寝起き顔に心持ち仰け反る。

真丸く赤く染まった額にシヨボシヨボと半開きの瞼、頬にはべつとりと涎の跡。そして皺。

顔だけタオルケットから出し、奇怪な笑い声を上げながらもぞもぞと震えるその姿は発禁物のグロテスク。

きつと前世はかたつむりか何かだったに違いない。

だが今の顔はほぼトドだ。これが三十路効果なのかと空恐ろしいものを感じる。

老いとは恐ろしい。

「ホホホ、お・は・よ・う……！」

「そ、その顔で凄まないで……！」

「凄んでないわよこれがデフォよ」

出来るだけ距離を取りたい。ぐつと詰める様に壁際に寄ると、見事に壁と俺の間でプレスされた撫子が苦しげに唸る。

「うーー！」

ジタバタ！ ジタバタ！ 一蹴りで布団を跳ねのけ、動く度に白

いおみ足がペラペラ晒されるので心臓に悪い。

「うー……う？ 朝？」

「そうです朝です。……落ち着いて聞いてね？ はい我が家にモンスターが現れましたあ！ あれ見てあれ！」

むくりと起き上がった撫子は、猫のようにぐぐつと背筋を伸ばしてほわりと欠伸を零した。

「むー」と唸りながらも素直に俺が指さす方向に目を向けると、

「ひゃわ！？」

途端に飛び起きた。

何という目覚まし効果なのでしょう。

バツ、ババツと凄い勢い良く久美子（仮）の御姿を二度見し、金魚の様に口をぱくぱくさせる。

すらりと伸びた指先がビシ！ と久美子（怪）の方を指し示している。

「あ、あれ、あれ、あああ、あれ何ですのっ！？」

心の底からの叫びである。俺も叫びたい。むしろ写真撮ってテレビの特集とかに投稿したい。絶対採用される衝撃写真だ。

しかし人間というのは自分よりテンパっている人を見ると案外落ち着くようで、俺はと言うと慌ててばたばた動く撫子をニヤニヤと眺めている。

ちよつと遊んでみよう。

「おはようございます」

ペコリ、と頭を下げ、朝の挨拶を送ると、

「あえ、あ、おは、お早う御座いますですわ」

律儀にペコリ、と頭を下げ返された。ちよつと面白い。

「時に妹よ」

「何ですの！？ 今はそんなことよりあの、く、くく久美子先生らしき人に太陽の恵みを与えないと！」

「いやお肌が長年の戦いでボロボロだから、直射日光を素肌に当てたらオーバーキルだよ多分。撫子さんは今、があつちり俺を抱きしめている訳ですけど、その辺はどんな感じ？」

「オーバーキル……！ 撫子止めさしちゃう所でしたの！？ ああ、先生若くないか、ら……ひあああ！！」

「甘ーいっ！」

マトリックス避け！

唸りを上げて顎に振るわれたアッパーカットを、体を後ろに逸らすことで回避。

やられるばかりではないのだよ、やられるばかりでは。

「な、何で撫子の寝てるベッドに居るんですの！」

「知らんがな」

本当に知らないのだ。まあまあ、と掌を見せて撫子を宥める。

「うふふふ」

「おわ」

のそ！ とベッドの縁に手をかけて顔を出した久美子が不気味笑いを上げる。先ほどよりは目が覚めているのか、幾分瞼は開いている。

だがグロい。被ったタオルケットをわさわさと揺らしながら「うふふ、うふ」と笑う姿は子供なら確実に泣くであろうトラウマパワ！。

反射的に撫子と手を取り合って壁際に後ずさった。

「ちょ、あ、あっち行って下さいマジで！ えんがちょ！ えんがちょー！」

「な、ななななあ」

「ぐふ、ぐふふふふふ！ 太郎をベッドに運んだのは私なのよねえ……」

布団を蹴飛ばして逃げようとする俺と撫子に向かってじわじわと迫ってくる三十路前妖怪久美子。

「わ、分かりましたからち、近づかないで……！」

ひいひい！ と悲鳴を飲み込んで歎願すると、満足したのか妖怪はずりずりとタオルケットを引きずりながら遠のいて行く。

そのまま洗面所の方へと消えていくのを見て、兄妹揃って肩を落

とした。

「はあ」

深いため息。事態に付いて行けていないらしい撫子の方に向き直り、まだ手を握っていたのに気付いてそうっと離す。

「ええと、これで何故俺がベッドで寝てたかは解明された訳ですが……もうどうでも良いからご飯にしようぜ。忘れたい」

化粧でコーティングされていない寝起きの久美子はモンスターだ。とりあえず久美子が無事元の顔で洗面所から出てくるのを待って、撫子と交替で朝の雑事を終える。

顔を洗って歯も磨いて髭も剃って、心機一転朝のトラウマ画像を心的ゴミ箱に叩き込んだ俺は、さっぱりした顔を撫でながら部屋に戻った。

手際よく撫子が朝食の用意をしているのをちらと見たが、どうも手伝えることはなさそうだ。

コーヒートを啜りながらぼけっとテレビを見ている久美子に視線を合わせる。

「最近の若手男性アイドルはぱつとしないわね……インパクトがないのよ私みたいに」

自覚はしてるのか。

ももごと世間に向かって文句を呟いている久美子の向かいに腰を下ろす。

テレビの画面の中では、下らないゴシップから凶悪な刑事事件、微笑ましい子供達のボランティア活動まで無差別に並べて報道されている。

この国の国民性を反映するような適当さを發揮して原稿を噛み噛み呼んでいるニョースキャスターの顔に目をやって、すぐに視線を外した。

今の所暇大学生をやっている俺には、ニョースは大した価値を見いだせない。

それより。

顎に手を当てて、俺はむーと首を捻る。その拍子にぱきつと首の骨が鳴った。

「何か忘れてる様な気がするんだよなあ」

反対側に首を傾ける。更に二、三度それを繰り返して、テレビ画面を眺めている久美子に声を掛けた。

「久美子先生、何か忘れてる気がしません？」

「ん？」

首だけを捻ってこちらを向いた久美子は、数瞬天井の方を向いて考え込んだ。

両手で抱え込むように持ったコーヒーを一口啜り、眉根を寄せる。

「んん……そう言われてみると、何か忘れてるような気がするわねえ」

「何かあんまり重要なことじゃないと思うんですけど、魚の小骨みたいにつまみ掛かって」

「何だったかしら。あー、確か下らないことだったんだけど……」

「そうそう、下らないことで……あーここん所まで出かかってるんだけどなー」

ここなんだよここ、と首の辺りを指で指しながら頭を掻く。
目の前、腕を組んで眉根を寄せ、難しい顔でうんうん唸っている
久美子と二人で考え込んでいると。

「お兄さま、そろそろご飯出来ますからテーブルの上を片づけて…
…何やってるんですの？」

台所から撫子が顔を出す。

いつの間にか我が家に常備するようになったひよこのエプロンで濡れた手を拭っている。

流すままに下ろされた髪の毛が動きに合わせてさらりと靡いた。

「いや、何か大したことじゃないんだけど、忘れてる様な気がして」

「何か心当たりあるかしら？」

久美子と俺。2人して撫子にも話題を振った。

はぁ、とやる気なさげに息を吐いた撫子はやれやれと頬に手を当てた。

「そんなことは如何でも良いですの。あ、そうだ、窓開けて換気しておいて下さいまし」

「はいはい」

「返事は一回でよろしいですわ！」

台所に帰りながら、鋭く注意を飛ばす撫子に見えないよう肩を竦める。

「はあい」

呟いて、窓を開けようと立ち上がった。
ん？

「窓……」

「どうしたのよ」

「あ！ 思い出した！」

両掌を合わせてパチンと音を立てる。それだけじゃ物足りない気がしたので右手で二回指を鳴らした。ぱちんぱちん。
久美子に向き直って窓、否ベランダの方を指差す。

「窓で思い出したんだけど、そういえば外に一人放置してたよね！？」

「あ」

思い出した思い出した！ と立ち上がった久美子とハイタッチを交わし、満足気に息を吐く。

すっかり、たった一人ベランダに放置していた変態のことを忘れていた。

悪いことをしたなあ、と疑問を解消出来た爽快感を味わいながらカーテンを引く。

淡く目を射る陽射しに一瞬目を眇め、鍵を開けてガタガタと建て

つけの悪い窓の取っ手をスライドさせる。

「……うお」

そして、冒頭の遣り取りに戻る訳だ。

「……生きてる？」

俺はやや遠慮がちに声を掛けた。今は朝食の席である。

「……まあ、なんほは」

何とか大丈夫な訳か。

ボッコボコに青痣やタンコブで膨らみ、素敵に鼻血を一筋トツピングした半死顔でもそもとトーストを齧る変態の姿。

手に持つそのトーストは、見事なまでに黒い。

端的に言えば完食すると洩れなく癌になれそうなレベルで焦げているのだ。全体的に。

「……」

言うまでもなく、変態にマジギレした撫子様の所行である。

あんまり揶揄わないようにしよう。

俺は一つ大人になった。

「全く……もう八時過ぎですわ。どなたかが変態的奇行を繰り広げていなければ、もっと落ちて着いて朝ご飯食べれましたのに」

触れば切れそうな鋭さの一睨みが変態を貫く。

「ふいまへん」と小声で呟くモヒカンの姿に哀れを覚えた。

過去の行いに懲りないタイプの奴でも、流石に一時間程撫子に肉
体言語でマジ説教されれば改心するらしい。

まあ、傷が癒えたら同じことしそつだが。何となく、そついう自
爆体質な気がする。

俺には関係ないけどな。

「ごちそうさま」

唇に付いたパン屑を払い、食器を持つて立ち上がる。準備は撫子
がしてくれたので、片付けは俺がするのだ。甘えてばかりは良くな
い。

最初に食べ終わった俺に続くように、皆次々と完食して食器を持
つてきた。偉い。

蛇口を捻り水を出す。泡立てたスポンジでさつと汚れを落とし、
水流の力で泡を洗い流す。軽く水を切つて食器を仕舞えばそれで終
わりだ。

対して汚れものもなかったので、片付けなど手間もかからずすぐ
に終わる。

濡れた手を拭つて、一人大きく伸びをした。

ちら、と部屋の方を見やる。

三人はそれぞれの方法で寛いでいる様に見えた。しかしどこことな
く。ピリピリしている。

変態は撫子の一挙動に怯えているのだろう。ゆらゆらと落ち着か
なげに左右に揺れている。正座で。

撫子と久美子は腰を下し、並んでテレビ画面の方を眺めている。しかし撫子はテーブルを細かく指先でタップしているし、久美子は難しい顔で黙り込んでいる。

流石に、落ち着けと言うのは無理かあ。

俺は薬缶に水を入れ、火にかけながらそつと苦笑した。

実は俺も緊張しているのだ。

幾ら落ち着いているように見せ掛けることが出来ても、知り合いが誘拐されているこの状況。

しかも、今から幾ばくか後にはもう一人の知り合い、撫子にとっては兄である俺も居なくなるのだ。

どこかしら不安を抱いているのだろう。

だから久美子は俺を、撫子が寝ているベッドに移動させたのだ。きつと。

ただ単に面白がつてやった訳ではない。多分。……多分。

「……でも面白そうだからって理由でやりそうだよな」

小さく呟いた言葉は心持ち気弱で、それがちよつと面白くて笑みを零す。

薬缶に掛けた水が沸騰した音で我に返り、人数分のコーヒーを用意する為に手を動かした。

これで多少なりとも、気を落ち着けてくれたら良いのだが。

「三丈太郎。リーダーのお呼出しに従う気はあるか」

午前九時ジャスト。外から響いた車のクラクションに合わせて外に出た俺を迎えたのは、無愛想な男の声である。

「どう思っ？」

威圧的な黒スーツ。サングラスで顔を隠し、どっしりと腹に響く重低音で言葉を話す大柄な男に俺は肩を竦めて見せた。

我ながら挑発的な行動だが、ふん、と鼻を鳴らした男は無言のまま車を親指で指し示す。乗れ、ということらしい。

如何にもな黒の高級車に乗り込みながらふつと振り返る。

「ちよつと行つて筋肉姫連れ帰つて来るわー」

軽く告げ、笑う。

唇を噛み苦しげに眉を下げた撫子を中央に、久美子、変態もそこに立っていた。いや変態はどうでもいい。

難しい顔で腕を組んでいる久美子は、

「アンタ、ちゃんと帰つて来なさいよ！」

言い、撫子の背を軽く叩く。

一步踏鞆を踏むようにこちらに押し出された彼女は、何か言おうとして口を嚙み、もう一度口を開く。

「大丈夫だから」

珍しいことだが、何となく言いたいことが読み取れてしまい、先に声を挟み込んだ。はっと息を飲んだ撫子は、潤んだ瞳を伏せて小

さく呟く。

「……行つてらっしゃいませ」

「行つてきます」

短く告げて、ドアを閉める。もう一度視線を振ると、変態が腫れ上がった顔を精一杯歪ませて大きくサムズアップしていた。

何考えてるんだろう、と思いつつも笑顔が零れる。なので小さく、親指を下にして返してやった。

ええ！？　と目を見開いた変態を無視して車が滑るように走りだす。

俺って超優しい。

走り出すとすぐに三人の姿は見えなくなる。努めてゆったりと息をしながら、俺は前に目を向けた。

何があるか分からない。だが考えることは簡単だ。

乗り込んでレティシアを連れ出して無事帰宅。ついでにあのム力つく仮面男を殴り飛ばせたら言うことなし。

「うわあ超シリアスって感じー」

昂ぶってくる怒りを鎮める為に、敢えてふざけた調子で呟いた。

大男の淀みない運転によって、見知った景色が次々に後ろへと流れて行く。

にっこりと不敵に笑う俺の顔が、ほんの一瞬窓ガラスに写って消

え
た。

第十七話 マッシュ・トライアル。

「何か、まるきり実験動物だな。笑えねえ」

たった一人、他に誰の姿も見えない部屋の中で溜息を吐いた。

目の前には巨大な金属製の扉。ご丁寧にも、デカデカとペンキで

『1t』と書かれている。

試しに軽く押してみても、扉は微動だにしない。

室内を隈なく見回しても、ボタンも役に立ちそうな器具もない。

ただし、1tと書かれたその下、丁度目線が合う位置に切り抜いた画用紙が一枚貼つてある。

墨汁で書かれているのはただ一言。『押せ』。妙に達筆なのがムカつく。

「いやあ、分かりやすい『試練』だなあ」

ぐるぐると肩を回す。手首を振り、首を鳴らし、ついでに足首も回す。

目を閉じる。

大きく深呼吸して肺一杯に空気を吸い込み、出来るだけ細く長く息を吐いた。

それに合わせてすうっと、頭の中心が冷えて行く感覚。

閉じていた目を、見開く。

「一丁、やりますかあ！」

乗り込んだ敵の本拠地、最初の障害を前にしての一幕である。

マッシブ・トライアル

「降りろ」

目隠しするでもヘッドフォンをするでもなく、走り続けること三十分。

高級そうな黒の乗用車が停まったのは、とある建物の前である。ここでこねても何の意味もない。

しかし素直に車を降りてすぐ、俺は短く言った切りむつつりと押し黙ってこちらを注視する大男に向き直った。

「いやいや、まさかここが目的地？」

目の前にある建物を指差し尋ねる。余りの事態に頬がひくつく。

「そうだ」

頷く大男。

「……嘘ですよネ？」

やれやれと首を振りながら再度問い返す。

「本当だ」

またもや短く言い切る大男。

マジ？ と視線で問うと、ふいつと視線を逸らされる。その額に汗が浮かんでいるのに気付いた。

どうやら大男もおかしいとは思っているようだ。

俺は建物を見、男を見、建物を見、そして男を見て思いつきり息を吸う。叫んだ。

「どう見ても一軒家です有難うございました！ 普通もつとこつ、大豪邸とか怪しげな研究所とか廃屋とかじゃないのかよ！？」

かよ……かよ……かよ……。人気の無い住宅街に、俺の叫び声が響き渡る。

そう、目の前にあるのはどう見ても普通の一軒家であった。

落ち着いた濃い灰色の屋根にクリーム色の壁。車が二つ入る大き

さの車庫と小さな門扉、これまた僅かに見える小さな庭。

平屋では無く二階建て、微妙に造りに無個性さを感じるような力タロゲ一軒家。

俺が住んでいる所とはまた別の、極普通のお家が立ち並ぶ住宅街の中に見事に溶け込んでいる。

曲がりなりにも、大立ち回りとか予想してドキドキしていた俺は今猛烈に恥ずかしい。

普通の一軒家に怪しいサングラスの大男と誘拐犯と高級車とか、あれか、ドッキリかこれ。激しくそぐわない。

もしかしてこういう如何にもな敵ついおっさん達はパートタイムで雇えたりするのか。

「あまり大きな声を出すな。折角良くして下さっているお隣の中谷さんに怪しまれる」

「ようしまず鏡見る鏡。……っていかご近所付き合い重視してんじゃねえよ誘拐犯の癖に！ フロ ヤイムかお前ら！」

ケツ！ 思わず毒づいた。いやでも誘拐犯だし、レティシアが捕まってるのが問題なんだからこれでも脅威か。

そう思い直し、何の変哲もない一軒家を仰ぎ見る。

「ねーよ……」

無理だ。

この落ちに落ちた俺のテンションはどうしてくれるのだ。郵便受けに朝刊挟まってるぞ。ちゃんと朝取れよ。

「言つな……」

大男の声がどことなく疲れている様に聞こえるのは気のせいだろうか。

「もう何ですかお前ら」

俺の口調が投げやりになるのも仕方ないと思う。

沈黙を保ったまま肩を竦めて見せた大男は、踵を返して門扉を潜る。

極普通に玄関前まで歩き、極普通に鍵を取り出し、極普通に解錠する。

今帰ったぞ、と一声掛けてから振り向いた。お父さんかお前。

「入れ。……安心しろ。ちゃんとアジトだ」

「……何か泣きそう」

何故敵にフォローを入れられないといけないのだろう。

土足のままでいい、と言う大男の声に従ってずかずかと家内に入り込んだ。

やはり極普通の家にしか見えない。

「付いて来い」

テンション低めで重々しく呟く男に従って、廊下を通りリビングらしき部屋に入る。

カーテンが閉め切られているせいで少し暗い。

身構える俺を余所にそのまま部屋を横切ってキッチンに入った。

こちらはそもそも明かりとりの窓がないらしく、室内灯の白い光が満ちている。

ここで何をするのだろう。なるべく油断しない様に大男の挙動を少し離れた所から眺める。

「ここだ」

もつと何か喋ってくれ。

大体六十センチ四方くらいだろうか。床下収納の取っ手を引き上げた大男が体を横にずらす。

本来なら収納箱が納まっている筈のスペースには、

「梯子……」

中は薄暗いが下の方にほんのりと白っぽい床が見える。大体十メートル位だろうか。それなりに深く、暗い闇が横たわっている。大男を見ると手振りで階段を示される。下りろということだろうか。

「これで素直に下りて、突き落とされたりしたらたまらんですけど」

「俺はこれからカレーの仕込みに入る。忙しい」

「昼飯の用意かよ……じっくりコトコト煮込む気ですか!」

「あ、娘がどうなってもいいのか」

「それは先に言うべきだろ! ……いや、先に言われても微妙……? いやいや、でも……くっ」

きいー！ 歯をむき出しにして叫び、背後に注意しながら薄暗がりに飛び込んだ。

カンカンカン、と小気味の良い音を立てながら梯子を下りて行く。幸いにも何の妨害もされることなく地下に辿り着いた。

まず感じるのは温度の低さ。

外は既に暑いのに対して、ここは驚くほど涼しい。冷房要らずである。

息を潜めて耳をそばだててみるが、特に誰かが居るような感じもしない。

「冷蔵庫の野菜室が開けにくいから閉めるぞ」

渋い声に頭上を仰ぎ見ると、音もなく入って来た床下収納の扉が閉じられているのが見えた。

もつと緊迫させてくれよ……咳き、改めて辺りを見回す。上から見た時は気付かなかったが、一方通行のようだ。

下り立ったすぐ後ろは壁になっており、反対側にまっすぐ通路が伸びている。

その先に、ぼんやりと揺らめく明かりが見えたので仕方無く歩き出す。きちんと舗装されているのか、床に足を取られるようなことはない。

「……さっさとレティシアを見つけないと」

暗がりの中に一人で居るとつい強がりの仮面が取れかかってしまう。

いくらここが悪の組織川崎支部っぽい家庭感爆発な拍子抜けさを見せつけていてもだ。

……そうだ、こうやって油断させる罠かもしれぬぞ！
気を引き締めなおしピシヤリと頬を叩く。

そうこうしている内に曲がり角に辿り着いた。見ればそこには一つランプが掛かっている。

視線を転じると、またも続く直線。その突き当りに同様の灯りの揺らめきを見て、迷わずそちらに足を進める。

一瞬ランプを持って行けないか考えたが、どうやらしつかりと壁に据え付けられているらしく簡単には外せそうもない。諦めて歩き出す。

暗がりの中に自分の足音だけが響く。こうやって如何にも違法臭い地下通路を作っているなんて、やっぱりそれなりに力はあるのか。二つ目の曲がり角に着いた。今度も曲がり角の先には直線の通路が続いている。しかし今度は突き当りが見えない。

その代わりの様に途中途中に幾つかのランプが設置されている。何となく壁に手を付きながら更に歩みを進める。

「それにしても広いなあ」

思わず呟いた。ひっそりと呟いた筈の言葉は、ほの暗く静かな地下道の中で意外にも良く反響する。慌てて口を噤んだ。

「……」

本当に広い。

先程から数えて既に四度は曲がり角を通過している。うんざりするような広さの地下通路である。

水道管とか一体どうなっているのだろうか。一本道なのが唯一の幸いなかもしれない。

「ん？」

さらに歩いて数分、

視界の先にソレが見えた。

今まで見てきた味気ない白の壁とは違う、金属特有の光沢でもって灯りを跳ね返すソレ。

自然と足早になり、息を切らさぬ程度の駆け足でドンドンと近づく。

「扉……」

ソレとは正に扉であった。周囲の白と対照的な黒い金属製の扉で、ノブがただ一つあるだけの何の装飾もないシンプルな扉。

念の為周囲に目を配るが、目の前の扉以外に先に進めそうな道は無い。

ごくりと唾を飲み込んでドアノブに手を掛けた。捻る。

鍵は掛かっていなかったようで、扉は軋むこともなくスムーズに動く。

「うお眩し……!!」

途端、目を射る光。

いつの間にか通路の薄明かりに慣れていた瞳に蛍光灯らしき強く明るい白色の光が突き刺さる。

腕で目を庇い、扉を開け放ったまま一歩後ずさる。まずい。今何かされたら対応も出来ない。

「ようこそ我が魔王城へ！ 当魔王城案内人は私、青鬼が務めさせて頂きます!!」

大音声が耳を射る。明かりに慣れた所で今度こそ部屋に押し入った。

声の主を探すため、部屋中に視線を配ろうとして

すぐ、目の前にそいつを発見する。

「痛い！」

そして叫んだ。次いで男の格好をズビッと指差す。

小学校の教室程の広さの部屋、壁面に設置された巨大スクリーンの中で黒コートに素肌、レーザーっぽい光沢のボトムを合わせたスキンヘッド。

手にはアルミホイルっぽい輝きで光を反射する、ダンボール技術を駆使して作られたであろう巨大な剣っぽい何か。

もう心の底から痛い。

邪気眼全開の痛いファッションである。

ビデオレターではシヨボイ赤鬼の面を被っていた男は今、何故か某有名な宇宙人のお面を被って青鬼と名乗っている。

余りの異空間ぶりにどこから突っ込めば良いやら分らなくなって、俺はもう以後基本スルーの方向で行くことにした。

「ヒャーハー！ いいか！ O R E 様はここ魔王城の魔王補佐！ でも魔王不在だから実質俺が魔王！ イエアフー！」

ズビ！ ズバ！ とエクスクラメーションマーク毎にキモイポーズをキメる宇宙人青鬼。もう長いので青鬼。

俺が黙っていることに気を良くしたのか、青鬼は突如流れ始めたBGMに合わせてパラパラを踊り始めた。

でも俺は喋らない。疲れるから。

「……」

「ヒー！ イヤッフウー！？ ……アッハアー！」

「……………」

「フオウ！ フオウ！ フオウ！ フオウ！ さあ皆も一緒にー！？」

「……………」

「フオウフオウフオ……………」

お、効いたか。ボディブロー様に精神に効いたか青鬼め。
顔に出さない様に、俺が内心ほくそ笑んで居ると、変態仮面は突然右腕を押さえ始めた。ガクリと膝をつく。

「ぐっ………… おさまれ………… おさまるんだ………… ここでお前を解放する訳には………… くそ、運命は俺を逃しはしないのか…………！」

突・っ・込・み・た・い…………！

怒りやら焦りやら色々爆発しそうな感情を噛み殺す為に奥歯に力が入る。

俺は今、ハリセンで人を殺せるかもしれない………… そんな感じである。

そんなアホらしい葛藤を心中で繰り広げる俺の姿をどこからか見ているのか。

画面の中の馬鹿はまたも突然立ち上がり、堂々とした佇まいで腕を組む。

「…………さて、今のは全部思いつきの悪ふざけだった訳だが…………」

駄目だ…………！ 突っ込んだら負けだぞ！

「今どんな気分？　ねえ今どんな気分？」

アスキーアートそっくりのダンスを見せつけるハゲ。宇宙人面がやけにム力つく。

だけど我慢。今は忍ぶる時なのだ。下手にコイツを刺激して、レティシアに何かされたら目も当てられない。

……そもそもレティシアがまだ生きているかも不確定なのだが。

「……ち、面白みのない奴め。まあいい、約束通りここまで来たんだし、女は返してやろう。　ただし、三十分以内にここまでこれたらな？」

ころころと雰囲気の変わる奴だ。先ほどとは違う意味で奥歯を噛み閉め、腹の底に力を入れる。

一度深く呼吸をしてから口を開いた。

「……先に、レティシアの安全を確認させろ」

「いやはや、そうさせたいのは山々何だけど、残念ながらカメラのケーブルが届かないんだよ」

お面越し、更に画面を通して明確に伝わる揶揄の表情。

ニヤアッと笑うその顔が容易に推測出来る。

今まで会った中で最悪の人種だ。

用意周到で口が上手く、相手を嬲るのを楽しむ節がある。

「じゃあ、何故俺をここに呼んだ？」

「さあてねえ、何ででしょうねえ」

……今は我慢だ。

手を変え品を変え、声色もお面も衣服も雰囲気も変え、ひたすら俺を苛立たせようとする手合いである。

どうせマトモな答えは引き出せまい。

諦めて腕に付けている時計を確認する。時刻は十時二分。

「……今、俺の時計で十時二分だ。今から三十分後、十時三十二分までがタイムリミットでいいのか？」

「まあ、切りも悪いし五分からにしようじゃないか。さて、ここでルール説明だ。この先に、君に見合う試練を幾つか用意した。それを全て突破してここに来ること。ちなみに一本道だから迷う心配はなくていいぞ？ 制限時間は三十分。間に合わなければ女は殺して俺は逃げる。間に合ったらチャンスをやろう」

「ご丁寧にとーも、さっさとくたばってしまえ。……後一分三十秒」

時計の針だけを無心に追う。横目で部屋を眺めると、右手方向に一枚の扉があることに気付く。

他に扉は見当たらないので、これがスタート地点なのだろう。だが万が一もある。

「あの扉が、スタートってことか？」

腕時計をして居ない方の手を上げる。先ほどからこいつは、明らかにこちらの様子を把握した上でおちよくって来ている。

間違いなく、カメラか何かで今の俺の様子を監視しているだろう。なら、俺のこの動きも見えている筈だ。

「いやいやあ、どうかな？ おおっと、怖い顔するなよ、あの扉がスタート魔王城の地点さ……はい、スタート。精々頑張ってくれたまえ？」

ハゲ仮面の言葉が響き終わる前に駆けだす。

勿論慎重に行った方が良いのは分っているが、三十分しか時間がないのだ。巧遅よりも拙速を尊ぶべきだろう。

迷わずドアノブを掴み、捻る。押しあげた扉の先には 同様の部屋、しかし高さだけが全く違う第一の関門。

冒頭の一室である。

助走を付け、勢いを乗せた状態で扉に突っ込む。

正面に突き出した両掌を強く強く叩きつけながら歯を食いしばった。

「ぬぐ……！」

びくともしない。

それでも諦める気にはなれなかった。しっかりと踏ん張りなおし、腰を落として力を籠める。

瞬間的な筋肉の緊張で、急激に心臓の回転数が上昇し発汗、合わせて筋肉が唸りを上げる。

しかし動かない。

「おやおや、まだ最初の試練なのだよ？ だらしないなあ」

……。

「あれあれ、何をしているのかな？　かなかな！？」

……俺は更に力を込めた。

「ぶるぶるぶるぶる。シャンデリイイアー！」

……力を込め。

「なあ俺は今インスタントラーメンのシーフード味を食べてるんだが……ズゾ。お前は何か食ったんだね？　残飯？」

……畜生ム力つく。

徐々にはあるが、ここに来て今まで溜めこんでいた怒りのリミッターが外れかかっているのが分かる。

これまでは激昂しても意味がないと我慢に我慢を重ねて来たが……黙っていても腹立たしい声は一向に止まらない。

むしろ囃し立てる様にその苛立ち度を上げて行く。

どこか見えない場所にスピーカーでも設置しているのだろう。耳障りな声は部屋中に反響しながら容赦なく俺の脳を蝕んでいく。

目に見えない毒素に充ち溢れたその音は俺の脳を通じて精神を犯し、無遠慮に肌を撫でる。

唐突に、昨晚の撫子の声が脳内で再生された。

この事件の元凶、俺の体。魔法。ぐるぐると聞かじった知識が渦巻き、やがてそれも灼熱の怒りの海に沈んで行く。

連れ去られたレティシア。悲しみ苦しむ撫子。脅された久美子。ふざけている犯人。

怒りに呼応して真っ赤に、真っ赤に染まッテ行く視界ノ中デ

鎖力引キ千切レル様ナ、音力

「グ、又アアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアツ！！」

「……エクセレント！」

よろよろと二、三步もつれる様に足を出た。

瞬間的に真赤に、徐々に薄く他の色が戻ってくる視界の中で、今引き出した感覚を掴もうと僅かに残った理性が意識を凝らす。

荒い息を吐きながら膝に手をつけてしばらく呼吸を落ち着ける為に目を閉じる。

体が熱い。今まで使われていなかった器官を行使したかの様な違和感を感じる。

吐く息は熱いが、だからと言っていつまでも呆けている訳には
くまい。

氣力で持つて休息を求める体を捻じ伏せる。

時計を見た。

「……後、二十四分」

時間が無い。言い聞かせる様に数度呟き足を前へ。その足を妨げるはずの重たく分厚い扉はもう無い。

視線を上げると良く分かる。

瞬間的に絞りだした力は扉を押し開くには十分過ぎたようで、馬鹿馬鹿しくも１と銘打たれていた両開きの扉は大きく開け放たれている。

というか、開け放ち過ぎて壁に食い込んでいる。

「やり過ぎたような気が……」

こういうのはレイシアの担当だったはずなのに。

ひとまず先へと急ぎながら、確かめる様に掌を握り締めた。

昨晚撫子からの衝撃告白の後、聞かされた話だ。

常識外の筋力を生み出せる筋繊維。だけど俺の無意識下の制限がそれを妨げていること。

あの扉が本当に1tもの重さがあつたのかは知る由も無い。

しかし現実には、全力で当たってもピクリとも動かせなかった扉を開けたのは紛れもなく俺だ。

マッスルだのなんだのと半信半疑だったが、使える能力なら今はどうでも良い。

あのスキンヘッドの苛立ち口調も少しは役に立っている。

リミッターだのどうだの、要するに心底からブチ切れてしまえば良いらしい。

確かに怒って興奮状態な人間に常識がどうか言っても聞かないだろう。そう言う意味では助かった。

どうせ、同じように人間の身体能力じゃ突破出来ないような『試験』が用意してあるのだろうけど。

何故か高さが五十センチ程しかない扉をくぐる。今度の部屋も同程度の広さ大きさの様だ。ただし。

「……古典的」

目測で幅、七メートルくらいか。部屋のこちら側と向こう側を区切る様に横たわる巨大な溝が鎮座している。

ベタな試練だが、五メートルはありそうな深さの底にはびっしりと剣山の如く鋭利な棘が見えている。

慎重に下りても、この溝を渡り切れずに落ちて着地しても、間違はなくあの世に旅立てる鋭さと長さだ。

鈍く灯りを照り返すその切っ先を見ていると、自然と身震いが沸き起こる。

それに部屋の広さの関係で、助走を取る距離は無さそうだ。とれて小さく一歩だろう。

元の部屋から助走を付けて飛び込むには扉が小さすぎる。俺の骨が超合金とかだったら壁をぶち抜いて無理やり距離を作れるのだが、如何せん、俺は筋力が強いだけ。重い物を持ち上げることは出来ても、同じ力で壁に突撃敢行することは出来やしない。

そんなことをしたら普通に骨が砕けてしまうこと必至。

時間はない。従って迷ったり躊躇ったりする余裕は無い。

先程僅かに指先を掛けた、今まで認識していなかった自分の能力。魔法と言うからにはMPなのだろうか　を意識する。

撫子はレティシアにこう聞いたと言っていた。

『要は自転車の乗り方の様な物らしいですね。一度出来れば、後は慣れるだけだ』

どうやら少しは感覚は馴染んでいるようで、今度はそう時間もかからず体が熱く成っていくのが分かる。

問題ない。飛べる。

根拠も無く只そう思い、ゆつくりと膝を撓め体を沈み込ませる。
動きに合わせて、太腿の大腿筋群や広背筋、大臀筋、下腿三頭筋
が充実してミチミチと張り詰めた。

深く息を吸い、止める。ヘモグロビンが取り込んだ酸素をむさぼ
り食い、全身を駆け巡りながらエネルギーに変換していく。

そして。

体全体に蓄えた力を一気に 解き放った。

「ふぬあ！」

一步、ほんの小さな助走を付けて床を蹴る。大地の楔から解き放
たれ、宙に舞う体の眼下には広がる針の山。

恐怖を押し殺してバランスを保つことだけを考える。勢い良く飛
び出した体はやがて三メートル、四メートルを越えて徐々に失速を
始めた。

五メートル、六メートルを越えるか越えないかでみるみる内に失
速、落ちて行く高度。

力を入れ奥歯を噛み締め、手を伸ばす。

「っ！」

ギリギリの地点で対岸の縁を掴むことに成功した。

ドクドクと緊張で脈打つ心臓の鼓動を感じながら、普段なら考え
られない膂力を発揮して体を引き上げる。

額から流れおちる汗を拭い、時計を見た。宙に居る間はとても長
く感じたが、先程から五分も経過していない。

「……ふう」

ともすれば震えそうになる膝を叱咤する。ここに来てガタガタ震えているだけなら、家の布団に包まっている方がマシだ。

レティシアを取り返す為に来たのだから、立ち止まっている暇はただの少しも存在しない。

唇を引き締め、走る。今は少しの時間も惜しい。

「……遂にここまでやってまいりました」

ひたすらダウナーで、一つも突っ込み所の無い道筋だった。

あれから後に傾斜九十度の壁を飛び越えたり。1.5tと書かれた扉を押し開いたり。

部屋に入った瞬間扉がロックされ、カラコロと手榴弾が転がってくるギミックでは全力越え疾走で反対側の扉まで逃げ込んだり。

それら色々な試練を乗り越えて今ここに居る。

流石に手榴弾が出てきた時は焦った。服の端が吹き飛んだしな。

立ち止まっていれば死んでいただろう、確実に。

本当に馬鹿げた話だ。ここは日本なのにな。

頭を振り、視線を上げる。

「史上最大最高空前絶後にして並ぶ者無し of 知略策略陰謀闘上等ラスボス永久凍土的な必殺技を持つであろう俺の間」

数メートル先には如何にも、と言った感じに金色銀色で装飾され

た観音開きの大きな扉。

その上にはふざけているのかと言いたい位長い一枚のプレート。
右手を見れば。

「控え室」

やる気のないシンプルな一枚扉の上には、短く書かれた言葉。
何が控えているのか知らないが、今さら控え室に用は無い。ずっと控えたままで居て下さい。

ゴミゴミと色んなガラクタで散らかっている部屋の中を、ラスボスの間目指して移動する。

時間は残り五分ほどしか無い。

「おおつと！ 待って貰おうかい！？」

「スゲエ！ パネエ！ ここで登場するとかマジクールだぜ兄ちゃん！」

「……………」

自称魔王俺命名青鬼ハゲ宇宙人の居るであろう所まで後少し。

「おい無視すんじゃない！ テメエの舌ぁ引っこぬいておきゅばはあんぬぐるらあ！？」

「マジパネエよ兄ちゃん！ 難し過ぎて何言ってるか俺には分ないよー！」

「……………」

……つち、邪魔だなこのコンクリートブロック。
何で大型車のタイヤ積んでるんだよ。冷蔵庫も。

「いいか良く聞け！ 俺様あ地元じゃ知らねえ奴のいねえ悪^{ワル}だ！
テメエに恨みはねえが、潔くここで主人公の俺に敗れて散つちまえ
クラァ！」

「パネエー！ー！ 悪！？ 悪悪じゃんよ兄ちゃん！」

「おうよ悪悪だ！ 分つたらテメエ黙つてねえ」

「煩い黙れ」

「のお！？」

イラッ と来た。なので手元にあったコンクリートブロックを豪
速で投げつけてやった。

残念なことに当たっては居ないようだ。後悔はしていない。
やはり怒りを感じているとリミッターを外し易いようだ。

「つぶねえだろおがクラァ！」

「う・る・せえんだよギヤアギヤア囀つてんじゃねえこのクソ餓鬼
が！ 耳の穴から手突っ込んで奥歯ガタガタ言わせてやろうかこの
ボケが！！」

「……」

振り向きざまの俺の顔は、多分今悪鬼の如く七変化中だろう。

レティシアがかかっているこの状況下で、脳内お花畑の相手をしている暇は一ミリもないのだ。

ギラギラと睨み付ける先、ダボダボのスーツをだらしく着崩したどう見ても少年な二人は驚いた様に目を見開き、次いで真っ青になって震えだす。

「て、テメエ……ひいひい！」

「に、兄ちゃひいひい！」

ひいひい煩い奴らめ。あ、コンクリートブロックをまだ投げているからか。

当たらない様に適当狙いだが、まあ当たると普通に死ぬるだろうから怖いのも無理はない。さっさと俺の視界から消えてくれ少年たちよ。

これまでの行程で、俺のイライラはずっとピーク状態を維持しているのだ。日本経済並の低迷っぷりなのである。

一刻も早くレティシア連れ帰ってふざけたハゲ男を殴り飛ばして、家に帰って寝たい。

ガラクタが邪魔だ。涙目になってへたり込む少年を確認して投コンクリを止めて順調に蹴散らしながら扉に近づく。

「おい」

またかよ。扉に手をかけようとした所で違う男の声が掛かり、仕方なしに振りかえ

「死ねよ」

らず、咄嗟に右側に体を投げ打つ。

しかし僅かに間に合わない。左肩を掠って突き抜けて行く灼熱感。痛み。衝撃。火薬の匂い。

漠然と直感する。銃だ。

転がっていればガラクタに紛れてこちらの様子は分らないだろう。痛みに呻きそうになるのを歯を食いしばることで我慢する。痛い。咄嗟に銃弾が掠めた所を手で押さえ、見る。

丈夫だが、安物の半袖Ｔシャツの袖が一部分だけ血で汚れている。幸い、銃弾は掠めただけのようだ。

表面の肉が少し抉られて血が出ているが重症ではない、と思う。そうやって傷口を見分する俺に、再度銃弾が襲いかかった。今俺が隠れているガラクタを破壊してやると言わんばかりに鉛玉が撃ち込まれる。

「ハハハハハハ！ 楽しいなあ銃を撃つのは！ アハハハハハハハハ！」

「あー、テストス。マイクのテスト中ー。三丈太郎君、ここまで辿り着いたことに敬意を表して、プラス五分オマケしてやろう。その男はちよつと特殊な性癖の持ち主なので難易度が高いが、頑張つて最後の試練を乗り越えてくれたまえ」

じつとりと浮かぶ脂汗。吐く息は痛みを堪える為の熱い物だ。

馬鹿の様に次々撃ち込まれる銃弾によって身動き出来ない俺を、嘲る様な男の声。スピーカーから流れるハゲの声だ。

間違つて扉に打ち込まれた銃弾に当たって死ね！ 毒づき、ひとまず身を起こす。

慎重に体勢を整えながら、とりあえず弾切れを待つ。
銃なら弾切れがあるはずだ。

それにしても、順応が速過ぎると思わなくてもない。脳みその中でアドレナリン他各種脳内麻薬がどばどば出ているのだろうか。スーパーマッスルの使いすぎでハイになっているのかもしれない。今この状況を切り抜けられるのなら何でも良い。

しかし、弾幕とでも言うべき銃撃は一向に終わりを見せない。物影をこっそりと移動し、見つからない様に気を払いながら襲撃者の姿を見る。

「アハハハハハ！ 弾は一杯あるからな！ おいお前、さつさと弾交換して銃寄越せ！」

最悪だ。

無個性なスーツに身を包んだ男は、傍らに先ほどガタガタ煩かった少年らを置き、ついでに装弾してあるであろう大量のマガジンも置いていく。

両手でしっかりとホルドした自動拳銃が取り換えられるのが見える。少年の手に一丁、男の手に一丁。

男は一丁を撃っている間に、少年を使ってもう一丁の銃に弾込めをさせて延々撃ち続けているのだ。高笑いで。

嫌過ぎる。

「……待ちだな。ごくろーさん……って訳にもいかないか」

呟く。興奮し過ぎて鼻血を出している様な狂った男だ。碌に狙いも付けていまい。

自動拳銃だしその内ジャムる。というか腕とかが限界を迎えて、引き金を引けなくなるだろう。何せ馬鹿撃ちだ。

しかしこのまま只待つのはよろしくない。狙いは適当でも、兆弾

は危ないし、さつさと片をつけてレティシアの無事を確認したい。
周辺に転がっているガラクタの中から一つ手頃な物をチョイスし、
掴む。

俺には喧嘩の経験は無い。殺し殺される血みどろの争いなんかも
やったことが無い。格闘技なんてテレビで見る程度の、ごく普通の
人間だ。

しかしスーパーマッスルならそれはそれ、らしい戦い方が有る筈
だ。

原始的？ 投石は立派な武器だよ、誉め言葉をありがとう。

「せー、の！」

「早く！ 早く早く早く！ イミディエイトリイ！ 銃を寄越せよ
クソ餓鬼が！」

「うっ、何でこんな目、に……？ うひい！」

「兄ちゃん！？ って冷蔵庫お！？」

そうです冷蔵庫です。所詮拳銃だ。唸りを上げて飛んでくる大型
冷蔵庫など撃ち落せまい。

質量が違うのだ。拳銃は、空を裂いて飛んでくる大型冷蔵庫を破
壊する為に生まれた訳では無い。

「うっ！」

「ぶひ！」

「パネエ！」

……また詰まらぬ物を以下略。

狙い通り飛んで行った冷蔵庫は弾込めをしていた少年二人に衝突、ついでに銃を乱射していた脳内トリップ野郎を巻き込み大破。

騒々しい音を立てながら吹き飛んで行った。

音が途絶えたのを確認して、そつと相手の様子を窺う。どうやら上手いこと気絶しているらしい。

安堵の息を吐く。

一応、転がっていた拳銃二丁はガラクタがごちゃごちゃと積み重なる一角に蹴り込んでおく。これで咄嗟には取り出せまい。

ついでに男の服を破いて包帯代わりに腕に巻き付けた。とりあえずの応急処置である。

ふんと鼻を鳴らして向き直る。オマケとやらのお陰で、ギリギリ制限時間は残っている。

今度こそ青鬼とご対面だ。余程頑丈な造りになっているのか、あれ程銃弾を撃ち込まれた扉はほとんど傷ついていない。

気を落ち着ける様に深呼吸し、扉に手を掛ける。左肩が痛むのに顔をしかめながら勢い良く取っ手を引いた。

あそこまで人を馬鹿にするのが好きな奴が、扉を開けた瞬間ズドン、なんて面白く無い手を打つ筈が無い。

やるなら、レティシアを見せて、助けることの出来る可能性を提示しておいてからその手段を潰す位のことはする筈だ。そういう陰険な野郎に違いない。

扉の向こうから唐突に溢れる光。
激しい光が目を灼いた。

第十八話 脱出劇。

「おお主殿！ ふふそうかそうか我が居なくて寂しいのか苦しゅうない近う寄れ！ ハリーハリー！！」

反響する叫び。

ラスボス（自称）の間。おそらくニヤついているであろう宇宙人面を視界に留めおきながら俺は沈鬱な表情で額を押さえた。

「……もう何だ、アレだ、俺の盛り上がったテンション返して下さい」

ジタバタ！ ジタバタ！ 拘束された手足を駆使して奇異なる芋虫ダンスで大気をこねくり回す不思議生命体レティシア。

奇怪なダンスは稀少部族が雨乞いをするが如く意味不明である。

「んは！ めははははッ！」

元氣一杯だなお前。

溜息を吐く。元氣一杯にに振舞うレティシアを放ってもう帰りたい。

ムチムチ溢れみなぎる精神破壊効果保有特殊筋肉で拘束を軽うく引きちぎって一人で帰って来れそうだ。

ゆつくりと薄く目を開いていく。

「眩し……」

「ははははは、サーチライトの集中照射は効いたかね？　ん？
んん！？」

「……ハゲ頭の照り返しが」

「……サーチライトだ！」

はん、馬鹿め。ばやけてはいるものの、取り戻した視界の中心には宇宙人の顔したお面を被るスキンヘッドの姿。

高級そうな黒革のソファに悠然と腰を下したその姿。依然厨二病全開の格好である。

傍らに置かれた銀色にテカテカ輝くダンボール製の剣が笑いを誘う。

真夏に黒コートとかどんだけ暑いのが好きなんだお前。

現実と鏡を見る。そして十年位後に黒歴史として今を振り返って悶え転がり恥死んでくれ。

「ゴホン……よくぞここまで来たな、三丈太郎……」

「うわぁ眩しい。照りかえって眩し過ぎて何言ってるか分ないね
！」

「……ふふ、ふあはははははははは！」

暫く黙り、突然哄笑を上げ始めるお面被った眩い頭。それを半ば

引き気味の視線で見ながら、今居る部屋の中に注意を向ける。

今まで通って来た部屋より少しだけ広い部屋。全体的にグレーで統一されている。床も天井もグレー。

しかし、壁一面に掛かっている金の垂れ幕は悪趣味の一言に尽きる。

視線を右に転じると、今は光が灯されていないがこちらに向けられた大型のライトが一つ。

先程部屋に踏み入った時眩しかったのはこれのせいだろう。

扉から見て正面に置かれたソファ以外には家具等は見当たらない。

そして。

俺は一つだけ異様に奇怪なモノがソファの後ろに鎮座していることに気付いた。

何だろう、こう古き良き時代に生贄とかを捧げていそうな感じの祭壇がそこにある。

俺は見る。

「ふはははははは！ 俺の正体を知っても尚その余裕が保ってられるかな！？ そう、俺は」

「レティシアっ！」

精神年齢が残念なことになっている奴が厳かに何か叫ぶが耳に入らない。

男の後ろ、祭壇っぽいそこに広がる金色に俺の目は釘付けだ。声を張り上げよると一歩二歩前に出る。

歩みはすぐに駆け足になった。

「んん……むう……ぬあ、あ、ある、ある……」

眠っているのか眠らされているのか、祭壇の上に横たえられたレティシアから、目覚めを知らせるむずがる様な声が届く。

「女を誘拐し、お前たちを脅し、そうして様々な実験データを採取していた俺の名前は……！」

「そう、ある……の後は！？俺を呼べよ、レティシア！」

「ある、ある……ある……あると思います！」

「ねえよ！」

全力でこけた。

顔からスライディングで地面に倒れ込む。

何だそれは。起きる時位普通に起きてくれシリアスを返せ。

俺の叫びに反応してモゾモゾ動いていたレティシアは、ガバリ！と起き上がると同時にそう叫び腐りやがりました。

祭壇まで後数メートルの所で這いつくばっている俺は一体何をしに来たのか。

世の無情を憐みながら手について体を起こし、改めてレティシアの姿を見る。

たった一日見ていないだけなのにひどく懐かしいその姿に思わず、笑みをこぼした。

「ぬ……ごふあああああ……良く寝た……ん！？これは……
そうか、そうだったな……」

乙女にあるまじき大欠伸を投下して目を擦ろうと腕をあげるレティシア。が、その手はがっちりと身動き出来ない様に革製の拘束具で拘束されている。

……ん？

俺は目を擦った。

「おい、お前。太郎。いいか？ 聞いて驚け見て懾け、俺の正体とは……」

「おお！ 主殿ではないか！」

レティシアが俺を見つけ、嬉しそうな、それでいて驚いた声を上げる。

そして冒頭の脱力系再開を繰り広げる訳だ、が。

俺は、安堵で肩を落としながらもあることに違和感を覚えていた。

正確には、レティシアの拘束された腕と、否その体。恐る恐る声を上げる。

ない。

ないのだ。

「レティシア……？」

「どうしたのだ主殿！？ ハライタ 腹痛か！？」

「そんな訳ありませんよおバカさんめ！……お前、ほら、俺の気のせいなのかどうなのか、いや白昼夢か？とにかく無意味かつ無差別周囲攻撃力を持つ近距離パワー型みたいなあの恐ろしい筋肉の鎧、どうしたんだ……？」

そう、ない。

俺の中の、いや一度でも徘徊タイプの人型モンスターレティシアに遭遇した人間ならば形作るであろうレティシア象。

その最たる分厚くて暑苦しく、地球温暖化に一役買っていそうな位アグレッシブな筋肉の鎧が見当たらないのである。

祭壇の上で体を起こしているのは、ちんまりとした女性の姿。

一昨日家を出た時と同じ、パツツンパツツンに張りつめていたシヨートパンツからはすりと柔らかそうな白い脚が伸び。

キモさ全開でピッチピチだった男物のタンクトップは緩々で何とか肩に引っかかっている状態。

狂っていると思えない頭部とマッスルボディとのバランスも今はどこにいったものか。

小さな頭に見合う、華奢そうなちっこい手足がくっついていてのだ。

……い、一体どんな奇跡が！

そんな風に怖れ慄く俺の耳に、暫しスルーしていたお面野郎の声が飛び込む。

仮面越しに目を合わせた。

「……ああ、彼女の筋肉は魔法だったからね。俺は科学も魔法も、両方調べているからねえ……暴れられると面倒なので、特殊な薬を注射して魔法を使えない様にしたのだよ。過去に類を見ない、魔法

と科学の合成によって俺が生み出した薬だから不完全で一時的にだが、ね。ああそうだ、久美子女史にお礼を言っておいてくれないかね？ 彼女との会話で得た知識がとても役に立ったよ！」

「お前……」

余裕綽綽で人差し指を振る宇宙人。その後ろで身動きの取れないレティシアの姿は、いつそう小さく見えた。

にへりと笑い崩れている整った顔からは、今彼女が何を考えているのか読み取れない。

それが何故か、酷く悔しかった。

「主殿、済まぬな！ これが二度の変身を経た我の最終形態なのだ！ だから心配する必要はないぞ！？ ぬん！」

「嘔吐けお前。どこの戦闘力五十三万だ」

ここでは遠すぎる。

だがこちらを安心させるように笑み、いつもの様に力瘤を作ろうと腕を曲げる彼女の頬が腫れているのに気付くには十分過ぎる距離だ。

大方暴れた時に頬を張られたのか、殴られたのか。

もしソレをされたのが筋肉を失った今の状態だったなら、どれだけ怖くて痛い思いをしたのだろう。

今だって、目覚めてすぐに俺に心配するなど。状況も掴めていないだろうに、何を考えているのか。

それを考えたら堪らなくなった。

ぞぶり、と腹の底で何かが蠢く。

「ははは、元気な娘さんだ。手酷く暴れられたからねえ、薬で眠ら

されるまでに、ちょっと羨はされたかもしれないねえ」

ほとんど脊髄反射だった。

一も二もなく男に飛びかかる。

憎い。

こんなことに巻き込んだ目の前の男が憎い。こんなことに巻き込んでしまう原因となった、俺の魔法とやらも憎い。

色んな事が憎くて憎くて腹が立って、感情が胸の中で渦巻いて外に飛び出しそうだ。

「貴、様アアアアアアアツ!!」

「うお、おおとーう！ 君の力で殴られたら、いくら俺でも死んじゃうじゃん!？」

男が座っていたソファは、感情に任せて叩き付けられた俺の右拳によって、あたかも巨大な鉄球で殴り付けたかの如く軽々と吹き飛ばされる。

間一髪でソファから飛び退き距離を取った男の近くを、壁に激突して飛び散ったソファの破片が掠めて行った。

荒く息を吐くままに男を見える。咄嗟の動きのせいかな今まできつちりと被っていたお面が僅かにズレ、口元が露になっていた。

濁流の如く荒れ狂う感情のままに、再度男に飛びかかろうと身構える。

視界ガ、紅ク

「主殿ッ!!」

ぼす、と。

背中に余りにも軽すぎる衝撃。

赤く染まりつつある視界をそのままに軽く視線を振る。

「主殿……!」

手足を拘束されているからか。

体全体で体当たりするようにレティシアが俺にしがみついている。俯きぐりぐりと押しつけられる、今まで見上げる高さにあった金の頭は、今では俺の肩より低い位置。

僅かに服を引っ張られる感触は、唯一自由になる指先で俺の服の裾を摘まんでいるからだろうか。

「……どうしたんですかレティシアさん」

さあっと、波が引く様に視界がクリアになっていく。

「……いかん。そんなことをしてはならんだ!」

腹の底から吹き上がる怒り、それを溜息に乗せて吐き出し頭を掻いた。

泰然と身構えている男から注意を外さぬようにしつつ、振り返ってレティシアの小さな体を抱え込む。

ぼむぼむと頭を撫で、手足の拘束具を引きちぎってやる。

ちらと確認した所では、頬の他に怪我をしている様子は無い。

「怪我は?」

「む……特には……」

「頬つぺた腫れてんぞお前」

「ぬう……それ以外は。連れ去られる時何か嗅がされて、その時殴られた位で、我は今までずっと寝てたから……」

鼻を嚙る音は聞こえないことにする。彼女の体が震えているものもなるべく事務的な口調になるよう心がけて、俺は再び口を開く。感情に身を任せてしまえば、俺は目の前の男に全力で　そう、後先考えずに全力で、拳をお見舞いしてしまうだろう。

バカバカしい程人間の限界を越えた筋力で人を殴ったりしたらどうなるか、それは1+1より簡単な問題だ。

「じゃあ、帰って頬つぺた手当するぞ」

「う、む……うむ！」

ぐしぐしと腕で目の辺りを擦り、笑顔で顔を上げたレティシアの頭をぐりぐり撫でる。

しかし一つだけ言いたい。

「……おま、鼻垂れてる」

「ぬうああー!!」

素敵に垂れた鼻のせいで色々台無しである。

「……おお怖い怖い！　殺されるかと思ったじゃん、太郎！」

「おい素の口調出てんぞ。後ボイスチェンジャーでもお面に付けてたのか？　バレバレだよ、ハゲ」

おどけたように肩を竦める厨二病ハゲ。

レティシアを背後に庇いながら指摘すると、ハゲはあちゃあと頭を掻いてお面を投げ捨てた。

現れるのは見慣れた顔。大学の学友であり、ハゲであり、そしてム力つく誘拐犯一味のリーダーである男の顔だ。

レティシアの無事を確認したことで何かが振りきれってしまった俺は、呆れや驚きも感じなかった。

ハゲと呼び続けてきた友人は、元友人に、俺の敵になった。不思議とそれ以上の感慨は無い。

ゆっくりと膝を撓め、いつでも飛びかかれるように意識を凝らす。精神力とでも言うべきだろうか、MPとやらがガリガリ削れるのに合わせて全身の骨格を支える筋肉が張りつめ漲る。

「言うべきことは何もないぞ」

「まあまあ、そう言うなよ？　短期は損気って、言うじゃん？」

ハゲが片手をさつと上げる。垂れ幕の後ろに扉でも隠れていたのだろうか、幾人もの男達が手に手に拳銃を持って踊り出た。

反射的にレティシアを抱きかかえる俺を余所に、男達は素早くハゲを囲み、俺とハゲとを隔てる壁となる。

「わぶ！　あ、主殿！？」

「そうカリカリすんなってー。俺は、女には興味がないじゃん？」

「……お前、まさか俺の純ケツを……！」

女に興味がない。そう言ったハゲの言葉に、俺は状況も忘れて青ざめた。レティシアを抱えたまま一步後ずさる。

「ば……！ アホじゃん太郎お前！？ 俺はノーマルじゃん！？」

「知るかホモがあ！ あっち行け変態がうつるしっしっ！ ハゲでガチでホモとかどんだけ最低なんだお前！」

齒をむき出して威嚇。

視界の片隅では、屈強そうな男達がじりじりと距離を取っている……ハゲから。

「ていうかお前らは信じんな！ 俺が興味あるのは太郎、お前のその筋繊維じゃん……！」

どつと汗が出た。無論のこと、俺の貞操が守られそうな安堵でだ。思わず毒づく。

「また筋繊維かよ……ほつといてくれ」

「俺は世界征服がしたい！」

突然大声を上げるハゲ。護衛の男たちをわざわざ掻き分けて前に出、腕を振り上げ無い髪の毛を振り乱す様に頭を振る。

「俺は魔法使いじゃん！ 俺の魔法はこの頭脳！ 知識に関する図抜けた吸収力！ もしも太郎の身体能力を持つ手下を量産出来れば、世界征服など簡単じゃん！？ 怪しまれにくいヒト型で、かつ武器

が無くともその力だけで兵器に近しい攻撃力を持つ！俺はそれが欲しいんじゃない！」

俺は突きつけられる銃口に体を強張らせつつもハゲの目を見た。

そしてすぐに後悔する。

道化の様に珍妙な動きで注目を集め、一人狂った様に喜色満面の笑みで声を上げるハゲの瞳は 酷く澀んでいるのだ。

まるで、そう、底なし沼だ。絶望と悲哀と、それを凌駕する圧倒的な憎悪で構成された悪意の底なし沼。

囚われそうになる心を、頭を強く振ることで保つ。腕の中に居るレティシアの顔を見、改めてここに来た目的を見詰め直す。

この女を守る。そう思うだけで、薄れそうな意識がクリアになり、何とか二本の足で立って居られるのだ。

「……後学の為に聞いておきたいんだが、何故世界征服なんだよ？ファンキーな絵本でも読んで昼寝したのか？」

理解出来ない物は単純に怖い。人間として当然の衝動に突き動かされた俺は、言葉を選びながらハゲに質問を飛ばす。

俺の魔法とやらが他人に移植できるのかは分らない。

しかし、目の前でケタケタと哄笑を響かせるハゲの姿を見ると、実際に出来そうだと思ってしまうのだ。

「簡単さあ 復讐だよ！」

ハゲは流れる様に過去を紡ぐ。

年の離れた可愛い妹に仲の睦まじい両親。日本から遠い異国の地で幸せに暮らしていた家族四人。

ある日何の理由も信条も必然も大儀も怨嗟も無く家族に振りかかった禍いが、兄一人を残して他全てを奪い去って行ったこと。

目の前で残虐な方法で時間を掛けて殺された父。目の前で無残なやり口で犯され殺された母と妹。

殺しても殺し切れない程憎い犯人はそいつらが敵対していた連中に目の前で一瞬にして始末され。

数々の偶然が重なって生き延びた男が後に調べて分かったのは、その日襲われる筈だったのはとある政治家の家族だったこと。

愛する家族を襲った連中は、間抜けにもターゲットを間違えて襲撃をしたこと。それを嗅ぎつけた政治家子飼いの連中が、犯人を始末したこと。

そして、結局その政治家も既に別の陰謀に巻き込まれて殺されていること。

家族を襲う様に指示した黒幕も、また別の襲撃によってこの世を去っていたこと。

一体何がいけなかったのか？ 敬虔なクリスチャンであった木訥なある家族には、神は何の救いも下さなかった。或いは罰も。

下されたのは肥溜めに集る蛆虫より価値のない陰謀術数と鉛玉、それと下らない残りの人生だけ。

復讐したいと身を焦がす情念も、相手が居なければどうしようもない。

何の救いも持てず、狂い掛けた男を支えたのは発現したその魔法。そして男は考え付いた。復讐する相手が居ないのならば、いつそ世界に対して復讐してやればいい。

一世一代をかけた最大の嫌がらせだ。

十四の頃から路地裏で泥を啜りながら知識を齧り、ただただ世界に復讐する為に生き延びてきた男。

ありとあらゆる手を駆使して人を集め武器を集め、潜伏先に平和ボケしている日本を選び。

あらゆる工作を世界中で行いながら着々と力を蓄え続けて来たこと。

平和な日本に居れば中々気付かないが、言葉で羅列してしまえば陳腐なストーリーだった。

ただ、ソレを実際に体験した男に掛ける様な生半な慰めの言葉など俺が持ち合わせている筈もない。

部屋の中に重苦しい沈黙が漂う。

俺はハゲとその手下に悟られぬ様、慎重に後ずさりながら何か使えそうな物はないか視線を飛ばした。

ハゲとは話し合いでどうにかなるとは思えない。

俺はカリスマも、ご大層な人生経験も含蓄も持っていないのだ。

ただ腕の中のレイシアのことを助けたいだけの俺に、憎悪にまみれ狂気に身をやつした男を改心させられる様な力は、どこにもない。

「だあーかあーらああああ！俺はお前の力が欲しいんじゃない！ここに来るまでの試練で、おおよそではあるがある程度の身体能力の数値は見当が付いた。だから俺はもつともつとお前が欲しい！老いも若きも男も女も、富も貧も幸も不幸も等しくグチャグチャにしてやりたいッ！お前の力を俺のモノにして、この世界を滅茶苦茶にブチ壊してやりたいじゃああああん！？」

「狂っておる……」

胸元から響く小さな呟きに、小さく頷くことで返事を返す。

怖い。が、現金なものでぎゅうと服を握りしめてしがみ付いてく
る少女が居るなら何とでもなりそうな気もする。

そうだ、コイツは家に連れて帰る。

その決心を静かに腹の底に沈めると、震えが治まった。

ここに来てようやく俺は、撫子からの告白で判然としなかった自
分の気持ちにはっきりと気付く。

「おい、ハゲ！　一つだけ言っておいてやる！」

喉を震わせた声は、自分が思っていたよりずっとスムーズで張り
がある。

「何だよ太郎？　あ、命乞いかあ？　ダメダメダメじゃん！？　俺
の目的の為に死ぬまで何度でも人体実験に付き合ってもらうじゃん
！」

はん、鼻で笑う。同時に大きく手を振るい、ゆっくりと後ずさり、
近寄っていたソレをしかと手に掴んだ。

撃たれるより速く、引き金を引かれるより速く、スーツ姿の護衛
達が反応するより速く。

腕を鞭の如くしならせる。

「お前の事情なんぞ知るかボケエエエエエ！」

勢い良く投げつけたソレ　大型のサーチ・ライトは直線の軌道
を描いて男たちに向かって突っ込み、同時に俺達の姿を一瞬隠す。

瞬間、転身。全身の筋肉が唸りを上げて人間の限界を突破し、投
げつけたライトもかくやと言わんばかりのスピードで床を蹴り大地
を踏み込んだ。

ぐん、と体が加速する。

瞬間的に発生した圧力によって床材が砕け、罅が入る音すら置き去りにしてやると言わんばかりに背後の部屋に飛び込んだ。

守る。只一つ意思を込めて抱きかかえたレティシアの体を背で庇う。サーチライト一つ投げつけた位では相手全員の視界はカバー出来ない。

一、二発の銃弾が肩と頬を掠めて行った。

床に足を叩きつけ急停止。頑丈そうなガラクタの陰に転がり込む。

「レティシア、怪我はないか!？」

「う、うむ！ 主殿は!？」

やはり人間が行使出来る力じゃない。ほんの一瞬だけの全力ですら、筋肉はともかく骨や内臓に負担がかかり過ぎるようだ。

チカチカと目が霞む。吐く息は荒く、刻む鼓動はエイトビート。体が軋む。

簡単に言えば。

「動悸息切れ眩暈です。モーマンタイ」

短く言い切り、散発的に銃弾が撃ち込まれる中にこそつと顔を出す。

こちらの部屋とあちらの部屋を隔てる扉の所に人影を認め、取り敢えず旧式のテレビをプレゼントして差し上げた。

直後に悲鳴と破壊音、銃声。ここは一体どこの国だ。掠めていった弾丸に肩を竦める。

「畜生！ ボブがやられた!」

「俺から逃げられる訳ねえじゃん太郎う！？ あははははは！ 撃て撃て撃て撃て！ 死ななければ良い！」

「あーらよ出前一丁！」

も一つついでにガラクタを投げつけて置く。コンクリートブロックだが、膝の高さに放ったから死ぬことはないだろう。

一時的に止んだ銃声の合間に位置を確認する。

……理想的なのはそのまま逃げ出して日本のおまわりさんに助けて貰うことだが。

ここから一つ前の部屋に戻るには、一度何の遮蔽物もない開けた場所を通る必要がある。

勿論相手からも丸見えだ。わざわざダックハントの的になってやる趣味は無い。

ふと見れば、すぐ近くに先ほど昏倒させた男三人が転がっていた。

「いいこと思いついたぞなもし……」

どれだけハイになっているのか。普段なら思いつかないようなことを思いついた。

ふはは、俺は悪魔にでも成れるぜ。

拳銃乱射男のベルトを掴み、せーの、で護衛の男達が居るであろう扉の方に投げつける。

慌てたような声が響くのを聞き取って、ありったけのガラクタを放り投げてやった。

これで、手の届く範囲にあるガラクタは今隠れている頑丈な金属製金庫だけだ。

完全に銃撃音が途絶えたのを確認して、倒れているもう一人の男のベルトを掴んで持ち上げる。

振りかぶって。

「……オマケだ馬鹿野郎ッ！」

投げた。

「くおお……ボブに続いてボブまでも……おいボブしっかりしろ、ボオオオオオブ！」

「畜生手を貸せ！　ボブ！？　鼻血出して蹲ってる場合じゃないぜ！」

ボブ多すぎだろ！　どれがどのボブなんだよ！？　心の中だけで突っ込み、最後に一人残った男を背に担ぐ。

多少重いが、走れないことは無い。これで背後から撃たれてもちよっただけ安心だ。

「主殿、無茶は……」

「うるせー黙ってる舌噛むぞ！　囚われの姫様は黙って助け出されれば良いんだよ分ったか！？　恥ずかしいけどそれが俺のロマン！」

「……うむ！　……えへへ」

しっかりと抱え直したレティシアと背負った男。両者を片腕ずつで支えながら一気に扉まで駆け抜ける。

「畜生逃がすかボブの敵だぜ！ 追え！ 追えー！」

「…………お前も行けよ！」

「やだよお前から行けよあの野郎コンクリートブロックをベースボールみてえに気軽に投げて来るんだぜ！？」

「俺だつて嫌だよ！」

背後から撃たれるということはない。幸いだ。

扉を抜け背後に視線を送る。まだこちらに追いついてくる様子は無い。

背負っている男を適当にその辺に放りだし、目線を前に。

というか下に。そこにあるのは高さ五メートル程の切り立った断崖絶壁…………ではなく壁だ。ただし、下方向に向かつての。

行きは一息に飛び上がって来たが帰りは飛び降り自殺だ。行きは良い良い帰りは怖…………こわ…………マジ怖い何だこれ。

「…………ううむ」

「？ どうしたのだ主殿」

「いや、ちよつと失敗したかな、と」

良く良く考えたら、ラスボスの間かどこかに別口の通路がある筈なのだ。こんな障害物競走普通の人間じゃあ完走出来ない。

不便すぎるし、一々地下に来るたびに非現実的なあの道を通るのは馬鹿らし過ぎる。わざわざ俺の能力を測る為に改装でもしたのだろうか。

しかし迷っている暇は無い。意を決して俺は

「……いいか、慎重にだ。こうやって手を掛けてぶら下がればその分下の床が近く……！」

「主殿、それはどうなのだ……」

俺は、ゆっくりそうっと飛び降りた。

額に浮かんだ汗を拭って息を吐く。微妙な顔でこちらを見上げるレティシアを抱え直して駆けだした。

何とでも言え。五メートル以上の高さとか飛び降りたらいくら何でも骨折するわ。
高い所怖い。

「ふ、はーっ、あふっ、ぜい、ぜい……」

流れる汗が目に入って沁みる。ごしごしと擦って大きく何度も息を吸い込んだ。

あれから何分経ったのかは分らない。

長い廊下や非人間的（身体能力的な意味で）ギミック満載の部屋を潜り抜け、最初のアドバンテージのお陰でさしたる怪我もなくここまで戻って来れた。

今居るのは最初の最初、怪し過ぎる地下道入り口である。

一体どんな手段で追いかけているのか分からないが、耳を澄ませば微かに連なる足音が聞こえる。

梯子を見上げた。問題はあの大男だ。連絡してないとは思えにく

い。

間抜けに梯子を上がった所で、大男に冷蔵庫の野菜室思い切り開き殺されてもしたら末代までの恥である。それでなくとも今代で終わりそうだが。

それにしても体中が痛くて堪らない。アドレナリンの出血サービスは終わってしまったようだ。

完全に息も上がっている。

指の先が冷えて来ていて、上手く思考が纏まらない。

「主殿……！ 奴らが追い付いてくる！」

「お、おうともさー」

酸素が足りないせいで目が霞む。しかし切羽詰った声を上げる元筋肉姫を負ぶって梯子に手を掛けた。

男には張るべき見栄がある。

「はいよいしょこらあ！」

疲れ切った体でも不思議と筋肉は良く動く。無意識化しつつある意識の集中で、俺とレティシアの体はずんずん上に上がっていく。すぐに一番上まで辿り着いた。下を見る。遠い地面と、追いついて来た男たちの姿。

「……ええい、ままよ！」

振りきるように頭を振り右掌を入口と思しき場所に押しあてた。上腕と下腕、肩口と背中中の筋肉群がほんの一瞬隆起して爆発的に収縮、そして膨張。

手応えは異様に軽い。

「……それにしてもえらく簡単に空いたな、主殿」

「ぬうあああ、鍵とか重石とか置いてないのか恥ずかしいぞ俺の馬鹿あー！」

地下道に叫びだけを残し、素早く体を引き上げた。白色の光で照らされるキッチンの流し台には大男。

「……何だ、飛び出すなスパイスの調合が狂う」

咄嗟に身がまえた俺に微塵の動揺も見せない男の声。

むしろ俺の方が今動揺している。

大男はスーツの上からひよこのエプロンを身につけ、サングラスのまま真剣な表情で各種赤々しい香辛料その他諸々を混ぜ合わせているのだ。

中々驚きの格好になっているであろう俺の姿に興味も示さない。男の姿が一番不自然だよもう。

「あの……」

首に齧り付くが如くしがみついていたレティシアがずり落ちるのが分かる。カパン、という間抜けな音と共に地下への扉が閉じられた。

警戒は解かない様にしつつ大男に声を掛ける。

「何だ」

「いやお前さん、ハゲの……手下とかじゃないのか」

「ハゲ？」

首ブリッジで容易に全体重を支えれそうな屈強な首を捻り、ようやく大男は俺を見る。

「ハゲ。痛い感じの……ああそう、リーダーとか言う奴」

「ああ……俺は三ヶ月契約で雇われたメイドだから良く知らん。仕事はこの家の一、二階の維持と家事だ」

メイド！ その図体でメイドと言いますか貴方！

恐怖に慄く俺を余所に、何に感銘を受けたのか、レティシアがちょちょこ前に出た。

慌てて制そうとする俺の腕をすり抜け、大男に駆け寄る。

「……ぬう……ぬ、は！」

「は？」

そして突然マッシブポーズをキメた。

いつもの、あの恐ろ頼もしい弾ける筋肉バディなら格好も付き過ぎるくらい付くだろぅが、今は華奢な女の子だ。

正直に言おう。アホの子にしか見えない。

大男は俺の視線の先でついつとスパイスを置き、指先でサングラスを押し上げる。

そしてやおら

「むぬん……！」

雄々しく荒ぶるポーズを取る。一体何言語だマッスリンガル（バ
イリンガルの筋肉語 日本語版。特許出願中）を寄越せ。

胡乱な目つきで2人を見る俺を放置プレイ、ノットマッスルレテ
イシアとゴリマッチョ系大男はがっしりと握手を交わした。訳が分
からん。

俺に背を向けていたレティシアが、髪を勢い良く翻し振り返る。
浮かべるのは妙に額がテカテカ光る男臭い笑み。

「主殿……今のは筋肉を愛する者に全国、否全世界共通の挨拶なの
だ！ 今、我とコヤツはマジカル・マッスラーズの一員として通じ
合った！ 妬くでないぞ！」

「もうどこから突っ込めば良いんだお前と言う奴は！ その嘘設定
生きてたのかよ！ えい！ ええいもう！」

「わひゃ！？ 主殿！？」

地団太を踏み、謎の達成感を放出しながら汗を飛ばすレティシア
を荷物のように肩に担ぎあげた。

お前はもう米俵だ。異論は認めねえ。

ペースを乱されっぱなしで忘れがちだが、さっき閉めた床下収納
がガンガン叩かれているのだ。

今は俺が重石代わりに上に乗っているので開いていないが、その
内鉛玉が飛び出してくるかもしれない。

もう本日何回目になるか分からない溜息を吐きながら、俺はキッ
チンから飛び出した。

三十六計逃げるに如かず。昔の人は良いことを言いました。

「ジタバタするな走りづらいだろ」

「うわあああ揺れる揺れる揺れるぞ主殿！？ わわわ我は縦揺れに……！ 揺れ……！」

「早く逃げ出して警察に電話を って、俺携帯持ってたよ！」

おっちょこちょいか！ 舌打ちし、すっかり汚れてしまった丈夫なジーンズのポケットを漁る。

立ち止まった。

愕然とし、がさごそとポケットを漁る。

ない。

「……携帯が御座いませんっていうかもう来た！ もう来た！」

「待てやコラお前！ フルマラソンで俺から逃げ切れと思うなよキッズ！？ 趣味はトライアスロンだぜ！」

数人掛けのソファを男たちの方に蹴り出して走りだす。

携帯が無い。

そういえば、あれだけ派手に思いつきり転がったりしているのだから、ポケットから携帯電話がまるび出ても気付かないのは当然か。俺の馬鹿め。

舌打ちを漏らしつつ、リビングの中ほどを一息に駆け抜け廊下に飛び出した所で。

「やあ太郎！ 俺からは逃げられないって言ったじゃん！？ 面白いな何でだろうな！？ あはははは！」

悠然とニヤリ笑いを浮かべるハゲの姿。その手には黒光りする一丁の拳銃。

一気に脳に叩き込まれた情報がパンクし、一瞬が引き伸ばされスローになる。

駄目だ。背後には護衛の男達。前には拳銃の狙いを付けたハゲ。身動きの取れない狭い廊下でかわすことなど出来るはずもなく、何とかレティシアを突き飛ばそうとする俺に向け。

ハゲは、冷静に引き金を

「ぬるいわあああああ！！」

「ぐ！」

引けなかった。目の前、絶対的有利を手にして緩めていた頬に突き刺さる巨大な拳。

切り揉みしながら壁に激突し、その壁を突き破ってリビングへと消えて行くハゲ。

俺は見ていた。

やけにゆっくりと動く世界の中、最後まで俺から目を離さなかったハゲの狂った瞳を。

吹き飛びながらも俺を射抜き続ける常軌を逸したその視線を。

「おあ……？」

何が何だか分からない。

コマ送りの世界が一瞬で元のスピードに戻る。

それを契機に、俺はようやくマトモに目の前の出来事に対面した。

壁をブチ抜いて現れるという世紀末霸王クラスの存在感たっぷりな登場を果たした男。

熊。いや人間だ。

もうもうと立つ埃の中はためく赤マント。白い短髪。岩石を掘り出したかの様な厳めしい顔つきをした巨躯の老人である。

その身に纏うはピチピチの真っ黒ボディースーツ、それを内側から引き裂かんばかりに押し上げる筋肉の隆起はレティシアを越えるクラスの爆発筋肉。

歯を剥き出し、悪鬼もかくやという表情を浮かべた謎の老人は俺の横を擦りぬけ、背後に迫っていた男たちに一瞬で迫る。

俺はつられる様にその姿を追う。

「仙人かよクソ！ 負け」

「遅いわ小童が！」

「うぶは！」

叩き込まれる右ストレート。

「ちょま」

「逃がさぬ！！」

「んげふ！」

竜巻の如く繰り出される豪速のフック。

「おいボブ」

「！」「！！」

「ひでぶ！」

時とか止められそうな感じに残像を残す猛ラッシュ。

「ぬはあああああ！！
無事かレティシア！！」

危機が去るまでたつたの五秒も掛かっていない。昨今話題のアクシオンヒーローだって、ここまで鮮やかに事態を解決しないだろう。

本当に何が何だか分からない。俺は生まれてこの方、ここまでアグレッシブかつマツシブでクレイジーなじいさんと知り合った覚えはない。

というか普通、拳銃持った大の男数人を数秒で黙らせるとか人間には出来ません。

「お、おじい様！」

「馬鹿者！ 外ではマジカルだんでい
師匠と呼べといつも言っ
ているだろう孫娘よ！」

「ええええええええええ！？」

ねえよ！
ね・え・よ！

孫て御爺ちゃんて魔法つて師匠てええええええええええ！？

「お兄さま！ 助けに参りましたわ！」

「太郎！ 筋肉娘！ 無事！？」

バムボタン！ と玄関を開け放して現れたのは撫子と久美子。
次々に展開する事態に付いていけず、混乱した取り敢えず俺は一番大事なことを叫んだ。

「レティシア……怪我は！？」

マジカル だんてい 師匠に抱き付いていたレティシアがこちらを振り返る。

満面の笑顔でVサインを寄越すその姿を見て、ひとまず常識や経緯や理解等々全て放り投げてても良い気がした。

レティシアが無事ならひとまず問題無い。

安堵を感じるのが先か。崩れ落ちる様に膝を落とすのが先か。

網膜の裏に百点満点なレティシアの笑顔だけを張り付けて、限界を超えていた俺の意識は急速に暗転していった。

「っ！？ あ、主殿！？」

慌てた様なレティシアの声を最後に断線。

第十九話 ロマン스에 マッスルは要らない。

「……ん」

気が付けば目の前に見知らぬ天井。

「……言わないぞ。知らない天井だなんて言うと思うなよ……」

茫洋と呟く。

どうやらベッドに寝転がっているようだ。起きているのだが意識がはつきりしない。

消毒液の匂い。緩やかな風。窓際で揺れるカーテンの音。

何でこんな所に居るのだろう。

霞みがかったように頼りない意識の中で、ぼんやりと記憶の紐を手繰り寄せる。

そう、確か

ぶっ倒れた後担ぎ込まれた病室にて、寝惚け頭的一幕である。

ロマンスにマッスルは要らない

初めに脳裏に浮かんだのは一人の女。
その満面の笑み。

の、下。いや首じゃない。もうちよと下。

「……だぼだぼのタンクトップを押し上げる、特盛り……！」

あ、何か意識が覚醒してキタぞ。
燃え上がる俺のリビドー。進むパッション。

「ゆるゆる……たゆたゆ」

ゆるゆるの、それも大柄男性向けのタンクトップを特盛りに被せたら……向かう所敵無しの奔放さが様々な三次元空間的自由度でたゆんたゆんと……。

「ち、チラ……チラ……！」

しがみ付くと素敵にたわみ潰れる魅惑の果実。何も補助する様な物を身に付けていないのにつんと上向く恐ろっぱい。

「おっぱー……！！」

そして死にたくなった。

「おぶ、おぱ……でか……でっぱい……!!」

「ちなみに、デカイ＋おっぱい」でっぱい、だ。ファイナルアンサー連打。みのさんに焦らす暇も与えない。

いいか、重要なのはイメージだ。

しかもその恰好はダボダボで色々アウアウな角度と柔らかさと大
きさ口リ……ッ！

うん、俺が何に煩悶しているか良く分って頂けると思う口り。おっぱい。

いや、学会で発表するにはそれを裏打ち出来るだけの綿密な研究が必要なのだ。ということは……研究という名目で……！

「……主殿？」

「ぬうおおあああああ！？ 見んといて！ 後生やから見んといてー！」

しまった人が居ないか確認するの忘れてた興奮で！
声がしたのは扉の方だ。誰かが入って来たのに全く気付かなかった。

ババツとベッドの上で顔を隠し、指の間から誰が来たのか覗き見る。

目に入るのは磨き上げた真珠の様にきめ細やかな白い肌。

微かな風にたなびく金糸の長髪。

甘やかにほの赤く色づく頬。

驚きに見開かれているのは大きな宝玉をそのまま嵌め込んだかの様な美しい碧の瞳だ。

子供っぽい顔立ちの中ではつきりと女を主張する桜色の小さな唇
体に沿ったシルエットの、ピンクのワンピースからすらりと伸び
た手足は細く。

胸元を押し上げる魅惑の双丘も、きゅつと締まった腰のラインから
続く脚線も艶やかなバランスを保っている。

小さな体にダメージ限界突破、はち切れんばかりの色気を纏った
女 レイシアはくしゃつとその小さな顔を歪め、

「あ・る・じ・ど・のー！ー！ー！ー！ー！ー！」

「あ、よりによってレデゅぐー！ー！」

勢い良く俺に突撃。

俺の胸元に大陸間弾道ミサイルよろしく飛び込み頭突きを敢行したのである。

当然、ベッドの上で起き上がっていた俺は堪え切れず。

ゴチン！ ベッド上部の金具で見事に頭を打った。頭の中に星が散り、声も出せずに悶える悶える。
じんわりと涙が浮かんた。

「い・あ・お・お・お・お・う……！」

「主殿！ 主殿！ 主殿ー！ ようやく目を覚ましたのか！ 我の、我のことは覚えているのかー！？」

グリグリグリ！ 小動物の如く頭を擦りつけ、精一杯の力で俺の体にしがみつくレティシア。

無事そうな姿を見て、俺は安堵の溜息を吐いた。

だが、冷静になった俺はここで重要なことを一つ思い出す。

ここ多分病院。つまりここ病室。そして俺は勿論けが人。そう、いきなり動いたツケが、一気にやってきたのだ。

どういふことかと言うと。

痛い。超シリアスにマジ痛い。

特にレティシアに掴まれてるそこは銃弾が掠った所でえええええええ！

「……いきなり何しやがるんですかレティシアさんそこは止めて怪

我してる所なのおおおお！」

「あ、す、すまぬ主殿!？」

「マテそこはそこで違う怪我がががが……!」

「ぬあ!？」

掴む場所を変えるんじゃないで、頼むから手を離して下さい。

紅葉の如き小さな手でも、全力で握られれば当然痛い。

どうやら全身どこもかしこも痛めているらしく、レティシアが掴む所掴む所痛いのだ。お陰で怪我自体は完治してないのは良う分かった。

電源を落とすように倒れてから、そんなに時間は経っていないのだろう。

一応病院であることをギリギリ思考の隅から引つ張り出し、驚異の小声叫びでレティシアに手を離してくれるよう伝える。

マッスルレティシアとの生活の中で体得した特技がこんな所で役立つとは。何て不毛なんだ。

離せ! 離しませぬ! のアホみたいな遣り取りをした後、レティシアは手を離さない代わりに俺の上にこのまま乗っかっておくことで妥協した。

……う、嬉しくなんてないよ。本当だよ?

「……まあ、とにかく。あれからどうなったんだ?」

「ちょっと待つのだ主殿!」

ずい、と突き出された小さな手の平に言葉を止める。

うむ、と大きく頷いたレティシアはずりずりと俺の胸下まで掛かっている掛け布団を下げ。

「うわふー」

ぽふ、と抱きついて来た。

怪我に障らぬ様に気を払っているのか、添えられた手は酷く優しい。

俺の頬に擦り付けられる頬。シャンプーの匂い。レティシア自身のやけに甘い香り。

薄い入院服とワンピース越しに、レティシアの柔らかく、暖かい体の感触を感じる。

「……」

俺はその抱擁を冷静に受け止めた。顔には菩薩の如き慈悲深い笑みを浮かべ、ゆっくりと手を動かしてレティシアを抱きしめ返す。

不安だったのだろう、何せ俺は目の前でぶっ倒れたのだ。あやす様にレティシアの背を撫で、髪の毛を指で梳く。

嘘だすまん。

残念にもこの長きに渡る二十年、生まれ落ちてより二十年、清い体を保ってきた俺にはそんなの難易度が高すぎるイベントである。

一瞬で頬と言わず首までが真赤に染まり、心臓の音がガンガンと煩く鐘を高速連打。

何か言おうと口を開けば、出てくるのは音にもならない動揺だけである。

「うー……主殿、主殿の匂いだ」

「あ、ああ、あの……！？」

男として情けなさ過ぎる裏返し声（オットセイ似）で、汗をたらだら流しながら何とかそれだけ言葉にした。

「うるさい黙るのだ主殿は我にも撫子殿にも久美子殿にもたくさん心配掛けたのだぞ！ す、少しくらいその……じゅ、充電させてくれても罰は当たらぬだろう……」

耳許で囁く様に呟かれ、レティシアの吐息が耳朶を撫ぜる。ぞくぞくと背筋に電流が走って、ひょ！？ と短く悲鳴を上げる。言葉にしてはならない気持ちよさに身を振った。

「……ま、まあ我も鬼ではないのでこれくらいで許して差し上げよう！ ぬは！ ぬははは！」

ガバリと起き上がり、多分俺に劣らず真赤に染まったレティシアの顔を見て、思わずぷつと笑いが漏れる。

緊張していた体が、心地よく弛緩する。顔を見合わせて、恥ずかしさを誤魔化す様に笑い合った。

腕を伸ばし、その柔らかな頬をぶよ々と突つく。

「顔赤いぞー」

「あ、主殿こそ！？」

「はっはっは」

笑い、話題を切り替える。そうでもしないと正直恥ずかしいのだ。頬の熱さはまだ取れない。きつと、しばらくこの胸の高鳴りはこ

のままだろう。

「んで、事の顛末は？」

「……うむ」

レティシアは、数度呼吸を落ち着けてから俺が倒れた後のことを語りだす。

「主殿が倒れた後、とにかく急いでここに運び込んだのだ。後のことはひとまずおじい様に任せることにして、我と撫子と久美子は付添いで一緒に病院までやって来た。それが昨日のことだから、主殿はほぼ一日寝ていたことになるな。あ、我を誘拐した連中のことはもう心配せずとも良いぞ。何せおじい様が直々に『ぬはは！ 片腹痛いわ！ 後片付けをしてやろうぬはは！』と仰っていたから。多分、今日辺り事情を説明しに来るのではないかなあ」

「……レティシアのおじいちゃんって何者なんですか」

気になる。凄い気になる。普通の御爺ちゃんは壁を突き破って登場したりしない。

絶対身長二メートル越えてたぞあの爺さん。

「さあ？」

ぐり、と首を傾げるレティシア。いやいや。

「さあって……」

「とある過激派武装集団を一人で壊滅させたとか、内乱を単身で治

めたとか、暴走機関車を体当たりで止めたとか、ハイジャックされた飛行機を取り返して自爆テロを未然に防いだとか、そういうのは聞いておるぞ」

……。

「どう考えても霸王様ですありがとう御座いました」

「？」

「いや……いいんだ、続けておくれ」

「後、何であのタイミングで撫子殿達とおじい様が現れたかは……」

「かは？」

「撫子殿から聞いたのだが……ぬう、どうやら、主殿が出発した後居ても立っても居られなくてお金や人脈に物を言わせて追跡させて助けに行こうとしたら偶々おじい様の耳にそれが入ったらしくておじい様は何というかそういう争いを治めるのが非常に得意な方なので付いて来てもらったと！　そういう訳だ分ったか主殿お汁粉飲むか！？」

「頼むから普通に喋れ。後お前今どっからお汁粉出したんですかしかもホット……！」

シット！　眉間を揉む。ついでに眼窩から米噛み、耳の所にあるツボまでぐにぐにとマッサージした。

うる覚えの知識なのでプラーシボかもしれないが、血流が良くなつて頭がすっきりした気分になる。

「……怪我とかしたら、どうするつもりだったんだよ二人とも……」

「結果的に無事だったのだ。良いではないか良いではないか！……
… 2人とも、主殿の事が心配だったのだ」

「それは痛いくらい分っております」

ガリガリと頭を掻く。怪我が無いなら良かった。とりあえず全員無事。言うことなし。

ほっと大きく息を吐く。

「……そうだ。見よ主殿！　ぬは！　んん……ふむん！　ぬう……
！」

「……何、やってるんですか」

俺はげんなりと呟いた。俺の腹の上にぺたりと座りこんで白い歯を光らせ、腕を曲げ体を逸らし様々にポーシングをキめるレティシア。

なりがやつと普通になったので見た目的にはアホの子にしか見えないのだが。

モンスターカードレティシアの特殊効果発動。

ロリロリシアを攻撃表示で召喚に成功した時、ムキムキレティシアを特殊召喚出来る。

ムキムキレティシアの召喚に成功した場合、相手プレイヤーは無意味かつ理不尽にLPに二千のダメージを受ける。

ずっとレティシアのターン！

まあ具体的に言えば。

この数か月というもの何度も何度も見せつけられたキモグロマッスルポーシングが自動的に俺の脳内で再生されてしまうのだ。コラージュだ。俺の脳は勝手に、目の前の女の首から下をプロもびつくりな精度で摩り替え、盛大に精神的大自爆している。

力んだせいかうつすら汗を浮かべたレティシアは、やや恍惚とした表情でパチリとウインクを飛ばす。

「主殿に、今の私の心境を伝えてお・る・の・だ……！」

「いやいや何だそれはそもそも筋肉言語は使えませんから……！」

え、という感じでレティシアが俺を見る。次いでぎゅむむと疑わしげに眉を顰め、ええーと不満げに口を尖らせた。

そのままの体勢でしばし考え込み、慌てた動きでポーズを変える。

「何」

「主殿は、特殊な筋肉の持ち主だから！」

「だから何」

「このポーズは平仮名の『む』！」

ぐぐ、と細い腕を曲げたサイドチェスト。ぷるぷる力む度にぷるんぷるん胸元の兵器が揺れる。

健康的な成人男子的に非常に煩惱爆発画像な訳だが、何というか恥ずかしい。

ので。

「わ、分んねえよ無理やり教えようとすんなああ！　しっしっ！」
サイドチェストの体勢を維持したままぐいぐい迫ってくるレディシアを、必死になって手で押しやる。
可愛らしい頬っぺたが残念に潰れ、「はういろの……！」と、とても面白い顔になった。ぶちやいくだ。
ついでなので、あそーれ。

「ひは！」

「たーてたーてよーこよーこまあーる書いてちよーーん」

「ひよーーーーん！」

プクプクと柔らかな頬っぺたを思うさま両手の指先で摘まみこねくり回す。やばいちよつと楽しい。

じたばた暴れながらしばらくじゃれ合っていると、不意にズキリと右腕に痛みが走る。思わず眉根を寄せた。

「……主殿？」

「いや、ちよつと痛んで……そういえば俺の体、どうなってるの？」

「ぬあー……肩とかわき腹が挟れてて所々青痣があるけど、内臓は平気だとお医者さんは言っておったぞ。ただ、脚など含めて数か所、特に右腕はそのう、微細な罅が沢山入っておると」

「じゃあもつと固定するもんじゃないのか？」

右腕を見る。外見的にはほとんどいつもと変わらない俺の腕。精々ぐるぐると体中に包帯を巻いてある位で物々しいギプス等は見たらない。首を捻る。

「あの……筋肉が」

「うん？」

レティシアは口をへの字に曲げる。

「主殿の筋肉が、ギプスが必要ない位がっちり骨を支えていると」

「Really？」

マジで？

「うむ、流石主殿というべきか……あ、痛み止めの効果があるから今は余り痛くないと思うけど調子に乗ると地獄見るわよざまあって、お医者様言っておったぞ！」

どんな医者なんだそれ絶対藪だろ。

「更にちなみに、ここは久美子殿の診療所だ！入院してるのは主殿だけ！」

「ええええええ！？何で！？」

「治療費がつぱり取れるから……っていうのは嘘で、色々もみ消したりするから警察とかに余り怪しまれないように頼まれたのだ。おじい様に！」

どうだ凄いだろう、と言わんばかりに垂涎物の胸をばいんと張るレティシア。いやいや本当に何者なんだあの爺さんは。ふと視線を感じて扉の方に視線を向ける。

「おほ、おほほほほ……！　しっかり銭は落として行きなさいよ……！」

「ふお……！」

妖怪肥満年増が。いやカウントダウン三十路が扉から顔半分だけ覗かせてこちらを見ていた。

一人で何か盛り上がっているレティシアには彼女の小声トークは聞こえないらしい。ぴらぴらとはためく白衣がホラー過ぎる。

ん？　ぱくぱくと音を出さずに何か呟いている。

……か、ね、づ、る……。

とりあえず目を逸らした。

あんなものを見ていたら、治るものも治らない。

「ていうかここ診療所だろ……病院行かなくて大丈夫なの俺？　凄く不安で胸が一杯なんですけど！　ここの病院食コレステロール値高そう！」

「いや、ここは久美子殿の道楽で最新機器が揃ってたりするから、特に問題はないと。兎に角主殿の体は今、我にもびっくりな状態で自然ギブス状態なので、完治するまでいくら掛かるか良く分からなそうだぞ！　その内治ると言っておった！　良かったな主殿！　ぬはは！」

「もうちょっと考えて喋ろうな、うん」

患者にざまあ、とか言っちゃう医者はお茶目通り越して藪ですかな。

「お兄さま!？」

視線を再度扉に。いつの間に消えたのか、久美子の姿はそこには無い。

代わりに義妹の姿がそこにある。

「ハイホー撫子」

よ、と何でも無い様に片手を上げて挨拶。

泣き笑いのように流麗な顔をくしゃりと一瞬歪めて、ぐっと唇を噛んだ撫子が俺の視線の先で俯いた。

「……撫子？」

「心配、したんですのよ……!」

顔を上げ、堪え切れぬ様に涙をぼろぼろと零しながら呟く撫子。拳をぎゅっと握りしめ、小刻みに震える妹の姿に思わずもらい泣きしそうになる。

そうだ、撫子はあるなにも俺のことを心配してくれていたじゃないか。

不意に目頭が熱くなり、

「うわああああああん!　びいええええええええええ!」

「何でここでレティシアが泣くの！？　それにベタな泣き方ですね！」

思い切り突っ込んだ。返せ。俺の感動を返せ。

「レティシア……」

お、いいぞ撫子。言ってやれ。言ってやれ。

「感動しましたわ！」

「どこに！？」

「なでじこのの　お~~~~」

「レティシアっ！」

俺の上から華麗に飛び降りたレティシアと、扉からこちらに駆け寄って来た撫子がガッシ！　と抱きしめ合う。
何だか置いてけぼりである。

「え……どうしようこれ」

「お兄さま！　何でこの感動が分からないんですの！？　何かお言いなさい！」

「そうだそうだ！　主殿は鈍いぞ！　何か思う所はないのか言ったらどうなのだ！」

べったり抱き合ったまま、うわんうわん泣いていた二人が鼻を嚙

りながら俺に振り向く。

飛んでくるのは口撃だ。二人分なので二連撃。クリティカルヒットである。

「え、あの……」

戸惑った声を上げる俺。

「！のすげー」

「うるさいぞ主殿！」

「……う、うめんなさい」

迫力に押されて思わず頭を下げる。満足気に頷く二人。
それきり完全に二人だけの世界に入ってしまった撫子とレティシアを暫し呆然と眺め、俺は溜息を吐いた。

まあいい。ここで二人が抱き合ってるのを眺めていよう。ムフ、ムフ、ムフ。

枕の位置を動かし、両名の居る方向が楽に見える様に調整。
きやつきやうふふと戯れる妖精二人の姿に鼻の下を伸ばす。

しかし俺の平穩は長くは続かない定めにあるらしい。

そんな平和な病室に、突如爆撃機のエンジン音にも勝る大音声が飛び込んできたのだ。

[illegible]

「何ですの……？」

「……な、長えよ笑い声……」

「ぬ……この声は!？」

びつくりした様子で離れたレティシア達と、何とか突っ込みを入れることに成功した俺。

共に辺りを見回すが、野太い笑い声を上げる様な人影は見当たらない。

視線を振る。

そつえば声は外から響いてきた。なので一応窓の外にも目を向けると。

「そおい!! 待たせたな若者よ! 息災か!？」

全開に開け放された窓の縁、そこに下からぬつと手が掛かり、一瞬で大熊の如き巨漢の老人が飛び込んで来た。

ごろごろと床を転がり、俺の寝ているベッドの傍ですつくと立ち上がる。

たなびくマントに岩を掘り出したかの様な分厚い巨軀。銀にも見える白の短髪と鈍く光る眼光でこちらを射るその老人に俺は心当たりがあり過ぎた。

というか普通、こんな存在感の塊みたいな人を見たら一生忘れなと思う。幼い子供からすればトラウマものだ。

「え、ええまあ」

答えることが出来たのは、一重にレティシアの筋肉とか撫子の踏みによって精神的耐久力がカンストするまで鍛えられていたからに

他ならない。

勿論、本音では『これが息災に見えるか体中痛いです！ 眼科行け！』などと思っていることは内緒だ。そんなこと言えない。

このお爺さんはこの世の物ならざる圧倒的なプレッシャーを撒き散らしているのだ。

精神的に堪えることが出来ても、肉体的に何かされたら耐えられないこと必至。

これ以上怪我は増やしたくない。

「おじい様！ どうなったのだ？」

やはり血筋か。物怖じもせず気さくに爺さんに近づくレティシア。そういえば、コイツの口調はまんま爺さんのパクリっぽいな。御爺ちゃん子なのか。

場違いかもしれないが、そんなことを思う。

「うむ……もう心配要らぬぞ孫よ。彼奴等めは我輩がしま……ゴフン、説教しておいたでな！ ……もう、二度と会うこともあるまいて」

「流石おじい様だ！」

いやいや、この爺さん今しま……って言ったよね？ よね！？

俺の予測変換機能によると、『しま……』の後に『つ』が来そうなんですけどほんとに如何なんだろうか。

どうせ聞いても答えは貰えないだろうから、仕方のないことかもしれないが。

……それより、もう二度と会うこともない、か。ハゲの顔が一瞬頭を過ぎる。

「あの……」

「おお少年よ！ お主には礼をせねばならぬな！！」

「はい？」

ぐわ！ 目をかつぴらいた爺さんが俺を見る。

俺はベッドの上でたじろいだ。お礼はお礼でも、お礼参りとかだと物理的に地獄に行ってしまうエンドだ。

「聞けば、お主のせいで孫が巻き込まれたそうではないか！！」

生唾を飲み込んだ。そーいやそーうだ。否定しようがない。

これは死亡フラグかもしらん。

ぐぐ、と血管の浮いた丸太の如き腕を掲げた爺さんは、

「ぬはは！ 豪気なことよ！ 短き人生、少しは修羅の道も味わっておかぬとな！ それにお主、単騎で敵陣に突入して孫を救出したとか！ 見所があるぞ、我輩が鍛えてやろうか！？」

「おごごごご！ あああありがたきしあわせええええ！ でも勘弁してくださいだだだ！」

「ぬは！ ぬははははははあ！ 聞こえぬ！ 聞こえぬぞ若人よ！！」

「おお！ 弟子を取らぬので有名なおじい様が！」

うお、そう来たか。というかどういいう一族なんだ修羅って。

巨腕でがつくんがつくん揺さぶられながらそんなことを考える。
ブレにブレる視界の中、未だ驚きに固まったままの撫子の姿を捉えて少しほっとする。良かった、常識人は俺一人じゃない。

でもとにかく、誰か止めてええええええええええ。

「……ぬ、少しやり過ぎたか。許せ若人よ！ 孫娘を危険な目に合わせた償いとも思ってくれい。これで手打ちだ！」

「う、うぶ。い、いえすみません」

六十秒程続けて高速シェイキングされ、ぱつと手を離された。へなへなとベッドに倒れ込む。どんな地獄の責苦なんだこれは。

込み上げる吐き気をぐつと飲み込んで何とかもう一度頭を下げる。というより俯く。項垂れるの方が適切かもしれない。

「ふふ……ふあはははははははははは！ ではな若人よ！ 縁があれば再び見えることもあるであろうてい！！！」

「……」

コメントしづらい語尾を残して、嵐の如き老人は去って行った。窓から。

ふと、窓の外の景色が気になって撫子に目を向ける。
ハゲについて、爺さんは詳しいことは語らなかった。それが、全てなのだろう。

考えを切り替えるしかない。

もう、会うことはないのだ。

「なあ、ここって何階？」

はて、と言うように顎に手を当てた撫子は小首をかしげ。

「一階ですの……」

そう答える。

いやしかし、それなら一つ疑問が残る。

「……何で、窓の下から現れて窓の下へ消えて行っただろう」

「さあ……」

二人揃って米噛みを抑え、うーむを唸っていると、窓の外をキラキラした目で見ていたレティシアが振りかえる。

「おじい様は、地面を転がるのが大好きだからな！ ふはは！」

俺は疲れを感じて溜息を吐く。ん？ と小首を傾げたレティシアがこちらに一步步寄り来る。

「お前ん所の家族って、いや……もう何も言うまい。気にするな」

「？」

尋常じゃないのは良く分ったから。忘れよう出来るだけ早く。脳裏でぬはは笑いを延タリピートする驚異的老人の姿を、頭を振ることで振り払う。

ぎしりと音が一つ。

見れば、レティシアが性懲りもなく俺の転がっているベッドに乗り上げて来ていた。

目が合うとにぱ、と笑顔になる。

不覚にもドキドキするのは禁則事項である。何せ、今のレティシアは文句なしの美少女だ。

これまでの文句付け放題バージョンのレティシアなら、違う意味でドキドキするばかりだったのに。生命と精神の危険的な意味で。

そーいえば。

「レティシア」

「うむ？」

「俺のせいで誘拐されて怖かったろ？ すまなかった。後、今まで何か助けてくれてた、って撫子から聞いた。ありがとう」

「……」

ぽかん、と鳩が豆鉄砲食らったかのように口と目を見開いて呆然と俺を見るレティシア。

ベッドの上に居るので恰好は付かないが、なるべく誠意が伝わるように視線を伏せて礼の代わりにする。

「ふふ」

空気を微かに揺らす笑い声に顔を上げる。

視線の先、俺の腹の上に陣取ったレティシアが見たことのない微笑みを浮かべていた。

何とは言えないが気恥ずかしくなり、視線を逸らす。

その先に居た撫子と目が合った。仕方ないな、とでも言う様な笑みを浮かべた撫子は、貸しですの、と声に出さず呟き肩を竦めて静かに部屋を出て行った。

ごゆっくり、とでも言うようにひらひらと振られる纖手に苦笑を返す。

出来た妹だと思う。告白の返事を保留する様な兄には勿体ない。

後で、謝らなければ。

一度目を瞑る。俺にはレティシアにもう一つだけ、言いたいことがあった。

伏せた瞼の裏に、レティシアが現れてからの数ヶ月間の思い出が過ぎる。

右ストレートと犬モドキ。ベジタリアンだとか言う叫び。無理やり家に転がり込んできたこと。

吐いていた嘘と明らかになった苗字佐藤。久美子に襲われた時のこと。撫子との邂逅。変なテーマソング。今回の事件。

色々なイベントがあつて、その度に普通じゃ味わえない経験をして来た。

どれも楽しくて、良い思い出だ。俺一人で生活していたら、こんな思いを得ることは無かった。

それに、レティシアと強制的ノンドキドキ同居生活を送る中で色々なことも知った。

右利きであること。好物は野菜スティック。意外と小食。可愛い系のファッションが好きなこと。若干の露出癖。ぐうたらなこと。

髪を掻き上げる時、必ず逆側の手を使うこと。字を書かせると結構綺麗なこと。お箸の握り方が少し変なこと。寝起きは結構悪いこと。

上げ出したら切りがない。自分の気持ちを自覚したことで今までの幸いを思い、自然と口の端が緩むのを感じながら目を開けた。不思議そうに、でも柔らかな笑顔のままこちらを見ているレティシアの碧の瞳をじっと覗き込む。

俺の顔は赤くなっているだろうか？ 心臓の音が煩くて他に何も聞こえない。今、俺はレティシアのことしか分らない。

微かにその頬が染まっているのに気付くと、胸の中に安堵が落ち、代わりに滑るように声が出た。

「レティシア 好きだ」

狭い静かな病室に、俺の声はゆったりと広がった。

こちらを見つめるまま、何の反応も示さないレティシアに疑問を感じ首を傾げる。

そういえば、今まで聞いたことは一度もなかった。レティシアは、俺のことをどう思っているのだろうか？

「……もう一度」

桜色の愛らしい唇が僅かに動き、囁く様に声を落とす。

すぐに口を開こうとして、知らず緊張で唇が渴いていたことに気付く。

落ち着いているつもりだったが、どうやらちゃんと焦っているらしい。自覚した途端に体がカチコチになった。

そんな自分に苦笑してゆっくり唇を舐める。

今度は、言葉をしっかりと意識して選ぶ。

構えていないと緊張で呼吸が詰まってしまいそうだ。喉もからか

らに乾いていて、掠れた声を吐きそうになる。

「俺はレティシアのことが好きだ。だから、付き合っただけ欲しい」

そうすると、レティシアの手を取る。抵抗はされなかった。

それが切欠になったのだろうか。目を弓なりに、笑みを更に色濃くしたレティシアは一筋だけ涙を零す。

つと形の良い頬を伝って行く涙に目を取られていると、ぎゅ、と手を握りしめられた。

「……奇遇だな、主殿……私も実は……太郎のことが、好き」

いつもの物々しい口調とは違った、ふわふわと柔らかな、お菓子のような『女の子』の言葉。

その言葉が脳みそに沁み渡る前に、レティシアは勢い良く倒れ込んできた。

小さな体の全部を擲ってしがみついてくる。

反射的に小さな体を抱きしめ、そして俺もレティシアに抱きしめられる。

それを感じ、強くその背中に手を回した。大きく大きく、息を吐く。

抱きしめた体は本当に小さく、ひたすらに熱い。

「良か、ったあゝ」

依然心臓は忙しく動き回っているし、きっと顔も赤い。それでも、今はとにかく幸いを感じていた。

「我も……良かった。好かれる筈ないと、思っていたからな」

顔は見えない。だが唯一露になった耳が真赤に染まっているのを見て、大きく吐く息を首元に感じて、くすくす笑いが漏れる。

何だ、良かった。恥ずかしいのも緊張してたのも、レティシアだって一緒なのか。

「まあ、何でか分からんけどさ。好きになつたんだからいいんじゃないか。理由なんていくらでも見つかる物さ。兎に角今は幸せ。他に何かいるのか？」

「うむ、それもそうだ。……えへ」

ぐりぐりと頭を擦り付けられるのに甘んじながら、んー、とレティシアの体をより強く抱きよせる。

くすぐったそうな声を上げるのを無視して、俺はすりすり彼女に頬ずりをした。

「いやしかし、命懸けて何チャラとか良く恋愛モノのお話であるけども」

「うむー？」

「まさか、リアルに命かけて筋肉姫を助けに行きたーね。はっずかしー」

「でも、嬉しかったぞ。それが全てなのだ」

「……それもそうだな」

恥ずかし紛れに言った言葉は、真っ赤な顔を上げたレティシアの言葉に受け止められる。

俺から見ても幸せそうなの顔を見ると、背中がムズムズする。顔を見合せてお互い、照れを誤魔化すようににへらと笑った。そのまま、お互いの間に沈黙が満ちる。

「レティシア……」

「……たろっ」

舌足らずなレティシアの声。蕩けた視線を絡ませ合って、俺はそっと彼女の頬に手を当てた。引き寄せる。

抵抗なく徐々に近づいて行くお互いの顔。レティシアの澄んだ瞳の中に、俺の姿が見える位近づいた所でレティシアはそっと目を閉じた。

高鳴る心臓に煩さと恥ずかしさを等分に感じながら、俺も目を瞑り、そっと彼女の唇に

「若いって早いよね……ほらそこよ！　ぶちゅっつぶちゅっつぶちゅっつぶちゅっとおー！」

「お、お、お、お兄さまがレティシアとその、そんな、は、破廉恥を許す訳には……っ！　でもお兄さまキチンと告白したし羨ましい……じゃなくて……！　ううう」

「ふぁー……おう！」

「ぬああああああ！？」

重ならず、二人して慌てて顔を離す。

焦っているのは分かるけど手！
手で鼻を潰さないで……！

「わああ！ わあ！ ああああ2人共何でそこに居るのだ！！」

「何でつてアンタ、私は患者の様子を見に来ただけよおうふふ！
そしたら若い男女が盛つてイチャイチャしてるから？　面白いした
またまちよつと覗いてたのよおほほほほほほほほほほほほほほほほ」

「な、な、な、なぎゅ……!？」

マトモに言葉を話せないレティシアの下、腰に手を回したままの俺の鼻はどんどん高さを減らして行く。俺のぷりちーなお鼻がががが。

「お兄さま！？ 悔しいですけどかなりリードされてますけれど撫子はまだ負けた訳じゃありませんの！ 不倫愛人サヨナラ逆転ホームラン！ さ、最後にお兄さまを勝ち取るのは撫子ですからね！」

撫子は盛大な問題発言を叫んで見事な黒髪を翻し、凄まじい勢いで走り去っていく。

顔が真赤だったのは、非常にアレなシーンを見た羞恥からか、それとも別の理由か。

タタタタ、という軽い足音が微かに耳に届いた。はて、それにしても何か変な言葉だった……愛人……愛人！？

わたわたと意味も無くレティシアから手を離し、振る。脳髓に過負荷が掛かって一瞬何も考えられなくなり、

「ぬあ！　ぬあああああ！　あ、あああ主殿！　こうなつたら開き直る……！」

何を思いついたのか。

何事か叫んでむにゅむにゅ呟くレティシアに反応を返せなかった。カッツと目を見開いたレティシアは、全身に力を込め。

「ぬうん……！ 魔法発動、筋肉よ！！」

可愛らしい声で叫んだ。

ずしりと一気に増した重量に目を瞬かせ、恐る恐るその姿を見上げる。

胸があるはずの位置、顔がある筈の位置を視線はあっさり通り越え。

「あ・る・じ・ど・の……！ 愛しておるぞ……！！」

「ぎゃああああああ！？ その姿で言われても嬉しくありません
重い重い物理的に重いその筋肉で迫らないで……！！」

可愛らしい体のラインに沿ったワンピースは、今や常識外のムチムチ筋肉で内側から爆発的大膨張。精神攻撃力がダイナマイト。

凹凸（筋肉的な意味で）付き過ぎな筋肉美を思う様周囲に撒き散らす。

ちんまりと俺の上に乗って居たはずのレティシアは今、ビジュアル的に非常に残念な筋肉姫としてご降臨なされていた。

俺の、いやさ男のロマンである魅惑の双丘は見る影もなく、違う意味で豊満な大胸筋はレティシアの動きに合わせてうねりうねり。

巨木を捻り合わせたような、見るからに屈強で分厚い三角筋や僧帽筋、上腕二頭筋がワンピースの袖を引き裂かんばかりにみっちり
と漲り大充実。

頭身が狂ったせいで、どこからどう見ても可愛らしさの欠片もない際どい衣装（張り裂ける的な意味で）に大変身だ。

霸王も凄かったがこちらはやはり桁違いだ。その圧倒的キモさ。隔絶したグロさ。

転がっているせいで良く見えないが、足も同様だろう。初登場時のキモ恐ろしいキャミソール姿を思い出して冷や汗が噴き出た。それに。

丸太ん棒も何のそのと言わんばかりに盛りあがった露出肌は、緊張が羞恥のせいで浮いた汗でヌラヌラ、照り光っている……！大分慣れた慣れたと思っていたが、可愛い姿とのリアルな対比が俺を地獄を越えて冥界に叩き落としていた。

愛とか恋とかそういうあまじょっぱい感じのアレコレとは別問題で、これは耐えられない。耐えられない。

大切なことだから二回言った。

「さあさあ我と愛と感動のファースト接吻を交わそうぞ……！ぬう！」

「ひいひい！ お願いだから正氣に戻って下さい筋肉は要りません！ このままだと二人の甘い記憶じゃなくてトラウマですよー！ やめやめや俺を押さえつける……う、奪われゆ……………」

ゆ……………ゆ……………。

他を寄せ付けない神がかり的精神的ブラクラに無敵超変身した、レティシア。

真赤な顔で開き直った彼女に迫られた俺の、情けない叫び声が昼下がりの病院に空しく反響して消えて行く。

「若いわねえ……あ、あー、私も相手見つからないかしら。三十路かあ」

「お兄さま一体どうなさって……！？ 何やってんですのお兄さまの不埒物オオオオオオ！！」

[illegible]

扉の傍に腰を下ろし、宙空を眺める久美子の呟きと、ダツシユで病室に駆け込みジャンピングフットスタンプをキメた撫子の怒声。

そしてやつぱり、俺の濁った断末魔が爽やかな夏の空を突き抜けて行った。

第二十話 E p i l o g u e 姫の独白。

暑かった日のこと、そんな、夏の日のこと。

私が一人の青年に出会ったのは、日差しの眩しい、そんなある日のことだった。

e p i l o g u e 姫の独白

陽射しは強く肌を刺し、むんと漂う熱気はただじっと立っているだけでも汗を噴き出させる。

この夏一番の猛暑を記録するでしょう。天気予報のお姉さんが滑

舌良くお知らせする声に背を押されて、私は一人で街をぶらついていた。

暑いのは嫌いじゃない。

こういう時に遊ぶ友達が、居ない訳ではないけれど、どうしても家の事情で距離を置かれがちな私は今まで、誰も誘ったことがない。

子供は中々に残酷だ。小学校、中学校、高校、大学。私はいつも、輪の外に居た。

私の両親はかなり有名で、そして資産家でもある。

両親は忙しく、余り構ってもらった記憶がないが、その変わりおじ様に良く遊んでもらっていた。

学校で出会う人達がどこかいつも余所余所しいのは、ええと、類まれな人生を歩んできたおじい様の常識に私が被れているからかもしれない。

お金持ちだから、親が有名だから、男好きする容姿だから。

様々な理由と確執がそこにはあったのだろう。

大学三回生。大部分の同級生が先の就職活動で苦しむ中、ただ一人確実な明るい将来が約束されている。それも、あるのかもしれない。

それももうどうでも良い。

そんな訳で 特別、フリーの日に気軽に遊びに行ける様な友人が居ないのは真実だった。

「はあ」

溜息を吐く。

突風が吹き、舞い上がりそうになったスカートと幅広の帽子を慌てて手で押さえた。

失敗したかも。デニムにすれば良かったかな。

心の中で呟き、繁華街に足を踏み入れる。おじい様に護身術の手ほどきを受けている私なら、絡まれても何とか逃げるくらいは出来るだろう。

それに、この街は嫌に絡んでくる人は少ない。

小さな雑貨屋さんを冷やかし、細々した物を入れてあるハンドバッグを片手にウィンドウショッピング。

本屋さんで流行りのファッション誌に目を通したり、最近特集で取り上げられたカフェに足を延ばしたり。

目的もないまま、ただぶらぶらとあっちへこっちへ歩きまわる。だから、その子供達を見つけたのはほんの偶然だった。

「子供が……泣いてる。迷子かな」

呟き、辺りをきょろきょろと見る。とにかく子供たちの方へ足を向ける。

繁華街の片隅、そこそこに人ごみのある往来で立ち尽し、ただただ泣きじゃくる男の子と女の子。

彼らは泣きながらもぎゅうと女の子の手を握りしめていて、どことなく似た感じのする顔立ちからきょうだいなのかな、と思う。

結構な音量で泣いているのだが、親御さんが現れる様子はない。

行きかう人々も一瞬だけ子供たちに目を止めはするものの、何事もなかったかの様にふっと目を逸らして立ち去って行く。

そっけのないのは寂しいなあ、と思う。子供には差し伸べる手が必要なのに、この国の大人達はそれを忘れてしまっているかのよう。

せめて私だけでも。子供たちまで後五メートルくらいだろうか。ちょこちょこ、少しだけ早足で歩く。

そして。

「おーう坊主にお嬢ちゃん。どうしたどうした」

びつくりして立ち止まる。ふっと現れた男の人が、地面にしゃがみ込んで子供たちに話し掛けていた。

少し長めの黒髪で、そして多分少しだけ背が高い。細くも太くもない男の人。年はどのくらいだろう。多分、年下。

ここからでは横顔しか見えないが、だらしない程度のラフな格好で子供たちに笑いかけるその顔にはどこか愛敬が滲んでいる。優しそうに細められた目も、纏ったゆったりとした雰囲気も好ましい感じの人だ。

ただ、男の人は、胸ばかり嫌らしい目で見るから苦手だ。何となく話しかけづらくなって、丁度良い所にあった日蔭に入り彼らを観察する。

「うええええええん!!」

男の人が話し掛けても、子供たちは一向に泣きやまない。どうするのかなあ、と見ていると。

「……んお、坊主、お前凄え良いモン持つてるな!? 野球が好きなのか?」

少年が握りしめている、スナック菓子にオマケとして付いてくるプロ野球選手のカードを指差し、首を傾げる。

それに反応したのか、少年はだらだらと鼻を垂らしながら少しだけ泣きやんだ。

ん? と男の人が首を傾げると、小さくコクリと頷く。

「んっふっふー。そんな少年に、俺も凄い物を見せてやろう!」

彼は自慢げに笑みながら、片手に持っていたビニール袋を漁る。そこから手を引き出し、子供たちにほい、と掌を見せた。その手には何も握られていない。

何をするのだろう。

「ようしいかオコチャマ共め。今から不思議なこと見せてやるかな。今、俺こっちの手に何も持ってないよな？」

興味を引かれたのか、少年はじつとその手を眺めた。涙の跡はあるものの、ひとまず泣き止んでいる。

妹と思しき女の子は少年の手をぎゅっと握り、大きな目をつるつるさせながらそうっとな少年の後ろからその手を見ている。

「はい、何も持ってませーん。でもいいか、俺は魔法使いだから、呪文を唱えるとパツとお前たちが好きな物を取り出すことが出来るのだ！」

子供たちは、それこそ不思議なものを見る目で男の人を見ている。私にも何が何だか分からない。

傍を通り過ぎた女性が、男の人を見てくすりと笑みを零して行った。

「よし、特別にちよっただけ魔法を見せてやろう。行くぞー、ちちんぷいぷいちちんぷーい！」

ぐっと差し出した手を握りしめ、芝居がかった仕草と声音で呪文とやらを紡ぐ男の人。

ほい！ と叫んで再び開いた手の上には、真新しいカードと飴玉が一つ、乗っていた。

一体、どうやって取り出したのだろうか？

見ていた私も全く分からなくて、んむ、と首を傾げる。

「わぁ！　　すげー！　　これレアカードだよ兄ちゃん！」

「あ……」

「ふっふっふ。こっちのレアカードは少年にやろつ。こっちの飴玉はお嬢ちゃんな。ほら、友好の証だ」

「ゆーこのあかし？」

「ああ、仲良くしよう、ってことだよ」

突然目の前に現れたカードを、真丸な目で食い入るように見ている子供たち。

人見知りがあるのか、少年の後ろに隠れるようにしていた女の子も、大きな目を見開いてじっと男の人を見ている。

男の人はカードと飴玉を子供たちの手に渡し、くしゃくしゃとその頭を撫でた。

二人とも、さっきまで泣いていたのが嘘の様に満面の笑みを浮かべ、はしゃぎながらも一回やって！　と騒いでいる。

得意げに笑った男の人は、

「ははあ、特別だぞ。でも本当は一回しか見せちゃいけないんだ……そうだ、俺と約束しよーか。二人とも、も一度魔法を見たかったら泣いちゃダメって約束だ。出来るか？　……よしよし、偉いぞ。よく見とくんだぞ！」

「うん！」

と言って、今度は反対の手をぬつと突き出す。目を輝かせて大きくブンブン頷く子供たちの頭を一度撫でる。

そして、笑いを誘う位大袈裟で芝居じみた台詞と動作で再び掌を開くと。

「すっげー！」

「すごい……」

そこにはキラキラと光る飴玉の袋が二つ。一つずつ子供たちに渡して、男の人は子供たちに向かって首をかしげた。

「ははは、オコチャマ達が喜ぶから、今日は魔法も絶好調だな。それで、今日はどうしたんだ？」

「何でもないよ！　べ、別におれたちだけで何とかなるもん……！」

子供たちの機嫌は急転直下。

少年はむくれた様に口を尖らせ、女の子はじわりと涙を浮かべる。やっぱり迷子なのだろうか、酷く不安そうだ。

「おや、泣いちゃダメだぞー、約束したろう？　ほら、涙を拭きな。可愛いお顔が台無しだぞ」

女の子に向かって笑顔を向け、指先で彼女の涙をぐしぐしと拭いてやると、女の子は恥ずかしそうに俯いた。もう泣いては居ない。今度は少年の方を向く。涙と鼻水でぐちゃぐちゃのままの顔を、ポケットから取り出したティッシュで拭ってやっている。

「よし、見た所お前は兄ちゃんだろう？」

「う、うん」

「じゃあ、妹は絶対に、兄ちゃんのお前が守ってやらないといけないんだ。分るか？」

「そんなの分るよ！ ルリは俺の妹だからな！」

やっぱり兄弟だったのかあ。涙を拭くと、かなり愛らしい顔立ちのきょうだいだと良く分かる。

「そうだな。じゃあ、いいか？ お前さんはルリのことを、泣かせたりしちやあいけないんだ。そんなのは格好良い男のすることじゃない。さつき、この子は泣いてたろう？ お前が男で、お兄ちゃんならちゃんと、どうすれば泣かなくて良くなるのか考えて、守ってやらなくちゃならん」

気温三十度を超す炎天下の中、熱心に子供相手に兄とは、を説く男の人。少年は、小さな体でも妹を守らねば！ と決心したようで、

「うん！」

大きく頷いた。くりくりと良く動く瞳には、今は活発な少年らしい感情が浮かんでいる。先程までの不安げな光はかけらも無い。

「お、いいぞ、元気良いな。なら、今さつきはどうして妹が泣いてたんだ？ もしかしたら俺にも何か手助け出来るかもしれん」

人懐っこく笑う男の人は、真っ直ぐに少年の目を見てそう尋ねた。

子供には子供なりの、プライドや考えがある。

それを、ちゃんと理解しているのだ。

子供というのは、いくら優しい言葉を使っても、相手を信じていなかったら言うことを聞いてくれない。

素直な子たちだというのもあるだろうけれど、この男の人が対等に自分を扱ってくれることが嬉しかったのか、少年は誇らしさで頬を染めた。

「その……買い物の途中で、お母さんが居なくなっちゃったんだ！」

「ははあ」

言って、顎を撫でる男の人。

居なくなっちゃった、というのは、恐らく迷子になったのが恥ずかしくて言ってしまったのだろう。

少し罰の悪そうな表情の少年だ。

「よし、じゃあお前たちのお母さん探しに行くの、手伝っても良いか？」

「……ふふ」

笑みが零れる。あの男の人は、どうしてこんなに対等に子供と向かい合っているのだろう。

言い方は悪いが、さっさと交番に連れていけば面倒はないのに。子供のプライドを何よりも尊重しているのだろう。その姿勢が、心の琴線に触れた。

「うーん……仕方ないな！ 兄ちゃん、一緒に行こうぜ！ 俺、ダイチー！」

「おうダイチ、太っ腹だな！　んで、ルリ、お前はどうか？　兄ちゃんを着いてつても良いか？」

「……うん」

どうやら相当引つ込み思案な子らしい。しかし、ルリという女の子はおずおずとはあるものの、綺麗な笑顔で頷いた。

「ようし、じゃちよっくら行きますかー」

気だるげにそう言つて、ひょいとルリちゃんを肩車する男の人。驚いた様なルリちゃんの声は、すぐに楽しい笑い声に変わる。そして、不満気なダイチ君の声が大きく響く。

「あー！　ルリ、ずるいぞ！　俺も肩車が良いー！」

「まあまあ、レディファーストって言っただろう、ダイチ。ちゃんと代わるから、ちよっただけ我慢しろ、な」

宥める様に言う男の人は、すつとダイチ君の手を握り、もう片方の手にビニール袋を下げ、肩の上にルリちゃんを乗せて人ごみに歩き去っていく。

すぐ後に、お母さん！　という少年の嬉しそうな声が響いて来て、ふつと頬を綻ばせた。

どうやら、彼らはちゃんとお母さんに出会えたらしい。

自分は結局何もしなかったけれど、ほっと安心する。

「何だか、不思議な人」

言い、笑う。

時計を見るともう二十分も経っていた。久しぶりに見た、何だか珍しい青年の後姿を心に留めながら踵を返した。今日は、もう一軒カフェに寄ってみようかな。少しだけウキウキとした足取りで、雑踏に紛れて行く。

今でもはつきり覚えている。それが、彼との 三丈太郎との出会いだった。

「あれ……あの人？」

くり、と小首を傾げる。

夏の終わり、大学の夏休み中に何となく散歩している時に、どこかで見た横顔を見つけたのだ。

お婆さんを背負って横断歩道を渡っている。

「どうも、ありがとうねえ」

「いやいや、お気になさらないで。暑いから気を付けてね、お婆ちゃん」

「はい、本当にどうもありがとね、お兄さん」

聞き覚えのある声。少し考えて、ぱんと手を打った。少し前、街中で子供たちと喋っていたあの人だ。

声を掛けるのも憚られるし、その時は何となく彼を目で追いながらゆっくり歩き去った。

それから言うもの、街の色んな所で彼の姿を見掛ける様になった。いや、何の気なしに彼の姿を探していたのかもしれない。

「待てこらひつたくりいいい！ 唸れ渾身のオ、真・ドロップ・キ
イイイイイック！」

「いつてえ！？」

或いはひつたくりの犯人を追いかけて荷物を取り返し、感謝されている所。

「ちょっとアンタ、あんまり猫に餌やらないでよ！？」

「す、すみません」

或いは捨て猫にこっそり餌を与えて近所の人に怒られている所。

「大人げなくホームラーン！ ……あ」

「やーい！ 打ち上げてんじゃん！ アウトー！」

或いは子供たちと野球やサッカーに興じている所。

優しくったり、適当だったり、彼は意外と、街の色んな所に出没していた。

私と同じで、散歩でもしているのかもしれない。

ただ、彼を見かける度に、私はこっそりと足を止めるようになって

た。

理由は特には無い。何と無く。

でも、最近出席するようになったパーティーで、色んな年代の男の人から同じような嫌らしい視線を浴びせられることが多くて、少しウンザリしてたのはあるかもしれない。

悩みの相談をしようにも、両親は忙しくておじい様は今どこか中東の方に出かけている。依然友人も、居ない。

何だか間抜けでゆったりした彼のことを見ると和むのだ。意識はしていなかったけれど。

そんなこんなで長い大学の夏休みも終わり。

ゼミに出る為に校内をぶらついている時に、私は彼の姿を見かけた。

頭部が異常に眩しい男の人と一緒に、ド突き合いながら楽しげに笑っている。

かく言う私は、諸般の事情で目立ちたくないため、大学では度が入っていない伊達メガネとウィッグで変装しているのだけでも。

日本で金髪碧瞳は、とても目立つのだ。身にしてみても知っている。

何となく彼らについて行き、そつと講義に潜りこむ。プリントに書き込む名前をじっと見て、初めて名前を知った。

三丈太郎。

何と読むのだろう。さんじょう？　さんたけ？

これが、太郎の存在をしっかりと認識した日のこと。

それから幾度か街中で彼を見掛けることはあったけど、特にと
うと言うこともなく、季節は秋に移り変わる。

私が彼を、男性としてはつきり意識した、季節だ。

その日、私はいつもの様にぶらぶらと街を歩いていて、でも珍し
く、ガラのよろしくない男の人達に絡まれたのだ。

ニヤニヤ笑いながら、舐める様に私の体を見つめるその視線に怖
気すら感じて、私は何とか逃げようとする。

でも多勢に無勢で、男三人の力に私が抗えるはずもなく。

しかも運悪く、人通りも少ない時間帯・道。

横づけされた車に連れ込まれそうになって。

絶望感に打ちひしがれた時にふらっと彼は現れた。

「何だデメエ!？」

無言のまま駆けよって来た彼は、私を捕えようとしている男たち
の手を振りはらい、そのまま私の手を掴んで走り出した。

焦ってこちらに手を伸ばす男たちを置き去りにする、かなりのハ
イペースで。

「あ、あの……!」

「ねえあれ助けて良かったの!? ひょええ追って来るー!」

「待てコラアア! ぬぐるあああああ!」

初めて間近で聞いた彼の声は、思っていたよりも心地よく心に響く。

不思議と、気分が落ち着いた。

「とにかく、逃げよう！」

大通りを目指してひた走る。やがて、無事に人通りの多い道に出る頃には、私に絡んで来ていた男たちは居なくなっていた。

走り続けたせいで、恐怖と、そして手を握られたままだというドキドキで、私の息は荒い。

同じく荒い息を吐きながらさつと手を離れた彼は、すぐ傍の自販機で缶のお茶を二本買い、一本を私に差し出して来た。

何故だろう。離れた手が酷く冷たい気がするのは。

「ど、ど、どうぞ……」

「あ、ありがとう、ございます……」

胸に手を当て深呼吸。お互いに一息吐いて、顔を見合わせる。と言っても、彼は私が誰だか分からないだろう。

いつもの様に変装して、まあ目立つのはこの不本意な胸だけだ。

「いやいや……ベタな絡み方だったよネー」

「……そうですね……うふ、うふふふ。何だか可笑しくなって来ちゃいました」

「なはは、ホント、ぬぐるああ！　は無いですよねー」

笑い合う。

何だか、久しぶりに爽快な気分だった。

その後、お礼を固辞する彼からは名前を聞き出すことしか出来なかった。

みたけ、たろう。

名前を呟くと、ほんのりと胸が温かくなる。

いつもより少しだけぽかぽかと暖かい、浮ついた気分で、私は去っていく彼の背中をいつまでも眺めていた。

「レティシアー！　今、帰ったぞ！　ぬうははははは！！」

「おじい様！　お帰りなさい！」

その晩。少しだけ傷の増えたおじい様が家に帰って来た。

久しぶりに見るおじい様は相変わらずで、夕食を取りながら色々なお話をして私を楽しませてくれる。

象を殴り倒したとか、テロリストの集団に素手で挑んで勝ったとか色々。

とても現実のお話とは思えないけれど、その中に一つ、本当に信じがたい話が入っていた。

当時幼い少年が、とある災害現場で起こした奇跡の話。

妙に勿体ぶった話ぶりが引つ掛かって、私は沢山質問をした。

それは本当なの？　助けられた子は今？　その子のお名前は？

おじい様の口から告げられた言葉は、余りにも衝撃的だった。奇跡を起こした少年の名前は、三丈太郎。

街中で良く見かけ、今日私を助けてくれ、そして少し気になる男の人と同名同名。

音を立てて血の気が引いて行くのを察したのだろう。何事かと心配するおじい様に、取り乱した私は何もかも話してしまった。

彼がその奇跡の少年と同一人物だとは限らないのに。

「……彼は、いかん。駄目だ。止めておきなさい」

むっつりと厳しい表情で言い切ったおじい様に、私は生まれて初めて反発した。

私にも意外と情熱的な所があるらしい。業を煮やしたおじい様から聞いたのは、彼の周囲は危険にさらされるかもしれないということ。

今思い出すと恥ずかしいが、私は更に食ってかかった。

丸々一晚掛けて、世界に存在する魔法のこと、彼が狙われる詳しい経緯まで全て聞き出してしまったのだ。

その気になれば、おじい様は自分で私を守り切る自信があったからだろう。

単純に、私が執拗だっただけかもしれない。

魔法とか、色んなことが頭の中をぐるぐると回って、私は部屋に閉じこもった。

考えるのは彼のこと。じつと身じろぎもせず、ただ彼のことを考える。

しかし皮肉にも、考えれば考えるほど、私は彼に惹かれて行っていることを自覚してしまうのだ。

二十七年の離れた、嫌らしい目で私を見る見合相手の存在もあったと思う。

簡単には断れない縁談であると聞いている。

相手が、父の企業と母の所属する会社、どちらにも強い圧力をかけることの出来る男だったからだ。

両親は私のことを大切に思ってくれているが、相手は権力を使つて気に入らぬ物を陥れ、眼鏡に適う女性を片端から食い物にしているという男だ。

無碍に扱うことも出来ず、さりとて承諾も出来ず悩んでくれている。

しかし、このまま行けばほぼ確実に私はあの相手に慰み者にされ、飽きられたら捨てられるだろう。

それは、絶対に嫌だ。

その時の私は、誰かに助けて欲しかったのだ。

だけれど、ふらりと現れ、そして私を助けてくれた人は、今想像も付かない窮地に立たされているという。

どうしたらいいのか、どうしたいのか、それだけをじっと考える。結局、私はそれから二日間、ろくに寝もせずに引きこもって考えた。

おじい様に話を聞いてから三日後の朝、私は身支度だけを整え、おじい様の部屋の戸を叩いた。

「ん、レティシアか…… 入りなさい、顔色が悪いぞ……」

珍しく心配の色を濃く浮かべるおじい様に苦笑を返し、この三日間で考えたことをぼつぼつと語った。

彼のことが多分、好きだということ。

お見合いが嫌だ、ということ。

何とか彼を助けて上げたい、ということ。

私には力が無かった。私一人では何も出来ない非力な小娘だ。情報も、お金も、純粋な力も無い。

だから、おじい様にそれを欲したのだ。

私の懇願が珍しかったせい、おじい様は二つ返事で私の願いを聞き届けてくれた。

私はおじい様に情報の集め方を教えてもらいながら、まずは三丈太郎のことを調べることにした。

これは酷く簡単だった。彼はあくまで普通の大学生なのだ。義妹が居ること、住んでいる場所、年齢、健康状態。

一通り調べ終わると、今度は彼の周辺に目を向ける。

彼を狙う勢力の方針が、変わったとの情報を手に入れたからだ。

そんな、普通手に入らない様な情報をあつさり持つてくるおじい様が一体何者なのかは今になってもわからない。

情報の裏付けを取り、こっそりと人を雇って身辺警護用に遣わせた。

しかし、彼らは皆三日と立たずに連絡を絶ったのである。その後数回、人を雇ったが、同じ結果に終わる。

私は生まれて初めて心の底から身震いした。怖い。自分が直接雇った人たちが、どんどん消えてしまうのだ。

自分が関わったせいで、誰かが死んでいるのかもしれない恐怖。

同時に、こんなに恐ろしい人たちが彼を狙っていると知って、背筋

の凍るような思いをした。

そして、情報整理の合間にちよくちよく街中で彼を待ち伏せして様子を伺ったりもした。

ストーカー丸出したが、私はそうやって自分を落ち着けることしか出来なかったのだ。

何をしていても、ふと気付けば彼のことを考えている。

病気なのかもしれないが、同時に自分が何かの病気でないことも悟っていた。

これまでの人生の中で、ここまで他人に興味を持ったことは無い。ましてや恋愛など持ったの他だった。

淡い好意を抱いた所で、相手は私の両親や両親の資産に気遅れして、離れて行く。もしくは、下卑た笑みを浮かべて近寄ってくるのが常だった。

だから、彼のことを気にしつつも、私は好きにならない様に、好きにならない様に、と念じ続けていたのだ。

実際は、気付いていなかったただけですっかり彼のことが好きになって居ただけだ。

一月が経ち、やがて季節が冬に移り変わる頃。

その頃には、もう誰か人を雇って彼を警護するのは不可能になっていた。おじい様でもなければ対応出来ないような怪物の姿が確認されたせいだ。

そのおじい様にしたって、怪物を差し向ける組織の手がかりを追ったり、どこから入る依頼を処理したりですつとはこの街に居られない。

それに、見合いの期限も迫っていた。

それどころではないのに、と日に日に焦りを募らせていく私を見かねたのか、おじい様はある日一つ提案をした。

「レティシア……もしもお前が望むのならば、我輩の魔法をお主に伝えることも、出来る」

「私が、魔法……」

シツクな調度品で揃えられたおじい様の部屋。葉巻をくゆらせながらおじい様はそう呟いた。

私には魔法の才能があること。魔法は最も強い欲望に応じて発現すること。

おじい様と直接の血縁関係がある私ならば、代償が必要で、しかも劣化はするものの、無理やりおじい様の魔法を手に入れることが出来ること。

何もかも手詰まりで、何とか状況を打破したかった私は、しかし聞かされた『代償』の大きさに丸一日を費やして考えた。

そして、決意した。感情を基に、感情を切り離れた冷徹なメリットとデメリットの計算の末の決断だった。

あるいは、既に私は狂っていたのかもしれない。

「おじい様！……私に魔法を、授けて下さい……！」

手に入れるべき魔法は、修練によって魔法の限界を越えてしまったおじい様の持つ、『肉体強化』の劣化版。

人間という種の持つ限界まで身体を強化する魔法。そしてそれは同時に、『常識』を逸脱した存在に対して、相克的なまでの攻撃力

を持つ魔法。

根底にあるのは、ただ、三丈太郎という青年を、例え自分を犠牲にしても『守りたい』という気持ち。

代償は私の持つ、私を構成する『女性性』。女としての魅力、と言ひ換えた方が分かりやすいかもしれない。

魔法を展開すれば、私の体はそれこそ常識外の　しかし常識の範囲内限界の、屈強な肉体へと変化してしまう。

だが何よりMPを、精神力を消費する代わりに、常識外の怪物達に有効な打撃を放つことが出来る。

ただし、代償として　たった一度でも魔法を解けば、怪物に対する相克の力は失われてしまう。

彼の周囲に安全が確約されるまで、私は自らの『女』を捨てることを決意したのだ。

それから魔法を習得するまでの一月、私は生まれて初めて血反吐を吐いた。

本来ならあり得ない『魔法の継承』は、脆弱な私の身には些か以上に厳し過ぎたのである。

対怪物を想定した格闘訓練に、護衛の心得。

時間が無い為に実戦形式で、おじい様に毎日叩きのめされながら、私は少しずつ魔法を、強引に手に入れて行った。

ある程度満足出来るレベルに魔法を安定させると、私は積極的に動くようになった。

彼の周辺には気付かれないように巧妙に、怪物達が潜んでいたのだ。

幸い、怪物達は倒しても非常にグロテスクな死体を晒すようなことが無い。

魔法と科学を強引に組み合わせ作りだされた彼らは、命が尽きると灰になって消えてしまうのだ。

何故かは分からないが、都合が良いのは確かである。

そうしてまた月日が流れ、春になる。

魔法の効果は想像以上だった。メリットは想像以上だ。

私が自分で対処出来るのなら、雇った人間が怪物に襲われることは無い。

アレだけ重く私の心に押し掛かっていたスケベ親父との見合いは、この肉体を見せるだけであっさりと破談になった。

喜ばしい限りである。

ただ……デメリットも果てしない。

この肉体になって涙する日ももちろんあった。それにそもそもこんな姿では彼の前に姿を現す訳にもいかない。

初めて怪物と対峙した時は足が震えて訓練通り動けなかったし、初めて怪物を殴り……殺した時は何度も何度も嘔吐した。

怪物とは言え、生き物を殴る感触は手から離れず、その断末魔は耳に張り付いた。食事も喉を通らず、眠れない夜が続いた。

そして私は口調を変え、考え方も少し変えた。出来るだけ女性らしさをそぎ落とし、怪物に対する攻撃力を上げる為に。

それでも、どうしても髪は切れなかった。それに、どれだけ意識しても、私は言葉の端々で女を意識した言葉を使ってしまう。

しかし流石にそこまで変えてしまうと、私が『何』であるかも分らなくなってしまう気がして、気にしないことにした。

私は女で、だからこそ彼を守りたい、と思い、彼を守るためにこそ女を捨てているのだから。

私は以前とは変わってしまっただろう。浅ましく汚れ、穢れ、彼に相応しくない醜い女になってしまったのだろう。

だけれど、彼を好きな気持ちだけは変わらずに持っていたい。

毎日、こつそりと怪物を戦って秘かに彼を守る日々が続く。

いつしか最初の頃に感じていた気持ち悪さも感じなくなっていた。淡々と、ただ身勝手に彼を守るという目的の為に、倒れるまで拳を振るう。

おじい様は怪物を差し向ける組織を追って、またヨーロッパの方へと旅立っていた。

誰にも相談できず、気丈に振る舞いながらも彼を陰から眺め、満足する日々。

おじい様が怪物達の大本を何とかして下さるまで、私は彼に知られず、一人でこの戦いを続ける気概を持っていた。

しかしそれは、ある日あっさり破れてしまう。

怪物の一体が、私の監視の目を掻い潜って彼の目の前に現れたのである。

私は焦った。

こんな姿で彼の前に出るのは、その、女として恥ずかし過ぎる。

だが、実際に彼が襲われている所を見てしまうと、そんな小さな不安は全て吹き飛んでしまった。

私のことなんてどうでもいい。気が付けば無意味に名乗りを上げ、いつもの様に怪物を倒していたのである。

もうどうにでもなれと開き直った私は、彼の家に転がり込むことにした。

初めて彼と出会ってから、早くも一年が経つ。でも、彼はそれを知らないだろう。

夢にまで見た彼との触れ合いは、荒んだ私の心を急速に解き解していった。

彼は私を嫌悪しない。嫌だと思えばそう言うが、口汚い言葉で罵られる様なことは一度も無かった。

いつも最後は、何だかんだと受け止め、受け入れてくれる。それどころか、街に連れて行ってくれたり、海に誘ってくれたり。怒られたりじゃれあったり、強引に筋トレしてみたり、私は兎に角、泣きそうなくらいの幸福を噛みしめていたのだ。

データでしか知らなかった彼の義妹も不思議な人だった。

私を恐れる様子もなく、どう見たって彼女の方が綺麗なのに、私のことをライバルだと言って気持ち良く笑う人。

実は、あんまり嬉しくてこっさり泣いたのはここだけの話。

好きな人との生活と、大好きで大切な友達の存在。

折しも、怪物を差し向けていた組織をおじい様が壊滅させたとの報告もあって、私はすっかり幸せに浸っていた。

だからだろうか。油断して、とある組織に捕えられてしまったのは。

目が覚めた時の気分は最悪だった。

瞬時に何が起ったのかについて頭を巡らし、でも目の前に居る、いつもと少し雰囲気の違い彼の姿に胸が高鳴る。

そしてぞっとした。何をされたかは定かでないが、体が元に戻っ

ていたのである。

一応おじい様が組織を何とかしたとはいえ、怪物が現れないとに限らない。

これでは、彼を守る為に傍に居ることが出来ない。そうまで思った。

それに……考えたくもないことだけれど、もし、意識を失っている内に乱暴されていたら……。

体に変調は無いので、多分大丈夫だとは思うが、酷く心配だった。こればかりは、杞憂に終わって良かったと思う。

それから何だかんだあって、どうやら彼は、私を、女として何の魅力も無い私を助けるために無茶したのだと知って、悦びと哀しみを覚えた。

彼が優しいのも、お人よしなのも私は良く知っている。私が女だろうがそうでなからうが、彼ならば助けに来てもおかしくない。

そんな予感が胸の内にあった。

だから、告白された時は心臓が高鳴り過ぎて死ぬかと思ったのだ。まさか、そんな。

女に戻った私の体を撫でる彼の視線は、気恥ずかしさこそ伝わるけれども今までの男たちの様な邪悪さを感じない。

言葉に出来ない色んな思いが胸の奥から溢れで、止まらなくて正直、撫子と久美子さんが横槍を入れなければちょっと危なかったと思う。

ああ、私はこんなにも幸せで良いんだろうか。
身勝手で、汚い女なのに。

いつか、この話を彼にすることはあるのだろうか。その時、彼は何と言っただろうか。

心の芯から恐ろしく、しかし彼に隠し事をしたくない一心が私にはある。

だけど、わざわざそれを告げる様な無粋はしなくなかった。彼はきつと、私の罪もひよいと担いでしまっただろう。

そして何事もない様に手を差し出してくれる気がする。だからこそ、私は彼に対する気持ちの証として、この思いをずっと持っていたい。

私は彼を守りたいのであり、守って欲しいのであり、つまりは対等な関係で居たいのだ。

お互い欠点もあるし、完全なんかにはほど遠い。

すれ違いや喧嘩もきつと、沢山有る筈だけれど、頑張つて二人で歩いて行けたらいいな、と思う。

……撫子が、愛人発言をしたのには肝を冷やしたけれども。

「何というか、本当に、我で良いのかなあ」

久美子さんの診療所のベッド。個室として十分な広さを持つ部屋のベッドで、すやすやと寝息を立てる彼を見下ろして、私はそつと微笑んだ。

まあ、いいか。幸せだし。他には何もいらないのだ。

ちゃんと女の子の体で、膝の上に乗せた彼の頭を優しく撫でる。むずがる様にむにやむにやと呟く彼が愛おしい。

これから先、色んな障害や試練があるだろうけれど。

「我は、太郎のことが好き、だからな」

彼 太郎も、好きで居てくれると嬉しいな。心の中でそう呟く。
他に誰も居ない、静かな病室の昼下がり。差し込む日差しは優しく、頬を撫でる風もまた、柔らかい。

普通とは決して言えない私の恋は、こうして鮮やかな大輪の花を咲かせたのである。

膝にかかる愛しい重みを感じながら、ゆっくりと微睡みに誘われて、私はそつと瞼を下した。

第二十話 E p i l o g u e 姫の独白。(後書き)

読了お疲れさまです。

これにて本筋は完結ですが、後日談・次作もぼちぼちupするつもりなので、どうか御贖に……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4089h/>

マジカル・マッスル・プリンセス

2010年10月10日13時26分発行